異世界を渡る人

空色キノコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界を渡る人

【Ｎコード】
Ｎ８６６２Ｓ

【作者名】
空色キノコ

【あらすじ】
目を開けたら、何もない白く美しい世界が広がっていた…。
そこで一人の男に出会う。その男と共に修行を重ね成長する主人公…黒神　上総。
だが突如この世界に異常が起こる…男は黒神　上総を救うため異世界の扉を開き自らが犠牲になる…。
その事を知らない主人公は扉の中を彷徨い、そして自らの意識を閉ざしてしまう…。
意識が回復して眼を開くと、其処には色彩鮮やかな世界が広がって

いた。
その世界の名は…ストライクウィッチーズ。

第一話：プロローグ（前書き）

初めまして空色キノコです。今回初めて小説を書かせて貰いました！
初心者作品なので文章構成がめちゃくちゃですが、そこは暖かい目で見守って頂けると有難いです。
尚原作ブレイクが多いため、それが嫌な人は見ない様にしてください。
それでも構わないという人はどうぞ。
まだ、プロローグなので原作には介入しません。

第一話：プロローグ

何もない世界。
鮮やかな色も無い。
動物の鳴き声もしない。
賑わう街も無い。
そんな”無”の世界に音が響く。

激しく鉄が交わる音。
それと同時に飛び散る火花。

「ハー…ハー…」

「……」

人の疲労を現した息切れ。

「ハー…喰らえ！雷斬衝！」

青年が刀剣を振り下ろすと緑色の雷が落ちる。

「ふっ…甘い！！！」

もう一方の男がそう言うと刀で雷の斬撃を受け止め、その雷をクモの巣のように地面に受け流す。

「なっ…！」

斬撃を放った青年は驚き、その瞬間に隙が生まれる。

そして、その隙をもう一方の男が見逃さない。

「隙だらけだぞ…裂破掌！！！」

男は容赦なく魔力を溜めた拳を斬撃を放った青年の体で爆発させた。

「グハッ！！」

轟音と共に男は勢い良く後ろに吹っ飛んだ。

「まだまだ、我には勝てんな上総よ！」

「手、手加減ない…ですね…師匠は…ハァハァ…」

上総と呼ばれた青年は息を切らしながら言う。

「馬鹿者！戦いでは常に手を抜かないことが、相手への敬意でもあり、成長への近道だ！そのことをしっかりと頭の中に入れておけ！上総よ！」

「はい…師匠…ハァハァ」

上総は息を切らしながら返事をし、その姿を師匠と呼ばれた男は口元を少し上げ頷いた。

「よし！次は天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）と悪魔化（ｄｅｖｉｌｍｏｄｅ）の特訓！そして次に攻撃魔法、治癒魔法、防御魔法の特訓だ！わかったな上総！」

「はい！…ってえええええええ！そんなにするんですか！？俺死ん

じゃいますよーーー！無理です！！やばいです！！無茶苦茶です！！」

「黙れぇぇぇぇ！そんなに叫べるのだから、できるだろうがーーー！つべこべ言わずさっさとやれーーー－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－！！！！！」

「ひぃぃぃぃぃぃ！！！」

少し涙目になりながら、次の特訓に取りかかる。
その光景を師匠は口元をにやけさせながら眺めていた事は黒神　上総本人は知らない…。

俺の名前は、黒神　上総。年齢は１６才。身長は１７８ｃｍ，体重は６０ｋｇ。
前の世界では成績結構良く、運動神経も悪くはなかった。
友達も男女問わずいて、学校生活を毎日楽しく過ごした。
だけど…俺の人生にいきなり終止符がうたれた…。

俺は急に飛び出して来た、大型トラックに撥ねられ死んだ。
撥ねられた瞬間、いままでの思い出がすべてスライドショーの様にながれた…。
瞬間的に理解する。「死んだ…」と。

俺はそっと目をあけた…。すると目の前には白く美しい世界が広がっていた。
最初はとても神秘的であたりを見回したが、徐々にその光景が恐ろしくみえた。
音もなく、色も一色、動物もいない、人もいない…。

そんな光景が恐ろしく目を閉ざした。

その時、一人の男が俺に手を差し伸ばしてくれた。
それが、今の師匠である人だ。
師匠は俺のことを一人の息子のように可愛がってくれた。
武術も教えてくれた。武術を教える時の師匠は厳しかった。模擬戦では、今のところ全戦全敗だ。
多くの人は、勝負に負けたりすると「悔しい」「なんで、あいつなんかに…」と思うが、
俺はそう思ったことは一度もない。むしろ「勝ちたい」その気持ちだけ戦ったあとに、残る。
師匠はそんな人だ。
俺はいつか師匠を超えたいと思っている。
けど、今の俺は…

「ゼェー…ヒュー…ゼェー…ヒュー…おぇ…ハァ…ハァ…」

「どうした！息が切れておるぞ！」

「どう…して…師匠…は…息が…そんなにも…ハァ…ハァ…おぇ」

俺は師匠を越えられるのか？と心の中で思うのであった…。

第一話：プロローグ（後書き）

初めて書いたので、とてもつかれました…。
次もがんばって書きたいと思います…。
駄文でごめんなさい。

第二話：謎の男（前書き）

第二話です。今回は戦いがメインだが、戦闘描写は少なめ。

第二話：謎の男

「ハッハァーーーーー！！！」

「「グッ…！！！」」

俺と師匠は目の前にいる狂気の男が振り下ろす双剣を受け止める。
重い…師匠より数倍も…。
剣とはこんなにも重いものなのか…。

「おいおいおいおい…どうしたんだよ…こんなものなのかよ…光牙さんよぉ～～～」

謎の男は心底呆れた様子で俺では無く師匠に呟く。

「クッ…！！！」

光牙と呼ばれた師匠は焦りながら刀を思いっ切り握り締める。
こんなに苦戦する戦いなんて初めて経験した…。

「師匠…こいつは一体…」

「…こいつは天界の住人を全て殺し、破滅に追いやった罪悪人…魔牙」

「こいつが…」

なぜ俺等が今こんな状況になったかは数十分前に遡る…。

「はっ！ふっ！しっ！」

俺は激しく刀を振るう。
そのたびに師匠の刀と交じり火花が激しく飛び散る。

「ふっ！！…はぁぁぁ！！」

師匠も神速と言える速さで刀を振るう。
俺はその刀をすかさず受け止める。

「クッ…重い」

俺は思ったままの感想を率直にのべる。

「どうした上総！そんなんじゃいつまで経っても我を越えられぬぞ！」

「わかっていますよ…だから、次の一撃で決めます！！！」

「ふっ。かかってこい！」

俺は渾身の一撃を放つ為に刀に魔力を溜め始めた。
刀剣には徐々に水色の魔力が集まり始める。
そして刀に溜まった魔力を解放しようとした瞬間、この世界に異常がおきた。

骨の軋む音と共に空間が歪む。
俺と師匠は音のする方向を警戒しながら見る。

空間の軋む不快音はさらに激しくなってくる。
そして…

「「！！？」」

バキッと激しい破壊音を伴い空間が割れる。
割られた空間の欠片が辺りに飛び散る…。
それはまるで硝子にボールが当たったかのようだった。
空間が割れたことに二人の警戒はさらに高まる。
数秒して一人の男が割れた空間から出てきた。
髪は紫色。瞳も髪と同色。身長は上総と同じくらい。顔の右頬には龍の烙印らしきものが彫られている。
服装は紺色の長ズボンに白いシャツの上から薄茶色のジャケットとを着ていた。
俺はこんな男見たことも無い…。
しかし師匠は空間から出てきた男の姿を見て驚く。まるであの男を知っているかの様な…。

「な…なぜお前が、この世界に…」

「し、師匠？」

俺は初めて師匠が焦る姿を見た。
空間から出てきた男は此方に振りかえり師匠の姿を見て悪魔の笑みを浮べる。

「ひさしぶりだな～～～、光牙～～～、元気にしてたかぁ～～～」

「……」

空間から出てきた男は昔を懐かしむように師匠に問いかける。

「俺は元気だったぜ～～～お前に閉じ込められていた間ずっとなあぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

男はそう言うと手に二つの剣を発現させ師匠にに斬りかかる。

一瞬だった…全然俺は反応が出来なかった。

この男は一体何者なんだ…。

「ッ！！！」

師匠はその攻撃を瞬時に受け止める。

すると勢いのある衝撃波が生まれた。

「師匠！！！」

俺は師匠に駆け寄ろうとしたが…

「来るな！！！」

「！！！」

師匠は俺に向けて声を放つ。

「お前は来てはならぬ！！お前じゃこいつには勝てん！！それが、分かるのならお前は身を堅め我が勝のをまっておれ！！！」

「し、しかし…」

「おいおいおい…いきなり勝利宣言かよ～～～、え～～～光牙

さんよ～～～」

男は余裕を見せつけながら、師匠を追いこんでいった。
その光景を見て俺は拳を握りしめることしか出来なかった。

（俺は待つことしか出来ないのか？師匠が苦しんでいるのに…俺は…俺は！！！）

「はあぁぁぁぁぁ！！！」

俺は刀を振るうが男はそれをいとも簡単に受け止めた。

「何だ…このガキ…」

「か、上総！？」

男は興味が無さそうに上総を見つめ、師匠は驚いた表情で俺をみた。

「上総！待てと言っただ「嫌です！！！」…上総？」

「師匠が苦しそうにしているのに、俺だけ安全な処にいるなんて嫌です！！！俺だって戦えます！！俺は師匠の弟子です！！！俺を…俺を信じて下さい！！！」

「…ふっ。馬鹿弟子が」

そう言った師匠の顔は少し嬉しそうだった。

「では…行くぞ上総！！！」

「はい！！！」

俺達は勢いよく男へ立ち向かう。

「ははははは！！！いいねぇ！！！二人も殺れるなんて、最ッッッ高だなあぁぁぁ！！！」

男は狂気の笑い声を発しながら双剣を構える。
これが数十分前に起きた出来事である・・・。

そして現在…。

「ハッ！喰らいな！レストレスソード！！！」

魔牙が術を唱えると上空から漆黒の剣が大量に落ちてきた。

「はあぁぁぁ！！」

俺はその全てを高速で刀を振るい漆黒の剣を弾く。

「次はこいつだ！！！獅吼爆炎陣！！」

魔牙は俺に瞬時に近づき掌底から剣を地面に突き立て前方に爆炎を巻き上げる。

「なっ！があぁぁぁ！！！」

その爆炎はクリーンヒットし、激痛が俺の体を駆け廻った。

「上総！！！」

師匠はすぐに俺のもとへ駆け寄ってきた。

「大丈夫か！」

「は、はい…一応…」

（このままでは上総が……仕方ない……）

「異世界への扉！解放！」

すると後ろに光の扉が発現された。師匠は俺の首ねっこを掴むと光の扉の中に投げ入れた。

「な、何を！」

「上総…お前は生きろ！！！」

「えっ…そんな…師匠！」

「案ずるな…我は…負けん！！！…だからお前も…我を信じろ！！！」

師匠はそう言うと刀を上に掲げ、俺に笑顔を向けた。

「師匠ぉぉぉぉ！！」

叫びを最後に光の扉は閉じる。

「ふっ…逃がしたか…お前もあんな奴を逃がすなんて…つくずくあ

めぇなぁ～～～」

魔牙は光牙が先程行った行動に呆れて溜め息を吐く。

「逃がす？何を馬鹿なことを…我は託したのだ…我の馬鹿弟子になあぁぁぁ！」

光牙は口元を歪ませながら魔牙に突っ込む。

「託す？何をだ…？」

「それはな――――――」

「はっ…そんなことか…くだらない…」

魔牙はそう言うと剣に漆黒の魔力を纏わせ目の前のものを斬りかかった。

「死ね…光牙」

漆黒の魔力の牙が容赦なく光牙へ放たれる。

「上総…お前が我の…弟子で…」

漆黒の魔力の牙が無慈悲に光牙の身体を包み込んだ…。

戦いが今終わりを告げる。
周りに残っていたのは白い世界には似合わない赤い液体だけだった
…。

第二話：謎の男（後書き）

やっと上総を異世界へ送ることが出来ました。たぶん、次の話は更新が遅いと思います。こんな、小説を読んでくれてありがとうございます。初心者なりにがんばりたいと思います。

第三話：主人公設定（前書き）

第三話です。今回は主人公設定です。

第三話：主人公設定

名前：　黒神　上総

性別：　男

年齢：　１６才

身長：　１７８ｃｍ

体重：　６０ｋｇ

容姿：　髪は黒髪で首に少し掛かる位の長さ。瞳の色は綺麗な黒い瞳。顔付きは上の中。足もモデルみたいに長く、筋肉も引き締まっていて、スタイル抜群である。

戦闘スタイル：　地上では武術を得意とする。主に刀剣、リスト、双刀、短刀、投刀、槍、弓等を使用する。　空では天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）と悪魔化（ｄｅｖｉｌｍｏｄｅ）を駆使し、攻撃魔法、防御魔法、治癒魔法も使用する。

第三話：主人公設定（後書き）

現在、どうやってウィッチ達と出会うかを考えています。なるべく、早く更新できるようがんばります。

第四話：異世界に立つ人（前書き）

第四話です。

第四話：異世界に立つ人

俺は今深く暗い闇の中をゆっくりと進んでいる。
上下左右分からぬまま、ただ一直線に暗い闇の中を歩いている。
そして俺はその暗闇を歩きながら、あることを思っていた。

（師匠…）

それは自分が尊敬し、いつか超えたいと思っている人だ。

（師匠は無事…だろうか…まさか…）

俺の頭の中に最悪のビジョンが浮かぶ。
考える度に不安で仕方無くなる。
鼓動は叙々に早くなっていき、冷や汗が頬をつたう。
不安になっていくなかで師匠の言葉を思い出す。

”我を信じろ”

（そうだ…そうだよ…。師匠は俺に”信じろ”と言ったじゃないか！俺が…俺が師匠を信じなくてどうする！俺は師匠の弟子だ！今は……師匠を信じるんだ！！！）

俺は師匠の言葉によって先程までの不安や絶望が晴れ、今は明るい希望が頭の中で描かれている。
そんな希望を描きながら暗闇の中を歩み進めた。

しかし、その希望がすでに断ち切られているとは黒神　上総本人はまだ知らない……。

（はぁ…はぁ…俺は…どの位この暗闇の中を歩いて…いる…のだろう…）

現在俺は出口が一向に見えない暗闇を重くなっている足を引き摺りながら歩いている。
息切れも半端ない。

（それに…ただ歩いているだけなのに…すごく…はぁ…ふっ…疲れるし…とてつもなく眠い…この空間にいる…影響なのか…）

俺の足取りは段々と遅くなり遂には歩くのを止める。

（やばい…そろそろ…限界…かも）

とうとう限界になり膝からゆっくりとその場に崩れ落ちる。
瞬間体が軽い浮遊感に襲われ、俺は完全に意識を手放した…。

「……んっ」

辺りが眩しくなっている事に気付き、瞼をゆっくりと開く。
先ず視界に入ったのは太陽光であろう光。
次にざらざらと気持ち悪い感覚…砂だ。
そして何故か目の前に赤い生物。

「……」

「……」

両者共睨み合ったまま動かずいる。
そして先に動いたのは立派な螯をもった赤い生物。
螯を大きく開き俺の鼻目掛けて思いっきり挟む。

「ッ！？」

突然の出来事に目を見開き、太陽が照りつけ熱くなっている砂浜を転がり回る。
転がると同時に砂が巻き上げられ、身体の至る所にへばりつき不快感を与えてくる。
それと伴い鼻先を挟んでいる螯の力が更に増加する。
流石に俺も我慢の限界だ…。

瞬時に鼻先に居る生物の甲羅を鷲掴みにし、勢い良く引き離す。
軽く湿っており、肌を刺す感覚が手に感じられる。
引き離した後、辺りの異変に気付く。

「ここは…一体…？」

世界が変わっている…。
静かに波打つ綺麗な海がある。
上を見上げれば自由に浮かぶ白い雲と、水色に澄んだ美しい空がある。
視点を戻し振り返れば、不揃いに茂った新緑がある。
鼻から空気を吸えば、海からの流れる潮風独特の匂いが鼻孔を優し

く撫でる。
肌に意識を送れば、心地いい風が身体を通り抜ける。

「……久しぶりだ」

俺は久しぶりに見た色彩に感動した。
こんなにも身体全体で沢山の”自然”を味わったのは本当に久しぶりだ。
そんな感覚を楽しんでいると手に微かな痛みを感じた。
視線を右手に移し痛みの正体を確認する。
正体は言わなくてもいいが…蟹だ。
蟹の分際でこの俺に牙を向けたのか…ならやることは只一つ。
手中で暴れている蟹を投げやすい形に持ち直し、

「海の生物は大人しく元の場所へ…引き返しやがれぇぇぇ!!」

思いっ切り海目掛けて投球する。
すると漫画みたいな効果音を立て、海の彼方へ消える。
俺はざまぁ見ろと言わんばかりの表情を消えた蟹に向ける。
若干荒れた呼吸を整えるため軽く溜め息を吐く。
その数秒後、あることに気付く。

「あれは……基地？」

そう…かなり巨大な基地が存在している。
此処からだと滑走路や戦闘機等を収容するハンガーが見られる。
しかし何故だ…何か引っ掛かる。
まるであの基地を知っている様な感覚だ。

「たしか…あれは…」

腕を組み思考を働かせる。
確か何度か友達（だち）に見せられた事があった様な、無い様な…。
後少しで答えに辿り着きそうな時、腹が慌ただしく鳴り始める。

「腹…減ったな」

思考を働かせるのを一時中断し、腹を擦る。

「食い物…探すか…」

そう呟くと俺は後ろの森へ食料を探しに歩みを進めた……。

第四話：異世界に立つ人（後書き）

やっと、書けました。つ、疲れた…。あともう少しでウィッチとの出会いがあると思います…。これからも頑張っていきます。応援宜しくお願いします。

第五話：気付いた世界（前書き）

第五話です。今回はウィッチーズのみなさんが登場します。

第五話：気付いた世界

「な、何もない…」

俺は森を彷徨いながら呟く。
現在俺は自分の「食」と言う欲求を満たすために、食糧を探している。
だが、何もなかった。本当に何もなかった。あるのは、緑が豊富な木々だけだ。
茶色い木の幹を見つめる。
やはり……これを食うしかないのか…。
すると再び腹が激しく鳴り始める。

「うっ…は、腹が…辛い」

俺の空腹への限界は近かった。
このままでは、空腹ゾンビになってしまう……そんなのは……絶対嫌だ！
そんなことを思い涙目になりながら、一歩ずつゆっくりと森の中を歩いて行った。

森をさらに彷徨うこと数十分。ついに、俺は運命的な出会いを果たす。
そう……猪と言う最高の食糧との運命的な出会いを……。

「……」

「……」

俺と猪は数秒間目を合わせ対峙する。
そして先に動いたのは空腹ゾンビなりかけの俺だった。

「……発現」

どす声で呟く。
呟いた瞬間俺の手に、美しい刀剣が握られていた。
刀剣の名前は”ディスインテグレイト”
その刀身は薄紫色で透き通っており、とても神秘的だった。
俺はゆっくりと刀剣を鞘から引き抜く。

「！！！」

猪は危険を察知し、後ろ向きに方向を変え逃げ出す。
だけど、時はすでに遅し…

「…逃がすか…魔王炎撃波…」

俺はどす声で刀剣を横へ振るう。
振った瞬間刀剣から炎が発生し猪を焼き殺す。
猪はその攻撃で綺麗にこんがりと焼けた。
辺りにほんのりと肉の焼けた匂いが漂う。
俺はフラフラになりながら、何とかこんがり焼けた猪を掴み取り、皮を刀剣で剥いだ。
すると、俺の腹を満たすものが目の前に現れた。
綺麗に焼かれた皮脂。白い骨から伝う肉汁。恐らく肉の中は美しいレアだろう……やばい…想像したら涎が…。
俺は我慢できずかぶりつこうと口元まで肉を運んだが、あることに気付き食べずに一度肉を口元から離した。

「そうだ…忘れてた」

両手を確りと合わせて、

「頂きます」

命に感謝する。

「御馳走様でした」

そう言うと、猪の骨を地面に置き、大の字になって寝転んだ。

「……空が綺麗だな」

食後のコーヒーを楽しむ感覚で緑の葉の間から見える青空を眺める。

「くぁ……食ったら眠くなってきた…」

俺食後の軽い睡眠を取るためゆっくりと瞼を閉じた。

その時、

「ッ!?な、何だ!?」

緊急事態を知らせるかのような警報に驚きすかさず飛び起きる。

今も尚警報は鳴りつずけている。

「い、一体なにがおこったんだ?」

不安な面持ちで辺りを見回す。

「とにかく、今は状況把握をしないと」

俺はビーチへ出るため全速力で森の中を駆け抜けた。

数秒して森の中を抜け、最初にいたビーチに辿り着く。

「ふー…」

一呼吸おき空を見上げた。

「あれは…確か……ッ!!ネウロイ!!」

俺は空に浮かぶ無数の黒い塊を見て思い出した。

日常生活でもパンツみたいなズボン?を履き、ストライカーユニットと言う空を飛ぶ兵器を駆使し、ネウロイという化け物を十代の女の子達が倒す、友情や絆が描かれた物語。

”ストライクウィッチーズ”

「お、俺は…ストライクウィッチーズの世界に来たのか?」

あり得ない現実を感じながら空を見つめた。

警報が基地内に慌ただしく鳴り響く。

「ネウロイだと！！」

「ええ～！予報では来ない筈だったんじゃないの～～！」

坂本さんは驚き、ハルトマンさんは嫌そうな態度で言う。
それもその筈、今日はネウロイの襲撃は無いと予報されていたため、休暇となり街に備品を買いに行こうと話し合っていたところ、いきなりの襲撃が来たからだ。

「折角の休暇が～～～」

「だらしがないぞハルトマン！！それでも貴様はエースか！！」

「だってぇ～～～」

気だるそうなハルトマンさんに、バルクホルンさんが喝を入れる。
それでもハルトマンさんはだるそうだった。

「はぁ…休暇はまた今度にします。全員出撃準備！！！」

「「「「「「「「「「「「了解！！！」」」」」」」」」」」」

「了解～～～」

「ハルトマン！！！」

「はぁ…」

バルクホルンさんはいつまでも気だるそうなハルトマンさんを叱り、

ミーナ中佐はその光景を見て溜め息を吐く。

「行くぞ！宮藤！」

「あっ…はい！」

私達は急いでネウロイ撃墜の為にハンガーに向かった。

ハンガーに着いた私は直ぐにストライカーユニットを装備する。
何でも、今日現れたネウロイは数が多いらしく全員出撃らしい。
私は使い魔を発動させストライカーユニットに魔力を流し込む。
そして、

「宮藤　芳佳行きます！！！」

私達ストライクウィッチーズは空に舞い上がった……。

第五話：気付いた世界（後書き）

やっとウィッチーズの人達を載せることができました。次の話で上総とウィッチの出会いがあるかもしれません。初心者なりに頑張ります。

第六話：救出（前書き）

第六話です。今回は上総がウィッチを助けます。ただし、ウィッチ視点で。（未修正）

第六話：救出

「しっかし…多いな」

俺は空を見ながら呟く。

上空には無数のネウロイが、空の青を黒に染め上げている。

ざっと見る限り２００～２５０程のネウロイがウジャウジャと動きながら空を覆い尽くしている。

その光景を見て、

「気持ち悪…」

と言いながら鳥肌が出た腕を優しくさすった。

俺はこういう光景が嫌いなのだ。

例えば、ハチの巣で見かけられる無数の穴や軍隊アリのうごめく姿、豆腐の上を箸で何度も刺し、その上から醤油をかけ浮かび上がる無数の穴等、そういう光景が嫌いなのだ。

「ううっ……ん？…来たな」

空を見上げながら呟く。

そこには、武器を構えネウロイに立ち向かおうとする１１人の魔女がいた。

「さて、見せて貰うか……ストライクウィッチーズの実力を……」

俺は近くの岩陰に身を隠して、その光景を静かに眺めた。

「すごい数だな…」

「うじゅ～…うじゃうじゃがいっぱい」

「確かにな…」

坂本とルッキーニとシャーリが呟く。

「安心しろよサーニャ、私が守ってやるからな」

「うん…ありがとうエイラ」

「エヘヘ／／／」

サーニャの言葉でエイラは頬を赤くしていた。

「すごい数だね、芳佳ちゃん」

「う、うん、そうだね…」

「あら？怯えてらっしゃいますの宮藤さん」

「そ、そんなことは…」

「まぁ、せいぜい私の足を引っ張らないように」

「うっ…」

「ペリーヌさんなりに、芳香ちゃんのことを心配しているんだよ。

だから、そんなに気を落とさないで」

「うん…ありがとうリーネちゃん。」

「撃破数を稼ぐチャンスだぞ！！ハルトマン！！」

「私はもういいよ～～～。十分稼いだし」

「何を言う。カールスラント軍人たる者「わかった、わかった」ハルトマン！」

「まったく…二人ともよしなさい。…みなさん、ネウロイの戦力は未知数です。常時警戒を怠らないように！」

『了解！！！』

「シュトルム！！！」

ハルトマンは身体の周りに強力な風を発生させ、回転しながらネウロイに突っ込む。
ネウロイの黒い装甲はコアごとえぐり取られ白い破片となる。

「ふっふ～ん、一体撃破♪」

「ずおりゃぁぁぁぁぁ！！！」

バルクホルンは銃器を上に掲げ、そしておもいっきりネウロイに叩きつける。
ネウロイの装甲は一瞬で砕けコアが露出された。

「ミーナ！今だ！」

「わかったわ！」

ミーナはコアに狙いを定め引き金を引く。
銃から放たれた弾丸は嵐のように襲いかかり、ネウロイのコアを貫いた。

「ルッキーニ、アレをやるぞ！」

「うん！わかった！」

そう言うと、シャーリはルッキーニの手を掴み、自分の固有魔法である「高速」を発動させ、ルッキーニを振り回す。
そして、勢いがついたところでルッキーニをネウロイ向かって投げつける。

「当たれぇぇぇ！」

ルッキーニは光熱エネルギーを身体の前に一点集中に展開し、ネウロイに当たる直前で一気にエネルギーを放出する。
その攻撃は見事に直撃し、ネウロイを破壊した。

「一気にやりますわよ。トネーーール！」

ペリーヌは雷撃を広範囲に放出させる。
放出した雷撃はネウロイに絡みつき、その黒い装甲を焼き払った。

「ほいっと」

エイラはネウロイの放つ無数のビームを軽々しく避ける。
これは彼女の固有魔法、”未来予知”があるからこそなせる技である。

「そこ…」

サーニャはその隙を突き慎重に狙いを定め、フリーガーハマーの引き金を引く。
フリーガーハマーの砲撃は勢い良く目の前の敵に向かっていく。
そして砲撃は全弾直撃し、爆発と共にネウロイは砕け散った。

「はあぁぁぁ！」

宮藤はネウロイに向かって、九九式二号二型改１３ｍｍ機関銃の引き金を引く。
銃弾は黒い装甲を徐々に剥がしてゆく。
そして、ネウロイの装甲は砕けコアが見え始めてきた。

「今だよ！リーネちゃん！」

「お願い…当たって！」

リーネは対装甲ライフルの引き金を引く。
放った弾丸は見事コアに着弾し、目の間の敵を破壊する。

「ふー…いくぞ！」

坂本は烈風丸を引き抜き、

「烈風斬！！！」

強烈な衝撃波を伴いネウロイを一刀両断した。

数分後…。

「はぁ…はぁ…」

坂本さんは焦っていた。
最初は弱々しいネウロイの攻撃も、叙々にと強くなってきているのだ。
他のウィッチ達の皆にも疲れている様子が見られる。

「はぁ…はぁ…みんな…大丈夫か？」

「え、ええ…なんとか」

「はぁ…はぁ……ッ！！！宮藤！！！後ろだ！！！」

「えっ？」

坂本さんの言葉に私は後ろを振り返る。
そこには一体の中型ネウロイが私に向けて狙いを定めビームを撃とうとしていた。

「ッ！！！」

赤い斑点が激しく光を発する。
私はすぐさまシールドを張ろうとしたが、ネウロイのほうが一歩速く凝縮されたビームが放たれた。

（ダメ！！！間に合わない！！）

「「宮藤いいいいい！！！」」

「芳香ちゃん！！！」

坂本とバルクホルン、リーネが叫ぶ。
私恐怖により反射的に目を閉じた。

「……？」

違和感を感じた。
おかしい……幾ら待っても痛みが来ない。

（痛みが来ない……私…死んじゃったのかな……）

私はゆっくりと目を開いた。
そこには、綺麗な純白の羽を生やし、私達ウィッチ達とは違う形状のシールドを張っている男の人が私の事を守ってくれていた……。

第六話：救出（後書き）

上総の出番が少ないですね。だけど、次は上総の初の異世界での戦闘が繰り広げられます。頑張ります。

第七話：解放！天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）（前書き）

第七話です。

第七話：解放！天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）

「……すごいな」

瞳に映る光景に思わず驚きの声を挙げる。
大気を操る者。怪力を駆使する者。光熱を操る者。雷撃を操る者等、ウィッチ一人一人の戦闘能力は高く素晴らしいものだった。
関心している最中あることに気付く。

「……ん？」

不審な行動を行っている、一体のネウロイに眼を付ける。
そのネウロイは他のネウロイと共に行動せず、海面スレスレを単独で飛行している。
しかも、ステルスモードまで使用して…。

「あのネウロイ……」

海面スレスレを飛行するネウロイを見てから悪い予感を感じていた。
現在ネウロイの位置は、一人のウィッチの真下にいる。
息を潜めてジッとしている。
まさか……。
数秒後…悪い予感は的中した…ネウロイは一人のウィッチ目掛けて急上昇。
ネウロイが狙いを定めたのは、ストライクウィッチーズの主人公…宮藤　芳佳だった。

「ッ！！クソッ！！」

砂を蹴り上げ、すかさず岩陰を飛び出しそして、

「仕方ない！天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）解放！」

辺りから光が現れ、静かに身体を包み込む。
それは太陽のように明るくそして、赤ん坊が母親に包まれるような暖かさがあった。
光は俺を包み込んだと同時に辺りに弾け飛ぶ。
弾け飛んだ光から姿を現したのは、天使の象徴あるいは生命的存在である純白で美しい翼。
宝石の様に綺麗に輝く紅い眼をした異世界人…黒神　上総。

「間に合うか！？」

既に宮藤はネウロイと接触している。
只ならぬ緊張感と焦りが脳内を翔け回る。

「いや…絶対に…間に合わせてみせる！」

純白の翼を大きく広げ、ストライクウィッチーズの主人公…宮藤芳佳の元へ向かう。
ネウロイは赤い斑点に粒子を凝縮させる。つまり…ビームの発射準備である。

「ずおりゃぁぁぁぁぁ！！！」

叫び声を上げながら、さらに魔力を翼に流し速度を上げる。
速度を上げたことにより、音速に達し衝撃波を生む。
衝撃波と同時にネウロイから赤い閃光が放たれる。
此処からは本当にスピード勝負…。

間に合うか…それとも直撃か…。

「間に合え…！」

ギリギリ俺のほうがネウロイのビームより先に宮藤に辿り着く。
そして、

「”ａｅｇｉｓ（絶対防御圏）”展開！」

薄い青緑色の六角形の無数のパネルが球体を描くようにして繋がれあっていく。
六角形の青緑色のパネルは俺と宮藤　芳佳を包む。
ａｅｇｉｓは天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）の中で二番目に強い強度を持つシールドだ。
この世に存在する実弾兵器、圧縮粒子兵器、刃物…その全てをこのａｅｇｉｓは防いでしまう。

「ふ～…間に合った」

間に合ったことに安堵の溜め息を吐く。
本当にあの瞬間は焦った。
あと一秒…一秒遅かったら確実に宮藤　芳佳は撃墜され、ウィッチではなく人間としての命を落としていただろう。

「あ、あの…」

「ん？」

おどおどとした声に振り返る。
そこには目頭に涙を浮かべる宮藤　芳佳が居た。

泣いていたのか…。
瞬間目の前の敵（ネウロイ）に怒りが芽生える。

「……」

声を掛けたものの何を言ったらいいのかと、困惑した表情を浮かべている。
そんな宮藤　芳佳に俺はそっと彼女の頭に手を置き、優しく撫で始める。

「えっ…／／／あ、あの／／／」

頭を撫でられ顔を赤くしている宮藤　芳佳に対し、

「怖かっただろう？」

異世界人は優しく声を掛ける。

「安心して。後は俺がやるから。絶対に……助けてやる」

そっと宮藤　芳佳の頭から手を離し今だに閃光を放つ敵（ネウロイ）を見据える。
数秒して閃光が止んだことを確認して”ａｅｇｉｓ（絶対防御圏）”を解除する。

「女の子を泣かせやがって……ぶっ潰す！！」

「「宮藤いいいいい！！！」」

「芳佳ちゃん！！！」

皆が宮藤の名を叫ぶ。それは私も同様。
だが幾等叫んだところで、ネウロイは攻撃を止めてはくれない。
赤い斑点に粒子を凝縮させる。
私はストライカーユニットに魔力を注ぎ込み宮藤の元へ向かう。
しかし距離があり過ぎる…間に合わないッ…！
ネウロイは余裕を醸し出している。
そして遂に宮藤にビームが放たれた…。

「そ、そんな…宮藤…」

自らの武器を垂れ下げ、今にも崩れ落ちそうなバルクホルン。

「いや…いや…」

目に大粒の涙を浮かべ口元を手で押さえているリーネ。

宮藤の撃墜により私達は絶望の目を浮かべている。
私は自らの固有魔法である”魔眼”を使用し宮藤の生存を確認する。
使用していると不可思議な事に気付く。

「いや…まて！！ネウロイの攻撃は宮藤に直撃していない！誰かが…ネウロイの攻撃を防いでいる！」

「ふぇ…ひっく」

「ほ、本当か!?少佐!」

「でも一体誰が…!」

ミーナの言うとおりだ。
宮藤以外の私達は全員此処にいる。
誰かがシールドを張るなど不可能だ。
それでは一体何者が…。

全員が宮藤を攻撃したネウロイの方向を見る。
其処には薄い青緑色の球体が存在していた。
あのようなシールドは見たことも聞いたことも無い…。
数秒してネウロイの攻撃が止み、薄い青緑色の球体が叙々に消えていく。
そして姿を現したのは天使の様に美しい純白の翼を纏う一人の男。

「だ、誰だ?」

「お、男?」

「白い翼?」

バルクホルンとシャーリ、ハルトマンは疑問の言葉を発する。
それも当然のこと…この世で魔力を使えるのは女のみ。
なのに目の前の男は私達ウィッチとは形状が異なるシールドを張り、
況してや背中からは翼を纏い、ストライカーユニット無しに宙に浮いているからだ。
私達が驚きを隠せないでいると男が軽く息を吸い口を開く。

「女の子を泣かせやがって……ぶっ潰す！！」

その男の声は怒りを孕んだ声だった…。

「ふんっ！！！」

『！！？』

拳を握りしめ、思いっ切りネウロイを殴り飛ばす。

瞬間黒い装甲は砕け散り、赤い水晶みたいに綺麗なコアまでも砕く。

ウィッチ達はその光景に驚愕の表情を浮かべている。

それもその筈…武器も持たず只己の拳のみで敵を粉砕したのだから。

この世界の常識ではありえないことだ。

今度は数百メートル離れた敵を見据える。

数はかなりのものだが、小型機ばかり。

「うじゃうじゃ集まりやがって…堕ちろ！」

純白の翼を大きく広げる。

それと伴い翼が微かに光る。

「”Ａｒｔｅｍｉｓ（永久追尾空対空弾）”発射！」

命令と共に純白の翼から無数の空弾が放たれ、空を黒に染ているネ

ウロイをすべて破壊した。
中には回避行動を行うネウロイもいたがＡｒｔｅｍｉｓの前では意味を持たない行動である。
Ａｒｔｅｍｉｓの特徴は狙いを定めた敵を破壊するまで永久に追い続けるというストーカー兵器。
この追尾を逃れるにはＡｒｔｅｍｉｓを破壊するか、自らの命をＡｒｔｅｍｉｓに奉げるかの二種類しかない。
そしてこのネウロイ達は自らの命をささげる選択をした。もとよりそれしか選択肢が無いのだ。
破壊された大量のネウロイの破片は光を反射した。
その光景はまるで銀色に光る雪のように美しかった。

「すごい…」

「綺麗…」

兎耳と短髪銀髪が呟く。

「ふぅ…終わったか？」

戦闘は一瞬で片付きは辺りを見回す。
そこにはネウロイではなく口を開け呆然としているウィッチ達だけだった。
そんなウィッチ達に話掛けようと近付いた時、上空から何かが来るのを感じ取り上空にすかさず”ａｅｇｉｓ（絶対防御圏）”を上に向けて展開する。
展開した直後に赤く巨大な閃光が降り注いで来る。

「チッ…まだいるのか」

舌打ちをしながら顔を上に向ける。
そこには大型ネウロイが5体ほど浮いていた。

「はぁ…仕方ないアレを使うか…」

俺は手を前に伸ばし、

「来い！”ｃｈｒｙｓａｏｒ”！」

呟くと上総の手に光が集まり剣の形になっていく。
その剣を握り横に振った瞬間、光の粒が消えその姿を現した。
光子剣の名前は”ｃｈｒｙｓａｏｒ”
刀身は光子で出来ており、かなりの速度で振動している。
この武器は天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）近接戦闘武器で最も最強と言っても過言ではない武器だ。
そして、

「解放」

声と同時に光子剣は５ｍくらいの大きさまで膨れ上がる。
あまりにも振動が強力なのか、周りの空気が激しく唸り始める。

「な、何だあれは！？」

黒髪ポニーテールが驚きと興味を示した様子で”ｃｈｒｙｓａｏｒ”を見る。
まぁ当然の反応だ。
この世には存在しない武器なのだから。

「行くぞ！」

翼を広げ大型ネウロイに突っ込む。
ネウロイ達は激しくビームを撃ってくるが、そのすべてを自らの翼を匠に操りながら高速で避ける。

「は、速い！」

今度は兎耳が驚きと興味を示していた。
俺はそんなことは全く気にせず目の前の敵に向かう。
間合いが詰まった所で”ｃｈｒｙｓａｏｒ”を両手で持ち、

「どっせえええええい！！」

掛け声と共に”ｃｈｒｙｓａｏｒ”を思いっ切り横に振るう。
瞬間大型ネウロイは光に包まれる。
小さな悲鳴を上げた後敵は、完全にこの世界から消失する。
俺は綺麗になった空を見る。
其処には美しい青い空と途切れ途切れになっている雲が数個存在していた…。

「あの～…すいません…聞こえていますか～」

口を開け呆然としているウィッチ達に話しかける。
呆然…と言うよりも驚きのあまり硬直しているに近い。
大丈夫か…？

「えっ…な、何かしら？」

数秒して隊長であろう者から反応があった。

「怪我はしておりませんか？」

「ええ。あなたが助けてくれたおかげでね。…それよりもあなたについて色々と聞きたいことがあります。基地までご同行を…」

「……わかりました」

少し考え込んだ後赤髪の指示に頷く事にした。仮にも眼の前の人物達は軍人である。妙に抵抗し際は、躊躇なく銃殺されてしまう可能性が大きい。この場は赤髪の指示に従うべきなのだ。

純白の翼を大きく羽ばたかせ、第５０１統合戦闘航空団の基地に向かった。

その間ウィッチ達に物凄い凝視されたのは言うまでもない…。

第七話：解放！天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）（後書き）

次回は…どんな感じにしようか迷っています。

第八話：天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）説明（前書き）

第八話です。

第八話：天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）説明

Ａｒｔｅｍｉｓ（永久追尾空対空弾）：捕捉した対象物を破壊するまで追いつづけるミサイル。

ａｅｇｉｓ（絶対防御圏）：あらゆる攻撃を防ぐシールド。全方位に展開が可能。

ＡＰＯＬＬＯＮ（最終兵器）：漆黒の弓で、一発で国一つを滅ぼすことができる。

Ｈｅｐｈａｉｓｔｏｓ（超々高熱体圧縮対艦砲）：詳細不明

ｐａｒａｄｉｓｅ＝ｓｏｎｇ（超々超音波振動子）：音を凝縮、振動させ一気に放出する。威力は低い。

Ｐ＝ｓｔｅａｌｔｈ（反認知システム）：自らの姿を消せる。知覚不能まで姿を消せる。

ｃｈｒｙｓａｏｒ（超振動光子剣）：空の近接戦闘で最強の威力を誇る武器。

ａｅｇｉｓ＝Ｌ：円状の盾の形をしており、ａｅｇｉｓの様に全方位を防げないが強度はａｅｇｉｓより上。

Ｐｒｏｍｅｔｈｅｕｓ（超高熱体圧縮発射砲）：摂氏３０００度の気化した物体を秒速４ｋｍで撃ちだす射砲。

Ｄｅｍｅｔｅｒ（気象兵器）：気象を操る兵器。気圧を下げたり、

嵐を発生させること等が可能。

Ａｐｈｏｄｉｔｅ（素粒子ジャミングシステム）：機械に素粒子状のウイルスを注入するシステム。

Ｐａｎｄｏｒａ（自己進化プログラム）：詳細不明。謎に包まれている特殊機能。

Ｕｒａｎｕｓ・Ｑｕｅｅｎ・ｓｙｓｔｅｍ（空の女王）：全スペックを急上昇させるシステム。使用後は強力な副作用。

第八話：天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）説明（後書き）

そらのおとしものを参考にしました。

第九話：武術　秘奥義設定（前書き）

第九話です。

第九話：武術　秘奥義設定

刀剣

獣破轟衝斬：強力な横切りの後上空に向けて渾身の斬撃で敵を両断する。

白夜殲滅剣：満月を背景にしてターゲットをに連続攻撃を行う。

斬空刃無塵衝：打撃系の技を繰り出した後無数の斬撃を放つ。

天覇神雷断：眼前の敵を獣の爪で切り裂いたのち、はるか上空から神の雷のごとき一太刀を浴びせる。

リスト

クリティカルブレード：魔力を集めた拳を突き出して突撃し、進路上の敵を貫く。

インフィニティアソウル：打撃で打ち上げた敵に向かって高速で突進を繰り返し、最後に地面に叩きつける。

ゼロ・ディゾルヴァー：自らも無数の光子と化して敵に襲いかかり、最後にリストに溜めた魔力を放出し大爆発を発生させる。

シャドウ・モーメント：魔力を溜めた砲撃を放った後自身の身体を光子に変え、高速で敵に向かいすれ違い様に切り裂く技。

双刀・双銃

アンスタン・ヴァルス：極度の冷気を放出させた後連続射撃を行う。

ヴァンフレーシュ：武器を弓の様に構えて、矢を放つように膨大なエネルギーを発射する。

エクスパシオン：両剣、双剣、双銃と、武器の形態を次々と変えながら繰り出す連続攻撃。

ランヴェルス・レゾン：無数の射撃を繰り出したのちに、掌底打ちから敵の体内へ波動を放つ。

短剣

アステリズム・ライン：光の軌道を残しつつ敵に向かっていく短剣を、次々と投げつける。

イノセント・ガーデン：集めて魔力にを全域に放出し、味方全員の体力を回復させると同時に敵全体を攻撃する。

百花繚乱：時を一時的に止め正面に無数の短剣を展開し、合図とともに短剣を射出する。

投刀

カラミティ。ロンド：投げつけた武器が炎を纏いながら敵に向かい、当たると同時に爆炎を引き起こす。

ブレイズワルツ：武器を連続で投げつけたあと自らも突撃し、武器を手にとって爆炎を伴う連続斬りを繰り出す。

エターナル・セレナーデ：術で辺り一面を氷漬けにしたあと、武器を投げて竜巻を発生させ、最後に巨大な火球を落とし大爆発を引き起こす。

銃杖

G・ソードクロス：グリムシルフィと協力して、X字に斬りつける。

S・エクシード：シアンディームと同時にレーザーを発射し、重ねて極太レーザーと化す。

B・アサルト：ブラドフランムとシンクロして敵をボコボコにする。

第九話：武術　秘奥義設定（後書き）

これは秘奥義のごく一部なので、此処に載っている全ての秘奥義が本編に出るとは限りません。

第十話：仲間になる異世界人（前書き）

第十話です。（未修正）

第十話：仲間になる異世界人

「さてと…」

ミーナは執務室にある椅子に腰を下ろした。
その横では腕を組んで坂本と警戒心をバリバリ出しているバルクホルン。
そしてミーナはとてもいい笑顔を浮かべている。
そんな三人に少し怯える上総だった。
上総は基地に着いたら直ぐに執務室に通され、今現在尋問を受けようとしている。

「さっきは私達の大事な仲間を助けてくれてありがとうございます」

「い、いえ、お礼を言われるほどでは」

上総は少し緊張した面持ちで答えた。

「まず最初にあなたの所属部隊を答えてください」

「所属部隊？俺は部隊になんか所属しておりませんけど…」

「所属部隊がない……それでは質問を変えます。あなたはなぜあの場に居たのですか？」

「わかりません……気ずいた砂浜で寝ていました」

「はぁ……ではあなたの出身国と生年月日を教えてください」

「出身国は日本。生まれは１９９６年９月２１日です」

「「「……」」」

執務室に沈黙が流れる。

「どうかしましたか？」

「貴様…さっきから黙って聞いてれば…私達をからかっているのか…」

バルクホルンが拳を握りしめながら呟く。

「えっ…いや、からかってなんか…」

「嘘をつくな！お前の発言は怪しすぎる！」

「なっ！？俺は怪しい発言など――――――」

「日本なんて国は存在しない！それに生まれが１９９６年と言ったな…一つ教えてやる。今は…１９４５年だ！！」

「えっ……あっ！！！」

”やっちまったー！”と上総は心の中で呟いた。

ストライクウィッチーズのことはもちろん知っている。

だが、知っていることは隊員の名前ぐらいだ。

あとのことは、薄らと覚えているだけだった。

だから上総は自分の犯した失敗を今頃気付いたのだ。

「たしかに俺の発言はあなた方から聞けば怪しいですが、俺から取ってみればすべて事実なんですよ！」

「それではお前がまるで未来から来た人間みたいじゃないか！」

「”みたい”じゃなくて、本当のことなんです！」

「だったら証拠を見せてみろ！」

「ええ、わかりました。見せてあげますよ！」

「二人とも落ち着け」

口喧嘩をするバルクホルンと上総の間に坂本が仲裁に入る。
ミーナは呆れて溜め息を吐いていた。
上総はポッケに手を突っ込みあるものを探した。

「これが、未来から来たと言う証拠です」

上総はそう言うとあるものを机に出した。

「これは…？」

ミーナ達は机にあるものを不思議そうに見た。

「これはｉｐｏｄと言う機械で、自由に持ち運べる音楽機です」

「持ち運べる音楽機だと…また私をからかっているのか…」

「嘘だと思ったら使ってみてください」

バルクホルンはｉｐｏｄを持ち上げ、使用しようとしたが当然使い方が分かるわけでもなく、ひっくり返したり、目を細めて眺めたりしていた。

上総はそんな光景がじれったくバルクホルンに近ずいた。

「こう使うんですよ」

上総はバルクホルンからｉｐｏｄをとり、

「な、何を／／／」

イヤホンを耳の中に入れて上げた。

バルクホルンはそんな上総の行動に対し顔を真っ赤にした。

「顔赤いですよ？」

「お、お前がいけないんだろうが／／／」

「はっ？俺のせい？」

上総は何故バルクホルンが顔を赤くしたのか分からなかった。

「まっいいか。それじゃ音楽を流しますよ」

そしてボタンを押し音楽を流した。

「あっ……聞こえる」

「でしょ？」

「次は私に貸して……」

「ああ…」

バルクホルンはイヤホンを耳から外し、ｉｐｏｄに興味を示しているミーナに渡した。

「本当だわ……聞こえる…」

「これで未来から来た証明になりましたか？」

「ええ。確かにこんな高度な技術はどこの国に行ってもないわ」

「それはよかった。じゃあ俺はもう帰ってもいいですか？」

「ええ構わないけど。帰る場所はあるのかしら？」

「えっ……あっ」

「その様子じゃ無いようね」

「……はい…」

上総は申し訳なさそうに頷いた。

ミーナは少し黙りこみそして、

「行く宛てがないなら、私達に力を貸してくれないかしら？」

と言った。
上総はいきなりのミーナの発言に驚きの表情を浮かべた。
坂本とバルクホルンも同じく驚きの表情を浮かべた。

「ミーナどういうつもりだ！」

「そうだぞ！少佐の言うとうりだ！」

「でも、今回彼が居なかったら宮藤さんは…」

「「……」」

ミーナの言葉に二人は黙りこむ。

「特に最近は、ネウロイの活動が活発になって今まで以上に強力なネウロイの出現が増えてきたわ……このままの戦力では今日の様な危険がまた明日襲ってきてもおかしくないのよ」

「確かに…そうだな」

坂本が呟く。

「だから、あなたの力を貸してほしいの…私達の世界のために」

「……わかりました。ただし、条件があります」

「いいわ……言いなさい」

執務室に緊張が走る。

そして上総は、

「三食上手い飯と風呂と寝心地の良いベットを提供してください」

と言った。

「「「……は？」」」

「えっ？」

「ほ、本当にそれだけでいいの？」

「はい…俺なにかおかしいこと言いましたか？」

「ふっ…おかしなやつだ」

「本当だな…」

「？？？」

「本当にそれでいいのね」

「はい」

「わかりました……えっと」

ミーナは困った表情をし上総を見た。

「ん？……あっ！すいません、まだ名前を言っていませんでしたね…」

上総は頭を掻きながら言った。

「俺の名前は黒神上総です。宜しくお願いします」

「ええ。宜しくね黒神さん」

こうして上総はストライクウィッチーズの新たなる一員となった……。

第十話：仲間になる異世界人（後書き）

次は残りのウィッチ達との交流です。頑張ります。

第十一話：自己紹介（前書き）

第十一話です。（未修正）

第十一話：自己紹介

「でも、本当によかった…。芳佳ちゃんが無事で」

リーネは安堵の表情を浮かべていた。

「ごめんねリーネちゃん、心配させちゃって」

「まったく…本当ですわ」

「ペリーヌさんも…すみませんでした」

「まぁ、無事だからよろしくてよ」

ペリーヌは相変わらずツンツンした態度だった。

「でも、なんだろう?至急ブリーフィングルームに集まれなんて…」

現在ミーナ、バルクホルン、坂本を除いてすべてのウィッチがブリーフィングルームに集まっている。

何でも、ミーナが至急全員ブリーフィングルームに集まるようにと指示したからだ。

しばらくしてミーナ達が戻ってきた。

そして、全員がいるのを確認し口を開いた。

「全員いますね…いきなりですがこの第５０１統合戦闘航空団に新たな仲間が加わることになりました」

「新しい仲間?それって…」

宮藤が気付いた様子で言う。

「では、入ってきてください」

扉が開かれ入って来たのは、

「あっ！あの人…」

「やっぱり…」

大事な仲間を助けてくれた人だった。

「では、黒神くん自己紹介を」

「はい。えっと、名前は黒神上総といいます。出身は日本…じゃなくて扶桑です。宜しくお願いします」

上総は緊張した面持ちで自己紹介をした。

「これからのことと、私の自己判断により黒神くんには５０１部隊の戦力として一緒に戦ってもらいます。みなさん、各自で自己紹介をしとくように。では…解散！」

ミーナがそう言うと、全員席を立ち敬礼をした。

「あ、あの…」

「ん？」

一人のウィッチがすかさず上総に話しかけた。

「さっきは助けてくれて、ありがとうございました！」

「お礼を言われるほどではないよ」

上総はそう言うと優しく微笑んだ。

「それより、えっと…君の名前は？」

上総はあえて名前を知らないようなそぶりを見せた。
ここで、名前を知っているとなると混乱を招くことになるからだ。

「あっ…私の名前宮藤芳佳です！」

「そっか。よろしくね宮藤さん。あと俺のことは上総でいいから」

「私のことも芳佳でいいですよ。そ、その…上総さん／／／」

「うん、わかったよ。じゃあよろしくね。芳佳」

「ッ！！／／／」

芳佳は上総の優しい笑みと名前を呼ばれたことにより顔を真っ赤にした。
上総はそんな芳佳を不思議そうな目で見た。

「なんだよ～宮藤～照れてんかよ～」

「て、照れてなんか…／／／」

「顔が赤いぞ～」

「う～～～／／／」

「あなたは…？」

上総は芳佳に絡んでいるオレンジ色の髪の女に問いかけた。

「私か？私はシャーロット・E・イェーガー。シャーリって呼んでくれ。型っ苦しいのは嫌いなんだ。どっかのカールスラント軍人みたいのがな」

「リベリアン…それは私のことか…」

バルクホルンはシャーリを睨みつけた。

「お前以外居るかよ」

「何だと！！」

「二人とも喧嘩はよさんか。悪い印象を持たれてしまうぞ」

「そうだよトゥルーデ」

「「うっ……」」

黒髪と金髪の女が呆れながら喧嘩を止めた。

「私達の自己紹介はまだだった。私の名前は坂本美緒だ」

「わたしはエーリカ・ハルトマン。よろしくね～」

「ゲルトルート・バルクホルンだ」

「よろしくお願いします。坂本さん。ハルトマンさん。バルクホルンさん」

上総は礼儀正しくお辞儀をした。

「礼儀正しい奴じゃないか。どっかの奴と違ってな」

バルクホルンはそう言うとシャーリに目を向けた。

「なんだよバルクホルン…私に言っているのか」

「お前以外誰が居る」

「何だと！」

そして、二人はまた喧嘩をし始めた。

「喧嘩すんなよ！サーニャが起きちゃうだろう！」

「エイラの言う通りだぞ。二人とも止めろ」

「「うっ……」」

「まったく～。私の名前はエイラ・イルマタル・ユーティライネン。

こっちはサーニャ・V・リトヴャク。言っとくがサーニャに手を出すんじゃねーぞ」

エイラは寝ているサーニャを支えながら自己紹介をした。

「よろしく。エイラさん。サーニャさん」

「あの…」

上総が横に目を向けるとみつ編みと金髪眼鏡が居た。

「えっと…君は？」

「私はリネット・ビショップと言います。リーネと呼んでください」

「私はペリーヌ・クロステルマンと申します」

「よろしく。二人とも」

上総は頬笑みながら、二人に挨拶をした。

「もう大体挨拶は済んだかな…」

上総は自己紹介を済ませた人数を数え始めた。

「1、2、3…あれ？あと一人済ませてないような…」

人数が一人足りないことに気ずいた。

その瞬間、

「とぉーーー！」

何かが後ろに張り付いた。

「うおっ！な、何だ！？」

上総はいきなりのことに驚いた。

「……う～～羽ががない～～」

「…君は？」

「うん？私？私はフランチェスカ・ルッキーニ！よろしく、上総！」

ルッキーには無邪気な笑顔を浮かべて自己紹介をした。

「ねぇねぇ。それよりも羽は～？」

ルッキーニが背中を触りながら問いかける。

「羽か…今は閉まっているよ」

「じゃあ見せてぇ～」

「わかったから、背中から離れてくれないか？」

上総がそう言うとルッキーニは素直に離れ、早く早くという表情を見せた。

「天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）解放」

上総は光に包まれそして、純白の翼を生やし赤い目をした上総が現れた。

「わぁ…」

「綺麗…」

宮藤とリーネは思わず声を漏らした。

そして、ルッキーニは、

「それぇーーー！」

上総の羽にしがみついた。

「おっと…」

「お～～…わぷわぷ～～～」

ルッキーニは気持ちよさそうに羽に顔を埋めた。

「こら！ルッキーニ！」

「いえ。大丈夫ですよ」

「じゃあ私も～～～」

今度はハルトマンが羽にしがみついた。

「柔らかい～。ふわふわ～♪」

「こら！ハルトマン！」

「もぉ～～～トゥルーデも触ってみなよ～～～」

ハルトマンはそ言うとバルクホルンの腕を無理やり引っ張った。

「なっ！？ハルトマ…わふっ」

「どぉ～～～お。トゥルーデ～♪」

ハルトマンは羽に埋まりながらバルクホルンに言う。

「おお……はっ！いかん！」

（一番夢中になっていた…）

と心の中で思うウィッチ達だった。

こうして上総はウィッチ達との出会いを果たした…。

第十一話：自己紹介（後書き）

疲れましたぁ～。やっとウィッチ達と話すことができました。この調子で頑張ります。

第十二話：異世界で迎えた朝（前書き）

第十二話です。（未修正）

第十二話：異世界で迎えた朝

「ふっ！はぁ！」

現在上総は滑走路に出て刀剣を振るっている。
これは、朝の日課で３０分～１時間ほどの朝練をする。
朝練には色々あり、帯刀剣術や抜刀剣術、魔法等があり上総のその日の気分によってさまざまな朝練を行う。
そして今日の気分は帯刀剣術。だから朝練には、帯刀剣術を行う。

「旋狼牙！」

上総は素早く刀剣を振るう。
帯刀剣術の特徴は剣を納めたまま鞘や蹴りでの攻撃で、攻撃範囲は狭いが素早く動けるのが特徴である。
また、抜刀剣術は剣で斬りつけて攻撃で、隙が大きいが、威力が高く、攻撃範囲も広いのが抜刀剣術の特徴である。

「ふー…そろそろ」

上総が朝練を終えようとした時、

ドォォォン…ビーチのほうで音がした。

「ん？何の音だ？」

上総は音の行方が気になりビーチへ足を向けた。

「はぁ…はぁ…もう一回だ」

坂本は息を切らしながら烈風丸を構える。

そして、

「烈風斬!!!」

烈風丸を思いっ切り縦に振るった。

振るった瞬間、烈風丸から蒼い刃が放たれ海を大きく切り裂いた。

だが、坂本が望む烈風斬はこれではない。

「はぁ…はぁ…こんなんじゃ私は」

坂本はもう一度烈風斬を放とうと烈風丸を構えなおしたとき、背後の岩陰に誰かが隠れているのに気がついた。

「ッ!!誰だ!」

すかさず後ろを振り向き岩陰に隠れているものへ声を放った。

「俺です、坂本さん」

岩陰から姿を現したのはストライクウィッチーズの新たな仲間…黒神上総だった。

「何だ…黒神か…どうしたんだ?こんな朝早くに」

「朝の鍛錬をしておりましたら、海岸のほうで音がしたもので…気になってしまって」

上総は少し笑いながら坂本の問いに答えた。

「朝から鍛錬に励むとはしっかりしているじゃないか」

「坂本さんもですよ。それよりも、さっきの烈風斬ってやつすごいじゃないですか」

上総は坂本が放った烈風斬を褒めた。
だけど坂本は、

「いや…私のなんてまだまだだ…それに私には絶対に習得したい技がある」

「習得したい技?」

上総は首をかしげて坂本に問いかけた。

「ああ…遥か昔から扶桑皇国に伝わる最強の一太刀…真・烈風斬を」

「真・烈風斬…」

坂本は海を見ながら呟いた。
そして上総は坂本のその言葉に、坂本なりの”覚悟”を感じた。

「…さて、私もそろそろ終わりにするか」

坂本はそう言うと、静かに烈風丸を鞘に戻した。

「朝食の前に汗を流さないとな、どうだ黒神お前も一緒にくるか」

「えっ…お、俺もですか？」

上総は少し戸惑ったような表情を浮かべた。

「しかし、俺は男であって坂本さんは女であって、その…あの…」

「気にするな！風呂場では上官、男女とも関係ないからな！ハッハッハッ！」

坂本は笑みを浮かべながら、大声で笑った。
そして上総は、

「いいのかなぁ…」

戸惑っていた。

結局上総は坂本さんと共に風呂に入り、お互いの背中を流し合い、お互いの親睦を深めた。
だが、この行動があとあと問題になるであった…。

上総と坂本はお互いの親睦を深めた後一緒に朝食を摂りに向かった。
廊下を歩いているとほんのりといい匂いが鼻をついた。

「この匂いは…味噌汁でしょうか?」

「ああ、ということは今日の朝食は和食か」

「へぇ〜この基地では和食も出るんですか」

上総は嬉しそうに呟いた。
和食は上総の好きな食べ物の一つであり、もしパンかご飯を選べと言われたら当然ご飯を選ぶ。
その位和食のことが好きなのだ。
そして、匂いがする扉を開くとすでにみんなが揃っていた。

「あっ!おはようございます。坂本さん、上総さん」

宮藤は笑顔で二人に挨拶をした。

「おはよう。宮藤」

「おはよう。芳佳」

二人もきちんと挨拶を交わした。

「おはよう二人とも。さぁ座ってみんな待っているわ。」

「すいません…待たせてしまったようで」

「みんな揃ったようね。それでは、頂きましょう」

「「「「「「「「「「「「頂きまーす！」」」」」」」」」」」」

上総は最初に味噌汁を啜った。

味は言うまでもなく…美味い。

いままで食べてきた味噌汁で一番美味いかもしれない。

「ど、どうですか？上総さん？」

宮藤は緊張した面持ちで上総に問いかけた。

「すごく美味しいよ。これ、全部芳佳とリーネで作ったの？」

「「はい♪」」

宮藤とリーネは嬉しそうに答えた。

「そっか。二人ともこんなにおいしい料理が作れるなら、将来はきっと良いお嫁さんになれるよ」

「そ、そんなお嫁さんだなんて…／／／」

「恥ずかしいですよ…／／／」

上総の言葉に二人は顔を赤く染めた。

こうして上総はみんなと楽しく朝食を食べ終えた…。

朝食を食べ終え上総がお茶を飲んでいると、坂本が思い出したように上総にあることを問いかけた。

「そいえば黒神、背中の傷はどうしたのだ？」

「傷？…ああ、あれですか…あの傷は昔に付けられた傷です」

上総は昔を思い出すように呟いた。
そしてその目はとても悲しく見えた。

「そうか…」

坂本はそれ以上何も聞かなかった。
もとより聞いてはならないと思ったからだ。
それは、他のウィッチ達も同じだ。
そして、宮藤はあることに気付いた。

「でもどうして坂本さんは、上総さんの背中に傷があることを知っているんですか？」

「さっき一緒に風呂に入ったからな」

「へぇ～一緒にお風呂に……って」

「「「「「「「「「「ええええぇぇぇ！！！」」」」」」」」」」

ウィッチ達は顔を赤くし、声を荒上げた。

ルッキーニだけは何が何だか分からずいた。

「みみみ、美緒！あ、あなたは！／／／」

「ん？どうかしたのかミーナ？」

「”どうかしたか”じゃないでしょ！／／／」

ミーナが顔を真っ赤にしながら坂本に問いかける。

そしてペリーヌは、

「しょ、少佐が…／／／」

バタンッ！

あまりのショックにより倒れてしまった。

「ペ、ペリーヌさん！？」

リーネがすかさずペリーヌへ駆け寄る。

「しっかりしてください！ペリーヌさん！」

そして、上総はなぜか身の危険を感じ取り部屋を出ようとした。

しかし、

「待ちなさい…黒神くん」

「どこに行こうとしているんですか…上総さん」

「見損なったぞ…黒神」

三人の鬼がいた。
一人はすごくいい笑顔を浮かべているが、目が全く笑ってない。
二人目は…なんだろう、言葉にできないくらい怖い。
三人目は使い魔まで発動させている。もし、発動状態で殴られたら半端なく痛い。いや、痛いじゃ済まないかもしれない。

「あ、あの…少し落ち着き「「「覚悟は…できていますね（いるな）」」」…はい」

その後上総抜け殻となって現れたのは言うまでもない。
そしてあの鬼三人組は何故かツヤツヤしていた…。

第十二話：異世界で迎えた朝（後書き）

宮藤がやばくなっている気がします。まぁ、これからも頑張っていきます！

第十三話：訓練体験（前書き）

第十三話です。題名は思いつかなかったから、ほぼ適当です。
あと今回は結構短いです。

第十三話：訓練体験

「さっきはひどい目にあった…」

抜け殻状態から復活した俺は基地をゆったりと散策していた。
まだ、基地のことは詳しくは知らないし暇つぶしには丁度良いと考えたからだ。
歩いている最中、あることを考えている。

「でも、どうして芳佳はあんなに怒っていたんだ？」

そう…先程の芳佳のことだ。
ミーナ中佐とバルクホルンさんが怒るのはよくわかる。
ミーナ中佐はこの部隊の隊長であり、その様な行為を注意するのは当然だ。
バルクホルンさんは自身にも他人にも厳格な人だから、中佐同様で注意するのは当たり前だ。
だが、問題は芳佳だ。
何故あんなに怒る必要があったのだ？
何故優しく仲間思いの彼女があそこまで…。
……駄目だ…幾等考えても分からない…。

「……はぁ」

溜め息を吐き、思考を働かせるのを中断させ、再び基地の中を散策し始めた。

「ん？お～い芳佳、リーネ、ペリーヌ、坂本さ～ん」

ぶらぶらと散策していると、訓練をしている三人組とそれを指導している教官を見つけたため、手を振りながら近付いた。

「あっ…はぁ…はぁ…こ、こんにちは…上総さん…」

リーネは地面に大の字になり、息を切らしながら挨拶を交わしてくる。

「こんにちは。随分とへばっているようだね」

「はい…坂本さんの訓練は…結構…はぁ…はぁ…厳しくて」

「そんなに厳しいの？」

「知りたいのなら黒神もやってみたらどうだ？」

俺がリーネに問いかけると後ろから坂本さんが訓練をするよう促してくる。

確かにそれは良いかもしれない。

この世界に訪れ、まともに身体を動かしたのは天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）を発動させた時だけだと思う…。

天界に居たころはほぼ毎日休みなく、師匠と共に修行をしてきた。

あの頃は色々と恐ろしかったな……。

思い出すことが悪夢だ…。

俺は背中をぶるっと震わす。

もしかしたら師匠が監視しているんではないかという感覚に狩られたからだ。

此処は坂本さんの意見に賛成するべきだ。

「分かりました。やらせて頂きます」

「はっはっはっ！いい心意気だ！では早速、基地を３０周してこい！」

「はい！」

元気よく返事をし、早速訓練に取りかかった。

「だ、大丈夫かな？上総さん…」

「ふ～…終わりましたよ、坂本さん」

「はっ…？も、もう終わったのか？」

「はい」

私は驚愕する。

たった１時間足らずで基地３０周を終えてしまったからだ。

しかも息切れなど全くしていない。

普通ならあり得ないことだ。

「あの…坂本さん？」

「えっ…ああ、何だ」

私が呆然としていると黒神が不思議な様子で声を掛けてくる。

「次は何をすれば？」

「次は腕立て、腹筋、背筋を３００回ずつだ」

「はい！」

黒神は笑顔で返事をすると、早速私の言った訓練メニューをやり始めた。

「ふぅ…終わりました」

「えっ！上総さんもう終わったんですか！？」

「い、いくらなんでも早すぎますよ！？」

芳佳とリーネは驚いた様子で俺に尋ねる。

「そう？普通だと思うよ」

「ぜ、全然…普通じゃありませんわよ…」

ペリーヌは息を切らしながら言ってくる。

普通じゃないのかな…？

この位は序の口なんだけど…。

そう…これ位の訓練なら、未だ楽な部類だ。
修行で例えると…準備運動の部類に当たる。
天界での準備運動は、第一に走り込み。
走り込みといっても普通の走り込みではない。
終わりがない走り込みだ。
師匠の指示が無い限り、ほぼ永遠に走り続ける。
時間は良く分からないが、最低で４~５時間、最高で１０~１１時間位準備運動で走り込んだ事がある。
走り込みが終えた後は刀剣を師匠と共に振るう。
素振りは大体数万回やり続ける。
但し同じ動きをやり続ける訳ではない。
途中で踏み込みを取り入れたり、突きを繰り出したりなど様々だ。

最初の頃は走り込みだけでぶっ倒れてしまい、そのまま気を失った。
師匠はその姿を見て心底呆れていた。
俺はこの辛さに師匠に抗議をしたが、鋭い形相で睨まれ抗議など出来る状況じゃ無かった。
そんな辛い日々が続いた御陰か、俺の身体能力は短期間で急上昇した。
長時間走り込みが出来る様になり、刀剣も習った事が無かったが、短時間で基本は全て習得できた。

なのでこの程度の事は簡単に済ませることが可能なのだ。

「さすがだな黒神。さぁ、お前達も黒神を見習ってどんどんやれ！」

「「「は、はい…」」」

三人組は力無い声で返事をする。
俺はやることが無くなってしまった…。

「坂本さん、後は何を？」

「そうだな…」

坂本さんは口元に手をやり、考え込む。
そして数秒後、坂本さんは何か思い出した表情をしながら此方を向く。

「そうだ黒神。お前は剣を心得ているそうだな」

「ええ、そうですよ」

「よし！だったら私と模擬戦でもするか！」

「模擬戦ですか？別にいいですけど…」

突然の模擬戦の誘いに俺は少し困ってしまう。

「ん？どうかしたのか？」

「えっと、坂本さんには坂本さんの剣の流儀がありますよね？それと、同じで俺にも俺の剣の流儀がありまして…」

「それがどうしたと言うんだ？」

「俺の剣の流儀は魔力を行使する流儀なので…その…模擬戦で戦うのはまずいんじゃないかと思いまして…」

俺が師匠に叩きこまれた流儀は魔力を必要とするもの…。

坂本さんの流儀とはかなり異なる。
それと伴い危険である。
だから模擬戦を行うわけには…。
そう思い坂本さんの顔に目をやる。
すると口元を歪ませ、何故かうずうずしていた。

「魔力を行使する流儀…面白そうじゃないか」

「坂本さん？」

「黒神！模擬戦だ！」

「えっ…でもいいんですか？」

「構わん！私もお前の実力を確かめておきたいからな！」

坂本さんは何故か嬉しい表情を浮かべる。

「はぁ…はぁ…あれどうしたんですか？」

横からが息を切らした芳佳が尋ねてくる。

「これから黒神と模擬戦をするんだ。お前達も来るか？」

すると三人組は力無く頷く。
大丈夫だろうか…？

「行くぞ！黒神！」

坂本さんはそう言うと俺の首根っこを掴み、引き摺りながら歩きだ

す。

「あっ！ちょ…ちょっと坂本さん！？歩けます…自分で歩けますからーーー！」

「あっ、待ってくださーい。坂本さーん！」

三人組はふらふらになりながら跡を追いかけた…。

――――道中――――

「あっ、そうだ芳佳」

俺はあることを思い出し芳佳に尋ねる。

「はい？何ですか？」

「どうしてあの時あんなに怒っていたの？」

「あの時？」

首を傾げ何のことか考え始める。

「ほら、あの時だよ。俺と坂本さんが一緒に風呂に入ったと聞いた時」

そう言うと芳佳の表情はどんどん怒りの表情に変わっていく。

顔を赤らめ、頬を可愛く膨らます。

「むぅ…怒るにきまってます！男の人と女の人同士が一緒にお風呂に入るなんて！」

声を荒上げながら言う。

「それに…／／／」

芳佳は先程までの表情と打って変わり、今度は表情が妙に赤く染まる。

「それに？何？」

「ッ！！／／／何でも無いです！／／／」

俺が下から覗き込んだ瞬間、芳佳は顔を更に真っ赤にし俺から顔を背ける。

そして芳佳は駆け足で先に行ってしまった。

「結局分からなかったな…」

芳佳の何故あのような行動を取ったのか分からず、再び謎に包まれてしまうのであった…。

第十三話：訓練体験（後書き）

今回の作品は半分寝ながら作り上げたので、とても辛いです。次週は坂本と上総が模擬戦を行います。ストーリーが進むのが遅くてすいません。頑張ります。

第十四話：模擬戦（前書き）

第十四話です。（未修正）

第十四話：模擬戦

「さて、準備はいいか黒神」

「ええ、大丈夫ですよ」

現在俺は模擬戦を行うためビーチに来ている。
観客は芳佳、リーネ、ペリーヌ、そしてあとから来たミーナ中佐、ルッキーニさん、シャーリさんの６人だ。
観戦しに来た理由を後者の人達に尋ね要約すると、
ミーナ中佐は”息抜きに観戦”、ルッキーニは”面白そうだったから”シャーリさんは”暇だから”
と言うことだ。
そしてこの場に居ない４人は大体予想がつく。

上総はそんなことを考えながら坂本と対峙する。
すると、坂本が不思議そうな眼で上総を見た。

「？なぜ刀を抜かない？」

上総は刀を鞘から抜かず鞘に入った刀を構えている。

「俺は刀での剣術が帯刀剣術と抜刀剣術の二種類あるんですよ。それで帯刀剣術のほうが素早く動けて良いんですよ」

「なるほど…その様な剣術があるとはな…ますます興味が湧いてきたな」

坂本は少し興奮気味に呟いた。

「でも坂本さん…本当に良いんですか?魔力を行使しても…」

上総は申し訳なさそうに言った。

「構わん。お前の実力がどれほどなのか知りたいしな。それでは…いくぞ!」

「はい!」

そして、上総対坂本の模擬戦が始まった…。

「はぁ!」

坂本が刀を素早く振るう。

だが、坂本が振るった刀は上総の鞘によって水のように流される。

坂本は一瞬驚いたが直ぐに体勢を立て直し、再び刀を振るう。

「守るだけじゃ意味がないぞ!黒神!」

坂本が刀を振るいながら上総に言う。

「そうですね…そろそろ俺も反撃させてもらいますよ」

上総は坂本から一旦距離をとり、鞘に入った刀を構えなおした。

「それでは坂本さん。これから俺は魔力を行使した剣術をやらせて

もらいます。お怪我はしないように」

ビーチに緊張感が走る。
坂本の頬に汗が伝う。

「では…いきます！」

上総は刀を構えながら坂本に突っ込む。

「見せて貰うぞ…魔力を行使する剣術を！」

坂本は突っ込んできた上総に向けて模造刀を縦に振るう。
その時、上総の言っていた魔力が行使された。

「水影身」

すると上総の身体が水にのように変化し、川を流れるように右に大きく移動しながら坂本を鞘で薙ぎ払った。

「グッ！」

坂本はギリギリで攻撃を防いだが、体勢が崩されてしまった。
上総はその隙を見逃さなかった。

「次はこいつを…烈震虎砲」

その瞬間上総の手中から水色の獅子が現れ坂本に襲いかかった。
獅子の見た目を一言で言うなら”憤怒”の表情。

「なにっ！？」

水色の獅子は坂本の模造刀に咬みつき大きく後ろへ突き飛ばした。

「これで終わりです…抜砕竜斬」

上総は刀の鍔に親指を添え、居合い斬りの体勢になった。

「クッ！させるか…えっ…」

坂本は次の攻撃に備えようと刀を上総の前に構えたが、すでに上総の姿は目の前から消え気付いたら坂本の背後にいた。

「い、いつの間に…」

坂本は動揺を隠せなかった。

先程まで目の前にいた男が今度は自分の背後に居るからだ。

「俺の勝ちですね？坂本さん」

上総は頬笑みながら坂本に言った。

「はっ？私はまだ負けてなど――――――」

上総は抜刀した刀をゆっくりと鞘に戻した。

瞬間、

パキィィィィ…と坂本の模造刀が砕け散り、砂浜に砕け散った模造刀が突き刺さった。

「なっ！？」

私はは今起きた現象に衝撃を隠せなかった。
同じ模造刀同士でやり合っただけなのに、模造刀が砕け散った。
普通じゃあり得ないことをこの男はやって見せた。
一体どうやって…

坂本は砕け散った模造刀を見つめていた。
そして他のウィッチ達は何が起きたか分からず唖然としていた。

「黒神…頼みがある」

坂本は刀を見つめながら言った。

「はい？何ですか？」

「さっきの技を私にも教えてくれ！」

坂本は真剣な眼差しで上総に頼み込んだ。
だけど上総は、

「すみません坂本さん。この技は教えることはできないんです…」

申し訳なさそうな顔で頭を下げる。

「なぜダメなんだ？」

「この技を習得するのにかなりの歳月要します。それに…」

上総は言葉を詰まらせた。

「？それに？」

「い、いえ！何でもありません…とにかくこの技は教えることができません…」

「そ、そうか…」

坂本は悔しそうな表情を見せる。

「あっ、でも簡単な技なら教えられるので、それでいいのなら教えますよ？」

上総は頬笑みながら坂本に言った。

「ほ、本当か！？」

すると坂本の顔はさっきの表情とは打って変わり嬉しそうな表情に変わった。
その表情は、初めて玩具を手にした子供のように無邪気な笑顔だった。

「はい。もちろん」

こうして坂本との約束し、模擬戦を終えた…。
一方観戦していたウィッチ達は、

「す、すごかったね…芳佳ちゃん」

リーネは驚きの声を上げた。

「うん…それにちょっと…かっこよかった／／／」

「うん…私もかっこいいなと思ったよ／／／」

二人は顔を赤らめながら上総を見つめた。

「な、なんですのあのお方…少佐とあんなに楽しそうに」

ペリーヌは上総と坂本が仲良くしているのを見て、悔しそうにしていた。

「あれほどの力を持っているなんて…すごいわね…」

ミーナは上総の戦闘能力の高さに驚いていた。

「「クゥ…クゥ…」」

ルッキーニとシャーリは寝息を立てながら寝ていた。

その後上総は風呂に入りくつろぎ、夕飯を食べ腹を満たし、そして今は自室のベットで横になっている。

そしてそろそろ寝ようと目を閉じようとした瞬間、

コンコン…不意にドアがノックされた。

「どなたですか？」

上総は上半身だけを起こしノックの方向を見た。

「わたしだよ～」

「ルッキーニさんですか…どうしたんですか」

声の主はルッキーニだった。

ルッキーニは上総のベットの横にちょこんと座ると、

「ねぇねぇ上総。また羽を出してぇ～」

可愛らしい声で上総に頼みごとをした。

「いいですよ。ちょっと待っててくださいね。」

上総は一呼吸置きそして、

「天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）解放」

背中から純白の翼が出てきた。

「これでいいですか？ルッキーニさん」

「うん♪でねでね、この羽で私を包み込むようにしてほしいの」

「こうですか？」

上総は純白の羽をルッキーニを包み込むように折り曲げた。

「うん…そう…ありがとう…上…総…」

するとルッキーニは翼に包まれながら気持ちよさそうに寝てしまった。

「どうしよう……」

上総はルッキーニをどう翼から離そうと考えたが、ルッキーニは翼をしっかりと掴んでおり離せる状況じゃなかった。

「……まぁ、いいか」

上総はまたゆっくりと目を閉じようとした瞬間、

コンコン…再びドアがノックされた。

「どうぞ～」

上総は半分寝ながら答えた。

「失礼するよ～…ってもう先客がいるじゃん」

ハルトマンはルッキーニを見ながら呟いた。

そしてハルトマンは空いているほうの翼のところに移動し腰を下ろした。

「ねぇ上総。私も羽で包み込んで～」

「はい…いいれすよ…」

上総は半分寝ながらハルトマンのことも包み込んだ。
包み込んだあと上総は深い眠りに入った。
そしてハルトマンは、

「……」

ジッと上総の顔を見つめていた。

「こうして見てみると上総って結構いい顔してるな…それにとても暖かい…」

ハルトマンは静かに呟いた。
そして上総の翼をそっと握り、

「おやすみ…上総…」

そしてこの光景が他のウィッチ達に見られてしまい、再びお仕置きという地獄を見ることになったのは当然である…。

第十四話：模擬戦（後書き）

やっと書きあげました。戦闘描写は難しいです。とても疲れた～。
次も更新頑張ります。

第十五話：視線の正体（前書き）

第十五話です。

第十五話：視線の正体

俺がこの世界に現れて大体一週間が経つ。
この一週間は色々あった。
坂本さんと一緒に風呂に入って親睦を深めたり、ウィッチ達と共に訓練したり、ルッキーニさんとハルトマンさんと一緒に睡眠したり等本当に色々なことがあった。
その度に俺は芳佳やバルクホルンさん、ミーナ中佐に怒られたりしたけど…。
でもこうしてウィッチ達と共に過ごす生活はとても楽しかった。
だけど、そんな中で不安で仕方ないことがある。
それは、

（…師匠）

俺が最も尊敬する人でそしていつか超えたいと思う人の存在だ。
だけどあの時いきなり現れた男”魔牙”に俺と師匠は苦戦を用いられた。
そして師匠は俺を助けるために異世界の扉を解放した。
扉が閉じるとき師匠は”我を信じろ”と笑顔で言った。
だから俺は信じている。師匠があの男に負けるはずがないと…。

（師匠…俺は、信じていますから…）

俺はこの一週間で起きたことと尊敬する自分の師匠を思い浮かべながら、ゆっくりと瞼を閉じた…。

朝、まだ日が昇らない時間に起床する。

「ん～～～…」

腕を大きく上に伸ばし、固まった身体の筋肉を伸ばす。

「よし！そろそろ――――ん？」

朝の鍛錬に向かおうとした瞬間、誰かに見られる感覚に襲われる。

「……誰だ」

俺は辺りを見回しながら視線を向けてくる者に冷たく言い放つ。
この視線はウィッチ達のものではない。整備兵達でもない。
何故ならこんなにも人間を監視する様な気持ち悪い視線を向ける者はこの基地には居ないからだ。
このことはウィッチ達、整備兵達と交流して分かったことだ。
じゃあ一体この視線は誰の…。
そんな事を考えていると視線が急に消え、いつもどうりの部屋に戻る。

「一体……何だ」

俺は少し嫌な気分で朝の鍛錬をやりに滑走路へ向かった。

「はぁ！しっ！」

今日の気分は抜刀剣術なので抜刀状態で刀剣を振るう。

「幻魔衝…またか」

刀剣を振るうのを止め、辺りを見回す。
先ほどの視線にまた襲われたからだ。

「誰だ！出てこい！」

俺は自分に視線を向けてくる者へ声を荒上げ言い放つ。
その声は先ほどとは違い怒りを露わにした声。
そして視線はまた逃げるように急に消えて無くなる。

「あーもう！イライラする！」

俺は拳を握りしめ鉄で構築されている地面を叩きつける。
瞬間、周囲に衝撃波が放たれ滑走路の一部が壊れる。

「……やっちまった」

食事の時間。訓練の時間。ウィッチ達の会話の時間。くつろぎの時間。

そのすべてに何者かの監視がついてきた。
さすがに俺の精神的限界も近い。

「頭にきた…今夜決着をつけてやる…」

俺は静かに呟き宣戦布告をした。

満月が綺麗な夜、波の心地いい音を聞きながら視線を向けてくる者を待つため滑走路に立っている。

「…いい加減正体を現せよ」

静かな声で視線を向ける者へ言い放つ。
すると背後から誰かが近づいてくる音がした。

（歩幅の大きさ、速度、息づかいからして…男か）

振り返り近づいてくる者を見据える。

「お前が…俺を見ていたんだな」

「ええ。今日の朝からずっと見させて貰いましたよ」

俺を見ていた者はクスクスと笑いながら言う。
男の外見は３０代位、髪色及び瞳の色は緑色、服装は上下黒と怪しいイメージをさせるものだった。

「お前は…誰だ?」

「私は商業の神…メリクリウスと申します」

メリクリウスと名乗った男は紳士の様な態度で自己紹介をする。
一応礼儀正しい奴だな…。

「商業の神…メリクリウス…ローマ神話か?」

「おお…よくご存じですね」

メリクリウスは関心を示した顔で言う。

「で。何の用だよ…ローマ神話の神様がいちいち俺の処に来て…」

俺はそんな態度をとるメリクリウスに怒りを孕んだ声で言い放つ。
するとメリクリウスは笑顔で、

「簡単なことですよ。この世界のバランスを崩すもの…黒神上総。
あなたにはここで…消滅して貰います」

するとメリクリウスの手にはいつの間にか二丁のハンドガンが握られていた。
何時の間に!?

「さようなら…」

静かに呟くと同時に、ハンドガンの引き金を躊躇なく引いてくる。
俺は瞬時に双剣を発現させ向かってくる銃弾を弾く。

弾くと同時に、火花と鉄の焦げた臭いが周りに広がる。

「ほう…ふふふ、少しはやるようですね」

メリクリウスは口元をにやけさせながら俺に言う。

あの顔…俺は大嫌いだ。

「いきなり何しやがる！きちんと説明しやがれ！」

「先ほど言ったはずですけどね…この世界のバランスを崩す貴方を消しに来たんですよ」

心底呆れた様子で目の前の敵は言う。

こいつには話が上手く伝わらない様だ。

俺はその場で大きな溜め息を吐き、敵を見据える。

「どうやら、説明する気は無いようだな。だったら…」

双剣を構えなおし、

「ｇｕａｒｄｆｉｅｌｄ展開！」

すると三角形のパネル現れそしてそのパネルが繋がり合い、ドーム状の形に変化し始める。

その光景を珍しそうに眺めるメリクリウス。

眺めると同時に安全確認の為か、ハンドガンの銃口をパネルに向け突いたりしている。

それから数秒後、これは何だ？と言わんばかりの顔を此方に向けてくる。

「…”ｇｕａｒｄｆｉｅｌｄ”簡単に言えば周りに被害を及ばせないための俺たちだけのバトルリングだ」

「ふふふ…面白い」

メリクリウスは笑いながらハンドガンを消し今度は連射性が高いマシンガンを二丁取り出す。

流石商業の神だ…何でも取り寄せられるのかよ…。

「ふー…いくぞ！商業の神・メリクリウス！！！」

俺は圧倒的不利な武器でメリクリウスに突っ込んだ。

「ミーナ！一体何が起こっているんだ！」

バルクホルンが声を荒上げながら、ミーナに言った。

「私だって分からないわよ！」

現在私達は銃声がするほうへ走って向かっている。

こうして走っているうちも銃声はなり止むことがない。

ただならぬ緊張感が走る。

「あそこだ！」

私が銃声の方向を自分の固有魔法”魔眼”で見る。

「あれは…黒神!?」

私達は驚愕した。
そこには、双剣を振るい戦う上総と銃を放ちながら戦う謎の男。
どう見ても黒神が圧倒的不利な状況で戦っているのだから…。

激しい銃弾の嵐が俺に襲いかかる。

「クッ!」

俺は素早く双剣を振るい銃弾を弾く。この行動は普通の人間には不可能。これは天界で鍛えた動体視力があるおかげだ。
銃弾を弾きながらメリクリウスに近づき斬りかかる。
だが、それを奴は素早く回避し再び銃弾の嵐が俺に襲いかかる。

「クソッ…速い」

メリクリウスの射撃センスは抜群で的確に相手を狙ってくる。
そして、俺が近づき斬りかかってもそのすべてを紙一重で避けられる。
厄介な奴…。

「どうしたんですか?私はまだ出来ますよ」

メリクリウスは余裕そうな表情を浮かべている。
俺はその表情に再び苛立ちを感じた。

「調子に乗るなよ…喰らえ！リリジャス！」

無詠唱攻撃魔法を唱える。
するとメリクリウスの上から落雷が落ちた。
しかしそれも余裕に回避される。
だが避けられることは俺の予測の範囲。
メリクリウスが避けた瞬間一気に接敵し、

「この距離ならお得意の銃は撃てないなメリクリウス！」

綺麗に鋭く研ぎ澄まされた双剣を勢い良く振り下ろす。
だがメリクリウスの表情は慌てる表情では無く、余裕を表した表情。
その表情に疑問に思っているのを察したのか、メリクリウスが静かに一言。

「私が銃だけを使用すると思っているんですか…」

懐からぎらりと輝く鋭利な何かを取りだした途端、俺の腹部に何かが深々と突き刺さる。
赤い液体が身体を廻り、口内から吐き出る。この感覚は何時までも慣れる気はしない。

「黒神！！！」

「上総さん！！！」

ｇｕａｒｄｆｉｅｌｄの外に居る坂本さんと芳佳が叫ぶ。

「ハァー…ハァー…グッ…」

俺は腹に刺さっている短剣を思いっ切り引き抜く。
その短剣には血と混じり他の液体が短剣に付着しているのに気付く。

「ふふふ…苦しそうですね。その短剣にはたっぷりと毒を塗ってありますからね。貴方でももって…１０分ってところでしょうか？」

メリクリウスは楽しそうに呟く。
成程どうりで身体が重いわけだ…。

「黒神君！早くこれを解除しなさい！」

ミーナ中佐はｇｕａｒｄｆｉｅｌｄを解除するように命令を下す。

「それは…できま…ハァー…せん…」

「どうしてですか！？上総さん！」

「今…ｇｕａｒｄｆｉｅｌｄを…解除したら…貴女達に…被害が出る」

「でも！上総さんが…」

「大丈夫だ…芳佳…ハァー…絶対に負け…ハァー…ないから」

毒が全身に回ってきたのか…上手く立てない。

「さて…そろそろ消えてもらいますよ…黒神上総」

メリクリウスが銃口を躊躇無く意識が朦朧としている俺にに向ける。
これを覆すには…アレを使うか。

『黒神（君）！！！』

『上総！！！』

『上総さん！！！』

ウィッチ達が叫ぶ。

「本日二度目の…さようなら」

引き金が躊躇無く引かれ、銃声は波の音と交じり静かに消えた…。

第十五話：視線の正体（後書き）

疲れましたー。今回も少し眠い状態で仕上げました。誤字・脱字があるかもしれません。

第十六話：解放！ゼロ・ディゾルヴァー（前書き）

第十六話です。

第十六話：解放！ゼロ・ディゾルヴァー

銃声の音が夜空に消える。
黒神と男は対峙したまま微動だにしない。
私達はその光景を安全地帯で見ることしかできない。

「ど、どうなったんだ…」

バルクホルンが不安な面持ちで言う。
外から分かることは、何者かが黒神に向けて銃弾を放ったということと、二人が対峙したまま未だに動かないことだけだ。
沈黙が流れ数秒後、変化がおきる。

「がッ！」

黒神に銃口を向けていた者が、吐血しその場に片膝を着く。
一体何が…？

「何をした…」

「これ…見てわからない？」

黒神は苦しそうに呼吸をしながら、右腕を上げを自らが手にしている物を目の前の者に見せつける。
それは先程の双剣だったが双剣の”剣”である部分が無くなっており、先には円形の突起が出ていた。

「それは…仕込み銃ですか」

男は口元の血を拭いながら言う。

「違う…これはもともと双剣・双銃が一つとなった歴とした武器だ…仕込み銃ではない」

今度は黒神が銃口を向けながら目の前の者に言い放つ。

「今までのは…単なる余興。本番はこれからだ…メリクリウス！」

「チッ！」

メリクリウスは舌打ちをしながらマシンガンの引き金を引いた。
嵐の様な弾丸が俺に襲いかかる。
だがそのすべてを自らの身体能力を有効活用し高速で避ける。
そして上空に飛び上がり、

「R．サンダーボルト！」

メリクリウスの頭上に緑色の電流を放つ。
放たれた電流は敵を囲むように襲い掛かる。

「グッ！？」

「怯んでる暇は無いぞ！次はこいつを…クラックビースト！」

弾丸に魔力を込め獣を創造する。
すると銃口に水色の魔力が収縮される。
収縮された魔力は徐々に形を変化させ、二体の小さな獣を創り出す。

創り出された事を確認し、引き金を勢いよく引く。
引いたと同時に小さな獣は、咆哮と牙を剥き出しにし目の前の者に喰らい付く。
獣が喰らい付いた個所は、脇腹と左足。
メリクリウスは苦行の顔を浮かべながら、獣をマシンガンで撃ち殺す。
撃ち殺された獣は、光と為り、その一生を数秒で終えてしまう。

「ハァー…ハァー…ふふ、良いのですか?そんなに激しく動いて…毒の進行を促すだけですよ…」

メリクリウスは不適な笑みを浮かべながら言う。

「分かっているさ…そのぐらい。だから…これで終わりだ」

銃口をゆっくりと向け、

「フレアショット…」

爆発性を伴う弾丸を放つ。
その時のメリクリウスはこの場面を狙っていたかのような表情だった。
俺はその表情に疑問を抱いた。

(なぜあんな表情を…ッ!!!)

瞬間、腹部のあたりに何かが直撃し爆発を起こす。

「がはッ!」

大量の血が口内から吐き出て、服と伴い皮膚が焼ける。
熱さと痛みが身体を廻る。

「上総さん！！！」

「クソッ！何故壊れない！」

芳佳が声を上げ、バルクホルンさんと坂本さんはｇｕａｒｄｆｉｅｌｄを破壊しようと、殴る斬る等の破壊行動をしている。
だけど今はその様なことは気に掛けない。
今気になることは、何故俺が攻撃を受ける羽目になったかだ。
確実に銃弾は放たれ筈…しかしメリクリウスには直撃していない…。
考えていると、目の前に何かが落ちていることに気付く。
俺は落ちている物を拾い上げた。

「これは…俺が先程放ったフレアショット弾丸…どうして…」

「ふふふ…お忘れですか？私には…もう一つの神の名があるんですよ」

メリクリウスは口元だけを歪ませながら言う。
もう一つの神の名…？
そんな名前など無い筈……いや…確か……ッ！？
思い出した…こいつのもう一つの神の名を…。

「風の神か……！」

「よく御存じですね。私は風の神でもあります。すべての風は私の支配下…だから、このようなこともできるんですよ！！！」

風神は腕に風を纏わせ、横に薙ぎ払う。
瞬間、メリクリウスから巨大な風の刃が放たれる。
風の刃は全てが鋭くなっており、かなり危険。
あんなものを馬鹿みたいに真正面から受け止めたら、一溜まりもない…！
俺はスライディングの要領で風の刃を避ける。
そして再び銃口を向け、

「クッ…アクアバレット！」

引き金を引き、銃弾を放つ。
しかしその攻撃も風神の力で軽々しく跳ね返されてしまう。
跳ね返された銃弾は、俺の頭上から数センチに着弾する。
危ない…あと一歩遅かったら頭部が弾け飛んでいた…。
俺は跳躍を兼ねて立ちあがるが、

「うっ！？」

激しい目眩に襲われる。
視界が一瞬グニャと歪み、立っていることが困難になる。
それと同時に吐き気の症状まで発生する。
その光景を見ているメリクリウスは何処か楽しんでいるようだった。

「そろそろ貴方の限界が近いのでは？その様子だと…あと3分でしょうか？」

『なっ！！！』

メリクリウスは態とウィッチ達に聞こえる様に呟く。
その言葉にウィッチ達は驚愕する。

「黒神！早くこれを解除しろ！」

「黒神君！坂本少佐の言うとうりよ！早くしなさい！」

「上総さん！」

ｇｕａｒｄｆｉｅｌｄを叩きながらウィッチ達は言うが、その声は俺には微かにしか届かない。

確りと聞こえるのは目の前に居る敵…メリクリウスの声だけ。

「はぁー…はぁー…ぐッ…」

俺は呼吸を荒げながら、再び双銃を構える。

「ハァー…レール…アロール」

毒に耐えながら、双銃に魔力を流し込む。

流し込まれた魔力は、クラックビースト同様に銃口の先に収縮される。

しかし形状はかなり異なる。

レールアロールは光を凝縮し放つ技であり、獣の姿になったりなどしない。

只の球体である。

凝縮された光は、銃口の先に姿を現す。

頃合い（タイミング）を見計らい、引き金を引く。

光の弾は敵（メリクリウス）の元へ直進する。

「無駄だと言って…ッ！！！」

お得意の風で跳ね返すのだろうと思ったが、メリクリウスは俺の考えと全く逆の行動を行う。
それは回避行動である。
自らの脚を使い、光を避けたのだ。
その行動に不信感を抱いた。

（何故避ける必要がある？あいつの力なら跳ね返すことだって…。
さっき放ったのは光の弾…光……そうか！だから避けたのか！）

「ふふふ…」

回避した理由が分かってしまい、自然と口元から笑みが零れる。
しかし只の笑みでは無い…不敵で不気味な方の笑みだ。

「何が可笑しいのですか？」

俺の突然の行動にメリクリウスは少し苛立った声で言う。
それはウィッチ達も同様…皆が不思議そうな顔を浮かべている。
当然だろう…先程まで苦戦していた男が、いきなり笑いは始めたからだ。
誰だって不思議に思うし、不気味に思う。
すると、

「この勝負…俺の勝ちだ…」

口元を歪ませながら勝利予告をする。
武器を”双銃”から”リスト”へ変更する。
脚を肩幅より少し開き、腰を少し落とす。
そしてリストに魔力を溜め始める。
その行動に不審感をこの場に誰もが抱く。

「一体何を――」

「お前は先程の俺の光弾の攻撃は避けた。何故だ？避ける必要は無かっただろう。お前の風の力なら跳ね返すことが可能じゃないか。なのにお前は、自身の身体を使って避けた…それで分かったんだよ。お前の風の力は光までは跳ね返えせ無いってことがな！！！」

言葉を放つと同時に、辺りに小さな光の球体が無数に現れる。
これから俺が起こす行動に気付いたのか、メリクリウスは風の力を行使しようとしたが、俺の準備の方が先に終える。

「遅い！穿て裂閃！」

瞬間光の球体は、自らが通った軌道を残しながら、メリクリウスに襲い掛かる。

「クッ！鬱陶しいですね！」

身体能力を生かしながら襲いかかる光の球体を避ける。
しかし、一つの光の粒がメリクリウスの脚を掠る。
それにより片足が揺らめく。

「しまっ――」

「無限の拳閃　蒼空を駆けよ！」

すると今度は俺自身が光の球体となり辺りに分散する。
分散した光（自分）はメリクリウスに完膚なきまで襲い掛かる。

「がッ！！！」

光の球体は敵（メリクリウス）の身体を打ち上げていく。

その光の軌道はまるで流れ星のように美しく花火のように豪快だった。

「これで終わりだ…ゼロ・ディゾルヴァー！」

最後…分散させた光（自分）を元に戻し、周囲に留まっている光を手中に集める。

敵（メリクリウス）に狙いを定めると同時に、手中に凝縮されている光を振り上げる。

振り上げて数秒後、力を振り絞り、思いっ切り放つ。

放たれた光は極太な閃光（レーザー）と為り、メリクリウスの身体全てを包み込む。

「がああぁぁぁ……」

「さようならはお前だったな…メリクリウス」

「ハァー…ハァー…」

荒い呼吸をしながら、メリクリウスの居た場所を見る。

そこには先程居た風神の姿は無く、残っているのは薄い光の粒子だけ。

勝った…と思った瞬間、

「うぐっ！」

激しい目眩が襲い掛かる。
視界が先程より更に悪くなる。
これは…不味いな。

「クッ…毒か…治さないとな…リカ…バー」

治癒術を唱えた後、今まで保ってきた意識を手放す。
手放したと同時にｇｕａｒｄｆｉｅｌｄが解除される。
それに伴いウィッチ達が駆け寄ってくるのが、微かに感じられた…。

「うっ……」

ゆっくりと目を開ける。
そこには初めて見た天井が視界一面に広がっていた。

「ここは…医務室」

上半身だけを起こし辺りを見回す。
外には太陽が出ており、綺麗な海が見えた。
太陽の位置からして…昼頃か。
そんな事を思っていると、

（お目覚めですか？黒神　上総）

倒した筈の風神…メリクリウスの声が聞こえた。
場所は…かなり近く存在している。
一体どこに……。
そんな俺の行動を察したのか、再びメリクリウスが声を掛ける。

（ここですよ…）

すると俺の右手首が薄緑色に光った。
すぐさま右手首を見てみると穴が七個空いた金色の腕輪がしてある。
その内の穴の一個に薄緑色の宝石が収まっている。
何時の間にこんな物を…。
俺が腕輪を見つめていると、又もや声が発せられる。
そのことに少し驚く。

「どうしてお前がこんな所に…」

（貴方に負けてしまいましたからね…人間に敗北した神はその人間に従える…これが私達神の間の掟ですから）

メリクリウスは落ち着いた声で、自らが存在している理由を淡々と述べる。

「俺を消すんじゃ無いのかよ…」

神の掟って何だよと思いながら、俺を消さないのかと尋ねる。

（いえ…私はもう貴方を消すなんてことはしませんよ…それも私達神の間での掟ですから…もし破ったら私の存在が消されてしまいますからね）

「そうか…分かったよ」

（それと…その女の子に感謝しておくんですね）

「女の子？」

（貴方の左腕を枕代わりして寝ている女の子ですよ）

俺はメリクリウスに言われて、左腕を見てみる。
そこには、気持ちよさそうに寝ている芳佳が居た。

（その子、遅くまで貴方の治療をしていたのですよ）

「芳佳が…そっか、ありがとう芳佳」

芳佳の頭に手を置き優しく撫でた始める。
芳佳はとても嬉しそうな笑顔を寝ながら浮かべていた…。

第十六話：解放！ゼロ・ディゾルヴァー（後書き）

フレアショット：双銃から爆発する弾を打ち出す。
アクアバレット：左右同時にV字方向へ発砲する技。
レールアロール：光を凝縮した弾を発射する。
クラックビースト：獣の頭の様な銃弾を発射し敵を襲う。
R．サンダーボルト：上空へ飛び上がり、真下に向けて高圧の電流を放つ。
リカバー：状態異常を回復

第十七話：かたい・はやい・ものすごーい（前書き）

第十七話です。原作はあまり知りませんが、頑張って書いてみました。ところどころ話が抜けているかも知れません。（未修正）

第十七話：かたい・はやい・ものすごーい

神の襲来から3日が経った。
俺が目覚めたその日はとても大変だった。
芳佳とリーネには泣かれたし、ミーナ中佐と坂本さん、バルクホルンさんにはすっごい怒られたし、メリクリウスにはからかわれるし本当に大変だった。
そして最も大変だったのはあの夜起こったことの説明だ。
ミーナ中佐からは素直に話せと言われ、俺はすかさず嘘を付き”アレは人の皮を被ったネウロイだった”と説明した。
当然信じられることは無くミーナ中佐は無言でお得意のブラックスマイルを浮かべたがそれでも俺は真実を言わなかった。
数分間このことが続き中佐は俺の信念に負けたらしくこれ以上の追及を止した。
今回は何とか丸く収められた。しかし今回の様な事が中佐に再び知れると…
俺はそんなことを考えながら現在リハビリを兼ねて基地の周りを走っている。
すると腕輪にはまっている薄緑色の宝石が光り始めた。

（大丈夫なのですか黒神　上総。そんなに身体を動かして）

「メリクリウスか…大丈夫だ。身体の調子はもう完璧だからな」

（そうですか…無理はしない様に）

「……分かった」

メリクリウスの性格は大人しく、紳士的である。

このことはメリクリウスと話して感じた第一印象だ。
本当の性格はまだ分からないけど…。
そして格納庫近くを走っていると、誰かの口論している声が聞こえた。
気になり格納庫に入ると、バルクホルンさんとシャーリさんが口論している。

「いい歳してはしゃぐなよ。新しい玩具を買ってもらった子供みたいだぞ」

「負け惜しみか、みっともないぞ」

「気が変わっただけだ。私はこれでいいんだよ」

するとシャーリさんはレシプロストライカーを触りながら、バルクホルンさんに言った。
あの二人はストライカーの事で喧嘩しているのか？

「勝手気ままなリベリアンめ」

「なんだと！？この堅物軍人馬鹿！」

その光景を見てミーナ中佐と坂本さん、ハルトマンさんは呆れていた。
俺は呆れている3人に近づき喧嘩の理由を聞くことにした。

「ミーナ中佐。どうしたんですかこの状況」

「いつものアレよ…」

ミーナは溜め息を吐きながら上総に言った。

「それよりも黒神、身体はもう大丈夫なのか？」

「ええ、もう平気ですよ。心配させて申し訳ありませんでした」

上総は坂本に頭を下げ謝る。

「無事で何よりだ。体力が回復したならまた模擬戦に付き合ってくれないか？」

「いいですよ」

上総は笑顔で坂本との模擬戦を承諾した。

「美緒。あまり黒神君に無理させないようにね」

「大丈夫だミーナ。こいつは扶桑男児だ。そんな簡単には倒れたりなどしない」

坂本は上総の背中をバンバン叩きながら言う。

（そうなのですか？黒神　上総）

「……多分」

上総は小声でメリクリウスの疑問に答えた。

「いったい何やってんのあの二人」

上総は空を見ながら呟いた。

「バルクホルンさんとシャーリーさんが勝負しているんです」

「最初は上昇勝負だよ！頑張れシャーリー！」

ルッキーニはシャーリーの応援をしており、ペリーヌは飛んでいる二人を見て呆れていた。

そして上総とメリクリウスはこの勝負に何の意味が…と思っていた。

そして再び上総が格納庫に行くとまたしてもバルクホルンとシャーリとの勝負が始まろうとしていた。

「そんないっぱい持って大丈夫なんですか？」

「私のP―51は万能ユニットだからな。いざとなったらどんな状況でも耐えられるんだ」

「今度は何やるの？」

上総はリーネに尋ねた。

「搭載量勝負だそうです。重いものをどれだけ持てるかって」

すると腕輪にはまっている薄緑色の宝石が光り、

（黒神　上総…この勝負に何の意味が…）

上総が疑問に思っていることをそのまま聞いてきた。

「さぁ…特に意味は無いと思う」

上総とメリクリウスが小声で話していると後ろの方から

「またせたな！」

重装備をしたバルクホルンが姿を現した。

「だ、大丈夫ですかバルクホルンさん？」

宮藤が心配するとバルクホルンは、

「ふっ、問題無い」

自信ありげな顔で答えた。

そして、勝負の結果はバルクホルンの勝利。

だけど帰還してきたバルクホルンの表情はどこか疲れている表情だった。

「夕食は肉じゃがですよ～」

上総は直ぐに”頂きます”をして肉じゃがを口に運ぶ。

「ほふぅ……うん！とても美味しいよ芳佳」

「ありがとうございます。上総さん」

宮藤は上総に褒められ嬉しそうな表情をした。

「あの、バルクホルンさんもお疲れじゃないですか？」

「ああ、そこに置いといてくれ。今は…少し休みたいんだ」

上総はそんなバルクホルンを見て疑問に思った。

（たった一、二回飛んだだけであんなに目に見える疲労が…もしかして…）

そして翌日再び空を見るとあの二人がまた勝負をしていた。

「またやってる…」

「まったく…よく飽きませんわね」

俺とペリーヌは空を見ながら呟いた。

「あれ？でも様子がおかしくない？」

「本当ですわ……お、落ちた！」

バルクホルンはジェットストライカーを履いたまま海落ちた。

「助けないと！天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）解放！」

上総はすぐさまバルクホルンが落ちた所に向かった。

「あ、起きた」

「どうしたみんな？私の顔に何か付いているのか」

バルクホルンが目覚めたことにみんな安堵の息を吐いた。

「バルクホルンさん、よかったぁ～」

「トゥルーデ海におっこったんだよ」

「私が？落ちただと？」

バルクホルンはあり得ないという顔をしている。

「魔法力を使い果たして気絶したのよ。憶えてないの？」

「馬鹿な私がそんな初歩的なミスをするはずが無い」

「大尉のせいじゃない。問題はあのジェットストライカーにある。今黒神がジェットストライカーを解析している」

するとドアがノックされ、上総が入ってきた。

「失礼します。ミーナ中佐、ジェットストライカーの解析が出来ました…Ｍｅ２６２Ｖ１　ジェットストライカーは過剰に装着者の魔力を吸収して消耗させるものと判明しました。あまつさえ装着者の制御が喪失しても、装着者から魔力の抽出が止まらなくなるという欠陥もあります」

「そんなことが…」

「ということでバルクホルンさん。ジェットストライカーを履かない様に…絶対に」

上総は語尾を強めて言った。

「な、なぜだ…」

バルクホルンは上半身だけ起こし上総を見た。

「なぜ？その位分かるでしょう…」

上総の声は怒りを孕んだ声だった。

「しかし、ジェットストライカーの戦闘能力の高さはお前も知っているだろう…。実践配備するためにまだまだテストを続けなけ――――」

「いい加減にしろよ…だったら貴女は飛べなくなってもいいのか！！！死んでもいいのかよ！！！」

上総は怒りを露わにしバルクホルンに向けて怒鳴った。
他のウィッチ達は上総のその行動に驚き固まってしまっている。

「黒神…」

「……すいません。熱くなりすぎました……失礼します」

上総は頭を下げ医務室から出て行った。

「黒神君、あなたのこと凄く心配していたのよ。海に落ちた貴方を助けたのも、医務室へ運んだのも黒神君よ」

「黒神が…」

「ええ。黒神君はあなたの身をこれ以上危険にさらしたくないのよ、それは私達も同じよ。……バルクホルン大尉貴方には当分の間飛行停止と自室待機を命じます」

「ミーナ！」

バルクホルンはミーナの命令に反対しようとしたが、

「これは命令です」

「ッ！！…了解」

ミーナの真剣な視線に反対はできなかった。

「現時刻をもってジェットストライカーの使用を禁止します！」

――――バルクホルン自室――――

「えっ？またあれで飛ぶつもりですか？」

「ああ。黒神やミーナはあのように言ったけど、あのストライカーを使いこなせれば戦局は変わる」

芳佳の質問にバルクホルンは懸垂をしながら答える。

「無駄だ。諦めろ」

「何の用だ…リベリアン。魔法力不足で落ちた私を笑いに来たのか」

「黒神が言っていたろ。あのストライカーは本当にやばいんだ」

「それでも私はあのストライカーで飛ばなくてはならない。それに…私が落ちたのはあのストライカーが悪いわけでは無い…私の力が足りなかったからだ」

「この…分からず屋！！！」

その時基地に警報が響いた。

するとゴミの山から、

「あ、ネウロイだ」

ハルトマンが出てきた。

「ハルトマンさん！」

「いたんですか？」

「うん…」

ハルトマンは眠そうな表情をしながら軍服を着る。

「おっ先～」

ハルトマンは走って格納庫に向かった。

そしてシャーリは、

「……」

無言で格納庫へ向かう。

そして芳佳とリーネもバルクホルンの部屋を出て行った。

部屋に一人残されたバルクホルンは懸垂を止め、上総とシャーリが言ったことを考えていた。

すると後ろから、

「隙あり」

「うわぁ！！」

ハルトマンが何かをバルクホルンの耳に入れた。

「忘れものだよ～にゃははは～」

ハルトマンは可愛らしい声を出しながら再び格納庫に向かった。

「…インカム？」

「目標はローマ方面を目指して飛行中。ただし徐々に加速している模様。交戦予想地の修正およそ――――」

［大丈夫だこちらでも捕捉した］

ネウロイの数は一。誰もが勝てると思っていた。

しかし、

「ッ！！分裂した！！」

ミーナが驚きの声を上げた。

［数を利用して突破する気か…］

［五対五か…ちょうどいいじゃん］

坂本とハルトマンが分裂したネウロイを見ながら呟く。

［各自散開！各個撃破！ここから先は行かすな！］

［了解！］

数分後…

［こちら坂本。シャーリーが苦戦しているようだが、こちらも手が足りない、至急増援を頼む！］

「了解。リーネさん！宮藤さん！黒神君！」

「「「はい！」」」

上総達は急いでハンガーに向かった。

ハンガーに着いた宮藤とリーネはストライカーを装備し、上総は天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）を解放する。

そして坂本達の援護に向かおうとした瞬間目の前に誰かが現れた。

「バルクホルンさん！」

「お前達の足では間に合わん」

するとバルクホルンは使い魔を発動させジェットストライカーを縛り付けている鎖を引きちぎった。

「バルクホルンさん！」

「黒神止めないでくれ…今あいつを助けるにはこれしかないんだ」

その時のバルクホルンの目は覚悟を決めた目だった。

「バルクホルンさん……わかりました。だけど！俺も一緒に行きますから！」

「ふっ…好きにしろ」

［トゥルーデ！］

「すまんミーナ。罰は後で受ける。今は…」

［…五分よ。貴女の飛べる時間は！］

ミーナの言葉に静かに笑う。

「五分で十分！」

上総とバルクホルンは高速で仲間達のもとへ向かった。

「そこだ！」

シャーリーは素早く動くネウロイに向けて引き金を引く。
狙いは十分。シャーリーは当たると確信していた。
しかし、

「しまった！ジャムった！」

シャーリーは焦り直ぐに治そうとしたが、ネウロイがさらに分裂し
シャーリーを挟んだ。

「ヤバイ！挟まれた！」

シャーリーは”もう駄目だ”と思った時目の前に天使の翼を纏った
男が現れ、

「ａｅｇｉｓ（絶対防御圏）展開！」

シャーリーを守った。

「く、黒神！？」

「俺だけじゃないですよ」

上総がそう言った瞬間ネウロイが何者かに攻撃された。

「えっ…バルクホルン！？」

シャーリーは驚きの声を上げた。
それもそうだあの堅物軍人と言われるバルクホルンが命令を無視してこの場に居るからだ。
しかも使用禁止のジェットストライカーまで履いて。

バルクホルンの５０ｍｍカノン砲がネウロイに直撃し装甲が削り取られる。
ネウロイは再生しようとするが、バルクホルンの５０ｍｍカノン砲が容赦なく襲いかかる。
だがネウロイも必至だ。中々自分の心臓部分を露わにしない。

「クッ…」

バルクホルンが焦り始める。
カノン砲の装弾数も自らの飛べる時間も少しずつ削られていく。

「このままじゃ…」

「大丈夫ですよバルクホルンさん！俺が援護します！」

上総翼を大きく広げ、

「Ａｒｔｅｍｉｓ（永久追尾空対空弾）発射！」

Ａｒｔｅｍｉｓ（永久追尾空対空弾）がネウロイに向かって発射される。
ネウロイは回避しようとするがＡｒｔｅｍｉｓは永久追尾空対空弾。
絶対に避けることは不可能。
そしてＡｒｔｅｍｉｓは全弾ネウロイに直撃し、今まで露わにしなかった心臓を見せた。

「今です！バルクホルンさん！」

「了解！」

バルクホルンの５０ｍｍカノン砲がコアを露わにしている二体のネウロイに直撃する。

そして赤いネウロイのコアは砕け散り、白い破片だけが空に飛び散った。

「ジェ、ジェットストライカーは使用禁止のはずでは」

「バルクホルンめ…無茶しおって」

坂本はバルクホルンが破壊したネウロイを見ながら呟いた。

「やったぞ！バルクホルン！」

シャーリーが喜びの声を上げながらバルクホルンに言う。

しかしバルクホルンからは応答が無い。

「おい、バルクホルン？どうなってんだ？バルクホルンのスピードが落ちないぞ！」

そして坂本が気付く。

「いかん！ジェットストライカーが暴走しているんだ！このままでは魔法力が吸い取られるぞ！」

［シャーリーさん！黒神君！］

「「了解！」」

シャーリーと上総は全速力でバルクホルンのもとへ向かう。

「「うおぉぉぉーーー！」」

二人は速度をどんどん上げていく。
しかし、ジェットストライカーのスピードはどんどん上がっていく。
バルクホルンと上総達の距離が少しずつ開いていく。

「「くそったれーーー！」」

二人は同時に叫びながらさらに魔力を上総は翼に、シャーリーはストライカーに流し込む。
そして二人は音速に達し、暴走しているジェットストライカーに辿りついた。

「「止まれぇぇぇぇーーー！」」

左右にある緊急レバーを引きバルクホルンからジェットストライカーを外した。
ジェットストライカーはそのまま海に落ちていった。

「ふー…ん？」

上総は目を下に向けるとバルクホルンが上総の翼に包まれながら気持ちよさそうに寝ていた。

その顔は軍人のゲルトルート・バルクホルンではなく、十代の女の子ゲルトルート・バルクホルンの顔だった。
上総はその顔を見て優しく微笑んだ。
するとルッキーニが、
「あーーー！それあたしの！あーたーしーの！」
手足をばたつかせ叫んでいた。

「寝ている間に何があったんだ？」
「バラバラ…」
エイラとサーニャは壊れたジェットストライカーを見て呟いた。
「全く人騒がせなストライカーでしたね」
ペリーヌが呆れながら言った。
「ええ。それと使う人間もね」
「うっ…」
ミーナはバルクホルンの方を見る。

「おかげでネウロイが倒せたんだ、大目に見てくれよ。」

「規則は規則です！」

「しかしバルクホルンが命令違反なんて初めてじゃないか？」

バルクホルンは無言でジャガイモの皮を剥いていた。
すると後ろから眼鏡を掛けたハルトマンが現れた。

「みなさん。どうもお騒がせしました」

「何故お前が謝る？」

「ハルトマンのせいじゃないだろう？」

坂本とシャーリーが疑問の言葉を口にする。

「あっ…いえ、私は…」

「みなさ～ん！お腹すいていませんか？」

「お芋がいっぱい届いているから色々作ってみましたよ。はい、ハルトマンさんもどうぞ」

宮藤は眼鏡を掛けているハルトマンに近づきフライドポテトを勧めた。

「いただきます」

「あれ～？ハルトマンさんって眼鏡なんてしていましたっけ？」

「はい。ずっと」

眼鏡を掛けたハルトマンは宮藤の質問に普通に答えた。

すると宮藤の後ろから、

「わぁ。美味しそう！」

もう一人のハルトマンが現れた。

「あっ、こっちのハルトマンさんもどうぞ……えっ！？」

『えっ？』

「お久しぶりです。姉さま」

「あれ？ウルスラ？」

『お姉さま！？』

ウィッチ達は驚きの声を上げた。

するとミーナがウルスラに近づき、

「こちらは、ウルスラ・ハルトマン中尉。エーリカ・ハルトマン中尉の双子の妹さんよ」

『双子？』

「彼女はジェットストライカーの開発スタッフの一人なの」

『へぇ〜』

ウィッチ達は”知らなかった”という顔をしていた。
ウルスラはバルクホルンに近づき、

「バルクホルン大尉、このたびはご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。どうやらジェットストライカーには致命的な欠陥があったようです」

頭を下げ謝った。

「まぁ、試作機にトラブルはつきものだ。気にするな。それよりも壊してしまってすまなかったな」

「いえ、大尉が無事で何よりでした。この子は本国に持ち帰ります。」

「そのために、わざわざ来たのか？」

「ええ。代わりと言ってはなんですが、お騒がせしたお詫びにジャガイモを置いていきます」

上総が外に見に行くとそこには巨大な木箱に大量のジャガイモが積まれていた。
上総とペリーヌはその積まれたジャガイモを見て、

「ま、また…こんなに」

「こんなに食えるかな」

ペリーヌはがっかりし、上総は不安を感じていた。

「「ん」」

バルクホルンとシャーリーが同じフライドポテトを取る。
そしてお互いに同じフライドポテトをとり合う。

「これは私のフライドポテトだ！」

「リベリアンの食べ物は、いらないと言ってなかったのか？」

「今は体力回復のためにエネルギー補給が最優先だ！」

「素直にうまいって言えよ」

「まぁまぁだな」

食べ物で喧嘩する二人に上総が仲裁に入った。

「お二人とも落ち着いてくだ…さいっ！」

「「ほむっ！？」」

上総はフライドポテトを二個取り喧嘩している二人の口に入れた。
二人はいきなりのことで驚き、変な声を出した。

「く、黒神いきなり何をするんだ！」

「驚いたぞ！」

バルクホルンとシャーリーは上総に詰めかけた。

「せっかくの美味しい食べ物を喧嘩しながら食べたら美味しく感じられませんよ。だから二人とも喧嘩しないで仲良く食べましょう？ね？」

上総はとても綺麗な笑みを浮かべながら二人に言った。

すると二人は、

「「ッ！？／／／」」

間近で上総の笑みを見たことにより顔を赤くしその場に硬直した。

「？お二人とも、大丈夫ですか？」

上総は硬直している二人に声を掛けた。

「えっ、ああ！大丈夫だ大丈夫！／／／」

「わ、私も何ともないから／／／」

二人はそう言うと席に着き、フライドポテトをガツガツと食べ始めた。

「…何だったんだ？」

（黒神　上総…なんと鈍感な…）

何故二人が顔を赤くしたのか疑問に思う上総に、メルクリウスは呆れてしまった。
そして宮藤とリーネは、

「「むぅ…」」

何故か頬を膨らませ不機嫌な顔をしていた…。

第十七話：かたい・はやい・ものすごーい（後書き）

次回は更新が遅いかもしれません…。

第十八話：私のロマーニャ：前編（前書き）

第十八話です。久々の投稿です。暑いせいか全然頭が回りませんでした。誤字・脱字があると思います。（未修正）

第十八話：私のロマーニャ：前編

「黒神、やはりあの技は教えてもらえないのか」

「すいません。抜砕竜斬はちょっと…今は俺が教えている葬刃で我慢してください」

「むぅ…そうか仕方ないな」

現在上総と坂本は朝の日課を終え剣術のことについて語り合いながら廊下を歩いている。
そして食堂の前を通ると、

「坂本さーん！お米なくなっちゃいましたー！」

宮藤は米袋を上下に揺らしながら言う。

「一挙に全員集まると思わなかったからな、それに一人新たな仲間が増えたし…それは困った」

「どうしよう？」

宮藤とリーネは顔を合わせて困った表情をする。
するとミーナが、

「ちょうど色々備品が必要だから買い物に行ってくれるかしら？」

「「買い物？…了解！」」

”買い物”と聞いた二人は嬉しそうな表情をして任務を承諾した。

「と言うことで臨時補給を実施することになりました。大型トラックが運転できるのはシャーリーさん。ロマーニャの土地観があるのはルッキーニさんなので、この任務は二人にお願いします」

「「了解！」」

ミーナが言うと二人は嬉しそうな表情をし、リーネは不安な表情を見せていた。

「よッしゃー！久しぶりの運転だ！」

「敵の襲来がいつあるか分からないので、人数が出せなくてすまんな」

「わーい！ドライブ、ドライブ！」

「たまには基地の外にも出てみたかったからこんな任務は大歓迎だよ！」

ルッキーニは飛び跳ねながら街に行けることを喜んだ。それはシャーリーも同様だ。

「ほかに宮藤さんとリーネさんも同行します」

するとリーネが不安そうな表情で手を上げた。

「あ、あのやっぱり私は待機で」

「え?どうして?」

宮藤がリーネに待機の理由を聞くとリーネは言いにくそうな表情をする。

上総はリーネのその行動が不思議に思った。

(さっきまであんなに喜んでたのに…何故だ?うむ~~~難しいな女の子って)

「わかりました。じゃあ…黒神君、あなたがリーネさんの代わりに行ってくれないかしら?」

「えっ?俺ですか?」

上総はいきなりのことで少し驚いた。

「ええ。最近毎日警邏に当たっているでしょ。だから少し息抜きにロマーニャの街を見てきたらどうかしら?」

「えっ、でもそれはみなさんも同じで…」

「ミーナの言うとうりだぞ黒神。お前は少し休め」

坂本が優しい声で上総に言う。

「…わかりました。お言葉に甘えさせていただきます」

上総は頭を下げリーネの代わりに行くことを承諾した。
すると上総にあまりよろしくない視線が二つ刺さる。
視線を辿ってみると少し不機嫌な表情をするリーネとバルクホルンがいた。

「どうかしたんですか？二人とも」

「「何でも無い（です）」」

「？」

上総は何故二人が不機嫌なのか分からず頭の上にクエスチョンマークを浮かべていた。

「宮藤、黒神任務中はシャーリーの指示に従うようにな」

「「はい！」」

「「いってらっしゃーい」」

「「いってきまーす！」」

宮藤と上総は大きく手を振りながらロマーニャに向かった。
上総達を乗せたトラックが見えなくなった後リーネは、

「いいな…芳佳ちゃん。上総さんと一緒に行けて…」

静かに呟いた。

「わぁ～綺麗！そう思いませんか上総さん！」

宮藤は横に広がる花畑を見ながら興奮気味で上総に言う。

「ああ。とても綺麗だ」

上総も花畑を見ながら率直な感想を述べる。

宮藤は花畑から目を離し今度は上総の方を見た。

（上総さんと一緒に買い物か…二人っきりで買い物できるかな／／／）

宮藤は頬を赤らめながら心の中で期待の心を抱いていた。

「前方見通しよし、対向車線なし…にひぃ」

シャーリーは悪い笑みを浮かべながらアクセルを全開にした。

「なに？」

「にゃは！」

「…まさか」

ルッキーニは”待ってました”という表情をし、上総は冷や汗を流した。

「いくぞ！」

掛け声とともにトラックが猛スピードで谷間の道を攻める。

「キャー！」

「やっぱりーーー！」

「にゃはははは～♪」

宮藤と上総は絶叫し、ルッキーニは楽しそうな声を出していた。

「あははは、楽しい～♪」

「えええぇぇぇぇ！？」

「いけ～♪」

「止めて～！」

しかし宮藤のその声はシャーリーには届かずトラックのスピードは徐々に加速していく。

トラックは谷差し掛かった。

「まさか…」

上総はこれから起こりうることを予想する。
そして上総の予想は、

「いっけー！」

見事に的中。
トラックは谷を大ジャンプし一時的に空を飛んだ。
ジャンプは見事成功したが激しく地面に着地した。

「きゃっ！」

着地したことによりトラックが激しく揺れ宮藤は転倒しそうになる。

「危ない！芳佳！」

上総は宮藤の手を引き自分の所に抱き寄せた。

「ひゃあ！／／／」

宮藤はいきなり抱き寄せられたことにより顔を真っ赤にし焦っていた。

「ふぅ…大丈夫？芳佳」

「は、はい大丈夫です／／／そ、それよりも上総さん・・・／／／」

「ん？ああ、ごめんね。今離すから」

上総はそう言うと宮藤から手を離した。

「あっ…」

手を離すと宮藤は名残惜しそうな表情を見せた。

（どうしてあんな表情を…）

上総は宮藤が何故あんな表情をしたのか考える。

すると腕輪の穴に収まっている薄緑色の宝石が光を発した。

（黒神　上総。貴方は本当に馬鹿ですね…）

（なっ!?馬鹿って…俺の何所が…）

（はぁ…）

メリクリウスは呆れて溜め息を吐いた。

「本当にここでいいのか？」

ルッキーニの案内により一軒の店に辿り着く。

「うん。ここは大抵のものが揃っているんだ」

四人は店に入り辺りを見回す。

そこには食品に食器、日用雑貨など沢山の品物が並べてあった。

「えっと…」

「ラジオはこれだな」

「これあたしの！」

「ハルトマンの分も忘れんなよ。あっ、ルッキーニちょっと持ってくれ」

「あいー！」

ルッキーニはシャーリからボストンバックを受け取り、上総が腰をおろしている椅子の隣に座った。

「あれ？上総はいいの？何も買わなくて？」

「はい。俺はこの街に来れただけで良いのですから」

上総は頬笑みながらルッキーニの質問に答える。

「それにしてもこの街は良い街ですね…あれは」

そう言いながら上総は窓の外を見ると、赤髪の若い娘が二人の謎の男に捕まっている。

「ルッキーニさん！あれ！」

「うん！行こう上総！」

上総とルッキーニはすかさず店から飛び出し赤髪の娘の所に向かった。

「放してください！」

赤髪の娘は必死に自分の腕を掴んでいる男を振りほどこうとしている。

その時、

「スーパー…ルッキーニ…キィィィック！」

「うごぉ！」

腕を掴んでいた男が小さな少女に蹴り飛ばされ、男は腕を掴んでいた手を離した。

「上総！お願い！」

「了解！」

上総はすかさずもう一方の男にパンチを喰らわせた。

「ぐふぅ！」

男は鳩尾に上総のパンチがクリーンヒットしその場に崩れた。

「うわわ…あ、あの…」

赤髪の娘はいきなりのことに動揺している。
上総は動揺している娘の手を取り優しい声で、

「大丈夫、怖がらないで」

「え…？」

娘の手を優しく握った。

「ルッキーニさん！」

「うん！こっちこっちー！」

「さぁ行きますよ！」

上総は赤髪の娘の手を引きながらルッキーニの後を追いかけた。

「えー！？」

「「はぁ、はぁ、はぁ」」

「二人とも大丈夫ですか？」

二人は息を切らし、上総は平然としていた。

「助けていただきありがとうございました。あ、あのあなた達は？」

赤髪の女はおずおずと上総達に問いかける。

「私？通りすがりの正義の味方…フランチェスカ・ルッキーニ！」

「俺は黒神上総。あなたは？」

「わ、私はマリアです」

「マリアか。よろしくね！」

「よろしくお願いします。マリアさん」

上総とルッキーニは笑顔でマリアに挨拶をした。

「あ、あのよろしくお願いします」

マリアは礼儀正しくお辞儀をし挨拶を交わした。

「ところでさっきの男達は一体何者なんですか？」

「あっ…ええと…」

上総の質問にマリアは答えにくそうな表情を見せた。

「わ、わかった！さっきの奴等マフィアだ！だよね？だよね？」

「ええと、その様なものです」

マリアはルッキーニにの言葉に頷いた。
だけど上総は疑問を抱いていた。

（本当にマフィアか？そんな雰囲気は無かったし…どちらかというと護衛みたいな感じだったな…）

「あのさぁ、買い物だったら一緒に行くよ？」

ルッキーニは隣に座っているマリアに言う。

「いえ、買い物では無いので」

「ん？じゃあ何してたの？」

「ええと…観光というかお散歩と言うか…」

ルッキーニの問いかけにマリアはまたしても歯切れの悪い返答をした。

「お散歩？」

「へ？ええ。ほとんど家から出たことなくてローマをよく知らないんです。生まれた街なのによく知らないなんて変ですよね？」

（出身の街のことをよく知らない…歯切れの悪い返答…それと護衛か…ありうる可能性は一つだけだな）

上総はマリアの正体に一つの答えを導き出した。
そのことについて上総が問うとしたとき、

「にひぃ！街のことならルッキーニ様にお任せあれ！」

胸を張って自慢げに答えた。

「「え？」」

「行くよ。マリア、上総。」

ルッキーニはマリアの手を取り再びローマの街へ移動した。

「あれ～？車にも居ないな～」

シャーリーは車の中を覗きながら言う。

「さっきまでお店の椅子で上総さんと一緒に座ってましたよね？」

「う～ん、ルッキーニに残りのお金全部渡しちゃったからな～」

「え！？まだ食料買ってないですよ！」

宮藤は驚きの声をあげる。

「まぁ、黒神もおそらくルッキーニと一緒に居るとだろうし、そのうち帰ってくると思うけど…」

「急いで探しましょう！」

「おっきいでしょー？」

「素晴らしい…」

マリアは初めてローマにある遺跡を見たことに感動していた。
その姿を見て、

（これは、言わない方がいいな…）

と心の中で呟き上総も目の前に広がる風景を楽しんだ。
風景を楽しんだあとも様々な歴史を見て回った。
真実の口ではルッキーニがお決まりのアレをやりマリアが驚いていた。上総はそんな二人を微笑ましく見ていた。
トレビの泉では後ろ向きでコインを投げたマリアが落ちそうになりそれを助けようとした二人も共に泉の中にダイブした。
そのあともスペイン広場に行き子供たちにジェラートを買ってあげたり、服屋で帽子を買ったり、レストランで食事したり、みんなと一緒にピザを分け合ったりなど三人は楽しいひと時を過ごした。

「ばいばーい！」

「バイバーイ！」

「さよならー」

「気をつけて帰るんだぞ～」

三人は手を振りながら子供たちを見送った。
するとルッキーニは財布を取り出し中身を確認した。

「財布空っぽー、あ～…えへへへ」

「「あはははは」」

ルッキーニとマリアはお互いの顔を合わせた途端笑い始めた。
そんな二人を見て上総は静かに笑みを浮かべた。

「あ～もう全然見つかんねぇ～」

シャーリーはカフェのオープンテラスに出ている椅子にダラーンと座っていた。

「色んな人に聞いてみたけど、さっぱりでもうへとへとです」

と言って宮藤はケーキを口に運んだ。

「あむっ……おいしー！シャーリーさんこれすっごく美味しいです

よ！」

「おまえな…」

「はい！」

宮藤はケーキを刺しシャーリーにケーキを勧めた。

「あむっ……おお！すっげぇー美味いなこれ」

「でしょ？」

「ああ！このケーキもう一つ！いや二つ！」

「お願いします！」

二人は少し興奮気味に店員にケーキの追加注文をした。

「あ～早く来ないかな～」

「そうですね」

二人は早く来いという表情をしながらケーキを待っていた。
するとシャーリーが不意に口を開く。

「あのさ宮藤…」

「はい？何ですか？」

宮藤は残っているケーキを食べながら言う。

「宮藤は…その…黒神の事好きなのか？」

「ッ！？ごほっごほっ！」

宮藤はシャーリーの発言に驚き咽てしまった。

「ごほっごほっ！シャ、シャーリーさんいきなりなんてことを聞くんですか！？／／／」

「悪い悪い…でどうなんだ宮藤」

シャーリーは真剣な表情で宮藤に質問する。

「えっと…その…好き…ですよ…上総さんのこと／／／」

宮藤は顔を赤らめながら答えた。

さらにシャーリーの追撃が加わる。

「どの辺が好きなんだ。宮藤は」

「優しい所とか一生懸命な所とか色々ありますけど、私が一番好きなのは上総さんの…笑顔です」

「……」

「笑顔の時の上総さんはとてもカッコイイし、それに上総さんの笑顔を見ると私までなんだか嬉しくなってとても元気が出るんです。私は上総さんのそういったところに好きになったんだと思います」

宮藤はハッキリと自分が好きになった点を言った。
するとシャーリーは小さな声で、

「そっか…お前もか…」

呟いた。

「えっ？シャーリーさん今何てい――――」

「おっ！来た来た」

宮藤は先程シャーリーが言ったことを聞こうとしたとき目の前にケーキが現れた。
シャーリーは先程言ったことを誤魔化すかのようにケーキを食べ始めた。

（もしかしてシャーリーさんも上総さんのこと…）

宮藤はシャーリーが先程口にした言葉に不安な気持ちを抱きながら再びケーキを口に運んだ…。

第十八話：私のロマーニャ：前編（後書き）

疲れたーーー。もう後半はほぼ睡魔と闘いながら書いたのでなんだか滅茶苦茶です。どうもすいませんでした。

第十九話：私のロマーニャ：後編（前書き）

第十九話です。（未修正）

第十九話：私のロマーニャ：後編

「どう上総、マリア？ここから見る景色が私は一番好きなんだ」

「美しい…」

「本当綺麗だ…」

現在上総とマリアはルッキーニの案内で街の眺めが一望できる場所に居る。
そこから見る景色は美しく上総とマリアは感動の声を上げた。

「私家に帰らないでずっとここに居たいです」

マリアは目の前に広がるロマーニャの街を見ながら静かに呟く。

「だったらここに居ればいいじゃん」

「ふふふ、そうですね」

ルッキーニの提案にマリアは静かに笑う。

「この美しいローマの街を守ることが私にはできるでしょうか」

「えっ？」

マリアの不安を抱いた発言にルッキーニは不思議そうな声を上げる。

「あっ！家から煙が！」

不安な声から驚きの声にマリアは変えた。

「食事の準備の煙だよ」

「あの一つ一つが民人の暮らしている家なのですね」

「民人？」

「民人とは国家・社会を刑造っている人々。人民または一般人の人々の事を言うんですよルッキーニさん」

上総はルッキーニの疑問に的確に答る。

「上総は物知りだね。それよりも本当は二人に絶対に見せたい景色がもう一つあるんだけど」

「それはぜひ見てみたいです」

「う～ん今はちょっと……あっ！上総なら出来るかも！」

「俺ですか……ああ、そうゆうことですか」

上総はルッキーニがマリアに見せたい景色を理解した。

「うん！お願い上総！」

「了解。それじゃ行きますよ二人とも」

「えっ？行くってどこにですか？」

マリアは疑問の声を上げる。

「それはね――――――」

その時ネウロイの襲撃を知らせる警報がロマーニャの街に警報が鳴り響いた。

「ネウロイだ！」

「大変！早く逃げましょうルッキーニさん！黒神さん！」

マリアは急いだ様子でルッキーニと上総の腕を引いた。

するとルッキーニと上総はお互いの顔を見合わせた後マリアの方を向き、

「私達行かなきゃ！」

「えっ？」

「クソ！あの二人一体どこに居るんだよ！ネウロイが来たってのに！」

シャーリーはトラックの運転しながらルッキーニと上総を探している。

すると宮藤が、

「いた！シャーリーさんあそこ！塔の上です！」

「塔？」

塔を見るとそこにはルッキーニと上総、二人の知らない赤髪の女が居た。
シャーリーは塔の前に上手くトラックを止めすかさずストライカーに被せてある布を取り外した。

「シャーリー！」

「危ない！」

柵を越え塔の上から飛び降りようとしているルッキーニにマリアは声を上げる。

「行かなきゃ。私ウィッチだから」

「えっ？」

「これ持ってて」

ルッキーニは自分が被っている麦わら帽子をマリアに投げた。

「ウィッチ？」

「うん！だからロマーニャを守らなきゃ！」

頬笑みながらマリアの問いに答える。

塔の曲線を利用して滑り台のようにストライカーのあるトラックへ滑って行った。
そしてルッキーニは自分のストライカーを装着し使い魔を発動させ空に舞い上がった。

「俺も行かなきゃ」

「えっ？でも黒神さんは――――」

「天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）解放」

マリアは驚愕した。
目の前には純白の翼を生やし紅い目をした上総が居たからだ。
そして上総は翼を羽ばたかせ空に飛んだ。

「ルッキーニさん…黒神さん…」

マリアは空を飛んでいる四つの軌道を見ながら呟いた。

「ロマーニャは私が守る！」

ルッキーニはストライカーのスピードを上げネウロイに突撃しようとしている。

「先行するなルッキーニ！」

シャーリーは先行気味のルッキーニを止める。

「でも…」

ルッキーニはそれでもという表情をする。

「分かっている。でも一人じゃダメなんだ」

「ルッキーニちゃんの故郷を守りたいのは私達も一緒なんだから」

「そうですよ。ルッキーニさん」

「ありがとうシャーリー、芳佳、上総！」

そして四人はネウロイの迎撃に向かった。

「いた！…って五体もいるのか！？」

シャーリーは目の前の敵に驚きの声を発した。

前方には一体のネウロイ。さらにその奥には四体のネウロイがいるからだ。

シャーリーが焦っていると上総が、

「…シャーリーさん。奥のネウロイは俺がやります」

「…出来るのか」

「ええ。もちろん」

上総は自信ありげに答える。

「…頼む黒神」

「了解！」

上総は目の前のネウロイを避け奥のネウロイの迎撃に向かった。

「ネウロイ共が…堕ちろ！」

上総は目の前にいる四体のネウロイを見据えながら呟いた。
そして純白の翼を広げ、

「Ａｒｔｅｍｉｓ（永久追尾空対空弾）発射！」

無数の永久追尾空対空弾が純白の羽から放たれた。
Ａｒｔｅｍｉｓはネウロイに全弾直撃し三体のネウロイの黒い装甲を削り取る。
削り取られた装甲からは赤いコアが出現する。
その瞬間を上総は見逃さない。

「もう一度！Ａｒｔｅｍｉｓ（永久追尾空対空弾）発射！」

Ａｒｔｅｍｉｓはコアを露わにしているネウロイに容赦なく襲いかかる。
Ａｒｔｅｍｉｓがコアに直撃した瞬間三体のネウロイは勢い良く砕け散った。

「残りは…ッ！」

上総が残りの一体のネウロイを探していると下部の方からネウロイが突っ込んできた。

「なるほど…考えたな。俺のＡｒｔｅｍｉｓは至近距離じゃ当たる確率が低いのを理解したのか…だけど！！！」

上総は手に光を集め、

「来い！ｃｈｒｙｓａｏｒ！」

超振動光子剣”ｃｈｒｙｓａｏｒ”を発現させネウロイに突き刺した。

「俺の武器が射撃系統だけだと思ったのか？言っとくがその考えは…大間違いだ！！！」

上総はネウロイに言い放った瞬間ｃｈｒｙｓａｏｒを解放させネウロイごと消滅させた。

ネウロイは砕けること無く綺麗に消え去った…。

「あっちも…終わったみたいだな」

上総はシャーリー達の方を見て呟いた。

「すごい…」

マリアは空を見て呟く。
するとルッキーニがマリアに近づき、
「にひっ、見せてあげる」
「えっ？」
マリアを抱え上げ空に飛んだ。
上総も二人の後を翼を羽ばたかせ追いかけた。

「見てマリア、上総。これが絶対見せたかった景色だよ」
「これが…」
「綺麗だ…」
二人は目の前に広がる景色に感動する。
何故ならロマーニャのすべてが観賞できる景色が広がっていたからだ。
するとマリアが、
「ルッキーニさんは怖くありませんの？」
とルッキーニに尋ねた。
「え？何が？」

「あんな恐ろしい敵と戦うなんて怖くないんですか？」

戦闘が恐くないかとマリアが聞くとルッキーニは、

「だってネウロイを倒さないとロマーニャ無くなっちゃうじゃん。みんなの家とか友達を守るのがウィッチだもん」

自分の戦う理由をマリアに告げた。

「ノーブレスオブリージュですか？」

「え？何それ？上総分かる？」

今度はルッキーニが上総に尋ねる。

「ノーブレスオブリージュとは身分の高いものはそれに応じて果たさねばならぬ社会的責任と義務があるという、基本的な道徳観という意味ですよ、ルッキーニさん」

「う～～～ん……わかんない」

「そのうちルッキーニさんにも理解することができますよ」

三人は広がる景色を目に焼き付けた。

「一人で帰れる？」

「はい。今日はルッキーニさんと黒神さんのおかげで素晴らしい一日でした」

マリアは笑顔を浮かべてルッキーニと上総に言った。

「本当？」

「ええ。私は私のなすべきことに気付きましたから」

「そっか。頑張ってね」

「はい！」

マリアは自信に溢れた声で言う。

その後ルッキーニに近づき頬に軽くキスをした。

「おっ、あは♪」

ルッキーニは嬉しそうな表情をした。

そのあと二人はトラックの荷台に乗り込んだ。

すると上総が、

「マリアさん。あのときあなたはローマの街を守ること出来るかと言いましたよね」

「はい」

「マリアさんなら絶対に出来るよ。こんなにもロマーニャの街を民人を思うマリアさんになら絶対にこの美しい街を守ることができま

すよ。だから、頑張ってください」

上総は頬笑みながらマリアに言う。

「ありがとうございます。黒神さん」

「あっ…それと」

上総は思い出したように呟く。

「もし、あの景色がまた見たくなった何時でも呼んでください。直ぐに駆けつけますから」

「はい。その時はまたよろしくお願いしますね、黒神さん」

上総とマリアは頬笑みながら約束を交わした。

「ばいばいマリア！まったねー！」

ルッキーニと上総は手を振りながらマリアにお別れをした。

視線からトラックが消えた後、後ろから包帯を巻いた男が現れ、マリアはその男たちの元へ帰った。

「ルッキーニさん今日は――――――」

上総がルッキーニに今日のお礼を言おうとしたとき、

「ルッキーニ！」

「えっ？」

「ルッキーニでいいよ！それと敬語も使わなくていいから！」

ルッキーニは可愛らしい笑みを浮かべながら上総に言った。

「そうか…。じゃあルッキーニ、今日はありがとう楽しかった」

「うん！私もとても楽しかったよ上総！」

二人は楽しそうに笑い合った。

その会話を聞いていた宮藤とシャーリーは、

（あの二人…何か良い雰囲気…）

そんなことを思いながら少し不機嫌そうな表情をした。

「うえええぇぇぇん！ごめんなさーい！」

「本当にすいませんでした」

現在ルッキーニと上総は水の入ったバケツを持ち立たされている。

「しかし食料調達費の金を全部使い切るとはな……監督責任！」

「ひぃ！」

「私にもあるな。共に反省しよう」

「はぁ～、すまんルッキーニ、黒神」

シャーリーは責任追及を逃れイイ笑顔?を浮かべ、基地の中へ戻って行った。

「うえええぇぇぇん！」

「ルッキーニ。泣かない泣かない」

上総は大泣きしているルッキーニを言葉で慰めようとしていた。

ミーティングルームでは５０１統合戦闘航空団で賑わっている。
みんなが自分の要望の物を手にしているからだ。

「はいった！」

ミーナが声を上げる。
すると買ってきたラジオから声が流れ始める。

「さて、本日初めての公務の場である園遊会に出席したロマーニャ皇国第一王女マリア殿下からお言葉です」

「昨日ローマはネウロイの襲撃を受けました。しかし、そのネウロ

イは小さなウィッチの活躍で撃退されたのです。その時彼女からとても大事なことを教わりました。この世界を守るために一人一人が出来ることをすべきだと。私も私が出来ることでロマーニャを守っていこうと思います。ありがとう、私の大切なお友達、フランチェスカ・ルッキーニ少尉」

『えっ？えええーーー！？』

基地に驚きの声が響く。

「それと…」

マリアの声が再びラジオから流れる。

「私が呼んだら直ぐに駆けつけてまたあの景色を見せてください。私のもう一人の大切なお友達、黒神　上総さん」

『えええええーーーーー！？』

本日二度目の驚きの声が基地に響いた。

「ほらルッキーニ、泣きやんで」

「うん…ひっぐ」

上総がルッキーニを慰めていると空から貨物機のプロペラ音がし、

その貨物機から何が降ってきた。

「何だあれ…」

「ふえっ？」

二人は上を見ながら呟く。
貨物機から降ってきたのは、

「うわぁぁぁぁぁーーー！」

「ぴぎゃーーーーー！」

食料が入った大量の木箱だった。
その木箱は見事に上総達の身体に伸し掛かる。

「「う～…お、重い…」」

二人は木箱の重さを感じながら呟いた・・・。

～～おまけ～～

「この食料の入った木箱…マリアさんからかな」

「たぶんそうなんじゃ……」

ルッキーニが急に黙り込んだ。

それだけではない。何故か顔まで青ざめている。

「どうした、ルッキーニ？」

「う、後ろ…」

上総はルッキーニに言われて後ろを振り向く。
そこには黒いオーラを出した美少女４人が居た。

「あ、あのどうかなされましたか？」

上総は怯えながら恐る恐る尋ねてみる。

「黒神」

「どうゆうことか」

「説明」

「してください」

上から順にバルクホルン、シャーリー、宮藤、リーネが少し怒りを孕んだ声で聞いてくる。

「は？せ、説明？な、何のですか？」

「「「「いいから説明しろ（してください）！！！」」」」

「だから何を説明すればいいんだーーーーー！？」

上総の叫びは空に虚しく消えていった…。

第十九話：私のロマーニャ：後編（後書き）

原作ばかりですいません。次回はオリジナルにしたいと思います。
しかし更新は遅いと思います。頑張ります。

第二十話：訪れる海神（前書き）

第二十話です。今回は神との2回戦目。あと書き方も少し変更しました。

第二十話：訪れる海神

「はっ！」

声と共に坂本さんが模造刀をを勢い良く横に一閃。振るう速度は以前に比べ上昇している。

放たれる模造刀を水を流す様に素早く防ぐ。この時、再び坂本さんの成長を発見した。

…剣圧も速度と同様上昇している。恐らく素人がこの刀を防いでも、腕が麻痺により刀などまともに持つことは出来ないだろう。これ程まで成長したとは…驚きだ。

しかし…未だ意識が配慮出来ていない部分が数ヶ所見受けられる。

相手を動きを封じ込めるには…。

体勢を立て直しながら軽く息を吐く。狙いは定まった…左足を崩す。

冷たく感じる砂に爪先をめり込ませ一気に蹴り上げる。蹴った砂が中空を舞い互いの視界を奪う。

別に視界を奪うことが作戦では無くて、只純粋に左足を崩すことが今回の戦略だ。

中空を舞い散る砂を模造刀で斬り裂きながら間合いを詰める。その行動に敏感に反応した坂本さんは、姿を黙認したと同時に、模造刀を振り下ろす。反応速度も良好か…成長の速度が少し異常な気もするが…。今は眼の前の事に集中する。

模造刀を浜辺に深く刺し、振り下ろされた模造刀を微動だに出来ない程に抑え付ける。抑え付けた瞬間に自分の左足を軸にし、素早く隙だらけの左足に移動。そして柔道である大外刈りの要領で左足を足払いする。坂本さんは予期していなかった行動に驚いた表情のまま浜辺に倒れ込む。

すかさず倒れ込んだ坂本さんの首元に模造刀の鞘を添える。勝負アリだ。

「はぁ……はぁ……また私の負けだな」

倒れ込んだまま明け方の薄暗い空を見て静かに呟く坂本さんに、手を差し出す。

有難うと言いながら手を掴み立ち上がる。

丁度立ち上がったと同時に、起床を知らせるラッパ音が基地に鳴り響く。

「もうこんな時間か……戻るか黒神」

浜辺に突き刺さっている模造刀を引き抜き鞘の中に収める。

何時もの日課を終え基地へ戻る為足を運ぼうとした瞬間、

「…――――――ッ！！！」

あの視線を感じた。

この気色悪い視線は一度経験済みだから理解できる……二体目。

二体目の神が俺を消滅させに襲来して来やがった。そう思っていると腕輪に収まっている薄緑色の宝石が輝く。

（黒神　上総……分かっていますよね）

（ああ、お前に言われなくてもな……）

気持ちを落ち付けさせながら海を見据える。感じる…海の方から鋭い視線が飛んでくる。

そうなると今回は水を主軸とした神か……ということは……――――――

「どうした黒神？戻るぞ」

海を見据えていると坂本さんが不思議そうな表情をして声を掛けてきた。
全く関係のない人間を自分の戦いに巻き込むわけにはいかない…。
すぐさまこの場から退場させないとな。

「坂本さん。俺はもうちょっと身体を動かしてから行くので先に戻ってください」

「……そうか。朝食までには戻るようにな」

一瞬不審な表情をしていたが、俺の言葉に頷き再び基地の方に歩んで行く。
姿が完全に基地に消えるのを確認すると海の方を見据え、気色悪い視線を向けてくる者に言い放つ。

「待っていてくれるとはな……空気だけは読めるようだな。海神・ネプトゥヌス」

言葉に呼応するように海の中から一人の男性が現れる。
髪色及び瞳は蒼眼。年齢は見た感じ２０代位。眼つきは非常に最悪で、昭和時代に生息していた不良の連中に良く似ている。時代遅れだな…と思ってもこの世界の年号は１９４５年。古臭いのは当然だ。

「俺の事を知っているようだな。黒神　上総」

「ああ、一応な」

互いに言葉を交わした後、数秒の沈黙が流れる。
だが只の沈黙では無い。例えるなら同じ餌をどちらが喰らい付くか

で睨み合っている猛獣の雰囲気だ。
その危険を感じ取ったのか森に住み着く繊細な鳥達が一斉に逃げ始める。

「理解はしているな…俺が此処に来た意味を」

「勿論。だから……」

刀剣を瞬時に造り出し、力強く握りしめる。
ここで本来なら周りに被害を被らない”ｇｕａｒｄｆｉｅｌｄ”を展開させるべきだが、そうすると可動範囲が一気に制限され戦闘が苦しくなる。そして眼の前の男性はローマ神話で記されている神の一人だ。
どれ程の力量の持ち主なのか定かではない。だから”ｇｕａｒｄｆｉｅｌｄ”を無暗に展開させるわけにはいかない。まぁ…これ等の事は風神・メリクリウスとの戦闘で学んだ事なんだが…。

「準備完了だ……行くぞ!!海神・ネプトゥヌス!!」

「掛かって来いよ。海神の恐ろしさ…その身にたっぷり刻みこんでやるよ!!!」

全く…早朝から殺し合いとは嫌な気分だ…！

「蒼破刃!」

初めは小手調べに魔力を一点に凝縮した刀剣を地面を這わせながら振り上げる。

刀剣からは凝縮された彗星の魔力が海神に襲い掛かる。
しかし、魔力の彗星は海神が前方に展開した水壁により、いとも簡単に防御されてしまう。
やっぱり…か。何度もしつこく言うが、こいつはローマ神話に記されている神の一人。水を自由自在に従えることが可能なのだ。その水を盾のように使うのも他愛もないだろう。

「俺の番だ……硬水」

ネプトゥヌスが右手を此方に突きだした瞬間、手中から勢いのある水が放たれる。
素早くサイドステップで砂を蹴り上げ横に飛び退く。
放たれた硬水は岩に直撃し岩の硬い装甲を粉砕する。

硬水とは硬度の高い水。主にカルシウムイオンやマグネシウムイオンが多量に含まれる水である。
もしあんな物をモロに喰らったら骨が1，2本折れるかもしくは粉砕されるかもしれない。

「ちっ、避けんじゃねーよ。ｗａｔｅｒ　ｃｕｔｔｅｒ」

更なる追撃。水が細長く圧縮された水の閃光が高速で向かってくる。
その速さはおよそ５００~８００ｍ／ｓ程。
かなりの速度だが、鍛えられた動体視力で回避は可能。身体を捻らせ器用に回避。
水の閃光は砂浜の砂を巻き上げ、背後に生えている木々に直撃。
当たった部分は”切られる”のではなく一部だけ”吹き飛ばす”形になる。
本来ｗａｔｅｒ　ｃｕｔｔｅｒは「切る」と言うよりは「水流の当たった部分を吹き飛ばす」と捉えるのが正しいイメージである。

「おい。メリクリウス」

（何ですか？黒神　上総）

海神の弱点を知るためにメリクリウスに問う。

（弱点ですか…簡単に言えば雷撃ですね。だけど生半可な雷撃はネプトゥヌスには通用しませんよ。ネプトゥヌスを倒すには神の雷とも言える技を繰り出さないとなりません）

メリクリウスは自信の仲間であるネプトゥヌスの弱点を淡々と言う。この淡々さに少し驚いた。普通だったら自分の仲間の弱点を敵と言える人物に教えるわけがない。

なのにこいつは嘘の欠片も無い声で弱点を言う。これが人間に従える神なのか…。

そんなことを思う中先程メリクリウスが言った”神の雷”について考える。

考える中で一つだけ思いつく技がある…。

だけどその技を放つにはあいつを固定しなきゃならない。どうしたら……

「其処だ……過冷却水」

「しまっ――――――」

考えていた隙にネプトゥヌスの攻撃が襲いかかる。

何とか回避したが左腕だけ水を喰らってしまった。

次に来る痛みに備え左腕の拳を思いっ切り握り締める。

「……？」

おかしい…痛みが無い。
ネプトゥヌスが放ったのは只の水？何の意味があって只の水なんか…。
まぁ良い……今は攻撃することに全神経を集中する！！
刀剣を肩の部分まで持ち上げ技の使役準備。同時に激しく輝く薄緑色の宝石。

（ッ！！いけません！！黒神　上総！！技を――――――）

「覇道滅風！！」

メリクリウスの忠告を聞かずに地面を這う強力振動波を放つ。
だが、意味の分からない事態が発生した。

「ぐっ！？がああぁぁぁ！！」

左腕が…左腕全部が氷漬けになっている。
異常な程の激痛が身体を駆け廻る。氷漬けになるのがこれ程まで苦痛だなんて知らなかった…。
其処で俺はあることに気付く。何故こいつは氷を操作できる？こいつは海神。扱えるのは水だけの筈…。
思考を働かせろ…水を氷に変化させる技……ッ！！そうか！！

「過冷却水！！」

「よく知っているな……見事に氷漬けだ」

ネプトゥヌスは口元を歪ませ不敵に笑う。

過冷却水…それは融点以下でも凍っていない過冷却状態の液体の事。
不安定であり、振動などの物理的ショックにより結晶化を開始し氷に転移するのが過冷却水。
それなのに振動が大きい技”覇道滅風”を放ってしまった。振動が大きければ大きいほど氷漬けの反応・速度・範囲は速く大きくなる。

「クソ…厄介な技だ」

「これで終わったと思うなよ…過冷却水前方に展開」

過冷却水を前方に展開される。まさか……これは!?
次放たれる技を理解し回避行動を行おうとするが、氷漬けにされた左腕が負担となり激痛が身体を駆け廻るため思うように行動できない。

「無様な姿だな…氷舌」

ネプトゥヌスが無詠唱魔法を行うと過冷却水から舌状に突き出た狭く長い氷のシートが地面を駆け抜ける。氷のシートは俺の足元を的確に捉え動く為の足を氷漬けにされる。
刀剣を乱雑に振り回し足元の氷の破壊行動を行ったが、氷の強度の方が刀剣を勝り上手いように破壊できない。

「ぶっ飛べ……硬水」

その隙を見逃さない海神は、再び硬度の高い硬水が襲いかかってくる。
氷漬けになっている足の破壊を止め、向かってくる硬水を刀剣で受け止める体勢を行う。

硬水と刀剣が激しく交わり火花が散る。押し出す勢いも強力で敗北してしまいそうになる。
此処で朽ちるつもりは無い…！全身に力を加え硬水に対抗する。
しかし、激痛が再び全身を駆け廻り、刀剣を握っていた右手の力が一気に緩んだ。
その瞬間を海神は見逃さず、さらに硬水の速度及び威力を上昇させる。
硬水は刀剣を紙切れの様に弾き飛ばし、身体にめり込む。

「がはぁ！！」

ボキッと不快な音が体内で鳴る。瞬時に理解した…持って行かれた。
荒い呼吸をしながら硬水がめり込んだ部分を優しく触れる。
恐らく…持ってかれた本数は2，3本程。これは…非常に危険だ。
苦しむ光景を見ているネプトゥヌスはどこか楽しんでいる表情。

「そんなに苦しいか……なら一瞬で楽にしてやるよ」

そう言うと過冷却水を手中に溜め込み水龍を形成し、その水龍に振動を送り氷龍に変化させる。
氷龍にはルビーの様にギラギラと光る眼光が備えついており、歯は氷で鋭く尖っている。
あんなもの今の状態で喰らったら…即死だ。

「消え失せろ……黒神　上総。氷龍絶破衝！！」

両腕をクロスに振り下げた途端、二体の氷龍が咆哮を上げ鋭い牙を剥き出しにし襲いかかる。
二体の氷龍を食い止める策は…無い。

「……ッ……畜生」

氷龍を眼の前に静かに呟く。もう限界だ…勝てない…こいつには。
完全に諦めていた時、金色の腕輪に収まっている薄緑色の宝石が光輝く。

（私の力をお貸ししましょうか？黒神　上総）

突然言葉に、痛みを感じながら驚愕する。
風神・メリクリウスの力を借りる？そんなことが……。

（可能なのか…そんな事）

（当たり前です。それよりも時間がありません。さぁ…言うのです”神話融合”と私の名を……！）

（分かった…やるぞ！！！）

そして二体の氷龍が全身に襲いかかった…。

「けっ！こんなものか…つまんねぇなぁ！！」

水で冷え切った砂浜の砂を思いっ切り蹴り上げる。中空を舞う砂が、多少うざく感じる。
それよりも今回戦ったイレギュラー…黒神　上総。
武力と知識はそれなりに備わっているが、油断が大きすぎる。
過冷却水を放ち、奴の腕に直撃させた時一瞬だけ考える顔をしたがそれも直ぐに止め再び攻撃を仕掛けてきた。そして氷漬けにされた

後に気付く。

「本当に……馬鹿な奴だ」

氷龍から背を向け自分の居場所に帰ろうとしたとき、後ろの氷龍が勢いよく辺りに砕け散る。
何事かと思い、すかさず敵を包み込んだ氷龍を見据える。
そこには死んで当然の筈…黒神　上総が不気味に立ち上がっていた。
でも様子が変だ…黒神　上総が居るのは事実。それと同時にもう一人誰かが存在している。
魔女共――――いや、この考えは幾等なんでも馬鹿げている。たかが魔女風情で俺の攻撃を防ぐなど不可能だ。なら一体何者が…？
疑問を抱いていると、氷の煙が晴れ姿を現したのは、

「なっ!?その姿は……まさか!!!」

その場には先程の黒神　上総は存在しない。
居るのは髪色及び瞳が薄緑色に変化した黒神　上総。
そして眼の前の敵は口を小さく開く。

「Ｍｏｏｎ　ｓｔｒｕｃｋ　Ｎｕｍｂｅｒｌｅｓｓ　Ｇｒａｐｐｌｅｒ」

意味は…名もなき　狂躁の　格闘士ども……。

第二十話：訪れる海神（後書き）

何とか書くことができました。次回は海神・ネプトゥヌスとの決着をつけたいと思います。

第二十一話：風神ＶＳ海神（前書き）

第二十一話です。海神・ネプトゥヌスとの決着がつきます。

第二十一話：風神ＶＳ海神

「あの時の目は一体…」

私は日常生活の原動力とも言える朝食を摂取するため、食堂に向かっている。
向かう途中で先程の黒神について考える。
海を方を鋭い視線で見据える姿。あんな黒神の姿は日常生活で見たことが無い。
だけどあの視線について何か引っかかる。
まるで私はあの鋭い視線を一度見たことがある感覚だ。
鋭い視線……見たことある感覚……ッ！？

「まさか！？」

思い出した。あの視線を。あの夜起きたことを。
まったく同じだった。黒神の視線はあの夜起きた物と全く…。
振り返り今まで歩いてきた宿舎の廊下を走り始める。
このことはバルクホルンから言わせれば軍紀違反だが今はそんなこと関係無い。

「黒神無事でいてくれ！！」

先程の模擬戦を行った場へ戻るため全力で走った……。

「Ｍｏｏｎ　ｓｔｒｕｃｋ　Ｎｕｍｂｅｒｌｅｓｓ　Ｇｒａｐｐｌｅｒ」

自然と……口から言葉が漏れた。
体の感覚が何かいつもと違う……今はまるで風を身に纏っているような感覚だ。
とても心地いい……風がこんなにも清々しく良いものだとは知らなかった。
新たな感覚を身体全体で体験していると、

「メリクリウス！！！テメェェェ！！！」

ネプトゥヌスが拳を思いっ切り握り締め、怒りを露わにした表情で言い放つ。
怒号は大気を揺らしまた海も荒れ狂う。
海も…水までもが怒りを露わにしている。”神話融合”を成し遂げた俺に対して…。

「仲間である俺に牙を向けるのか！！メリクリウス！！大人しく黒神　上総を俺に殺させればお前は再び自由になれたはず！！何故だ！！」

「人間に敗北した神はその人間に従える…私はただ黒神　上総に”力”を貸しただけです。別に貴方に牙など向けてませんよ」

ネプトゥヌスの問いにメリクリウスは俺の口を勝手に借り挑発的な口調で答えていく。
そんな風神に海神の怒りは頂点に達した。

「ふざけんじゃねーぞ！！クソが！！」

ネプトゥヌスは地面に思いっ切り殴り付ける。
何かが来る…。
瞬時に理解し回避行動を行う。この時体が軽くなっていることに気付く。
これも風の神・メリクリウスの御陰か…。
そんなことを考えていると避けた場所に深い割れ目が生じ、その割れ目から氷柱が鋭く上を向いて突き出す。

「この現象は…クレバスと氷筍の応用技か」

クレバス…それは氷河や雪渓の深い割れ目のこと。
そして氷筍とは簡単に言えば逆さの氷柱の事である。
氷筍が発生するのは何とか理解出来る。
しかしクレバスは何故起こったんだ？氷河や雪渓がある地形にしか起こらない筈なのに…。

「ん？」

海神の攻撃を避けながらあることに気付く。
地面がかなり冷えている。しかし冷えているのは表面では無く内部が冷えている。
――――理解した。

「成程…凍らせたのか地中を」

恐らくネプトゥヌスは過冷却水を地中にに浸み込ませ俺らの”動き”を利用し振動で過冷却水を凍らせたのだろう。
ということはこの地中すべてが奴の支配下か…厄介だ。

「逃がさねーぞ！！凍上！！」

今度は地面に足を思いっ切り叩きつけた瞬間

「うおっ！？」

地面が勢いよく盛り上がる。

この現象は凍上と言い土壌が凍結して氷の層が発生した時、それが分厚くなる為に土壌が隆起することである。

いきなり自身の場が崩されたため体勢を崩す。

それをネプトゥヌスは見逃すわけがない。

「今度こそ消えろ！！黒神　上総！！」

ネプトゥヌスは怒号に近い叫びを放ちながら氷龍絶破衝を放つ。

二体の氷龍が襲いかかろうとしている。

だが俺は動じない。むしろ余裕を感じている…この二体の氷龍に。

二体の氷龍は牙を剥き出しにしながら襲いかかった…今度こそ消したと思っているだろう、海神さんは。

だが残念、

「風壁」

氷龍は俺の練り上げた風の壁で阻まれ、その形を残したまま風の中に取り込まれた。

ネプトゥヌスを見ると驚愕の表情を浮かべている。

それもそうか…自分のお気に入りの技をこんなにも簡単に受け止めてしまったのだから。

「返すぜお前の大事なペットを」

驚愕の表情を今だに浮かべているネプトゥヌスに対し口元を歪めながら言い、技を放つ準備をする。

風の壁に手を添え、

「Ｐｉｌｅ　ｔｏｒｎａｄｏ」

術名を呟き思いっ切り氷龍を取り込んでいる風を押し出す。

瞬間風は辺りの砂を巻き上げ竜巻と化しネプトゥヌスに襲いかかる。

それに＋@加わる。それはネプトゥヌスが自らの力で作り上げたペットである氷龍。

二体の氷龍は自分たちを作り出してくれた主人に牙を向ける。

「チッ！硬水壁！」

Ｐｉｌｅ　ｔｏｒｎａｄｏと氷龍がネプトゥヌスが作り出した硬水壁に直撃する。

様子からして何とか耐えているようだな…だけど！！！

「もう一つオマケ！！Ｐｉｌｅ　ｔｏｒｎａｄｏ！！」

「何だと！？がぁぁぁ！！」

さらにＰｉｌｅ　ｔｏｒｎａｄｏを海神の硬水壁にめり込ませる。

風の追撃が加わったことにより硬水壁は砕け散り、三つの竜巻と二体の氷龍は海神に容赦なく襲いかかる。

竜巻は体にめり込み氷龍は獣の様に喰らい付く…我ながら恐ろしい光景だ。

ネプトゥヌスは血を吐きだしながら苦痛の叫び声を上げる。

「クソが……殺す！！！」

鋭い視線と形相でネプトゥヌスが殺意を込めた声で俺に言う。
表情を見る限り少し焦っているように見受けられる。
そりゃそうだ…何でも竜巻をモロに喰らい氷龍には裏切られる。焦るのも当然だ。

「凍――――」

「動くな」

どんっと音を鳴らしながらネプトゥヌスの身体に何かが圧し掛かる。
その重さはかなりのものだろう…骨の軋む音が俺にまで聞こえてくる。

「てめぇ…何しやがった！！」

「簡単だ…Ｐｉｌｅ　ｔｏｒｎａｄｏの応用技で、コイル状の渦を一点に集めて空気を相手に圧しつける技…集積積乱雲（テ―パリング・クラウド）」

集積積乱雲（テ―パリング・クラウド）…その重さは風の量にで変化し最大で鉄をも砕く程にまで変化する。
使い方によっては人間を一瞬で圧し潰し殺すことが出来てしまう恐ろしい技だ。

「遊んでじゃねーぞ！！クソがぁぁぁぁぁ！！！」

するとネプトゥヌスは自らの力で集積積乱雲（テ―パリング・クラ

ウド）を圧し返した。
なんて奴だ…まるで”水棲の魔龍（オルカ）”みたいな奴だな。

オルカとは古代ローマは大プリニウスの著者。『博物誌』に出てくる海に棲む魔龍にちなんだものである。
しかし『トールキン』という英国の書いた本の所為で地底に潜む小鬼（オーク）のイメージが定着したと言われる。

「貫け！ｗａｔｅｒ　ｃｕｔｔｅｒ！」

「無駄だ」

ネプトゥヌスはｗａｔｅｒ　ｃｕｔｔｅｒを乱暴に放ち続ける。
しかしそれは風壁に阻まれその力を発揮しないまま只の水となった。
そろそろ決着を…俺は勝負を決めるために風を大量に集める。
そして、

「風よ牙と成りその者を監禁しろ……無限の牢獄（インフィニティ・ジェイル）！！」

風が変化し”牙”と化した物がネプトゥヌスに襲いかかる。
その”牙”は目の前の者を切り刻むという行動はせず、対象物を囲む檻の様な力を発生させた。
檻は見事にネプトゥヌスを監禁する状態になる。
この状況を待っていたんだ…神の雷を落とすために。

「決める…天光満ところ我あり黄泉の門、開くことに汝あり、出でよ神の雷…」

勝負を決める最後の魔法を詠唱し始める。
何でもこの技は詠唱が長く、隙が多いため上手いこと直撃させるこ

とが出来ない。
だけど今は確実に直撃させることが可能だ。
巨大な魔法陣が地面と空に浮かび上がり、雷雲が咆哮を上げながら発生し始める。

「クッ！！何で壊れないだよ！！この檻は！！」

ネプトゥヌスは牙の牢獄の中で暴れまわっている。
殴ったり蹴ったり等の檻への破壊行動を行う。
しかしこれは牢獄。破壊できるわけがない。
破壊行動を行うネプトゥヌスとは裏腹に俺は神の雷を放つ準備が整う。

「これで終わりだ！インディグネイション！！」

瞬間上空からあり得ないほど巨大な紫色の雷がネプトゥヌスに落ちる。
その雷は正しく神の雷。

「クソが……この俺が――――――」

海神・ネプトゥヌスの最後の言葉を聞かず雷はその者を轟音と共に包み込んだ。
砂が激しく舞い視界が黄土色になる。
それらを風の力を行使し、一瞬で舞う砂を吹き飛ばす。
先程インディグネイションを放った場所を見る。
そこには海神の存在は消えていて残っていたのは焼け焦げた砂浜と青い宝石だけだった。
勝負が完全に終えたことを確認すると俺は”神話融合”を解除する。
同時に髪色と瞳の色が元の黒色に戻る。

すると、

「ウグッ！？」

異常な疲労が俺に襲いかかってきた。
これは”神話融合”の副作用なのか…。
すると薄緑色の宝石が光を発し、

（一つ言っときますが”神話融合”を行うと過度の疲労が貴方に襲いかかります。その辺はお気をつけるように。黒神　上総）

「お前タイミング良いな……」

メリクリウスのタイミングの良さに俺は苦笑する。
すると後方から、

「黒神！！」

坂本さんが息を切らしながら此方に向かって来た。

「あっ…坂本さん。どうしたんですか？」

「お前…その傷は一体何が……まさか――」

「ちょっと上級魔法の練習をしていたら失敗してしまいまして……情けないです」

坂本さんの言葉を阻み嘘を吐いた。
あの事を坂本さんに話すわけにはいかない。それは他のウィッチ達も同じ。

それに戦いを引き起こしたのは俺だ。
全く関係の無いウィッチ達をこれ以上巻き込むわけにはいかない。
以前の戦いの様に見るのも駄目だ。あまりにも刺激が強すぎるから。
だからあいつ等と戦うのは俺一人で十分。
砂浜に落ちている青い宝石に近づき、それを拾い上げ腕輪にはめ込む。
すると微かに宝石が青く光ったのが見られた。

「坂本さん。先に基地に戻ってますね」

「あっ……」

坂本さんが何か言おうとしてたが、それを無視し駆け足でその場から逃げるように基地に向かった……。

黒神は魔法を使用し怪我をしたと言ったがアレは絶対に嘘だ。
何故かはわからないが私の心が嘘だと言っている。
そして黒神が荒れた砂浜から立ち去ろうとした時に問い詰めようとしたが上手く言葉が出なかった。
私はそのまま黒神が基地に戻っていく後ろ姿を見ることしかできなかった。

「どうして嘘なんか…黒神」

身体に悔しさと悲しみの思いが廻る。
何故こんな思いをするのか大体理解出来る。

頼ってもらえなかったからだ。
頼って欲しかった…私や他の仲間たちを……。

「一人で戦おうとするな…私達は仲間だろ」

黒神には聞こえない声で静かに呟く。
そして静かに波を打っている海を見る。
だけどハッキリとはその光景が見ることが出来なかった。
目の前が少し滲んでいたのだから…。

第二十一話：風神ＶＳ海神（後書き）

何とか上総と海神との決着をつけることが出来ました！次回は金曜日辺りに更新出来たら良いなと考えています。

第二十二話：坂本美緒の真実を求める戦い：前編（前書き）

第二十二話です。

第二十二話：坂本美緒の真実を求める戦い：前編

「疲れた……」

俺は疲労が蓄積した体を引き摺りながら、宿舎の廊下を歩いている。
先程行ったメリクリウスとの”神話融合”…あれが原因だ。
神話融合とはその名の通り自分の従えたローマ神話の神々達と、一時的に融合すること。
融合した際さまざまな変化が身体に起こる。髪、瞳の色がその神の応じて変化したり、融合した神の所有している”神術”を使えたりなど戦闘を有利にする力を一時的に持つことが可能になる。

そして今回融合したのは風神・メリクリウス。
その”神術”は文字通り”風”を自由自在に操れる。
風を身に纏い機動力を上昇させたり、牙の牢獄を創り上げる等、今後の神々達の戦闘に役立つ力を行使することが可能になった。
しかし”神話融合”には大きな欠点がある。
それは融合者に過度な身体的及び精神的な疲労を招くことだ。
幸い天界での修行や日々の鍛錬によって、何とか自身の身体を保つことが出来た。
恐らく一般人が”神話融合”を行うと一瞬でその身体と精神は殺され、死んでしまうだろう。
そのぐらい”神話融合”は融合者への代償が凄まじく、恐ろしいものなのだ。
これ等の事は全てメリクリウスの入れ知恵だ……色々と感謝しないとな。
それと――――

「……あと五体か」

腕輪を見て呟く。
現在収まっているのは二個の宝石…よって二体の神を倒し従えたことになる。
そして残りは五個…つまり五体の神々が俺を消しに来るのか…。

「……ッ」

突如不安が頭を駆け廻る。
勝てるのか……今までの俺の力で……これから訪れる神々達に……。
不安の泥沼に浸かっていると青色の宝石が光を発した。

(チッ、何情けない顔してんだよ…お前はそれでも俺に勝った人間か?)

「ネプトゥヌス…」

(俺はお前に従う気も力を貸す気も無いが人間に負けた神はその人間に従うのが俺等の掟…俺も流石に掟は破りたく無い。だから貸してやるよ…俺の力を。だからそんな情けない顔すんな…こっちまで気分が悪くなる)

ネプトゥヌスは不機嫌な声色で俺に力を貸してくれると言う。
言葉こそ悪いがネプトゥヌスには微かだが心遣いを感じられた。
本当はこいつ…優しい心の持ち主なんじゃないのか?

「有難う…ネプトゥヌス」

(勘違いするな。俺は掟のために力を貸すだけでお前の為じゃない。いいか!掟の為だからな!!)

その言葉を最後に青色の宝石は光を閉ざした。

神たちの中での掟……それは負けた神は人間に従えること。人間に従えるとは神にとって最も屈辱の事である。しかしその掟を守らないと神たちは、その存在を消されてしまう。消されてしまうとは、存在と共に神話の中からも消され、人々の記憶からも存在が無くなってしまう。

これ等の事は、神々達にとって最も恐ろしいことなのだ。

（ふふふ、良かったですね黒神　上総。あのネプトゥヌス自らが力を貸してくれるのですよ）

「……それ凄いことなのか？」

（ええ。何でも彼は神々達の間でツ――――――）

問いにメリクリウスが答えようとした瞬間、言葉を遮る様に青色の宝石が再び光を発する。

しかし先程と比べると光の量が違う。

何だろう……焦っているような感じだ。

すると、

（メリクリウス！！それ以上絶対言うな！！殺すぞ！！）

（ふふふ、何そんなに焦っているんですか？別に焦るような事じゃないのでは？）

（それはお前だけだろうが！！）

二人は何故かいきなり喧嘩を始めた。
聞いてる限りメリクリウスの方が口達者なようだ。
しかしネプトゥヌスは何に焦っているのだろうか……さっぱり分からん。
直接聞いてみるか…。

「ネプトゥヌス。一体な――――――」

（お前は関わってくんな！！黙ってろ！！）

「お、おう……」

聞いても無駄な様だ…。
ここはメリクリウスに任すか。
二人の喧嘩を聞きながら食堂へと向かった。

「お前等そろそろ終わりにしろよ…」

食堂の前についても依然二人は喧嘩したまま。
しかし喧嘩の言葉の中には互いの昔の事を懐かしむ言葉も含まれていた。
二人とも本当は仲が――――――

（チッ、このことは御預けだメリクリウス）

（そうですね。また貴方を弄れると思うと身体がうずうずしますよ）

（てめぇの趣味は本当に最悪だな……本当に殺したくなる）

非常に悪いようだ。
でも助かった。これで俺が弄られることは減ると思う。
安心して安堵の溜め息を吐くと、

（おい…お前何か安心してないか）

「そ、そんなことは…」

ネプトゥヌスは、心の中で思っていることを聞いてきた。
余りにも的確に聞いてきたので内心物凄く焦っている。
何とか否定はしたが…大丈夫だろうか。

（……まぁいい。俺は疲れたから休むぜ）

（私もそろそろ休ませて貰います…何でも今回は”神話融合”を久々にしましたから）

二人はそう言うと光を閉ざし大人しくなる。

「ふぅ…やっと大人しくなったか」

今度は安堵の溜め息では無く、疲れを露わす重い溜め息を吐く。
そしてゆっくりと食堂のドアノブに手を掛け、扉を開ける。
開けた途端良い香りが鼻を突く。卵焼きや味噌汁の香りがする…これは俺の好物和食の香りだ。

和食に心を躍らせてると、

「「おはようございます。上総さん」」

「おはよう。芳佳、リーネ」

可愛らしい笑顔を向けて挨拶をする二人に俺も笑顔を向けて挨拶をする。

すると二人嬉しそうな表情をしながら、再びキッチンに戻っていった。

そいて自分の分の食事を取り席に着く場所を探す。

「お隣良いですか？バルクホルンさん」

「あ、ああ構わないぞ」

席を探しているとバルクホルンさんの隣が空いていることに気付き、隣を良いかと聞くとバルクホルンさんは少し顔を赤くしながら承諾をした。

そして席に着き好物である和食を食べ始める。

食べ始めて数秒、視線が向けられていることに気付く。

その視線をばれない様に辿っていくと、隣のバルクホルンさんと左斜め前のシャーリーさんが、チラチラと視線を向けてくる。

そして何故か頬も若干赤くなっている……何故だ？

何故俺の顔を見て顔を赤くする必要があるんだ？

う～～～ん……分からん。

分からないときは直接聞いた方がいいな。

「お二人ともどうかなされたんですか？先程から俺の顔を見ているようですが？」

「えっ!?い、いや!!べ、別に何でもないぞ／／／!!」

「そ、そうだよ!何でもない何でもない／／／!」

視線を向けるバルクホルンさんとシャーリーさんに問うと、二人は顔をさらに赤くし焦った表情で俺の問いに答える。

結局何故二人が、顔を赤くし視線を向けてきたのかは分からなかった。

正面に座っているとハルトマンさんを見ると、二人の顔を見てニヤニヤしている。

何でハルトマンさんはあんなにニヤニヤしているんだろうか…。

俺が新たな疑問を抱くとハルトマンさんが此方に向き

「上総も大変だね。頑張りなよ」

「……はっ？」

一体何を頑張れば良いんだ?

色々な疑問を抱きながら、再び食事を口に運んだ…。

「美味しかった……」

自分の腹が好物で満たされたことに、満足感を感じながら自室へと戻っている。

神話融合を行った時の疲労も、少しばかり落ち着いた。

しかし未だ完全では無い。速く自室に戻り蓄積している残りの疲労を睡眠で取り除きたい。
少し足早で自室に向かうと、眼の前から坂本さんが歩いて来るのを発見した。
それは坂本さんも同じだろう。

「……」

坂本さんに一礼し無言で横を通り過ぎる。
そして5歩程歩くと

「黒神……」

坂本さんが背を向けたまま声を掛ける。
しかしその声は何時も聞いている声とは少し違う。

「……何ですか？」

同じく背を向けたまま坂本さんに問う。

「今夜話がある…今日模擬戦を行った場所へ来い」

「……了解」

坂本さんは、ほんの少し覇気を込めた込めた声で言った後食堂に向かった。
恐らく坂本さんはあの事を……。

「今夜はもしかすると…」

今夜起こりうる事を予想しながら自室へと向かった…。

「綺麗な月だ…」

坂本さんとの約束を果たすため、今朝模擬戦を行った場所へ向かっている。
向かう最中夜空を見上げると、雲一つ無く月がくっきり浮かび上がっている。
その光景は美しく神秘的だ。
光景を楽しんでいると、何時の間にか今朝模擬戦を行った場所に辿りついていた。
そして其処には黒髪で髪をポニーテイルで纏め、背中には自らの愛刀『烈風丸』を掛け、静かに波打っている海を見つめている坂本美緒少佐がいた。

「坂本さん…」

「来たか…黒神」

坂本さんと数秒間お互いの眼を見て対峙する。
そして先に口を開いたのは坂本さんだ。

「黒神…今日の事正直に全て話せ。偽りなく全てだ」

やっぱり…予想通り。
坂本さんは気付いたんだ。今日、魔法を使って負傷したのではなく

戦闘をして負傷したのを…。
確信できる。坂本さんの目は本気だ。
だけど此処は嘘を貫くしかない。

「一体何の事で――――――」

「とぼけるな!!!」

怒号が砂浜に響く。

「嘘を吐いても無駄だ黒神!!私には分かる…お前は今日また一人で戦ったんじゃないのか」

「……」

「頼む黒神…正直に話してくれ。お前は一体何と戦っているんだ?どうしてお前はひとり――――――」

「すみません坂本さん。こればかりは貴女に話すことはできません」

坂本さんの言葉を阻み謝る。
この事ばかりは坂本さんや他のウィッチ達には、絶対に知られる訳にはいかない。
これは個人の戦い。関係の無い彼女達を巻き込んではいけない。
だから坂本さんには話すわけには…。

坂本さんを見ると顔を附せ拳を握りしめている。

「…ッ……そうか…だったら!!」

「ッ！！」

瞬間坂本さんは愛刀『烈風丸』を引き抜き斬りかかってきた。
すかさず回避行動を行い距離を置く。

「……一体どうゆうつもりですか？坂本美緒少佐」

「お前は口で言っても話さないだろう…だから」

坂本さんは刀先を此方に向け、

「模擬戦だ黒神！！私がお前に勝ったら全て正直に話してもらうぞ！！」

「……良いでしょう。だけど俺が勝ったらこれ以上余計な干渉はしないでください。これが俺の条件です」

坂本さんに鋭い視線と覇気を放ちながら言う。

「ああ。構わない」

「そうですか……発現」

”発現”と呟くと俺の手には一本の刀が握られた。
この刀は扶桑刀と形状はそっくりだが一つ大きな違いがある。
それは刀に刃が存在しないことだ。
そうこれは『不殺の刀』人を決して殺める事無い刀だ。
これなら…

「さてと…準備完了です。坂本美緒少佐」

「分かった…いくぞ！！黒神！！」

こうして真実を求める坂本と全てを隠し続ける上総との戦いが今始まった…。

第二十二話：坂本美緒の真実を求める戦い：前編（後書き）

次回は書いても恐らく結構短くなってしまうと思います。長く書けるように努力します。

第二十三話：坂本美緒の真実を求める戦い：後編（前書き）

第二十三話です。

第二十三話：坂本美緒の真実を求める戦い：後編

坂本美緒少佐…これまで数多くの戦いを経てきたベテランウィッチ。
部隊では現場での戦闘指揮官と、芳佳ら新人を鍛える教官を務める。
豪放磊落で気さくであり、高笑いする姿が印象的だ。マンツーマンの訓練は時に厳しく、周囲からは鬼教官とみられることもある。
しかし、それは部下や同僚を未熟なまま戦わせて失いたくない一心ゆえである。
そして俺はそんな人と現在…

「はっ！！」

「……」

真剣勝負ならぬ模擬戦を行っている。
何故こうなったか…原因は俺の所為だ。
一人で何者かと戦っている事を坂本さんに気付かれ、前回の様に誤魔化そうとしたが無駄だった。
正直に全てを話せと言われたが、話すわけにはいかず、それを拒んだ。
拒んだ瞬間坂本さんは、顔を伏せ拳を握りしめていた。
数秒して坂本さんは何かを決意したかのように、愛刀『烈風丸』を鞘から引き抜き斬りかかった。
斬りかかってきた理由を聞き要約すると”口で言っても無駄”という事だ。
そして坂本さんが出した条件…それは坂本さんが勝利したら正直に全てを話す。
逆に此方が勝利したら、これ以上無駄な干渉はしない。
どちらも絶対に負けることは許されない勝負。

だから今回ばかりは……本気だ。

「魔神連牙斬!!」

刀を抜刀し、地面を這う魔力の衝撃波を三発放つ。
衝撃波は勢い良く坂本さん向かう。
しかし、

「此方もだ!魔神連牙斬!!」

坂本さんも同じく三発の魔力の衝撃波を放つ。
地面を這う衝撃波は激しくぶつかり合い、威力が相殺される。
驚いた…この技まで習得したのか。

「次はこいつを喰らえ!蒼破追蓮!!」

次はネプトゥヌスとの戦闘で使用した蒼破刃の応用版…蒼破追連。
簡単に言えば魔力を凝縮した弾を二発放つ技。
この技は坂本さんには教えていない…これなら!

「甘い!」

「ッ!?」

坂本さんは俺の放った魔力の弾を避けず、その場で一刀両断される。
両断された魔弾は左右に飛び散り、攻撃の意味を果たさなくなる。

「まさか…ここまで」

烈風丸は刀身に術式が施してあり、刀自体がシールドの様なもので

あるため、ネウロイのビームも斬ることが出来るのだ。
魔弾を切り裂くなど簡単だろう…しかし驚くところはそこでは無い。
注目するところは魔弾を切り裂いた瞬間だ。
使用するウィッチの魔力を吸い取る諸刃の刀…烈風丸。
しかし坂本さんは制御困難な刀を自らの力で制御し、切り裂く瞬間だけ魔力を刀に纏わせ魔弾を切り裂いた…普通なら有り得ない。不可能だ。あのじゃじゃ馬を制御するなど…。

「私の番だ！裂壊桜！！」

「ッ……」

坂本さんは刀を突き立てて、前方に噴出させた衝撃波で攻撃する。
刀身に魔力を纏わせ衝撃波を防ぐ。
この攻撃師匠には劣るがかなりの威力を伴っている…強い。
初めの頃とは比べ物にならない程武力も魔力も格段に上がっている。
制御も上手い。
これが坂本さんの本気か…。
考えていると坂本さんが不意に口を開く。

「……黒神。どうしてお前は一人で戦おうとするんだ」

「……」

「私達は仲間だぞ…一人で何もかも背負おうとするな」

坂本さんが悲しそうな顔で言う。
止めてください坂本さん…そんな悲しい顔をしないでください…。
こっちまで悲しくなるじゃないですか…苦しくなるじゃないですか…。

「…ッ……それでも……それでも俺は！！」

刀を振り上げ坂本さんに斬りかかる。
刀同士が激しく鍔迫り合い火花が周囲に散る。

「クッ……お前はこれだけ言っても…一人で戦う道を選ぶのか…」

「選ぶんじゃありません…もう選んだんです！」

刀に力を込め烈風丸を弾く。
弾いた瞬間坂本さんに微かな隙が生まれた。
この瞬間を見逃すわけにはいかない。

「喰らい付け！烈震虎砲！！」

至近距離での烈震虎砲を放つ。
青い獅子が周りの砂を巻き上げ坂本さんに襲い掛かる。
この距離での烈震虎砲…当たれば一撃で倒せるはず。
しかし、

「このっ…烈震虎砲！！」

またしても坂本さんは同類の技を放つ。
獅子と獅子が互いを激しく喰らい付く。
その姿は例えるなら一つの縄張りを争い仲間同士なのにお互いを喰らい殺し合う猛獣だ。

「うおぉぉぉーーー！！」

叫びと共に烈震虎砲の威力を上昇させた。
すると獅子は、坂本さんの獅子の倍にまで膨れ上がる。
巨大な獅子から見れば、坂本さんの獅子は弱者と同じ。

「喰らい付けぇぇぇーーー！」

巨大な獅子は小さな獅子に容赦なく喰らい付く。
瞬間坂本さんの獅子は悲鳴と共に消え去る。
そして巨大な獅子は、そのまま眼の前の者に襲い掛かる。

「くっ！？うぐッ！！」

坂本さんは刀に魔力を纏わせ何とか防御するが獅子が大きすぎ防御は結局意味を果たさなくなる。
刀は弾かれ獅子は坂本さんにクリーンヒットする。

「あがッ！ぐッ…うぇッ」

坂本さんは口を押さえうずくまる。
それもそうだ…鳩尾に獅子が直撃したのだから。
自分の取り込んだものが逆流するのは当たり前だ。

「ぎっ…ふー…ふー…」

坂本さんは何とか耐え抜いたようだ。
しかし呼吸はまだ乱れたまま…もうこれ以上戦う必要は――

「はっ…はっ…ま、まだだ」

坂本さんは刀を杖に再び立ち上がる。

その目は”絶対に負けない”という闘志に満ち溢れた眼をしていた。

「どうして……どうしてそこまで…坂本さんは」

「どうして?…決まっているだろう…お前が大事な仲間だからだ!」

刀を一度鞘に収め坂本さんは居合いの形をとる。
この構えは……まさか!出来るのか!?あの技を!
刀と鞘で自分を守る形をとる。

「当たれ!葬刃!!」

技名を叫ぶと同時に刀を勢いよく抜刀する。
瞬間”見えない斬撃”が襲い掛かる。

「ぐっ!!」

何とか防御したが、葬刃の威力は凄まじく後ろへ吹き飛ばされた。
葬刃…ターゲットがどれだけ離れていても、その場から動くことなく一瞬で攻撃が届くという、恐るべき性能を誇る神速の居合術。
今まで坂本さんがやってきたけど一度も出来なかった技だ。
どうして…今になって出来るようになったんだ?
いや、それよりもあんな神速で居合いを行った坂本さんの腕は…

「……やはり」

坂本さんの腕からは出血していた。
葬刃を放つための神速は腕にとんでもない負荷をかける…筋肉細胞がそれに耐えきれずに破裂して…内出血が外にまで染み出す。
葬刃にはそんな大きなリスクがあるのだ。

「もう止めてください…これ以上は坂本さんが――――」

「…止めない。これは私から挑んだ戦いだ…勝手に投げ出すなど出来ない。…それに此処で止めたら…お前一人が救われないし傷つく。そんなのは……駄目だ」

「……ッ」

坂本さんはボロボロの体で言う。
呼吸も荒れている。
もう見たくない…こんな傷ついた坂本さんは…見たくない。
だから…終わらせる。
この戦いを…あの技で…。
戦いを傷つけることで終わりにすることを決意し坂本さんに一瞬で近づき、

「昇竜氷舞」

凍気を纏った回し蹴りを繰り出す。
狙いは足元…。
足に凍気を纏った蹴りを放つ。
すると見事に坂本さんの足は氷漬けにされた。

「くっ！」

何とか脱出を試みてるが氷はそんな簡単に砕けるものではない。
これで坂本さんは捕えた。
月を背後にゆっくりと刀を抜刀し――――

「閃く刃は勝利の証！」

一気に斬り刻む。

斬ると同時に綺麗な弦音と青い刀の軌道が描かれる。

弦音がするのは神速と言わんばかりの速度で刀を瞬間的、縦横無尽に辺りにある空気を斬り裂くため、美しく綺麗な弦音が奏でられる。

そして青い刀の軌道…これは背後に存在している月光。

刀を振るうと同時に月光を反射し、他者からは青い刀の軌道が見られる。

「白夜殲滅剣！」

そして最後。後ろから峰打ちでとどめを刺す。

「かっ…く…黒…神…」

坂本さんは俺の名を呼んだのを最後にゆっくりと膝から崩れ落ちた。

体は白夜殲滅剣を放ったためボロボロだった体がさらに傷ついている。

「……すみません。坂本さん」

冷たい夜風を肌に感じながら静かに呟いた…。

「はぁ……」

戦いの後坂本さんを治癒術で癒し自室へ運んだ。
運ぶ際背負った時坂本さんは、とても軽く小さかった。
こんな小さな女性を傷つけてしまった…。

「くそっ…」

横の壁を軽く殴る。
すると青色の宝石が光を発する。

（けっ、何悔しがってんだよ。もう遅いだろが）

「ネプトゥヌス…」

確かに…こいつの言うとおりだ。
悔しがっても時は戻らない。
傷つけたことには変わりない。
そこでネプトゥヌスに問いかける。

「なぁ…俺がやったこと…本当に正しいことなのか？」

（はぁ……お前は自分で決めたんじゃないのか）

「えっ…」

ネプトゥヌスの言ったことに言葉を止める。

（お前は自分で決めたから、やったんだろう）

「……」

（自分で選んだなら受け入れる…自分で決めるってのはそういうことだ）

そうだ……自分で決めたんだ。
決めたからやったんだ…それを受け入れないでどうする。

「有難う…ネプトゥヌス」

（はっ？何言ってんだお前…意味分かんねぇ）

ネプトゥヌスに礼を言い自室へ戻るため、ゆっくりと宿舎の廊下を歩き始めた…。

「ん……」

ゆっくりと……瞼を開く。
其処には夜空は広がっておらず見慣れている天井が視界に入った。

「此処は…私の…」

布団から体を起こし辺りを見回す。
此処は私の部屋だ。
どうして……？

「あっ…そうか…私は黒神に…」

負けたのか。
黒神と勝負をして私は…。

「くっ…」

突然悲しい気持ちに襲われた。
話してくれなかった…頼ってもらえなかった…救えなかった…。
そんな悲しみが体中を駆け廻る。

「うっ…うう…」

悲しみは、涙線にまで襲い掛かり涙が溢れた。
必死に止めようとしても涙は収まらない。
それどころか更に溢れてくる。
初めてかもしれない…こんなにも涙を流したのは…。
枕に顔を押さえつけ周りに聞こえない様に、声を押し殺しながら静かに泣いた…。

第二十三話：坂本美緒の真実を求める戦い：後編（後書き）

何とか更新出来ました。次回の更新は何時になるか分かりません。

第二十四話：複製（レプリカ）（前書き）

第二十四話です。夜中に仕上げたので誤字脱字が多いと思います。

第二十四話：複製（レプリカ）

――――朝。
太陽が少し顔を出し、ほんのりと明るくなっている空の下。
滑走路に一人で刀剣を振るう男がいる。

「ふー…」

俺はウォーミングアップを終え一息着く。
何時もならこの時間帯に坂本さんと模擬戦を行っている筈。
しかしあの夜の一件以来俺と坂本さんは模擬戦を行わなくなった。
会話も特別なこと以外は話さず、目も合わさない。
俺が目を合わすと坂本さんは目を逸らし何所か辛い表情をしていた。
勘の鋭いミーナ中佐やバルクホルンさんは俺達の事について聞いてきたが、俺は何でもないと答えた。
同時に同じ質問を中佐が坂本さんに問うと、坂本さんも俺と同じ答えを言った。

そして現在もミーナ中佐とバルクホルンさんは俺達に何かあったんじゃないかと疑っている。
ここは何としても気付かれない様に行動をしないといけない。
その為には…

「…もっと…強く」

そう…強く。
ローマ神話の神々達に一人で挑める強さ。
神話融合を完全に使いこなせる強さ。
関係の無いウィッチ達に被害を出さないための強さ。

「よし…出でよ俺の複製（レプリカ）」

俺は更なる”強さ”を求め自分の複製（レプリカ）を出現させる。
この複製（レプリカ）は攻撃、防御、魔法が全て俺と同じステータス。
完全なる複製（レプリカ）。
しかしこいつには俺とは大きな違いがある。
それは、

「クロ…カ…ミ…ガガッ…殺ス」

まともに言語機能が備わっていないこと。まるで壊れた機械人形みたいに話す。
そして攻撃的。現すたびに俺を殺そうとする。
毎回思うけど…気色悪いな。

「はぁ…来いよ。返り討ちにしてやる」

「コレヨリ…キキッ…お前ヲ……殺ス」

俺が軽い挑発をすると複製（レプリカ）は俺に襲い掛かる。

「くっ！」

自分で言うのはあれだけど…強い。
剣圧も、速度も、殺意も…何もかも。
手を抜いたら確実に負ける。
だから…手加減はしない！！

「焼き殺せ！魔王炎撃波！！」

抜刀し複製（レプリカ）に圧倒的な火力の炎を纏った刀剣で斬りかかる。
しかし、

「ゲンマ…ショウレッパ」

巨大な冷気と真空波を伴うX字斬りが、俺の魔王炎撃波の炎を打ち消す。

「マジかよ…」

「コチラモ…マオウエンゲキハ」

俺が驚いていると複製（レプリカ）が俺と同じ技を放つ。
その動きは先程の俺と全く同じ。

「うぐっ！！」

刀剣に魔力を纏わせ何とか炎を受け止める。
だが全てを受け止めることは流石に出来なかった。
炎は俺の左腕の一部を包み込む。

「ぐっ…はぁ…はぁ…くそっ」

肉は一部焼け焦げ辺りに異臭が漂う。
俺は複製（レプリカ）を見据える。
するとそいつは見下す様に気色悪い笑みを俺に向けてきた。
正直…超ムカツク。
俺は嫌いなんだ…あのような気色悪く、人を見下すような笑みが…
大嫌いなんだ。

「俺の複製（レプリカ）のくせに…本物（オリジナル）を見下しやがって…絶対潰す！」

「来イ…ギギッ…返リ討チ二…シテヤル」

「真似すんじゃねーーー！！」

刀と刀が激しく混じり合い静かな空に鉄の音が鳴り響く。

「俺ガ…殺ス…オリジナルニ…ナル」

「黙れ。複製（レプリカ）のお前が本物（オリジナル）になんてなれない！！」

怒号と共に脇腹に蹴りを入れる。
蹴りは見事に直撃し、複製（レプリカ）の骨が折れる感触が脚に伝わる。
これなら…

「ッ！？な、なんで…」

其処には蹴りを喰らったのに平然としている複製（レプリカ）が立っていた。
するとそいつは再び気色悪い笑みを浮かべ、

「砕ケロ…」

俺と同じく蹴りを脇腹に放つ。
威力はかなりのものだ。骨が…持って逝かれた。
こんな蹴りをこいつは耐えたのか…。

「いぎっ…はぁ…はぁ…」

俺は一旦距離を取り脇腹を手で押さえる。
感覚的には…2本位か。
片膝を着き脇腹を押えていると複製（レプリカ）がゆっくりと歩み寄ってきた。

「クロカミ…オリジナル…殺ス…殺ス」

俺への殺意が剥き出しになっている。
この状態はかなり危険だ。
天界での修行ならこの時点で師匠は複製（レプリカ）を殺す。
だけどこの世界には師匠は居ない。
だから止めることは俺にしか出来ない。
こいつに勝ったことは一度もないけど…一つだけ手がある。
確実に奴を束縛することが出来る技が…だからもっと俺に近付け。
疑い無く近づいて来い！

「ドウシタ…諦メタカ」

「……」

複製（レプリカ）は嘲笑い、本物（オリジナル）である上総は黙ったまま。

「応エナイカ…死ネ…オリジナル」

「……ふふふ。逆だぜ…複製（レプリカ）」

オレが刀剣を振りかぶると突然本物（オリジナル）が笑いだし、意味の分からないことを言い始めた。
コイツ…自らの危機に恐怖し頭がおかしくなったのか？
まぁいい…本物（オリジナル）の遺言を聞いてやるか…。

「ソレハ…遺言カ？」

「違う…勝利宣言だ。複製（レプリカ）！」

俺はそう言うと滑走路に手を着け、複製（レプリカ）の真下に魔法陣を出現させる。

「清き光よ…その者を束縛しろ！光の鎖（ホーリィー・チェーン）！」

すると魔法陣から光で構築された鎖が放たれ、その者を束縛し動きを封じ込めた。

「ナンダコレハ……外レナイ……壊レナイ…」

複製（レプリカ）は激しく体を動かし光の鎖（ホーリィー・チェーン）から逃れようとする。

しかしこれは光子を凝縮し構築された光の鎖。そんな簡単に壊れはしない。

「止めだ…複製（レプリカ）！」

俺は刀剣に水色の魔力を纏わせ、

「未来へ託す永劫の剣…貫け！」

言葉と同時に神速の突き、刀剣を掲げ渾身の一閃、一閃から繋ぐ斬り上げを放ち、斬り上げられた対象物を魔力を込めた拳で殴り付け、最後――――跳躍を兼ね対象物を破壊する…。

斬空天翔剣――――言葉を一字叫ぶごとに強力な一撃を繰り出す…受けたら最後、その対象物が破壊されるまで繋がれる英雄の技…。

「痛イ…暗イ…深イ…俺ハ…死ヌノ…カ」

複製（レプリカ）はゆっくりと倒れ込み、そして光の粒子となってこの世から消滅する。

「はぁ…はぁ…何とか勝てたな」

俺はその場で仰向けになり一時休憩を行う。

空は先程と比べると明るくなっていた。

すると薄緑色の宝石が光を発する。

（大丈夫ですか？黒神　上総…苦戦していたようですが…）

「メリクリウスか…大丈夫だこれ位」

（そうですか…ではお気を付けて）

「……何にだ？」

（力を求めすぎることに……）

少し強めな口調で俺に言うと薄緑色の宝石は光を閉ざした。

そしてメリクリウスが言った最後の言葉について考える。

「……力を求めすぎること、か」

昔も師匠に言われたな。

力を求めすぎるなと。自分が何者なのか分からなくなるから…。

「分かってるさ…その位…俺にだって」

分かる。
俺にでも力の求めすぎは危険だと理解出来る。
だけど…だけど今は力が欲しい。
勝利する力や守る力など全ての力を…。

「はぁ……そろそろ戻るか」

俺はゆっくりと体を起こし立ち上がる。
すると数メートル横に誰かが居るのに気付く。
この感覚は…

「どうしたんですか……坂本さん」

俺は体を横に向け坂本さんに問う。

「いや…その…」

すると坂本さんはどこか話しにくそうな表情をする。
恐らく…

「坂本さん…もう一回言っときますけど、無駄な干渉はしないでください」

「ッ……」

図星か。
聞こうとしたんだろうな…だけど約束は絶対守って貰わないと困る。
だから俺は少し強めな口調で言った。

「……俺は先に戻ってますね」

俺は坂本さんから目を離し基地へと向かった…。

「駄目か…」

私は黒神の後ろ姿を見ながら呟く。
なにが駄目だったかと言うと…聞けなかった。
あの事を…真実を。

「くそっ…」

私は悔しくなり拳を思いっ切り握り締める。
爪が肉にめり込み少量の血が手のひらから流れる。

「……痛いな」

握りしめている手を開く。
爪がめり込んだ所からは静かに血が流れている。
私はその手のひらを見た後、今度は軽く拳を握りしめた…。

「あっ…おはようございます。エイラさん」

「おはよ〜。黒神」

一旦自室に戻るため宿舎の廊下を歩いているとエイラさんを発見し挨拶を交わした。
この時間に彼女が起きているのは珍しい。
聞いてみるか。

「珍しいですね。この時間に起きてるなんて」

「ちょっと目が覚めちまってな～」

エイラさんは笑いながら頭を掻き答えた。
すると何か気付いたのか俺の事を見てくる。

「お前どうしたんだ?その服、ボロボロだぞ」

「服?…ああ、さっき朝練をしてたら失敗しまして」

先程の複製(レプリカ)との戦闘で服はボロボロになり使い物にならない物になっていた。
今まで気付かなかった…危ない危ない。

「ふ～ん。気を付けろよな～」

「了解」

俺は軽く敬礼をした後再び自室へと歩みを進めた…。

「……占ってみるか」

黒神が自室へ歩いて言った後ポケットからタロットを取りだした。
これから占いをするのだ。
特にこれと言った理由は無い。
ただ何となくだ。何となく占いをしたくなった。
黒神の事を占ってみたくなった。

タロットを素早くシャッフルしカードを引いてみる。
すると、

「塔の正位置…」

正位置の『塔』は、困難や苦しい状況を人に与え、そしてその状態の自然な結果として、物事を崩壊させていく。
そこにたどり着くまでには、人と人と争いや感情的なやり取りももたらす。

「…あまり良くないな」

念の為もう一度シャッフルをしタロットを引くとまたしても、

「また塔の正位置…」

私は塔が描かれたタロットを見つめる。
普通ならこんなことは起こらない。
そう…普通なら。

「あいつ……一体何を隠しているんだ?」

黒神が歩いて行った宿舎の廊下を見ながら静かに呟いた…。

第二十四話：複製（レプリカ）（後書き）

次回は…恐らく一週間後に更新したいと考えております。

第二十五話：エースの洞察力（前書き）

第二十五話です。尚深夜投稿なので後半がかなり雑です。

第二十五話：エースの洞察力

「～～～～～♪」

――――午後。

今日やることは大体終えた為、俺は鼻歌を歌いながら基地の中をぶらぶらと歩いている。

俗に言う…暇人だ。

（おい…黒神…）

「ん？何だネプトゥヌス」

ネプトゥヌスは静かな声で俺に話しかける。

何時もは汚い言葉を使い、日々メリクリウスに弄られたことを数時間ほど語ってくる。

そのたびに何故か”お前が悪い”と理不尽なことを言われ、結局俺が怒られる羽目になる。

これが日常でのネプトゥヌス。

しかし今回は何か違う…少しキレている様な感じだ…。

（てめぇ…何呑気に鼻歌なんか歌ってんだ…）

「……」

俺は何も言わずネプトゥヌスの言葉を待つ。

（てめぇが馬鹿みたいに歌っている間に俺達の仲間は、お前を確実にこの世界から消去する手段を綿密な計算で考え出してんだよ…な

のにてめぇは……）

「ふっ…もしかして心配してるのか？」

口元を少し歪め意地悪な声でネプトゥヌスに問う。
すると青色の宝石が激しく発光する。
これは確か…焦り……だったか？

（はぁ！？馬鹿かてめぇは！！この俺が心配なんかするか！！）

焦り？を孕んだ言葉を最後にネプトゥヌスは光を閉ざし元の宝石へと戻った。
戻ったのを確認すると腕輪がある右腕を自分の視線の高さまで上げ、

「……お前の言う通りかもな…ネプトゥヌス」

静かに呟く。

「俺は少し…呑気になり過ぎたか」

ズボンのポケットに手を突っ込み再び基地の中をゆっくりと歩き始めた…。

――――――腕輪内――――――

「ちっ…あの馬鹿が」

戻って来た途端ネプトゥヌスは舌打ちをし文句を言い始めた。
また黒神　上総と何かあった様に見えますが…様子が何時もと違いますね。
弄りも兼ねて聞いてみますか。

「どうしたのですか？ネプトゥヌス」

「ん？ああ…ちょっとな」

珍しいですね…彼(ネプトゥヌス)が浮かぬ顔をするなんて…。

「心配なのですか…黒神　上総の事が」

「はぁ？そんな訳……いや心配なのかもな」

ほぅ…これは凄いですね。
人間嫌いの彼(ネプトゥヌス)が心配するなんて…。
況してや自分が敗北した人間に…。

「初めてですね…貴方が自分の仲間以外に気にかけるなんて行動は…驚きですよ」

「けっ…俺だって驚いてるさ。自分の変化にな…」

ネプトゥヌスは今だに浮かぬ顔のままで私に答えた。
これは弄るより話を聞いた方が楽しそうですね。

「それでも心配なんだよ…あいつの事が」

「……何故」

「何故か……分からねーよ。ただ…」

「ただ？」

「あいつは俺の見てきた人間で一番興味深い人間だ…簡単に死なれたら困るだよ。ただ…それだけだ」

ネプトゥヌスは少し頬笑みながら答える。
彼の頬笑み（ネプトゥヌス）を見るのも久しぶりですね。
これは良い収穫です。

「ふふふっ……」

私の口からは自然と笑みが零れる。
ネプトゥヌスはそれを見逃さない。

「おいメリクリウス。てめぇ何笑ってんだ…」

「何でもありませんよ…ふふふっ」

「この野郎…メリクリウス！！」

私が笑ったことにネプトゥヌスは拳を握りしめ怒り始めた。
黒神　上総…貴方は本当に興味深い人間ですよ…。

――――――腕輪内　ｏｕｔ――――――

「ふぁ……ん？」

俺は欠伸をしながら宿舎の廊下を歩いていると、正面から食糧が入った布袋を重たそうに持った少女がふらふらと此方に向かってくる。

「あれは…リーネか？」

顔が布袋に隠れ見えないが、歩くたびに揺れるみつ編みを見る限り、あれはリーネだと判断できる。

しっかし…危なっかしいな。

前が見えないのかな？大変そうだな…。

「よし…手伝ってやるか」

俺は正面からふらふらと歩いてくるリーネに近づいた…。

「ううっ…重い」

私は食糧が減っていることに気付き、補充のため食糧庫から必要な物を布袋に入れて再び食堂へと向かっている。

しかし、大きな問題があることに気付いた。

そう…この食糧が入った布袋は一人で持つにはとても重いのだ。

何時もなら芳佳ちゃんと一緒に食堂にまで持って行くんだけど、今日は食堂に居たのは私一人だった為仕方なく一人で補充することに決めた。

それが今の状況に繋がる。

「はぁ…はぁ…」

私はふらつきながらも一歩ずつゆっくりと食堂へ向かった。
食堂まではあと少し…頑張れ私！
そんなことを思いながら歩いていると急に手に掛かっていた重さが軽くなった。
もとより布袋を誰かが持ってくれている…誰だろう？
私は首を少し上げ布袋を持ってくれている人に視線を向ける。
そこには、

「大丈夫？リーネ」

重たい食糧の入った布袋を軽々と持っている上総さんが居た。

「か、上総しゃん／／／／！？」

私はいきなりの事で驚き、思わず噛んでしまった。
は、恥ずかしい／／／
も、もしかして聞かれちゃったのかな…？

「〝しゃん〟？〝さん〟の間違えじゃないの？」

やっぱり聞かれてた…恥ずかしいよぉ…。
とにかくこの話題からそれないと。

「そ、それよりも、どうして上総さんが此処に？」

「ちょっと散歩を兼ねて基地を歩いていたんだよ。そしたら荷物を持つリーネを見つけてね」

上総さんは優しい笑みを浮かべながら言った。
優しい笑みを見た瞬間私の鼓動は先程より速くなる。
顔も熱くなっているのもハッキリと分かる。
この気持ちは一体……。

「どうしたのリーネ？顔真っ赤だよ？」

「えっ…あの…これは…その／／／」

「もしかして熱？ちょっとおでこ出して」

そう言うと上総さんは片手で食糧の入った布袋を持ちもう片方で私の前髪を掻き上げた。

「な、何を／／／」

「ジッとして」

上総さんの顔が徐々に近づいてくる。
そのたびに私の心臓の鼓動は速くなり、さらに顔が熱くなる。
数秒後、私の額と上総さんの額がくっ付いた。

「ふぁ…／／／」

お互いの鼻と鼻が軽くぶつかる。
上総さんは目を閉じ体温を額から測っている。
それとは逆に私は恥ずかしさで目を見開いている。
そして数秒後、上総さんの額が私の額から離れた。

「う〜ん…熱は無いようだ……ってどうしたんだリーネ？」

俺はリーネに問いかける。

何故なら呼吸が乱れ、顔も先程と変わらずに赤く染め、ボ〜ッとしているからだ。

「おいリーネ…大丈夫か？」

リーネの肩に軽く手を置く。

すると、

「あっ…えっ…そ、その…御免なさい／／／！！！」

我に返った途端リーネは何故か俺に頭を下げ、猛スピードで何処かへ行ってしまった。

「俺…何か悪いことしたのかな？」

何故か申し訳ない気持ちになりながら食糧の入った布袋を新たに持ち直し、食堂へ向かった…。

「あっ…シャーリーさんだ」

食糧をリーネの代わりに補充した後再び基地の中をぶらぶらしている。

そしてたどり着いたのはウィッチ達のストライカーが収容されているハンガー。

そこには自らのストライカー［Ｐ－５１］を改造しているシャーリーさんが居た。

「こんにちわ。シャーリーさん」

俺はストライカーを改造しているシャーリーさんに近づき挨拶をする。
するとシャーリーさんは気付き此方に振り返る。

「黒神か…どうしたんだ？こんな処に来て」

「散歩ですよ。それより俺も見学させて貰っても構いませんか？」

「あ、ああ。いいぞ」

ストライカーの見学を申し込むと何故か頬を赤くしながら承諾してくれた。

「じゃあ…お隣失礼します」

俺はシャーリーさんの隣に腰を降ろした後改造の光景をジッと見つめた。
かなり手際が良いな。慣れているんだな。
眺めているとあることに気がつく。
それはシャーリーさんが自分のストライカーを改造しながら、此方の事をチラチラと見ている。
確かこんなこと…前にもあったな。

ネプトゥヌスを倒した後の朝食の時。
バルクホルンさんと同様にシャーリーさんも俺の事をチラチラと見

ていた。
それと同じことが現在起こっている。
結局何で俺の事を見ているのだろうか…気になる。
直接聞くか…。

「シャーリーさん。あの」

「お、おう。な、何だ」

シャーリーさんは何故か恥ずかしそうな面持ちで答える。

「先程から俺の事を見ているようですが…何か俺の顔に着いているのですか？」

「いや。そんなことは無いぞ。た、ただ…」

「ただ…？」

俺は首を傾げて次の言葉を待つ。
しかし、

「……や、やっぱり何でもない／／／／！！」

少し考えた様な素振りを見せたが、結局あのときみたいに答えてはくれなかった。
そして正面を向き再びストライカーの改造を始めた。
今度こそは真実を知りたい……超気になるから。
もう少し粘ってみるか。
そう思いシャーリーさんに更に近づき問いかける。

「良いじゃないですか。教えてくださっても」

「だ、駄目だ駄目だ！教えるなんて出来ない…絶対に／／／！！」

顔を赤くし”絶対”という言葉を強調してきた。
そんなに言えないことなのか…ますます気になってくる。

「何でですか？俺超気になるんですけど」

「だから気にすんな――――いてっ」

シャーリーさんが小さな声で呟く。

「どうかなされたんですか？」

「ああ…さっきストライカーに向き直った時手が当たって軽く擦り剥けただけだ」

手の甲を見せながら言う。
出血はあまりないが、傷が結構目立つようになっている。

「大変…俺が治しますよ」

「えっ？いや、いいよ。ほっとけばそのうちに治るだろう」

「駄目ですよ。ほら」

「あっ…／／／」

俺はそう言うと怪我している方の手を掴み自分の所まで引っ張った。

するとシャーリーさんは顔を更に赤くし、大人しくなった。

「動かないでくださいね」

「あ、ああ／／／」

左手で怪我をしている手を支え、右手で傷のあるところに軽く触れる。

そして、

「癒しの光を、その者を癒したまえ…ファースト・エイド」

治癒魔法を唱える。

すると怪我をしている手が金色の綺麗な光に包まれる。

数秒後、金色の光が静かに弾け飛ぶ。

シャーリーさんの傷があった手の甲を見てみると傷は綺麗に治癒されており、傷が全く見当たらなかった。

「ふぅ…これで良し」

「有難う…黒神」

「気にしないでください…さて俺はそろそろ自室へ戻らせて頂きますね」

俺は軽くお辞儀をした後ハンガーを出て、自室へと戻った…。

「……」

黒神がハンガーを出で行った後、私はストライカーを弄るのは止め治癒魔法で治して貰った手の甲を見つめた。

「あいつの手…暖かかったな」

先程黒神に手を握られた時あいつの手はとても暖かかった。
とても安心感がある様な…そんな感じだ。
それともう一つ。
手を握られたときだ。
あの時黒神に手を握られた時、とてもドキッとした。
決して悪い意味では無い。むしろ嬉しい様な心地良い様な…。

「やっぱり私…あいつの事が…」

――――――夜。
俺はベットに身を預け見慣れている天井を只ジッと見つめている。
そして数分間、天井を見つめた後寝ようと思い瞼をゆっくりと閉じる。
その時ドアが軽くニ回ノックされた。

「どうぞ…」

「失礼するよ～」

ノックの正体はこの部隊のエースである通称［黒い悪魔］…エーリ

カ・ハルトマン中尉。

「どうかなされたんですか？」

「まぁ…ちょっとね」

ハルトマンさんはそう言いながらベットに腰を下ろす。
俺も上半身を起こしベットに座る形をとる。
軽い沈黙が流れる。
そして先に口を開いたのはハルトマンさんだ。

「ねぇ上総。少佐と何かあったの？」

「……いいえ。何もありませんよ」

ハルトマンさんは問い詰める様に聞いてくる。
驚いた…まさかこの人が気付くなんて。
常に眠たそうで気だるい感じの振る舞いをしている人なのに…鋭い人だ。
俺は少し沈黙した後ハルトマンさんの問いについて答えた。
”何もない”と…。
すると、

「嘘だよ」

迷いがない声色で答える。

「上総…今嘘ついたね」

「……どうしてですか？」

俺はハルトマンさんに静かな声で問いかける。

「少佐…上総が来てから毎日をとても楽しそうにしてた。笑顔も…前と比べると増えた。だけど突然少佐から笑顔が消えたんだよ。それに上総の顔を見る度に何時も辛そうな表情を浮かべてるの。あれ程悲しい表情を浮かべる少佐…私見たことないよ」

「……」

「ねぇ上総、正直に答えて。少佐と何があったのか…」

ハルトマンさんは真剣な表情と視線で俺に問う。

「……答えはさっきと同じですよ。何もありませんよ…坂本少佐とは何も…」

「……じゃあその腕輪が関係しているの？」

「えっ…？」

いきなりの腕輪の指摘に俺は驚いた。

どうして…ハルトマンさん腕輪の事を聞いてくるんだ…。

「腕輪に収まっている宝石…一個増えてる」

「……」

「そしてその腕輪を上総が手にしたのは、滑走路で何かと戦ったあとだよね？」

「ッ！！」

鋭い…鋭すぎる。
何でこんな的確に答えるんだ…この人は。
流石にこれ以上は…不味い。

「上総は一体な――――――」

「ハルトマンさん……出で行ってください。もうこれ以上話す意味がありません」

俺はこれ以上不味いと思い、強い口調でハルトマンさんの言葉を遮った。
瞬間ハルトマンさんの表情は曇り、悔しさや怒りの表情が現れる。
そして再び軽い沈黙流れる。
数秒してハルトマンさんはベットから腰を上げ、扉の方へ歩いて行く。
ドアノブに手を掛ける直前此方に振り返り、

「……上総の馬鹿」

怒りを小さく凝縮した声で俺に言う。

ハルトマンさんが出で行った後、再びベットに体を預ける。

「馬鹿、か……」

最後の言葉について考える。

「馬鹿でも構わないさ…俺は５０１のみんなを守れれば…どんな馬鹿でも」

そして俺は呟いた後、瞼をゆっくりと閉じ深い眠りに落ちた…。

第二十五話：エースの洞察力（後書き）

バルクホルンと宮藤の話は何時か作りたいと思います。と言っても結構先です…。

第二十六話：速過ぎる襲来（前書き）

第二十六話です。

第二十六話：速過ぎる襲来

「フー…フー…」

人の疲労を露わす息切れ。
その息切れの正体は一人の男から。
男は髪と瞳が緑色に変化し、手中に風を凝縮し保持している。

「くっ…荒れ狂う風の牙と為れ…」

男が詠唱を行うと手中の風は半円状の形に形成される。
そして創り上げられた風の”牙”を下から上へ振り上げる要領で、

「Ｌｅｖｉａｔｈａｎ！！」

海に放つ。
放たれた”牙”は轟音と共に海を斬り裂き巨大な水飛沫を上げる。

「はあっ…はっ……はぁ」

俺は片膝を着き海を見る。
そこには先程の”牙”は消えており、海は元の静かなものに戻っていた。

「ちっ…駄目か」

額から滝のように流れる汗を拭いながら呟く。
朝から小一時間ほど”神話融合”を行っているため体の限界が近い。
だけど…簡単に諦める訳にはいかない。

（黒神　上総。そろそろ止めた方が良いと思いますよ…）

メリクリウスは忠告を促してくる。

しかし、

「……これから訪れる神々達は遥かに強い。前回の戦闘もお前の”力”が存在しなかったら俺は確実に殺されてた」

（……）

「恐らく次の戦闘もお前達の”力”が必要になる。その為には…この風をモミ消されない”神”を斬り裂く”牙”を…」

――――一発…！！

神との戦闘で馬鹿みたい何回も技を使う必要は無い…。

たった一回でいい…！！

ただ一回であらゆる神を殲滅する必殺の”牙”をこの手に！！

俺は立ち上がり再び風を手中に凝縮させ、海に向けて”牙”を放った…。

――――腕輪内――――

「……けっ」

俺は腕を頭の所で組み、黒神の様子を横になりながら眺めている。

現在黒神はメリクリウスとの”神話融合”を行っているようだ。
力の使い方は…普通だな。
修行の様子を見ていると、一つあることに気付く。

「あいつ……焦ってるな」

黒神の様子…一般人から見れば普通だが、俺から見れば焦っている様に感じる。
恐らく原因は…

「あの魔女(ウィッチ)か…」

二人の魔女(ウィッチ)の顔が浮かぶ。
一人は戦いを挑んだ眼帯女。
そしてもう一人は鋭い洞察力を持つ金髪貧乳女。
あの二人が原因で黒神は焦り、無理に”神話融合”を続けようとしている。

「これだから魔女(ウィッチ)は……」

俺は溜め息を吐きその場で目を閉じた…。

――――腕輪内　ｏｕｔ――――

「……くっ」

俺はベットから体を起こし頭を振るう。

朝の修行を終え朝食を食べた後、体を休めるため素早く自室に戻った。
戻る際、坂本さんとハルトマンさんが視線を向けてきたが、俺はその視線に全く気付いていない素振りを見せ食堂を出た。
あの二人が他のウィッチ達に話して無ければ良いが…。
俺はそんな不安を感じながら体の様子を調べた。

「治癒術じゃ治らないか…」

”神話融合”を行うと肉体的疲労及び精神的疲労が体に一気に負荷として掛かる。
そしてその負荷を直すには治癒術を行うのでは無く、只普通に睡眠で直すことしか出来ない。
メリクリウスに更に詳しい理由を聞いた所、”神話融合”行う際俺の身体全身にその融合する神の魔力を一時的に流すため、その身体に残っている魔力がプロテクトとなり俺の治癒術がごく少量しか通用しない。
しかし時間が経つと神の魔力は身体から自然と抜けて行き、元の俺の身体に戻る。
その時に睡眠を行うと、神の魔力が身体から抜けるのを促進させるのだ。

「便利なのか不便なのか……分かんねぇな」

俺は手を大きく広げベットに身を預け睡眠を摂ろうとした。
しかし、

「ッ！？ま、まさか……もう…」

あの視線を感じ取った。

三体目…速い。幾等なんでも速過ぎる…。
ネプトゥヌスが襲来してまだ数日しか経っていないのに…何故？

「ッ…くそっ！！」

俺はベットから飛び起き自室から飛び出す。
急いで視線の居場所まで走る。
その際メリクリウスに速過ぎる襲来について問いかける。

「おい、メリクリウス！！幾等なんでも速過ぎないかっ！！」

（……恐らく焦っているのでしょう。私達の仲間も…）

「でも何で今日なんだよ！！畜生！！」

焦りが身体を駆け廻る。
今日は流石に来て欲しく無かった…。
理由は簡単。今朝の”神話融合”で身体が思うように動かないのだ。
恐らく武術と魔法は全力で６０％～７０％まで、天使化も全力でも５０％。
そして”神話融合”は…出来たとしても制限時間は五分間。

「耐えられるか…俺の身体は」

俺は自身の身体の限界を心配しながら視線を向けてくる者へ向かった…。

「大丈夫かな…上総さん」

「ちょっと心配だね…」

私とリーネちゃんは上総さんの事が気になり部屋に向かっている。
朝食に見かけた上総さんの表情は何処か疲れた感じだった。
そんな表情を見て私とリーネちゃんは心配になり、後で一緒に様子を見に行こうと決めたのだ。
それと話は少し変わるけど、一つ気になることがある。

「どうしたのリーネちゃん？顔が少し赤いよ？」

「えっ！？そ、そうかなぁ？」

リーネちゃんの様子が最近おかしいのだ。
上総さんと話す度に顔が赤くなり、恥ずかしそうな表情をする。
もしかして…リーネちゃんも上総さんの事が…。
私がもやもやした気持ちでいると、

「あっ…上総さんだ」

「本当だ」

正面から上総さんが走って来た。
でも様子が少しおかしい。
何か…急いでいるような感じだ。

「上総さん。大丈夫で――――――」

「芳佳ごめん！話は後で聞くから！」

そう言うと上総さんは私とリーネちゃんの横を走って通り過ぎる。

「どうしたんだろう…何かあったのかな？」

「うん…焦ってたね…」

私は走り去っていく上総さんの背中を不安な面持ちで見つめた…。

「はぁっ…は…何処だ」

俺は何時も坂本さんと模擬戦を行っていた場所に辿り着く。
辺りはには何も居らず、あるのは岩や木などの自然物のみ。
しかし視線は確実に此処から感じる。

「隠れて無いで出て――――――ッ！？」

瞬間俺の正面に橙色の炎が現れる。
危険だと感じ取りすかさず後方へ回避行動を行う。

「今の炎は…えっ？」

俺は驚愕した。
何故なら先程の炎が、かなりの遠距離に存在していたからだ。
さっき俺が回行動を行った距離は２ｍ。
しかし現在の炎との距離は６ｍ前後。

「どうして…あんな距離に――――――ッ！？」

今度は先程の炎が俺の背後に現れた。
これは…転移魔法の一種か？

「ちっ！消えろ！」

俺は刀剣を発現させ背後の炎を切り裂く。
しかしまたしても転移を行う。
厄介な炎だな。
そんな事を思っていると今度は紫色の炎が何処からか放たれる。
大きさは約一尺（３０ｃｍ）の火の玉…この程度の炎なら…。
俺は向かってくる紫色の炎を刀剣を振るい斬り裂こうとする。
しかし炎は俺に直撃という行動はせずに、只通り過ぎるだけだった。

「何だ今の炎は…あれ？」

俺はあることに気付く。
刀剣が無くなっている。
先程まで確りと握りしめていたのに…どうして？
驚きを隠せない状況で居ると森の方向から、

「己が欲する物はこれか？」

一人の男が俺の刀剣を持ちながら現れる。
容姿は炎髪灼眼。
服装…あれは武士だな。
年齢は見る感じ４０代半ばだろうか…。

「あんたは……火の神・ウルカヌス」

「我を存じている様だな」

「ああ…それよりも俺の刀剣を返せよ」

俺は手を伸ばし火の神を見据えながら刀剣を返すようにと促す。
しかし、

「己の願い…断る」

青い炎がウルカヌスの手中から現れ刀剣を溶かし始めた。
ゆっくりと鉄が溶けていく。
ポタポタと音を鳴らしながら地面に落ちる。

「今の炎は……まさか鬼火か？」

俺は先程現れた炎と現在現れている炎の情報を連結させ一つの答えに辿り着く。
それは、

「如何にも…これは怪火の一種だ」

「やはり…そうだと思ったぜ」

怪火…それは原因不明の火が現れる怪異現象の事だ。

「お前が先程放った炎…遊火、姥々火、鬼火だな」

「如何にも……」

遊火…すぐ近くに現れたかと思えば遠くに飛び去ったり、また一つの炎が幾つにも分裂したかと思えば、再び一つにまとまったりする。危害を及ぼす事の無い炎。

姥々火…大きさは約一尺（３０ｃｍ）の火の玉であり、この火の玉が飛び回る光景を目にしたものは、一人残らず驚かずにいられない。その正体はある老女の死後の亡霊とされ、生前に灯油を盗んだ祟りで怪火になったと言われる。

そして鬼火…日本各地に伝わる怪火の事である。伝承上では一般に、人間や動物の死体から生じた霊、もしくは人間の怨念が火となって現れた姿と言われる。

「ちっ…怪火を操るのか……本当に厄介な奴だ」

「我…己の死を所望する」

ウルカヌスは静かな声で俺の死を望んだ。

「……逆だ。俺がお前の死を所望する！」

俺は再び刀剣を発現させる。

そしてその刀剣を目の前の敵（ウルカヌス）に向け、不適な笑みを伴いながら言い放つ。

するとウルカヌスも火で構築された炎剣を発現させる。

戦闘準備完了な訳か…。

「ふっ…行くぞ！！火の神・ウルカヌス！！」

「我…参る！！！」

今此処で火を掌る神との戦闘が開始された……。

第二十六話：速過ぎる襲来（後書き）

次話は恐らく出来たら一週間後に更新したいと思います。

第二十七話：怪火（前書き）

第二十七話。テスト期間中に仕上げました。

第二十七話：怪火

火…熱と光を出す現象。
化学的には物質の燃焼に伴って発生する現象、或いは燃焼の一部と考えられている現象であり、物質の急激な酸化である。
熱や光と共に様々な化学物質も生成する。気体が燃焼することによって発生する激しいものは炎と呼ばれる。
煙が熱と光を持った形態で、気体の示す一つの姿であり、気体がイオン化してプラズマを生じている状態である。
燃焼している物質の種類や含有している物質により、炎の色や強さが変化する。

火は火災を引き起こし、燃焼によって人間が物的損害を被る事がある。また、世界的な生態系にも影響する重要なプロセスである。
火はある面では生態系を維持し、生物の生長を促す効果を持つ。
人類は調理、暖房、合図、動力源として火を利用してきた。また、火は水質・土壌・大気などを汚染する原因という側面もある。
そして俺はその火を自由自在に操る者と激戦を繰り広げている。

「当たれッ…！」

刀剣に耐熱魔力を纏わせウルカヌスの腹部目掛けて横に薙ぎ払う。
しかし目の前の者は動じない。一切その場から回避行動を取る様子も見受けられない。
即ち余裕…俺の攻撃が通じない。当たらない。無力などの余裕を全身から醸し出している。

「その攻撃…あだなり」

瞬間ウルカヌスの手中から青い火が現れる。
火は耐熱魔力を纏っている刀剣を包み込む。
包み込まれた刀剣はどろどろと溶け始める。

「鬼火…」

「ッ！！くそっ！！」

俺が驚愕しているとウルカヌスのもう一方の手から鬼火が現れる。
危険を感じ取り、使い物にならなくった刀剣を手から離し、素早く後方へ回避する。
回避の直後に俺が先程居た所に鬼火の拳が放たれた。
すると爆発音と共に砂が焼け焦げる。

「耐熱魔力が通じないのか…本当に厄介だ」

耐熱魔力とは名の通り熱を遮断する魔力を纏わせる技。
これは火球を切り裂いたり等に利用される事が多い。
しかしその耐熱魔力は目の前の者には全く効力が発揮されなかった。
これが火の神・ウルカヌスの力…。

「…叢原火」

今度は紫色の火が放たれる。
火の速度は速くは無い。
これなら余裕で斬り裂くことが可能だ。
再度刀剣を発現させ向かってくる炎を斬り裂こうと近づいた瞬間、
緑色の宝石が激しく光を発する。

（黒神　上総！！その火に近づいては駄目です！！全てを喰い尽く

されてしまいます！！）

「はっ、何をいっ――――――ッ！？」

メリクリウスは忠告をしてくるが俺には何故そんな事を言うのか理解できなかった。

俺は火を見つめた瞬間メリクリウスの言ったことを理解する。

瞼を強く閉じ近くの岩場の頂上に回避行動を行う。

「はっ…はあっ…っく…理解したぜメリクリウス…」

（全く…忠告は確りと聞いた方が宜しいですよ）

「ああ…お前の言うとおりだ」

額からは冷や汗が流れる。

恐らくあの火は叢原火…。

叢原火とは盗みを働いた僧侶が仏罰で鬼火になったものとされ、火の中には僧の苦悶の顔が浮かび上がっている。

俺はその火の中に存在している僧侶の苦悶の顔を見てしまった。

見たと同時に俺の精神は僧侶の様な苦しみに襲われた。

あの火が齎す効果は…

「精神破壊か…」

「如何にも…」

俺の言った回答にウルカヌスが腕を組みながら頷く。

「まさか…そんな怪火まで扱うとはな…流石火の神だな」

「……鬼火」

不適な笑みを浮かべるとウルカヌスが鬼火を火球にしたものを五発俺に向けて放つ。
すかさず岩場から跳躍し鬼火を回避する。
火球の二発が上空に飛んでいき、残りの三発が岩に直撃する。
直撃した火は岩を砕き、その飛び散った破片を燃やし尽くす。

「全く…何て威力だよ」

今だ俺目掛けて放たれる鬼火を回避しながら呟く。
そんな中ウルカヌスの不審な行動に気付く。

「……態(わざ)と外している？」

そう…先程から鬼火の一部を態と外している。
地面の所々に青い炎が燃え盛る。
何の意味があるんだ…只の魔力の消費を促すだけなのに…。
分からない……こいつの真意が分からない。

「蓑火…」

鬼火と同時に蛍の光の様な火が放たれる。

「くっ…！」

急に軽い目眩が襲い掛かる。
何とか鬼火は回避できたが、向かってくるもう一方の火は回避不可能。

やはり斬り裂くしか方法が…。

「出来るか…！」

俺は刀剣に耐熱魔力を纏わせ向かってくる火を斬り裂く。
すると火はあっさりと斬れた。

「斬れ――――えっ」

目の前に起きている光景に驚愕した。
何故なら火が増加しているからだ。
先程の火が半分になって今は二つの火になっている。
それともう一つ…攻撃をしてこない。
只そこに居るだけの存在。

「こんな火…何の意味があるんだ！」

更に火を斬り裂くが、只一歩的に増えるだけ。
斬っても駄目ならやることは一つ…。

「吹き飛ばすだけだ！！」

俺は自身の真下に魔法陣を発生させる。
魔法陣の色彩は緑…即ち風の魔法。

「全てを吹き飛ばせ…アリーヴェデルチ！！」

詠唱を行い魔法名を叫ぶと、荒々しい風が魔法陣から発生する。
火はその風で遥か上空に飛び上がる。
渦巻く風で敵を吹き飛ばす荒々しい風の魔法…アリーヴェデルチ。

「ふっ…どうだ！」

「……」

「それに、お前が最後に放った火…蓑火だな」

蓑火…蛍の様な火の玉。手で払いのけようとすれば、どんどんと数を増やし星のまたたきの様に光ると言われている怪火の一種。
刀剣等の直接触れる攻撃は無駄だが、風などの自然を利用した技なら蓑火を消滅させることが可能だ。

「如何した…何か言ってみろよ」

不適に口元を歪め敵（ウルカヌス）に言う。
するとウルカヌスの瞳が哀れみの物へと豹変する。
その瞳に一瞬身体が強張った。

「…己は誠に愚かな人間だ」

「……どうゆう意味だ？」

「…捕えたぞ」

「えっ――――がはっ！？」

瞬間俺の背中に熱い何かが爆発と共に着弾した。
大量の血を吐き片膝を着きながら背中の状況を確認する。
背中の皮膚は焼け焦げ、傷つき自分の人肉が露わになっている。
人肉が焼け異臭が漂う。

体中に熱さと激痛が駆け廻る。

「何を…かはっ…した」

「……鬼火だ」

「鬼火…？お前は…鬼火を放っていな――――――ッ…お前…態とあの鬼火を」

「如何にも…」

俺が叢原火をを回避した後上空に外れた鬼火…あれが直撃したのだ。
こいつは態と鬼火を上空に放ち、俺が何も疑いもなく背中を向けた瞬間に、上空に滞在させといた鬼火を遠隔操作し直撃させた。
今頃気付くとは…失態だ。

「今頃悔いているのか…もう遅い」

「くっ…」

ウルカヌスが右手を横に軽く振ると、地面に放たれていた鬼火が更に燃え盛る。
まさか…こうなることを予め予測してやったのか…。

「燃え尽きろ…黒神　上総」

その言葉に鬼火が反応し四方八方から青い火が襲い掛かる。
回避も背中の傷が深く思うように動けない。

「ッ…仕方ない」

呼吸を整え腕輪を見る。
すると青い宝石から光が発せられた。

「準備完了か…いくぞ！！」

そして鬼火が俺の身体を包み込んだ…。

鬼火が燃え盛るのを静かに見つめる。
只の黒神　上総なら死んだだろう。
そう…只の黒神　上総なら。

「……生きておるのだろう」

我が鬼火に向けて問いかけると、それに答える様に鬼火が蒸気を伴い一気に爆発する。
水蒸気と焼け焦げた砂が慌ただしく舞い散る。
数秒後…視界が晴れる。
そしてその場に居たのは髪色、瞳の色が蒼く変化した黒神　上総。

「…その姿…ネプトゥヌスか」

「けっ…久しぶりじゃねーか。ウルカヌス」

ネプトゥヌスは俺の口を勝手に拝借しウルカヌスに話しかける。
挑発的な発言をしなければいいが…。

「無様に人間如きに敗北するとは……己も愚かな者よ」

「”Ｗａｎｎａ　ｓｅｅ　ｔｈｉｓ　ｗａｔｅｒ　ｔｕｒｕｉｎ　ｔｏ　ｙｏｕｒ　ｏｗｎ　ｆｕｃｋｉｎ'　ｂｌｏｏｄ?”」

馬鹿かネプトゥヌスは…何でウルカヌスの挑発を真に受けるんだよ…。

しかも何だよ。かっこつけて英語で”この水をテメェの血に変えてやろうか?”何て言いやがって…。

戦うのは俺なんだぞ。余計なことを言うなよ。

「ふっ…愚か者が」

（おい…黒神。あいつを…本気（マジ）で殺すぞ）

「分かったから…そんなに怒るなよ」

軽く溜め息を吐き目の前の敵（ウルカヌス）を見据える。

「それじゃ…第二ラウンド開始しますか」

「来い…！」

第二ラウンド…”神話融合”の黒神　上総と怪火を有する者との戦闘が開始された…。

「鬼火…！」

「過冷却水！」

異なる二つが互いにぶつかり合う。
火は水を蒸発させ、水は火を打ち消す。
いわば相殺である。

「ちっ！前方に過冷却水を展開！」

俺の目の前に円状の過冷却水が現れる。
それに物理的振動を加える。
すると過冷却水は凍り、今度は円状の氷が現れる。

「地を駆ける氷よ…氷舌！！」

瞬間氷は舌状に突き出し地面を駆け巡る。
速度はそれなりに備わっている。
これは回避不可能だろう。

「甘い…火柱」

しかし氷舌はウルカヌスが発現させた火柱に妨げられる。
最初は互いに鍔ぜり合ったものの火の方が威力が強く、氷舌を押し切る。
火柱はそのままの姿で俺に襲い掛かる。

「くそっ！」

無駄な反撃はせず横に飛び退く。
前にも言ったが今の身体では”神話融合”のリミットは五分間。

一つ一つの技ががとても重要である。

「近付けない…だったらあの技で」

再び過冷却水を展開させる。
しかし今度はかなりの大きさの物。
それを一気に物理的振動を加える。
過冷却水は一瞬で巨大な氷の球体に変化する。
だけどこれで終わりじゃない。

「全てを吹き飛ばせ…アリーヴェデルチ！！」

巨大な氷の球体を渦巻く風で粉々に砕く。
砕かれた氷は雪の様になる。
その氷をこの空域全体に広げる。
これで準備完了だ。

「……何をした」

「別に…只何もないこの空域を綺麗にしただけだ」

ウルカヌスは俺に疑いを掛けてくる。
まぁ…当然の事だろう。
いきなり氷の球体を生成したと思ったら、今度は粉々に砕いたのだから。

「じゃあ行くぜ…」

俺は手を包み込むように過冷却水を纏わせる。
そして何も防御もなく只突っ込んだ。

「己から死を所望するとは…その心意気良し！！」

ウルカヌスは鬼火を纏った拳を上総の身体に叩きこむ。
しかし拳を叩きこんだ瞬間、衝撃な事が起きた。

「ぶ、分身だと！？」

我は驚愕した。
先程突っ込んできた者…黒神　上総。
その者の姿が風の様にふわりと消えたのだ。
何時の間にこんな小細工を…。

「捕えた…」

「ッ！！？」

後ろから静かに呟く声が聞こえる。
この声は…何故だ！！
何故我の背後に居るのだ！！

「ぢィッ…！！」

ウルカヌスは咄嗟に此方に振り向き攻撃を行おうとする。
しかし俺の方がこいつより先に捕えた。

「おっせえッ！！砕け散れ！絶破烈氷撃！！」

過冷却水を纏わせた拳で掌底を打ちこむ。
そして手を軽く振動させウルカヌスの身体に直接氷塊を生み出しそ

の者を氷漬けにさせ、過冷却水が完全に氷になったことを確認し氷塊から自らの手を引き抜く。
引き抜いた直後、今度は爆発性のある掌底を同じ個所に再び打ち込む。
打ち込まれた掌底は激しい爆発と共に氷塊を砕きウルカヌスを３ｍ後方に吹き飛ばす。

ウルカヌスは大量に吐血し、背後にある岩に叩き付けられる。

「がっ…一体…はがっ…何を」

「細氷（ダイヤモンドダスト）と大気光学現象だ」

細氷（ダイヤモンドダスト）…大気中の水蒸気が昇華して出来た、ごく小さな氷晶が降る現象。

大気光学現象…大気中の氷晶によって、太陽又は月の光が反射、屈折、回折などを起こす光学現象。

「俺はこの技を行うために過冷却水を凍らせ、風で砕きこの空域にばら撒いた。そして空を照らしている太陽光やお前の鬼火の光源を利用して俺の姿を屈折させお前の背後に回り込んだのさ」

「成程…」

「さて…これでこの区域は俺の支配下だ…どうする？」

挑発的な笑みを浮かべ目の前の敵（ウルカヌス）に言う。
するとウルカヌスは拳を握りしめ身体を震わせている。

「……るな」

「あっ？」

「調子に乗るな！！！屑がッ！！！」

ウルカヌスの怒号が区域全体に響く。
空気が振動し俺の身体は吹き飛ばされそうになる。
その位こいつの怒号は強力。
それと同時に地面に残っている鬼火が激しく上空に燃え盛る。

「一体何の真似…えっ」

瞬間俺の身体が地面に倒れ込んだ。
何故だか分からない。
分かるのは無意識で自ら地面に倒れ込んだことだ。
数秒後、俺の呼吸は急に乱れ始める。

「はっ…はっ…はぁっ……ぐっ…は…こはっ……これは…酸素…欠乏症…！」

酸素欠乏症…人体が酸素の濃度１８％未満である環境に置かれた場合に生じる症状。
一般の空気中の酸素濃度は２１％。

酸素欠乏症のメカニズム…人間は主は主に肺胞でガス交換をしている。肺胞毛細血管から肺胞腔に出てくるガスの酸素濃度は個人差もあるが１６％であり、これが空気中の２１％の酸素と濃度勾配に従って交換される。
一回でも酸素１６％以下の空気を吸うと肺胞毛細血管中の酸素が逆

に肺胞腔へ濃度勾酸に従って引っ張り出されてしまう（即ち、極論例として酸素１０％の空気は、呼吸にとって「１０％の酸素がある」のではなく「酸素６％奪われる」空気ということ）。
更には血中酸素が低下すると延髄の呼吸中枢が呼吸反射を起こして反射的に呼吸が起こり、呼吸するとさらに血中酸素が空気中に引っ張られると言う悪循環が起こる。
従って酸素濃度の低い空気は一呼吸するだけでも死に至る事があり大変危険である。また死亡前に救出されても、脳に障害が残る危険性がある。

酸素欠乏症の症状　酸素濃度…１６％；呼吸脈拍増、頭痛悪心、吐き気、集中力低下
酸素濃度…１２％；筋力低下、目眩、吐き気、体温上昇
酸素濃度…１０％；顔面蒼白、意識不明、嘔吐、チアノーゼ
酸素濃度…８％；昏睡
酸素濃度…６％；痙攣、呼吸停止

「はっ…はぁっ…あがっ……これは…やばい」

激しい目眩に襲われ、吐き気が身体を廻る。
これは…酸素濃度１２％の症状か…！

「……これで終いだ」

ウルカヌスがゆっくりと瞼を閉じる。
すると紅い魔法陣が俺の所に出現する。

「Ｐｅｒ　ｍｅ　ｓｉ　ｖａ　ｎｅ　ｌａ　ｃｉｔｔａ　ｄｏｌｅ

nte,
per me si va ne l'etterno do
lore,
per me si va tra la perduta
gente,

Giustizia mosse il mio alto
fattore,
fecemi la divina podestate,
la somma sapienza e 'l primo
amore

Dinanzi a me nan fuar cose c
reate
se non etterne, e io etter
o duro
Lasciate ogne speranza, voi
ch'intrate'」

ウルカヌスからは英語の言葉が紡がれる。
俺はこれを知っている……ッ!?
まさか…こいつ。

「地獄の門…」

「如何にも…」

そうこれは『神曲』　地獄篇第3歌の冒頭である。

「地獄の力まで有しているのか…!」

驚愕していると魔法陣からゆっくりと黒色の門が現れる。
柱には裸の男女が絡み合っており、門の一番上には拳を突き出した男の像が三体。
門の開口部はもがき苦しみ喰われている人々の像がびっしり。
それらの間に考える人のブロンズ像。
これは紛れもない地獄の門。

「開け…地獄の門」

ウルカヌスの言葉に反応し門の開口部がゆっくりと扉を開く。

（おいっ！黒神！！さっさと逃げろ！！死んじまうぞ！！）

「分かっている…！だけど…動かないんだよ身体がッ…！」

何とか腕に力を入れ起き上ろうとする。
しかし上手いこと身体が言うことを効かない。
筋力低下が起こっているのだ。

「閉じ込めろ…地獄の門」

門がゆっくりと近付いてくる。
今はその門を只見ることしかできない。
数秒後、門が完全に俺を取りこんだ。

「くっ…やばい」

取り込んだ門はゆっくりと閉じ始める。

「己に教えよう…先程の紡いだ言葉を」

ウルカヌスは腕を組み瞼を閉じる。

「我を過ぐれば憂ひの都あり、
我を過ぐれば永遠の苦患あり、
我を過ぐれば滅亡の民あり、

義は導きわが造り主動かし、
聖なる威力、比類なき智彗、
第一の愛、我を造れり、

永遠の物のほか物として我よりさきに
造られしはなし、しかして我永遠に立つ、
汝等ここに入るもの一切の望みを棄てよ」

閉じた瞼を開いたと同時に地獄の門が閉じる。

「黒神　上総。消去完了」

第二十七話：怪火（後書き）

テストでごたごたしているので更新はまた一週間後です。

第二十八話：神話融合　弐式（前書き）

第二十八話。誤字・脱字が多いかもしれません。

第二十八話：神話融合　弐式

「はぁ……」

自然と口から溜め息が漏れる。
最近このような事が増えた。
原因は私…そして黒神だ。
あの日の夜…私は真実を求めるために黒神に勝負を挑んだ。
最初は互いに互角で私にも勝つことが出来るとその時は感じていた。
しかしその考えは甘すぎた。
黒神が放った烈震虎砲…その一撃で私の身体はボロボロになりまともに戦える状況では無かった。
それでも私は諦める訳にはいかなかった。
全力を振り絞り再び黒神に立ち向かうが、傷ついた私は弱者と同じ存在…当然敗北。
敗北したその日は負けた悔しさよりも、救えなかった悔しさが身体を駆け廻ってきた。

その日を境に黒神と私は互いを避け合い始めた。
目が時々合うが、そのたびに私は悲しい気持ちに襲われ無意識に目を逸らしてしまう。
そんなことがもう数日間続いている。

「はぁ……ん？あれは宮藤とリーネか…」

再び溜め息を吐くと、向こうから宮藤とリーネが歩いていることに気付く。
けど様子が少し妙だ…何かあったのだろうか？

「如何したんだ二人共。浮かぬ顔をして」

「あっ坂本さん…。実は…」

坂本さん元気が無い顔で私達の事を聞いてくる。
最近の坂本さん少し様子がおかしい。
元気がなく何時も悲しい顔をしている。
原因は私もリーネちゃんも分からない。
そんな状態の坂本さんだけど、私は先程の上総さんの様子を話すことにした。

「上総さんの様子が少し変で…」

「様子が？それは本当か宮藤！？」

先程の事を話した途端、坂本さんの様子が豹変する。
私の肩を両手で掴み、焦った態度で問いかけてくる。
こんなにも焦りを露わにした坂本さんは見たことがない…。
リーネちゃん驚きの表情を浮かべている。

「黒神は…黒神はどこに向かった！！」

「わ、分かりません！」

「ッ……くそっ！！」

肩から両手を離し、坂本さんは走って何処かへ行ってしまう。
私は掴まれた肩を抱きながらその姿を見つめた。

「ど、如何したんだろう…坂本少佐」

「分かんない…でも」

一つだけ分かった事がある。
それは坂本さんと上総さんの間に何かあったということ。
この事は確信できる。

「私…上総さん探してくる！」

「あっ！ちょっと待って～芳佳ちゃ～ん」

不安な気持ちともやもやした気持ちを心に抱きながら、坂本さんの跡を走って追いかけた…。

門が…閉じる。
これが目の前で起きている現象。
分厚く造られた巨大な扉が軋む音を奏でながらゆっくりと閉じ始める。
脱出を試みるが、身体が思うように動かない…脱出不可能。
無理なら壊す…だが意識が朦朧とし刀剣の発現や初級魔法の使用すら困難。
これ等は全て酸素欠乏症の症状による影響。

地獄の門の内部を軽く見回す。
辺りは薄汚れた赤一色の空間。
上下左右がイマイチ理解できない。
異臭が鼻を突き刺す。

この臭いは…死臭だ。
多くの罪人がこの門に飲まれ、自身の肉体を残し、そして魂のみが消えた。

「くっ…そ…」

ぼやけて視界がハッキリしない状況の中、出口に向かおうと必死に手を伸ばす。
手を伸ばす最中…ウルカヌスの声が聞こえた。
先程の英語を日本語に訳している様だ。
門に差し込んでいた太陽光が少しずつ減っていく。

「ネプトゥヌス……何とか…出来ないのか……」

（俺一人の力では……不可能だ）

駄目なのか…。
此処から脱出することも、破壊することも…何もかも。
ローマ神話の神である海神・ネプトゥヌスの力を有しても。
こいつだけの力では……？
朦朧とする意識の中、先程の言葉に違和感を覚える。

（まてよ…ネプトゥヌスは”神一体の力では不可能”と言ったはずだ）

そう…あいつは”神一体の力では不可能”と言っていた。
では神二体ではどうだ？この門を脱出或いは破壊は？
もしかすると…。
俺は口元を不敵に歪ませ、腕輪に問いかけてみる。

「なぁ…ネプトゥヌス……お前一人の力では不可能なんだな？」

（ああ、そうだ。何で今頃そ――――――待て…てめぇ…まさか！？）

「ああ…そのまさかだぜ」

黒神は口元を不気味に歪ませながら言う。
こいつが言いたいことは理解したが、あまりにも危険すぎる賭け。
それは自らの命を無くすほどに…。

（てめぇ…酸素欠乏症で頭が狂ったのか！！そんな事をしたら本気（マジ）で死ぬぞ！！）

「だけど…この門の中に居ても死ぬだけ…只此処に居ても出血多量、酸素不足で死ぬだけだ……」

（……）

「どの道死ぬ運命…なら俺は……こんな薄汚れた空間ではなく…綺麗な……青空の下で死にたい！！！」

黒神は限界に近い身体で声を振り絞りながら叫ぶ。
こいつの覚悟は偽りの欠片も無い本物。
敗北した神はその人間に従う…。

（くそっ…何でこんな状況で掟が頭を過るんだよっ……！！）

「……いくぞ…メリクリウス！！」

（…分かりました。無理をしない様に）

（ッ！！？止めろ黒――――――）

「神話融合！！！」

俺の制止は阻まれ、黒神は自らの命が消滅するかもしれない賭けにでた…。

「黒神　上総。消去完了」

門が閉じた。

我の勝利はこの瞬間確定する。

地獄の門は我の”神術”でかなり上位に匹敵する技である。

指定した対象物を門に閉じ込め、生命が消滅するまで永遠に封じ込める。

脱出不可能及び破壊不可能の最強の牢獄だ。

しかしこの”神術”には大きな問題が存在する。

「ぐっ…」

それは神術回路に負荷が掛かるのだ。

神術回路…我達が所有する”神術”を行使するのに最も重要な機関。

この回路の存在で各々の神達は自らの”神術”を行使することが可能になる。

何故負荷が掛かるのか…簡単なことだ。

制御が難しいのだ…地獄の門は。

失敗すれば我が逆に閉じ込まれてしまうのが一つ。

もう一つは、多量の魔力を消費すること。

「我も……未だ…修行が足りない未熟者だ」

地獄の門から背を向け、その場から立ち去ろうとした瞬間…門が轟音と共に粉砕された。
その光景に我は驚愕する。
あり得ない…幾等ネプトゥヌスの力を借りたとしても、地獄の門の破壊は不可能なはず…何故だ?
我がそんな事考えていると、正面に何者かが存在しているのに気付く。

「神話融合…」

その者は静かに口を開く。
その行動に我は不審に思う。
神話融合?どうゆう事だ…ネプトゥヌスからメリクリウスに融合を変化させたのか?
いや……それでもおかしい…。
たかがメリクリウスだけの”神術”で門が破壊するのは不可能はず…。
思考を働かせ考えていた次の瞬間、目の前の者から衝撃的な言葉が発せられる。

「弐式…」

「!!?に、弐式だと!?」

驚きのあまり目を見開く。
それは当然なこと…人間如きの分際が”神話融合　弐式”を口にし

たからだ。
口にするだけならまだしも、”弐式”を扱えるとなると……厄介だ。
それに黒神　上総が従えている神はメリクリウスとネプトゥヌスか…。
ならばあの型…
「風海(ふうかい)型」

「…やり遂げたのか」

ウルカヌスは不敵な笑みを浮かべているが、何処か焦っている様子が見受けられる。
原因は恐らくこの姿だな…。
現在の俺の容姿はとても不思議なものだ。
髪色は緑色と蒼色が混じり合っており、瞳の色は右が緑、左が蒼色の状態。
何故この様な容姿になったのか…理由は至って簡単。
賭けたのだ…自分の生命が消滅するかもしれない賭けに…。
賭けの名前は”二体同時神話融合”別名…”神話融合　弐式”。
そして型名は”風海(ふうかい)型”。
”弐式”とは名の通り二体の神と同時に”神話融合”を行うことである。
そして”型”とはその融合している神を表すための言葉だと思ってくれれば良い。

「己は理解しているのか…弐式を扱うとどうなるか」

「ああ……理解は…はぁ…はっ…している」

呼吸を乱しながら敵(ウルカヌス)の言葉に答える。

「ふっ…愚か者が。その様な状態で戦などで――――」

「うるせぇ……。ごちゃごちゃ言ってんじゃねーよ」

黒神　上総は苦しそうな様子で言葉を阻んだ。
見ている限り”弐式”の状態だけで身体が限界に近い様だ。
これは…我の勝利だ。
そんな事を考えていると、黒神　上総が右腕を上げ、指を3本突き立て此方に向ける。

「3分だ…3分間で倒してやるよ」

「…我に見せてみろ。己の可能性を!!」

制限時間3分の弐式とウルカヌスとの戦が始まった…。

「鬼火!!」

「ッ…」

脚に風を纏わせ機動力を上昇させ鬼火を回避する。
風が砂を舞い散らせ、鬼火が砂を焼く。
この戦いで何度も見てきた。
何度見ても恐ろしい程の威力を秘めている。

「今の身体じゃ…一撃だけでも喰らったら…終わりだな」

今の身体ではあの一撃を受けただけで死に至る…確実に。
それに”神術”も多くは使えない。
ならやることは一つだ…。

「一撃で潰す…」

俺には一つ考えがある。
その為には確実に技を当てるのが絶対条件。
もしも外すような事があったらその場で終了…即ち敗北。
奴を騙すには再び細氷（ダイヤモンドダスト）を……いや、駄目だ。
もうあの技ではウルカヌスを騙すことは不可能。
だったら一つ無理をして布石を張ってみるか…。

「前方に…過冷却水を展開」

目の前に過冷却水を展開させ、物理的振動を思いっ切り加える。
過冷却水は音を鳴らしながら一気に凍る。
完全に凍るのを確認した後、今度は手中に風を凝縮させ氷に叩きこむ。

「Ｐｉｌｅ　ｔｏｒｎａｄｏ」

風を叩きこまれた氷は砕け、空域全体に行き渡る。
此処までは全てあの時と殆ど同じ状況…。奴を騙すだけに造り上げた…。
そして此処からが勝敗が決める鍵となる。

「いくぜ…」

あの時と同じ様に過冷却水を手に纏わせる。
恐らくウルカヌスは不審に思っているだろう…。
しかしその事も勝利条件の一つだ。
俺は真っすぐウルカヌスに突っ込む。

「その技…一度見た！！」

我はこの技を一度見た。
細氷と大気光学現象を利用する技。
この空域に散らばっている氷の水晶を太陽光などで反射させ、自らの姿を屈折、回折を行うのだ。
炎で氷の水晶を蒸発させる事が可能だが、そんな事をしたら辺りに水蒸気が充満し視界が悪くなる。
それに水蒸気は水と同じで奴の所有権。状況が悪化するだけだ。
だから氷は破壊しない。
我だけ力で奴を捕えてみせる。

「正面…いや右側に重心が寄っている…ならば……そこか！！！」

正面から向かってくる虚像を分析し、黒神　上総の本当の位置を割り出す。
割り出した途端振り返り、本物を鬼火で殴り飛ばす。
勝ちだ…と思った瞬間本物が風のように消える。

「まさか…此方が本物なのか！？」

再び正面に向き直る。
そこには過冷却水を拳に纏わせ今にも殴りかかろうとする本物が存在した。

「やるな…だが甘い！！」

再び鬼火で殴り飛ばす。

今度こそ…。

確信を得て殴り飛ばしたが、再び衝撃的な事が起こる。

「なっ！？こ、これも偽物！！」

そう…我が本物と確信を得ていたものさえ偽物だった。

風の様に偽物が消える。

では本物は一体何処に居る…。

「二度目だぜ…」

「ッ！？」

ま、また背後を取られただと！？

何故だ…一体何が起こっているんだ！？

「やらせるかッ…！！」

「おっと…」

我は振り返らず、鬼火を纏わせた拳で裏拳を放つ。

しかし黒神　上総はその攻撃をメリクリウスの力を行使し、後ろへ飛び退ける。

その行動に疑問を抱く。

妙だ…我の背後にを捕えたのに何故攻撃を仕掛けてこなかった。

備わっていた筈だ…攻撃する時間は十分に…。

「己の分身…あれは一体どうやった……」

「簡単さ…自分の姿を目の前に空気の壁を歪ませることによって、作り出した巨大な風のレンズで自らを投影する技…光の髪（スキンファクシ）」

「そうか…それではもう一つ問う。己は何故攻撃をしてこないのだ」

そう問うと黒神　上総が不思議そうな表情を浮かべる。
最初は分からなかった、この表情に多くの事が隠されていたなどと。

「攻撃？ふっ…気付いてないなら教えてやるよ…もうやったぜ」

「己は何を言っておる――――――ッ！？」

どうやら気付いたようだな…。
自分の周りに起きていることに現象に。

「これは…水泡？」

そう…ウルカヌスの足元には多量の水泡が発生している。
普通に見れば只の水泡だが、これはそんな甘いものではない。

「弾けろッ…」

水泡に向けて指を鳴らす。
それと同時に水泡が破裂し、ウルカヌスの膝上部分まで氷が発生する。

「ぐっ！？こ、これは一体！？」

「…お前が虚像である俺を攻撃した際に予め、大量の過冷却水を脚や地面にばら撒いたのさ。そして先程の水泡…周囲の空気を高密度で閉じ込めた水泡であり、その高密度の水泡は破裂した際に凄まじい振動を発生させる。その振動に過冷却水が反応し、氷が出来始めたんだ」

汗を流しながら淡々と言う。

ウルカヌスは反撃をする様子が見受けられない。

「どうした？得意な怪火を使わないのか」

「ふっ…己の攻撃で完全に神術回路が壊れてしまった…我の負けだ」

ウルカヌスは不敵な笑みを浮かべながら言う。

どうやら神術回路という機関が壊れてしまったらしい。

「負けを認めるか…良いだろう潰してやるよ」

風を手中に集め凝縮させる。

凝縮の際、風と風がぶつかり合いとても不思議な音を奏でている。

数秒後、風の凝縮が完了する。

完了したと同時にウルカヌスが口を開く。

「私の負けはもう確定した…だからこそ」

「……」

「最後の悪足掻きをさせてもらう」

そう言うとウルカヌスの右手から黒い何かが放たれる。

俺はそれを避ける事が出来ず、空いている左腕で防御を行う。
だが次の瞬間恐ろしい事が起きた。

「これは…」

黒い物体は膨れ上がりその姿を一気に変える。
何かを突き破る音と共に現れた六本の足。
薄汚れた青い瞳。
鋭く尖った歯。
頭に生えた二本の角。
どす黒い皮膚。
まさか…こいつは…。

「牛鬼だと…！」

牛鬼…主に海岸に現れ歩く人間を襲うとされている妖怪。
非常に残忍・狂暴な性格で、毒を吐き、人を喰い殺す事を好む。
頭が牛で首から下は鬼の胴体を持つ。

俺が驚いていると牛鬼は咆哮を挙げ俺の左腕に思いっ切り咬み付いた。
激痛が身体を廻る。

「がっ…荒れ狂う風の牙と為れ…」

術式を唱え風の形状を変化させる。
風は半円状態になり、全体が鋭利な刃物みたいになっている。

「これで最後…喰らえ…Ｌｅｖｉａｔｈａｎ！！」

風の牙を振り上げる要領で牙を放つ。
放たれた牙は氷によって拘束されている者に高速で襲い掛かる。
それと同時に牛鬼が俺の左腕の肉を不快音と共に喰いちぎる。
喰いちぎられた腕からは大量の血が噴出する。
声に出来ないほどの激痛。
自らの腕の骨が肉眼で確認できるほどの量の肉を喰われた。
それに牛鬼は満足したのか自らその姿を消す。
いや…自らというよりも無理やり消されたのに近いかもしれない。
何故なら自らを造り出したご主人様がこの世から消えたからだ。
主人が消えれば、造り出した下部達も消える。当然の事だ。

「はぁ…は…はぁっ…があっ」

喰いちぎられた左腕を右手で抑えながらウルカヌスの居た場所へ向かう。
そこには少し砂を被った赤い宝石が落ちていた。
その場に片膝を着き、宝石を拾い上げる。
赤い宝石は正に炎を象徴させる物…綺麗だな。
軽く砂を払い除け、腕輪にはめ込む。
これで残り四体…か。
俺はゆっくりと”神話融合　弐式　風海型”を解除する。
瞬間とてつもない疲労及び神話融合で紛らわしていた激痛が身体を蝕んだ。
力が抜けうつ伏せで倒れる。

「あがっ……もう…だ…めだ…賭け……負けたのか」

身体が重く沈む様な感覚に堕ちる。

「でも……青空の…元で…げほっ……死ねるなら…良しとするか」

その言葉を最後に俺の意識は完全に閉ざされた…。

第二十八話：神話融合　弐式（後書き）

無事火の神との決着を着けられました！しかし戦闘描写が短いし理解しにくいで…本当に大変だ。

第二十九話：傷（前書き）

第二十九話です。坂本さん視点です。

第二十九話：傷

「はぁ…はぁ…」

私は息を切らしながら、全力でいつもの場所に向かっている。
何故こんなにも焦っているのかには大きな理由がある。
それは先程の宮藤が言っていた黒神の様子…。
宮藤は”黒神が何処か焦っている様子だった”と言っていた。
その言葉を聞いた瞬間、私はあの時と同じ不安な感覚に襲われた。
まさか…と思い、何時も黒神と二人で刀の訓練を行っている場所へ走って向かった。

走ること数分――――――いつもの場所が見え始めてきた。
それと同時に、辺りの空気がおかしいことに気付く。

（何だ……妙に空気が熱い…それに……鼻を突く様な臭いが微かに感じる）

そう…辺りの空気が、他の場所と比べると妙に熱いのに気付いた。
それと伴い、肉が焼け腐敗した様な臭いがする。
一体何が……――――――そんな事を思っているといつもの場所に辿り着いた。
辿り着いた直後、眼の前に広がる光景に驚愕した。

「な、何が……ここで起きたんだ…？」

砂浜の大部分が黒に焼け焦げている。
近くの岩場は罅が入っており、一部が砕けて消失している。
そして空気も…薄い。

呼吸するのが少し辛く感じる。

「いや……それよりも…今は黒神を――――――ッ！？」

周りに起きている異常現象を一時取り払い、黒神を探すべく辺りを見回す。

見回していると、黒神が血だらけになり、うつ伏せに倒れ込んでいた。

「黒神！！！」

私は地面に倒れこんでいる黒神の元へ駆け寄る。

「おい、大丈夫か！！返事をしろ！！」

片膝を着き、黒神の身体を揺すりながら問いかける。

しかし返事は無い。

只背中から血が滲み出てくるだけ。

私は意識を確認しようと、黒神の身体をうつ伏せの状態から仰向けの状態へと変える。

体勢を変えた瞬間、衝撃的な光景を見てしまった。

「えっ……」

左腕の一部が…無い。

人間には通常、筋肉などを覆っている皮膚が存在している。

しかし黒神の左腕には皮膚のみならず、筋肉までもが消失している。

腕を可動させる白い骨までもが、肉眼で確認できる。

私はあまりに突然で衝撃的な光景を見て、目を逸らしてしまう。

初めてだ…人間の骨をこんなにも間近で見たのは…。
恐怖のあまり手が震えだす。身体の力が入らない。立ち上がれない。
だけど、

「くっ…！」

黒神は生きている。
呼吸は浅いが…生きている…！
この場に居るのは私だけ。
今黒神を助けることが出来るのは、私だけだ！！

黒神の上半身を起こし、私の軍服を上から被せる。
そしてその場で身体を屈ませ、黒神を背負う形を取る。

「絶対に…お前を助けてやる……！」

私は黒神を確りと背負いなおし、走ってきた道を全力で戻った…。

「え～と……これが…こうで…」

私は日課とも言える、ストライカーユニットの改造をしている。

「あ～やっぱり最新鋭のストライカーが欲しいな～」

自らのストライカー［Ｐ－５１Ｄ］を弄る手を一旦止め、上を向きながら呟く。
確かにこれでも音速は突破できない訳じゃない。

只私は更なる速さ（スピード）が欲しいんだ。

「まぁ…今はコイツで――――」

「シャーリー！！」

突然私の名が呼ばれる。
驚きで手に持っていたレンチを地面に落した。
落とした時の金属音がハンガーに響いている中、私の名を呼んだ主を確かめるため後ろを振り向く。
そこに居たのは、軍服を着て無くボディスーツ姿の坂本少佐。
見た感じ誰かを背負っている。
あれは……ッ！？

「く、黒神！？その傷…一体…」

少佐が背負っていたのは、体中傷だらけの黒神。
私はあまりの驚きに思考が追いつかない。
すると少佐が、

「シャーリー！！宮藤を…皆を今すぐ医務室へ呼んできてくれ！！」

声を荒上げ言う。
その時の少佐は、何時もと違いとても焦っている様子だった。
私は少佐の言われた通り、改造中のストライカーを放棄し、皆を呼びに向かった。

「何があったんだよ…黒神……！」

「ふ〜…やっと終わったわ」

ペンを置き、最後の書類を紙束の上にゆっくりと置く。
指を交互に絡ませ、背筋と腕を思いっ切り伸ばす。
伸ばして数秒後、絡めていた指をほどき腕を下に垂らす。
そしてゆっくりと自らが座っていた椅子から腰を上げる。
立ったと同時に医務室の扉が開かれる。

「アレッシア！！」

入室してきたのは、ボディスーツ姿の坂本少佐。
何故ボディスーツ姿なのだろうか…と疑問を抱いていると、坂本少佐が誰かを背負っているのに気付く。

「その子…黒神君？」

「ああ…！頼む…すぐに黒神の治療を…！！」

そう言うと坂本少佐は近くのベットに黒神君を降ろす。
降ろされた黒神君の姿を見て私は驚愕した。
体中が火傷で傷つき、皮膚が赤く爛れている。
それに口元が乾燥している。
これは…脱水症状だわ…。

脱水症状…水分喪失量に対して、水分摂取量が不足することによって起こる症状。
　この場合は水分摂取が不足している状態だと考えられる。

「一体何をしたら…こんな怪我を…！」

私が彼の今の状態に驚いていると、扉の向こうから慌ただしい足音が聞こえてくる。
足音は医務室の前で止まる。
止まると同時に扉が開かれ、ウィッチ達が慌てて駆け込んでくる。

「か、上総さん！！」

宮藤が一番早く黒神に駆け寄る。
黒神と宮藤は結構仲が良い。
心配するのは当然だ。
しかし今黒神の傷を治すことが最優先。

「宮藤頼む！！黒神の左腕を――――――！！」

軍服で隠れている無残な左腕を明かそうとする。
手を軍服に掛けるまでは出来た…だが捲ることが出来ない。
不安なのだ…宮藤が動揺してしまうのではないかと。
もし動揺して気を失ってしまったら黒神の生命は…。
しかし、左腕に被せている軍服を捲らなければ…。

「ッ…治してくれ！」

私は決心し、左腕を隠している軍服を捲る。

『ッ！！？』

皆の表情が一気に驚愕の表情に変わる。
当然だ…この中で私を含めて全員が見たことが無い光景だからだ。

況してや人間の骨なんて…。

「あ……腕…が…」

そして案の定、宮藤はかなり動揺している。
もし本当に気を失ってしまったら大変だ。
ここは私が確りしなければ…。

「…宮藤!!黒神は…黒神はまだ生きているんだ!!だからお前は…自分がなすべきこと考えろ!!」

「ッ!!!」

私の言葉を聞き宮藤は黒神の左腕を自らの固有魔法”治癒”で治していく。
これで黒神は…。
そう思い安堵の息を吐く。
しかし問題が起きた。

「えっ…ど、どうして」

「どうしたんだ…宮藤?」

「治癒魔法が…効かない」

その言葉に誰もが驚く。
水色の光が灯っている左腕は、傷が治るどころか更に血が溢れ出てくる。
溢れ出てきた血は、純白のベットを一気に赤へと染め上げる。

「おい、宮藤！何やってんだよ！！ちゃんと黒神の――――――」

「分かってます！！！」

「ッ！？」

シャーリーの急かす発言に、宮藤が声を張り上げて言う。
急かした本人はそんな宮藤に驚く。
それは私も同様だ。

「ちゃんとやっているんです……だけど…！」

額からは汗が滲み出ており、とても辛そうな表情を浮かべている。
宮藤も必至だ…表情から伝わってくる。

「お願い…治って……お願いだから」

目に涙を浮かべ懇願する宮藤。
しかしその願いは届かず、傷が塞がる事はなかった。
誰もが絶望の顔をしている。
私も自分の無力さに苛立ちを覚える。
何とか出来ないのか……！
そう思っていると、

（ちっ…結局魔女（ウィッチ）は使い物になんねーな）

「ッ！？だ、誰だ！？」

何処からか声が聞こえた。
皆が不思議な表情で周りを見回す。

しかしこの場に居るのは私達だけ。
黒神以外の男は居ない筈…。
一体誰が…？
すると黒神の右手首にある金色の腕輪にはめ込んである、青い宝石から光が発せられる。
光は更に輝き、医務室を明るくしていく。
私達は眩しさに瞼を閉じる。

宝石が輝いて数秒後、周りが元に戻る。
ゆっくりと瞼を開ける。
するとそこには、髪色と瞳が蒼色の男が不機嫌そうな顔で立っていた。
私達はこんな男は知らない…。
男は少し足早で宮藤の元に向かう。

「退け女…邪魔だ」

左腕を医療している宮藤を無理やり退かせた。

「まだ上総さんの傷が――――――」

「女…お前じゃ無理だ。只の役立たずだ」

「ッ！！」

男は冷たい声で宮藤に言い放つ。
役立たずと言われた宮藤は、ショックで何も言えなくなっている。
すると、

「貴様ァ！！！」

バルクホルンが男の胸倉に掴みかかる。
その行動に誰も止めに掛からない。
私も含めて全員が。
当たり前だ…黒神の傷を一生懸命治しているのに、男はそれを中断させ、宮藤には役に立たないと言った…その言動に怒りを覚えるのは当たり前だ。
もしバルクホルンがやらなかったら、私がやるところだった。

「何故そんな事を言えるんだ!!!宮藤は黒神を治すために――――」

「はっ…治す？馬鹿かお前は…」

「何だと!!!」

バルクホルンは使い魔を発動させ、今に殴りかかろうとする。

「あっ？殴るんかよ？やってみろよ…塵屑（ごみくず）」

「ッ!!」

その言葉はバルクホルンを怒らせるには十分だった。
拳は男の頬を確実に捕えた…と誰もが思った。

『なっ…!?』

あり得ないことが目の前で起きた。
止めたのだ…固有魔法”怪力”を発動させた拳を片手で軽々しく。
拳を止めた男は口元を不気味に歪ませている。

「…無様だな。所詮は魔女（ウィッチ）か」

男はそう言うとバルクホルンの拳を突き返した。
そして軽く溜め息を吐き、アレッシアの方を向く。

「おい女…頑丈な布…持ってこい」

「えっ…？」

「頑丈な布を持ってこい…って言ってんだろうが！！！」

「は、はい！」

男は怒鳴りながらアレッシアに指示をする。
指示されたアレッシアは慌てるも、ちゃんと言われた物を持ってくる。
持ってきた布を男は乱暴に受け取り、黒神の口に巻き付けた。
一体何を……。

「全く…面倒掛けさせんじゃねーよ」

男は心底呆れた顔をしながら、静かに呟く。
右手の掌を一度握りしめ、再び開く。
瞬間掌から、美しく透き通った水の球体が現れた。
私達は目の前に起きた現象に驚愕する。
掌を握り、開いた途端水の球体が現れたのだ。
普通なら絶対にあり得ないことだ…普通なら。

「お前…魔法が…！？」

バルクホルンは驚きの声を上げるが、男の耳には届いていない。
水の球体を肩の高さまで持ち上げ、

「黒神…頼むから耐えてくれよな！！」

黒神の左腕に思いっ切り叩きつけた。

「――――――――――！！？」

叩きつけた途端、黒神は口に巻き付けられている布を思いっ切り噛み締める。
痛みの所為か身体を捩じらせ、ベットの上を暴れまわる。

「ッ…おい魔女共（ウィッチ）！！お前らも少し手伝いやがれ！！黒神を…助けたいんだろうが！！」

『ッ！！』

その言葉に私達は我に返り、黒神が暴れるのを抑え込む。

「――――――！？――――――！！」

「黒神…頼む少しだけだ…少しだけ大人しくしてくれ！！」

「上総さん…！！」

私も全身を使い黒神を抑える。
宮藤も泣きながらも必死に暴れるのを抑え込む。

「あっ…見て！上総の傷が…！」

ハルトマンの声に皆が黒神の傷を見る。
すると先程まであった傷が徐々にだが再生を始めている。
人肉が水の球体の中でパズルの様に組み合わさっていく。

「くぅ…ぐっ」

治療を行っている男は、額から汗を流し苦しそうな表情を浮かべている。
水の球体の大きさも若干乱れが生じている。

「あと…少しだ……耐えろよ」

歯を食いしばり、黒神に耐えろと呼びかける。
それに伴い、布を噛み締める力は更に大きくなる。

「これで…最後だ！」

男がそう言うと水が光を放ち、辺りに飛び散る。
飛び散った水は布などに吸着されるのではなく、光と為り消えてしまう。

「はぁ…はぁ…これでいい」

そう言うと黒神の左腕から手を離される。
離された手から姿を現したのは、一部が消失している腕ではなく、綺麗に元通りになった左腕だった。
皮膚も綺麗に再生している。
誰もがその光景に安堵の表情を浮かべる。

男はふらつきながら黒神の右腕にある腕輪の所まで歩み寄る。
そして宮藤の方を向き、

「女…傷は治した。それに…不足していた水分も…体内から直接流し込んどいた…」

「えっ…？」

「あとはお前がやれ…役立たず」

再び宮藤に暴言を吐くと男の身体が発光し始める。
私は何者なのか聞くために話しかける。

「待て！お前は一体――――」

「俺の事なら、黒神に聞け。その方が――――」

男は最後の言葉を言う直前に、目の前から姿を消した。
一体どこに……いや…今そんな事よりも…。

「宮藤。残りの傷も頼めるか」

「あっ…はい」

宮藤に残りの傷の治療を頼む。
すると静かな声で返事をする。
恐らく役立たずと言われたことに相当なショックを受けたのだろう。
それでも宮藤は残りの傷を癒していく。
見る限り細かい傷なら何とか治癒が可能なようだ。
私が再び安堵の息を吐くと、隣に居たハルトマンが小さな声で、

「水…まさかね」

何かに気付いた表情で静かに呟いていた。

そんなハルトマンを不思議に思いながら、宮藤が治療をするのを見守った…。

第二十九話：傷（後書き）

次回は…何時頃更新出来るか不安です。

第三十話：夢（前書き）

第三十話です。今回は少し短いと思います。

第三十話：夢

”ッ……此処は…一体……？”

辺りを見回しても全てが漆黒の暗闇。
建造物も生命も無く、只暗闇の空間が存在しているだけ。
そして俺もその空間に居るのだが、自らの感覚に異変が起きていることに気付く。

”俺は…どうなってんだ？寝ているのか…立っているのか？”

暗闇が原因なのか、それとも別の力が作用しているのか分からないが、感覚が完全に麻痺している。
立っているのか、それとも寝ているのかも分からない。
俺は恐怖心に狩られ、暗闇の中を走った。
しかし走っている感覚が全く得られない。
只激しく息切れするだけ。

”はぁ…はぁ…ぐっ…怖い……出口は何処だよ…ッ！？”

突如身体が何かに叩きつけられる。
左手で頭を押さえながら右手で辺りを弄る。
目の前に存在しているのは只の平面。
だが何処の平面に当たるのかが分からない。
壁なのか地面なのか…全く分からない。
自分の身体が歪み始める。
すると背後から何者かが俺の頬に優しく触れてくる。
恐怖で身体が動かないが、眼球だけは動かす事が可能だ。
ゆっくりと眼球を左に動かす。

目にしたのは綺麗でほっそりとした女性の手。
俺はこの手を……知っている筈だ。
特に理由は無い。ただ本能が確信を抱いている。
手は優しく頬を撫で続けてきたが、悪い感じはしない。
寧ろとても心地よく気持ちが安らぎ、先程の恐怖心がまるで嘘の様に消えていく。
安らぐと同時に眠気が俺の感覚を蝕み、瞼が徐々に閉じ始める。
閉じ始める最中、数メートル先に漆黒の暗闇には似合わない金色に煌く光が見えた。

”光が…広がっていく…”

先程まで小さな輝きを放っていた光は空間を包み込むほどまでに巨大化し、全てを包み込んだ。
俺や頬を撫で続けている女性までもを…。

”うっ…今度は……何処だ?”

周りが妙に明るくなっているのに気付き、重たい瞼を開く。
まず最初に視界に映ったのは、古びた薄汚い木の床。
所々に散らばっている埃や菓子の欠片。
その光景を見て初めて理解した。
俺は…床に倒れていると。
何故だ…何故俺は床に倒れているんだ?
そう思い顔を左側に向けた瞬間、恐ろしいものを見てしまった。

”あ…だ、誰だよ…誰がこんな事を……!”

俺が見たのは血だらけになり、瞳孔が完全に開いている…男性の姿。
髪色は金髪。服は白い生地の刺繍が無いシンプルな半袖のTシャツ。
古び汚れた青いジーパン。
耳朶には銀色に輝くピアス。手には液晶ディスプレイに大量の血がへばりついている携帯電話。
恐怖に縛られていると背中に痛みを感じた。

”くっ…何だよ――――えっ…？”

木の床に広がる赤い液体。即ち…血だ。
血が背中から溢れ出てきた。
どうして…？
痛みに耐えながら考えていると、女の子の声が耳に入ってきた。

”……ゃん…ちゃん…お兄ちゃん…！！”

”ッ！？…この声……まさか…！？”

顔を床に這いずらせながら声の方向を向く。
そこには目尻に涙を浮かべ、俺に向けて”お兄ちゃん”と叫んでくる一人の少女。
髪はストレートで綺麗な栗色。瞳も髪色と同様。肌は白くきめ細かく美しい。
そんな少女が必死になって俺の事を呼んでいる。
少女に声を掛けようとするが、身体に力が入らず声が掠れ上手く伝わらない。
伝わらないのならと思い、爪を立て木の床を精一杯這う。
少女も此方の行動に気付き駆け寄ってくるが、

”あぐっ！
”

何者かによって右手を踏み潰された。
爪が割れ、親指以外の骨が粉砕される。
襲ってくる激痛に耐えながら、右手を踏み潰した者を見る。
顔は見えないが、片手に長さ３５ｃｍ位の出刃包丁を持った一人の男。
出刃包丁からはポタポタと音を鳴らしながら滴り落ちる血。
それを見て瞬時に理解する…こいつは危険だと。
ショックで固まっている少女に一人の男がゆっくりと近付く。

”いや…来ないでよ…助けて…お兄ちゃん…！
”

少女は後退りながら男から距離を取る。
しかし男の一歩の方が大きく距離を取るどころか、徐々に詰まっていくばかり。
男の汚い手が少女の肩を掴み、床に叩きつける。
蹲り痛みに耐えるが、男はそれを許さない。
馬乗りになる形で少女の手足を強く拘束する。

”止めて…止めてよ！お兄ちゃん…助けて！！
”

ジタバタと暴れる少女。
自らを拘束している男に力で勝てるわけがない。
俺は残っている左手這わせながら少女の元へ向かう。
だが、背中から溢れ出てくる出血及び使用不可の右手の所為で前に進めない。
男は少女の頬を軽く撫でる一方、撫でられた方は歯を食いしばり、涙を流す。
撫で始めて数秒後、男の片手に持たれていた出刃包丁が上に振り上

げる。

”や、やめろ…！”

枯れた声で男に言うが、伝わる筈がない。
振り上げられた出刃包丁が微かに光る。
男は少女に何かを告げた後、手に持つ凶器を勢いよく振り下ろす。

”やめろおおおぉぉぉぉぉ！！！”

「ッ！！！」

夢から目を覚ます。
額からは汗が流れ出ており、息も少しばかり荒い。
呼吸を整えながら上半身を起こす。
両腕と胴体には白い包帯が沢山巻いてある。
窮屈だな…。
そんな事を思い溜め息を吐く。
するとそれに気付いたのか、一人の女性が駆け寄ってきた。

「黒神君！目を覚ましたのね！」

「アレッシアさん…」

アレッシアさんは安堵の表情を浮かべる。
でも、何で俺は医務室に居るんだ？死んだ筈じゃないのか？

「何故だ…？」

「どうかしましたか？」

「えっ…いや、何でもありませんよ」

「そうですか？では私は５０１の皆さんに目覚めたと伝えてきますね」

アレッシアさんはそう言うと白衣を整え直し、医務室から出て行った。

軽く息を吐き、再びベットに身体を預ける。

何度も見てきた天井を見ながら、先程の事について考える。

一つは生きていること。もう一つは…。

「あの夢…」

俺が見た悪夢と言える程の夢。

人間の死体を見て、自分の手の骨を粉砕され、そして目の前であの子を――――

「ッ……」

何で突然あの日の出来事が夢で…。

あの男も…あの少女も…。

「くそっ…」

手で目を隠し、静かに呟く。

すると腕輪が微かにだが発光しているのに気付く。

目を軽く擦り、腕輪を自分の視界に入る所まで持ってくる。
発光している宝石は緑と青…つまりメリクリウスとネプトゥヌスの二人だ。
メリクリウスは兎も角、ネプトゥヌスと会話は今はちょっと…嫌だな。
氷漬けにされることは無いだろうが、愚痴が凄そうだな…。
日常でも少なくて1時間~2時間、多くて4時間~5時間の愚痴を零す奴だ。
そこで簡単な計算をしてみる。

現在ネプトゥヌスは怒っていると仮定しておこう。
怒り＝5時間の愚痴だろう。
更に俺が寝ていた日数は…恐らく三日くらいか？
三日だとその分を怒りに掛けるのだから15となる。
即ち…15時間の愚痴を聞くことに……あっ…忘れてたぜ…もう一つ愚痴時間が加わる要素が存在している事を…。
頭の中で緑の髪と瞳の男がにやけながら頭の中を過る。
あいつが余計なことしなければ、愚痴は15時間程で終わる筈だ。
しかしもし余計なことをしたのであれば、愚痴時間は更に5時間程増加することになるだろう。
正確に言えば20時間の愚痴を聞くことになってしまう事に…。

「……恐ろしいぜ」

ほぼ半日だ。
半日以上あいつの愚痴を聞くことになってしまう。
それはかなりの精神的苦痛であり恐怖でもある。
トラウマにならなければ良いのだが…。
兎も角考えても駄目だ。大人しく腹を決めよう。

「どうしたんだ？二人とも」

（どうしたじゃねーよ馬鹿が！！無理しやがって！！あと一歩で死ぬところだったんだぞ！！）

やっぱり始まったよ…ネプトゥヌスのアレが。

今回は一段と五月蠅い…頭に物凄い響くな…。

俺が嫌そうな表情を浮かべていると、それに気付いたのか更なる追撃が加わる。

（何だてめぇは…何嫌そうな顔をしているんだ…こっちはお前の事を――――――ッ！？）

（お前の事を…何て言おうとしたんですか、ネプトゥヌス？私は物凄く気になるのですが？）

（なっ…くっ…別に何でもねーよ！！関わってくんな！！）

（ふふふっ…素直じゃありませんね）

ネプトゥヌスは何かを言おうとしたが、途中で気付いた様に言葉を閉ざしてしまう。

その行動に俺は不思議に思う一方、メリクリウスは何故か楽しそうにしていた。

一方が相手を弄り、もう一方が弄られる。

何故かこの光景を久々に見た気がし、自然と口元が緩んだ。

（ちっ…メリクリウスの野郎…調子に乗りやがって。はぁ…一気に疲れが出てきたぜ…俺は少しばかり休ませて貰うぜ）

「えっ…ああ、分かった」

驚きだ…案外速く終わった。
結構長くなりそうだと感じていたのに…。

（どうしたのですか？鳩が豆鉄砲を食ったような表情をして）

「いや…ネプトゥヌスがあんなに速く愚痴を終わらせるなんて珍しいなと思ってな…」

（成程…恐らく彼なりに貴方の事を気遣っているのですよ）

「ネプトゥヌスが……俺に？」

メリクリウスの言葉に再び俺は驚いてしまう。
あいつが俺を気遣う…だと。
普通ならまずあり得ない行動だ。
何時も馬鹿にして貶しているあいつが。
この俺を気遣うだと……考えているだけで激しい悪寒が…。

（何を怯えているんですか…怯えることでは無いと思うのですがね）

メリクリウスは呆れた声色で俺に向け言う。
確かに今の俺は怯えている。
ネプトゥヌスのあり得ない行動に…。
怯えるなと言われても絶対に無理だ。
もしかすると明日は氷が降るのかもしれない。
いや…或いは鋭く切断力のある槍が…。

「うおっ…恐ろしい」

（はぁ…全く貴方は最低な奴ですね）

「最低言うなよ…」

（まぁ、無事で本当に良かったですよ。あの状態で”弐式”を使用して生き残った人間は貴方が初めてですよ。最も”弐式”を使用した人間も貴方が初めてなんですけどね）

神話融合　弐式…名の通りローマ神話の神と二体同時に融合すること。融合した際は強力な”神術”が手に入る。
単体での神話融合を超える程の…。
しかし強力な力を得ること同時にそれなりの代償を支払うことになる。
支払う代償は単体での神話融合と殆ど同じだが、身体に掛かる負荷が尋常じゃない。
たった一度の使用で生命の消失率が単体での神話融合の倍だ。

「今度からは”弐式”も自由自在に使えないとな…」

（今後も弐式を使用するつもりなのですか？）

「当然だろ？弐式はこの後の戦闘にも役立つからな」

俺はメリクリウスの問いに素早く答える。
今回ウルカヌスとの戦闘で使用した”神話融合　弐式”は今後の神々との戦いで重要な戦力となる。
その為には自らの手足と言えるほどにまでに成長する必要がある。

「訓練メニュー…少し変えようかな」

溜め息を吐き、瞼を閉じる。
閉じて数秒後にあることが気になった。
それは腕輪に新たに加わった宝石…火の神・ウルカヌスの事だ。

「起きているか…ウルカヌス」

（うむ…起きておる）

ウルカヌスは静かな声で俺の問いに答える。

「全く…お前には本当に苦戦したよ」

（同感だ…）

「……」

（……）

意味が分からない沈黙が流れるが、只一つ理解出来ることがある。
それは…会話が全く続かないことだ。
ウルカヌスは基本的無口で大人しい奴だ。
あの二人より全然良いのだが、会話が続かないのは物凄く気まずい。
誰か助けてくれ…。
すると俺の願いが届いたのか、緑色の宝石が再び発光し始める。

（二人とも大人しいのですね。もっと対話をすれば良いではありませんか）

「メリクリウス…良いタイミングだ」

（己に同感だ…）

（はっ？一体何の事でしょうか？）

メリクリウスは本当にタイミングが良い奴。
色々と助けになっている。
信頼は……一応しているつもりだ。
向こうが俺の事を信頼しているかは知らないけどな。

（話は終わりか？終わりなら、我は再び眠らせて貰うとする）

「ああ…悪いな起こして」

（ふっ…構わん…）

ウルカヌスは軽く鼻で笑った後、宝石の発光を閉ざす。

（ふぅ…話をしていたら疲れましたね…私もそろそろ――――――）

「ちょっと待って貰えないか？」

（…何でしょうか？）

俺は話し疲れているメリクリウスを引きとめる。
普段なら引きとめるなどしない。
只今日は話したいことがあるのだ。
実際のところ、５０１の皆以外なら誰でも良いのだ。
聞いてもらえれば誰でも構わない。
先程見た夢の事を…。

「さっきさ…夢を見たんだ」

（夢…ですか？どのような夢を？）

「それは――――――」

夢の内容を打ち明けようとした瞬間、医務室の扉が勢い良く開かれる。

正体を確かめるため顔を横に向ける。

そこには息を切らし、此方を見て安堵の表情を浮かべる１１人のウィッチが居た…。

第三十話：夢（後書き）

次話は書けても短い作品になると思います。

第三十一話：限界（前書き）

第三十一話。今回は予告通り短いと思います。文章に色々と不審な点があると思います。

第三十一話：限界

現在ミーティングルームには第５０１統合戦闘航空団の皆が集合しているのだが、何時もとは雰囲気が違う。
不安や妙な緊張感が渦巻いており、不穏な空気を醸し出している。
この空気を造り出したのは私達だが、造り出す原因を与えたのは私達ではない。

「上総さん…」

不意に隣に座っているリーネちゃんが口を開く。
その時の表情は今にも泣き出しそうな悲しみに縛られた表情だった。
それは皆も私も同様だ。
何時も元気で無邪気なルッキーニちゃんも、今回ばかりは大人しくしている。
出窓の石段に腰を掛け、脚を交互に揺らしながら不安な表情を浮かべている。
坂本さんとハルトマンさんは悔しさの他に、何故か微かな怒りが見られた。
言い方は悪くなってしまうが、この空気を造り出す原因を与えたのは大事な仲間の一人であり、未来から訪れた男性…黒神　上総さんだ。

３日前、様子がおかしい上総さんとそのことを知り跡を追いかけて行った坂本さんを探すため、基地内を必死に駆けたが見つけることが出来なかった。
私もリーネちゃんも数十分間走ったため体力が持続せず、探すのを断念しようと決め二人で自室へ戻ろうとした途端、シャーリーさんが慌てた様子で此方に向かってきた。

何事だと思いシャーリーさんに問いかけたところ、その内容は驚きを隠せないものだった。
”上総さんが重傷だと…”

医務室へ辿り着き扉を開いた。
扉を開いて直ぐ目にしたのは、身体の至る所に火傷や切り傷を負い、血だらけになってベットに横になっている上総さん。
すかさず駆け寄り声を掛けたが、全く反応が得られなかった。
私が困惑していると坂本さんが、上総さんの左腕を隠している軍服を掴み、”治してくれ”と言い捲り上げた瞬間、私は自分の視覚がどうかしてしまったんではないかと思った。
左腕の一部が無かったのだ…。
恐ろしい光景を間近で見てしまったために呼吸は乱れ、意識が薄れていく感覚に襲われた。
その時、坂本さんの一喝”お前は…お前がなすべきことをしろ”という言葉で私の意識は再び元に戻った。
そして坂本さんが言った”今なすべきこと”…そんなの初めから決まっている…上総さんの左腕の医療だ。
すかさず失われた左腕の医療を行ったが、異常が起きた。
左腕の出血が止まらなかったのだ。

今でも確りと覚えている…あの時の自分の無力さに。

「…それで黒神の容態はどうなんだ?」

私が悔しさの渦に浸っていると、バルクホルンさんがミーナ中佐に上総さんの容態について尋ねた。
その問いにこの場に居る全員が反応を示す。
上総さんの容態はあまりにも酷く予断を許さない状態であり、ミーナ中佐と医師であるアレッシアさん以外医務室への出入りは固く禁

じられている。
即ち上総さんの容態を把握している人物はこの場に一人しかいない。

「今は安定しているわ。だけど血中酸素濃度がかなり低下していたそうよ。アレッシアさんの話しだと、脳に軽い障害が残るかもしれないと言っていたわ……」

その言葉に誰もが驚く。

「じゃ、じゃあ上総と一緒にもうお話出来ないの…？」

ルッキーニちゃんの問いに、悔しそうな表情を浮かべ首を横に振る中佐。

「…分からない。言語機能が働かない可能性も無くは無いわ…」

絶望的な状況により重く長い沈黙が流れる。
沈黙が流れ数秒後、ミーティングルームの扉が2回程叩かれる。
ミーナ中佐が静かな声で”どうぞ”と扉を叩いた主に向け言う。
すると”失礼します”という言葉と同時に扉が、ゆっくりと開かれる。
正体この部隊で勤務している医師…アレッシアさん。
まさか…上総さんの容態が…。
私は不安になりその場から立ち上がり、アレッシアさんに問いかけた。

「上総さんの容態は…？まさか悪化したとかじゃ…？」

その問いにアレッシアさんが首を横に振る。

「いいえ。黒神君が目覚めたと報告に来ました」

「ッ！？ほ、本当ですか！？」

「はい。脳や身体にも目立った障害は見受けられませんでした。至って正常です」

「よ、良かった…」

無事だと聞いた瞬間、身体の力が抜けその場に座り込んだ。
皆も安堵の表情を浮かべている。

「目が覚めているなら上総に合いに行ってもいいの？」

ルッキーニちゃんが嬉しそうな声でアレッシアさんに言う。

「はい。もう面会しても大丈夫ですよ」

「やったーーー！！」

その場で飛び跳ね喜んでいるルッキーニちゃん。
少ししてミーナ中佐の指示により駆け足で医務室へ向かった…。

医務室の扉が突如開かれる。
そこには息を切らし、此方を見て安堵の表情を浮かべる１１人のウィッチ達。
俺は腕輪を掛け布団に隠し上半身を起こす。

此処までは良いだろう。
しかしこの後は何と声を掛けたら適しているといえるのだろうか？

「あ～…えっと…おはようございます？」

何故疑問形何だ？と自分でも理解しがたい発言をしてしまった。
ウィッチ達は反応すら示してくれない。
これはこれで結構辛いものである。

「あの…少しは反応を――――――えっ！？」

困惑していると突如芳佳が俺の胸に抱きついてきた。
突然の事で驚き、少し裏声った声を発してしまう。

「え～…芳佳…一体どうしたん…だ？」

抱きついている芳佳の顔を見る。
涙を流し、俺の着衣を強く握りしめている。

「芳佳…大丈夫？」

俺の言葉に全く反応せず只必死に泣き続けていた。
そんな芳佳の頭に手を置き、優しく撫で始める。
それでも未だに泣き続けている。

「ミーナ中佐…どうしたら？」

「……少しだけそのまま泣かせておきなさい」

ミーナ中佐が優しい声色で言う。

俺はその言葉に静かに頷き、泣き続ける芳佳の頭を撫でながら見守った…。

数分後…芳佳の涙は何とか収まり、俺の身体から離れた。
とりあえず泣き止んでくれたのは良かった…。
安心し軽く息を吐くと、ミーナ中佐が一歩前へ出てくる。
何て言うか…威圧感が半端ないな。

「目覚めて良かったわ。身体の具合は？」

「…微妙ですね。外部は問題が無いのですが、内部への損傷が酷くて」

「内部への損傷？」

この場に居る全員が疑問の表情を浮かべる。

「俺の身体の内部にあり、魔力で構成されている最も大事な機関ですよ。この機関には様々な物がありまして…」

「様々な物って何だ？」

シャーリーが黒神に問いかける。

「例えば刀剣の発現や魔法の使用等に必要な魔法機関…。天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）を解放させる際に必要な天使機関等の事です。でその一部が損傷していて、今は使用不可な状態に陥っています」

そう…ウルカヌスとの戦闘や”神話融合　弐式”の負荷で各々の機関が損傷を受けてしまった。
魔法機関及び天使機関への損傷はかなり酷いものである。
魔法機関の損傷では、武器の発現が不可能に伴い魔法の使用も微弱な力しか発揮できない。
天使機関では、殆どが損傷しており翼を纏うことすら不可能な状態。
考える限り、今の俺は役立たずだ。
そんな事を思いながら再び溜め息を吐く。
すると、

「黒神君…率直に聞くわ。貴方は一体何をしたの？」

ミーナ中佐が突然俺が一番聞いて欲しく無いことを聞いてきた。
表情も何時もより真剣だ。
さて…ミーナ中佐に俺の嘘は通じるだろうか？

「訓練ですよ。少しばかり過激な…」

「……それは本当かしら？」

「本当ですよ。そもそも何処に疑う要素が含まれているんですか？」

「……」

少し強い口調でミーナ中佐の問いに答える。
中佐は無言になりながら真剣で鋭い視線を向けてくる。
それに負けじと此方も真っ直ぐ薄紅色の瞳を見る。
後少しだ…後少し嘘を貫き通せば……。

「そう…じゃあ質問を変えるわ。あの男性は一体何者?」

「男性?」

「貴方の左腕を治した男性よ」

「えっ…?」

俺の左腕を治した男性?どうゆう事だ?俺を治したのは芳佳じゃないのか?
治したのが芳佳じゃ無いとすると一体誰が…。
疑問の壁に直面していると、ミーナ中佐から驚くべき発言が飛び出す。

「その男性の特徴は、髪色及び瞳が蒼色で水系統の固有魔法を有している人よ」

「ッ!!?」

髪色と瞳が蒼色で水の魔法を使用する男……あいつしか思い浮かばない。
いや絶対にあいつだ。中佐はあいつの姿の事を語っている。
しかし何故だ?何故あいつが此方の世界に来れるんだ?
俺は隠している腕輪を軽く左手で突き、反応を待つ。
すると一秒も満たないうちに一つの宝石から反応が感じられた。

(おいネプトゥヌス。どうゆう事だよ…何で皆がお前の事を知っているんだよ)

(あぁん?簡単だ…そんな事。俺がそっちの世界に一時的に行った

からな。魔女（ウィッチ）が知っているのは当然だ）

（なら俺の左腕を治したのはお前だったのか？）

（うっせーな。どうでもいいじゃねーかよ…）

ネプトゥヌスは眠そうな声色で俺の疑問に答えた。
というか何でこっちの世界に来れるんだよ…。

「黒神君…もう一度聞くわ。あの男性は一体何者？」

「あっ…えっと」

しまった…ネプトゥヌスとの会話で全く嘘を考えていなかった。
何て言えば…妖精？いや…あの姿で妖精と言うには程遠い。
相棒？いやそんな事を言ったらネプトゥヌスが怒り狂うに決まっている。
神様？……駄目じゃん。

俺が困惑していると、ハルトマンさんから衝撃的な発言をする。

「もしかして…ネプトゥヌス」

「なっ！？」

驚いた…まさかハルトマンさんが気付いているとは…。
幾等鋭いとはいえ此処まで理解しているのか。
考えなしに言っているようには見受けられない。
ハルトマンさんの瞳を見れば誰にだって分かる事。
何て言うか…本当に鋭く厄介な人だ。

此処までハッキリと言われると逃げ場が無い気がしてくる。

（この状況から上手く逃げられると思うか？メリクリウス）

３体の神の中で最も冷静で、判断力が良いメリクリウスに一応尋ねてみた。

本当は聞かなくても、自分に残されている選択肢が一つしか無いということぐらい理解できているけどな。

（……無理です）

（そうだな……無理だ）

限界か…隠し続けるのも、騙し続けるのも。

元より嘘を吐くのは下手なんだよな…直ぐ表情や態度に表れるから。

今までも殆どの嘘がばれている。

坂本さんには一人で戦っているのではないかと言われ、ハルトマンさんには腕輪の事や少佐との間に何か問題があったのではないかと問い詰められたり等、疑われっぱなしだ。

もう一度言うが…本当に俺は嘘が下手。

「ふふふっ…限界だな」

「……」

口からは自然と笑みが零れた。

笑みを浮かべる俺に対しハルトマンさんを含む５０１の皆は黙ったまま。

掛け布団から腕輪が巻かれてある右手をゆっくりと出し、皆の視線

に入る位置に腕を動かす。
軽く腕輪を叩き3体の神に合図を送る。
するとそれに答える様に各種宝石が徐々に光り始める。
その光景に目を見開き驚くウィッチ達。

「話しますよ…全て」

瞬間宝石の発光が大きく医務室を包み込んだ…。

第三十一話：限界（後書き）

キャラクターの台詞が思い付かず色々と悩んでいます。本当にこのキャラクターがこんな台詞を言うのかという疑問を書きながら考えていました。

次回はウィッチ達とローマ神話の神達との対面です。

第三十二話：対面（前書き）

第三十二話。今回も短く、何か呆気なく感じます。

第三十二話：対面

――――――腕輪内――――――

この空間は非常に暮らしやすい。オブジェクトが一つも無く全体が白く物静か…殆ど”無”に近い空間だ。しかしオブジェクトが無いと言っても脳内で”創造（イメージ）”さえ行えば、自由に創り出すことが可能なのだ。

例えば腰を下ろす椅子が欲しいと思うなら脳内で椅子を”創造（イメージ）”すれば一瞬で椅子が創り出せる。本が読みたい場合はその題名（タイトル）を脳内で思い浮かべれば簡単に手に入る。

その位この空間は暮らしやすく、便利なものだ。

外部からの干渉は黒神　上総只一人だけなのでとても静かに感じる。

時々、魔女達（ウィッチ）の耳障りで、五月蠅い声が聞こえてくることがありますが…あまり気にしない様日々心掛けています。

そして私は今、背もたれと肘掛が付いている椅子に身を預け、椅子の左側に創り出した小さな円状のテーブルの上に置かれている温かい紅茶を啜りながら、静かに読書をしている。

他の二人を見ると、ネプトゥヌスはソファーに仰向けの形で横になり大人しく眠っている。ウルカヌスは瞼を閉じ、畳の上で腕を組み無言で正座をしている。精神鍛錬の一種なのでしょうか…？

そんな事を思い紅茶を手に取り静かに啜る。するとネプトゥヌスが突然目覚め、何やらぶつぶつと呟いている。

「どうかしたのですか？ネプトゥヌス」

「いや…黒神と少し話していただけだ」

私の問いに眠そうな表情と声で答えるネプトゥヌス。そんなに眠いのですか？まだまだ子供ですねと言うと高確率で怒り狂うから今回は止しておきましょう。今日は静かに過ごしたい気分なので。
そして紅茶をテーブルに戻し、再び読書の続きを行う。
今私が読んでいる所は『旧約聖書』の創世記という部分…バベルの塔を読んでいる。

バベルの塔…ノアの洪水後、人間は皆、同じ言葉を話していた。人間は石の代わりに煉瓦を作り、漆喰の代わりにアスファルトを手に入れた。こうした技術の進歩は人間を傲慢にしていった。天まで届く塔のある街を建てて、有名になろうとしたのである。
神は人間の高慢な企てを知り、心配し、怒った。そして人間の言葉を混乱（バラル）させた。
今日、世界中に多様な言葉が存在するのは、バベル（混乱）の塔を建てようとした人間の傲慢を、神が裁いた結果なのである。

全く…面白い話ですね。愚かな人間共の傲慢や高慢の心が結局は混乱を招く結果となり、今の世界が存在している…というわけですか。本当に人間は愚かな生き物だ。
私は口元を釣り上げ軽く鼻で笑うと同時に、黒神　上総が腕輪を叩いて合図を送っているのを感じた。それは他の二人も同様。ネプトゥヌスは大きな欠伸をしソファーから起き上がる。そしてウルカヌスは既に立っており、先程と同様瞼を閉じ腕を組んでジッとしている。残りは私一人ですか…。
本を閉じテーブルの上に置き、椅子の肘掛部分を掴み立ち上がる。

「…行きますか」

「ああ…面倒だけどな」

「うむ…」

互いの意思を確認し自らの身体を向こうの世界に送る準備をする。これは自らの意思で腕輪の外を移動することが可能なのだが、魔力の消費が激しく結構大変なものである。

「はぁ…人使いが荒いですね」

瞬間この場に居る三人の身体が発光を始める。恐らくこれが初めてだろう。

５０１統合戦闘航空団とローマ神話の神々達の真っ向からの対話というものは…。

――――腕輪内　ｏｕｔ――――

突如黒神の右手首の腕輪に収まっている三つの宝石が発光し始める。発光した宝石は緑、青、赤のの三種。普通なら先ずあり得ないことだ。宝石がひとりでに発光するなどと。太陽光の反射で宝石が輝くという域を既に超えている。私達はあまりの眩しさに、腕で目を隠すような形をとる。

少しして発光が徐々に収まっていく。それに伴い私もゆっくりと瞼を開く。するとそこには三つの光の塊…いや三体の光の集合体。

「な、何だこれは…」

バルクホルンが三体の光の集合体を見て呟く。当然の事だ。こんな現象などこの世に生きて一度も見たことも聞いたことも無い。皆が

驚く中、黒神だけは平然とその三体の光を見ていた。
数秒後、三体の光から三人の男が現れる。
一人は炎髪灼眼で武士の姿を思わせるもの。二人目は髪色及び瞳が蒼色。こいつは3日前に突然姿を現し、宮藤に暴言を言いつつも黒神の左腕を治した奴。そして三人目は……ッ！！？

「お前はッ…！！」

私は背中に掛けている烈風丸を素早く引き抜き、三人目の男に刀を向ける。バルクホルンは鋭い視線を男に向け宮藤たちを護る姿勢を取る。しかし鋭い視線を向けるのはバルクホルンだけではない。皆が同じ視線を放っている。
三人目の男は髪色と瞳が緑色。こいつの事は嫌でも憶えている。忘れるわけがない…あの夜の事を。

「随分と冷たい視線ですね。まるで敵を見る様な…」

「当たり前だ！！」

男に向ける烈風丸の力が強まる。それと同時に汗が刀を握る手を湿らせてくる。只ならぬ緊張感が張り詰める空気を打ち破ったのは、この男達を呼び寄せた黒神だ。

「これから詳しく事情をお話します…」

俺は殆どの事を皆に話した。こいつらが何者なのか。そして一人で戦ってきたこと等自分が知っていることを全て話した。すると案の

定驚き、そして皆が怒りの表情を浮かべていた。

「何故…」

坂本さんは拳を強く握りしめ、静かに呟く。

次の瞬間、

「何故そんな大事なことを話さなかった！！！」

坂本さんの怒号が医務室に響く。その声に驚くウィッチ達に対し、神達は其々違う態度を取る。

ウルカヌスは腕組をし瞼を閉じ微動だにしない。メリクリウスは口元を少し歪め、この光景を楽しむように観賞している。ネプトゥヌスは眠いのか時々欠伸をしイライラした表情を浮かべている。どうやらメリクリウスだけがこの状況を楽しんでいるようだ。後の二人は全く興味を示さない。全く…こいつらは。

呆れていると突如服の襟が勢い良く引っ張られ、首の後ろが締まる感覚が身体を廻る。

「答えろ！！黒神！！」

襟を引っ張ったのは当然坂本さん。話さなかった事に相当怒っているようだ。襟を掴む力がかなり強く、少しばかり苦しく感じる。

何故話さなかったか…理由は簡単。巻き込みたくないのだ。自分がこの世界に訪れて起こした戦いに、関係のないウィッチ達を…そう打ち明けようとした瞬間、蒼い髪が微かに揺れた。

「そんな事…お前等が知って何の意味がある」

ネプトゥヌスは氷の様に冷たく鋭い視線を坂本さんに放つ。その視

線に身体が強張ったのか、誰一人動こうとしない。ウルカヌスは右目だけを開き、ネプトゥヌスの様子を確認している。メリクリウスは相変わらず口元を歪めたまま。
氷室と化した医務室で更に言葉を繋ぐ。

「言っとくがな、こんな事お前等が知ったとしても何の意味の持たないことだ。何の助けにもならない…正直俺達もお前等みたいな下等生物に邪魔されたくねんだよ」

「勝手なことを言うな！私達にだって力がある。黒神と共に戦うことだって――――――」

「無理だ。魔女(ウィッチ)如きの力では、俺等に勝利することなど不可能だ。幾等未来予知や魔導針が存在していても俺ならお前等１１人を……」

肌を突き刺す沈黙が流れる。誰かが唾を飲み込む音が聞こえたと同時にネプトゥヌスが口を開く。

「３０秒以内で全員ぶち殺せる」

『ッ！？』

ネプトゥヌスは悪魔同等の笑みを浮かべ躊躇なく言い放つ。今度は氷室の空間では無く、殺気に満ち溢れた空間と化す。ルッキーニは恐怖のあまり小刻みに震えだし、シャーリさんの身体に抱きつく。
ネプトゥヌスの奴…少しやり過ぎだ。俺が注意しないとな…。

「少しやり過ぎだぞ…」

「あぁん？文句あんのかよてめぇは…」

不機嫌そうな表情で詰め寄ってくるネプトゥヌス。こいつ時代遅れのチンピラかよ…。

そう思い呆れて溜め息を吐くと、それを感じ取ったのか今度は”何溜め息吐いてんだよ”と言わんばかりの表情を此方に向けてくる。

一体俺にどうしろと…？

再び溜め息を吐く。すると、

「どうして…？」

芳佳が不意に口を開く。

「どうして上総さんはそんな呑気でいられるんですか！？自分の生命（いのち）に関わることなんですよ！？なのに…」

言葉を言い切る前に再び泣き出してしまう。そんな芳佳の身体を優しく抱くリーネの目尻にも涙が滲み出ていた。本当なら此処で優しい言葉を言うことが適切なのだが、何と言ったらいいのか思い付かない。

内心結構慌てている自分。

「まぁ…別に良いじゃん…現に今生きているならそれで。これから起こる事なんてどうでも――――」

微笑しながら言った瞬間、右頬からパァンという乾いた音が発せられる。自分の右頬が段々と熱くなり赤くなり始め、針を何度も突き刺した様な痛みが右頬に残る。俺は瞬時に理解する…叩かれたと。

右頬を擦りながら叩いた者を見る。そこにはロングスカートの軍服をきちんと身に纏い、髪を焦げ茶色のリボンで二つに結うカールス

ラント軍人…ゲルトルート・バルクホルン大尉がいた。
バルクホルンさんは坂本さん同様襟を勢い良く引っ張る。

「ふざけるな!!何が別に今を生きてればいいだ!…いいか、二度とこいつらと戦うことも神話融合というものを使用するな!!」

「…無理ですね」

「黒神!!いい加減に――――――」

「…神話融合の使用規制は極力約束は可能です。しかし戦うなということは不可能です。絶対に…」

バルクホルンさんの言葉に首を横に振るう俺。この事は幾等バルクホルンさんの願いでも承諾できないもの。神話融合は自分自身が強くなれば、使用回数も抑えられる。だが神達との戦闘…これればかりは逃げることが不可能。どんなに足掻いてもこの定められた運命に逆らうことはできない。
俺はバルクホルンさんの瞳を確りと見る。自分がどれだけ真剣で覚悟が備わっているという事を分かってもらうためだ。
瞳を見つめて数秒後、襟を掴んでいた手が離される。

「…お前の覚悟は理解した。だが、二度とあんな無茶をするな…。一人で戦おうとするな…。これは上官命令だ…分かったな?」

「……了解」

悲しそうな声で言うバルクホルンさんの命令に素直に頷く。だがその頷きも殆どが嘘で出来ている。
神達の戦闘で無茶をしない戦いなんて存在しない。必ず何かしらの

損傷を受けることになる。そんなのは覚悟している。そして一人で戦うこと…この意思は曲げられない。だれが何と言おうと絶対に曲げてはいけない。
結果的にこの頷きは殆ど嘘で出来ている。つくづく思う…俺は何て最低な奴なんだと…。

それから数分して皆が医務室から出て行った。ミーナ中佐の命令で暫くの間は身体の調子が良くても安静にするようにと命じられた。
そして皆が出ていく際に芳佳、坂本さん、ハルトマンさんを自らの元に呼び寄せた。先ず芳佳には泣かせてしまった事を謝り、”俺は大丈夫だから安心して”という言葉を添え頭を優しく撫でてあげた。すると芳佳は無言でその事に頷き、少し安心した表情で頭を撫でられることを素直に喜んでいた。
坂本さんとハルトマンさんにはもう一度確りと頭を下げ謝った。坂本さんはバルクホルンさん同じことを言い、ハルトマンさんは何故か”悪いと思っているんなら、私の頭も撫でて”と言ってきた。俺はその言葉通りに、頭を優しく撫でてあげた。とても気持ちよさそうな表情を浮かべるハルトマンさんに対し、むすっとした表情で此方を睨んできた芳佳。
医務室を出て行った今でもその理由が分からない。
俺が唸って考えていると腕輪に収まっている緑色の宝石が発光し始める。こいつ等何時の間に腕輪内に戻ったんだ?そんな疑問を持ちながら、発光している緑色の宝石に問いかける。

「どうしたんだ?メリクリウス」

(いえ…貴方がここまで鈍感屑野郎だと思っていませんでしたよ)

何だこいつ…喧嘩売ってんのか。もう一度此方の世界に呼び出して、しばき倒し……いや今の俺では絶対に無理だ。しばき倒すどころか、逆にしばき倒されてしまう。流石にこれ以上怪我を悪化させたく無い。ここは我慢だ…我慢。

「てかその鈍感屑野郎ってどうゆう意味だよ…」

（はぁ…これだから鈍感屑野郎は）

「もういい…止めてくれ」

軽く涙目になりながら天井を静かに見つめる。見つめる中一つの言葉が突然頭の中に表れた。
その言葉を声に出して言ってみる。

「臆病者は本当に死ぬまでに幾度も死ぬが、勇者は一度しか死を経験しない…ｂｙ．ウィリアム・シェイクスピア」

この言葉が突然浮かんできた理由は分からないが、只一つ言えることがある。

「俺は嘘つきで最低な野郎…そして……」

「臆病者だ」

第三十二話：対面（後書き）

深夜投稿なので誤字・脱字や文章構成がおかしい所が多々あると思います。また、今回眠気に襲われ書けなかった、黒神　上総が消される理由をいずれ書きたいと思います。

次回は…何にするか迷っています。

第三十三話：料理（前書き）

第三十三話です。

第三十三話：料理

この世界に生まれ、この世界に生き、この世界で一生を終える下等生物の集まり。
神を偽りの存在と信じ込み、見下ろして踏み潰すだけの存在…人間或いは魔女（ウィッチ）。
俺はこいつ等の存在が気に入らない。
やりたくないことを必死になって行うし、自ら望んで何かしらの関係を築こうとするし、そして無駄に仲間思い。
何かあれば直ぐに”仲間”という言葉を使いたがるし、その言葉で異常に喜びを表す奴もいる。
別に人間や魔女（ウィッチ）に嫉妬しているわけじゃない。只気に入らないだけだ。
もう一度言うが、俺はこの地を這う蟲（にんげん）の存在が気に入らない。
しかしその存在の中で一人認められる奴が居る。
言わなくても察しの良い奴は分かる筈…黒神だ。あいつの事は認められる。
素より認めざる得ない…あの”神話融合　弐式”をやり遂げたのだから。
只の”神話融合”でさえ持続時間が二~三時間程度。その程度しか持続出来ない奴が”神話融合　弐式”を使用するなど自殺行為に等しい。
使用した時は”もうこいつは駄目だ”と確信していた。がその確信を裏切る様にこいつは生き延びた。
流石の俺もこの事には度肝を抜いたが、メリクリウスだけが口元を不気味に歪ませ静かに喜んでいた。
そして一言黒神には聞こえない声で言った…人外。
確かにそうだ。今の黒神……いや、この世界に訪れる前からあいつは完全に人の域を超えている。

魔女達（ウィッチ）の様に偽物の翼で空を翔るのではなく、本物の翼で空を翔け回り敵（ネウロイ）を殲滅し、地上では様々な武術及び魔法を駆使し俺達に勝利する。
人の域を超える条件を満たし、メリクリウスが人外と言うのも頷ける。

話が変わるが何故こんなことを急に言い始めたのか…原因は黒神。
いきなり意味不明の事を言い始めたのだ。

「だから…久々に料理がしたいんだ」

俺が聞きたいのはその理由何だが…。

宿舎の廊下から差し込む眩しい太陽光が身体を優しく温める。
その温かさを肌に感じながら、宿舎の廊下を自分なりのペースで歩く。
俺の身体はたった二日で治ってしまい、アレッシアさんに酷く驚かれた。
幾等芳佳の治癒魔法が強力でも最低一週間以上かかる怪我を二日で治してしまったのだから驚くのは当然だ。と言っても驚いているのは俺も同様。
まさかこんな早く治るとは思っていなかった。身体への異常は特に見受けられない。一体何故…？
歩くのを一時中断し、口元に手を当て少しばかり考える。
一つばかり思い浮かぶ点があるが、確信を得ることは出来ない。

「まぁ…今慌てても仕方ないか。それよりも…おいネプトゥヌス」

（何だよ…こっちは寝てんだぞ）

ネプトゥヌスは眠気や怒りが籠った声で嫌そうに答える。
どうやら心地よく寝ていたところを俺が起こしてしまったらしい。
非常に機嫌が悪いようだ。

「俺さ……料理がしたいんだ」

（……は？）

「だから…久々に料理がしたいんだ」

腕輪に収まっている青い宝石を見ながら二回同じ事を言う。
一回目はどうやら聞こえなかったのか長い沈黙の後、間抜けな声を出したネプトゥヌス。
二回目は既に黙りこんでいる。何か間違った発言でもしたのだろうか…。
あまりにも長く黙りこんでいるので少しばかり不安になるので、直ぐに声を掛けた。

（いや…お前が料理したいと言うことは理解できたが、何故突然に…理由はあるのかよ）

理由か…理由ならあるさ。

「皆に迷惑掛けたからな…その反省みたいなもんだ」

皆には本当に色々と迷惑を掛けた。
だから迷惑を掛けた分、反省として料理を作ろうと考えたのだ。

これまでの恩を食べ物で返すのは最低だけど、今自分が出来るのはこの位しか無い。

（律義な奴だ…それよりも大丈夫なのかよ身体の方は）

「ああ…もう完全に動け――――」

（そっちじゃねーよ。内部の方だ）

外部の損傷の心配より、内部の損傷の心配かよ。

少しは外部の損傷も気遣って欲しいものだ。と言った瞬間絶対に罵詈讒謗（りざんぼう）の嵐が襲いかかるだろう。だから言うのは控えておこう。

軽く鼻から空気を吸い込み、息を止めた状態で内部の損傷を調べる。

［魔力機関］…損傷により魔法使用不可。

武装創造（ウェポンクリエイト）：一部使用可能。

［天使機関］…損傷により使用不可。

可変ウィングシステム使用不可。

天使武装機能システム使用不可。

［悪魔機関］…損傷により使用不可。

可変ウィングシステム使用不可。

悪魔武装機能システム使用不可。

［裏コード］…獣人化（ザ・ビースト）：安全装置（セーフティ）により使用不可。
使用後負担個所一部損失。
［自己修復プログラム］…正常可動。

酷い…損傷があまりにも酷過ぎる。
殆どが使用不可能。今の俺完全に役立たず。
恐らくこんなにも使用不可能になった原因は二つ。
一つは不完全な状態でウルカヌスに戦闘を挑んだこと。
もう一つは”神話融合　弐式”の使用による負荷だと考えられる。

「あはは…こんなに酷いとか…勘弁してくれよ」

あまりの酷い状態に思わず苦笑する。

（はぁ…現在お前は役立たずだな）

ネプトゥヌスが溜め息を吐きながら、呆れ声で言う。
尤もな事実なので否定が出来ない自分。

（まぁ…仕方ないことだ。今はゆっくり休んどけよ）

そう言うと青い宝石は只の宝石に戻る。
俺は腕輪を見ながら呆然とその場に立ち尽くしていた。
当然だ…あのネプトゥヌスが心配したのだ。驚かずにはいられない。

「変わったな…あいつも」

俺は驚きを隠せないまま食堂へ向かった…。

「さてと……何があるかな？」

食堂に到着したので早速食材の確認に入る。
戸棚を開け中を見回す。すると早速あるものを大量に発見した。
手に取り安全状態を確かめる。固い感触やざらざらとした砂が掌に広がる。
そして一言、

「良いじゃが芋だ」

このじゃが芋は前にウルスラ・ハルトマン中尉に頂いた物。まだ食べ切れていないらしい。
流石にこのまま放置するのは可哀想だ。

「よし！やるか！」

数時間後…

「完成～」

完成した料理を見ながらのびのびとした声で呟く。
目の前にあるのは殆どがじゃが芋料理。

コロッケやポテトサラダ、肉じゃがなど様々な料理を作り上げた。
久々の作業に疲れたのか腕の筋肉が少しばかり痛む。
そんな事を思いながら一息吐くと同時に、食堂の扉が開かれる。
入ってきたのは芳佳とリーネの二人。恐らく料理の仕度をしに来たのだろう。
二人の顔を見ると、とても驚いた表情を浮かべていた。
その後二人から色々と質問攻めにあった。
起きて大丈夫なのかとか、この料理全部を一人で作ったのか等である。

それから数分して皆が食堂に集合してきた。
理由は”匂いに誘われたから”だそうだ。

「しっかしこれを全部黒神が作ったのか…」

「ちょっと怖いな…」

シャーリーさんとエイラさんが不安な声色で言う。その言葉に頷くウィッチ数名。
何故だ?と二人に尋ねる坂本さん。
二人の話しによると、戦闘で才能がある俺が料理の才能まで備えている筈がないということらしい。
酷い言われようだ…。

「兎に角食べてみようぜ」

シャーリーさんの言葉に頷くウィッチ達。
コロッケを箸やフォークで切り、ゆっくりと口に運び入れる。
すると直ぐに反応を得られた。

「「おいしーーーーー！」」

声を挙げ美味しいと言うルッキーニとハルトマンさん。
それは他の皆も驚いた様子で美味しそうに食べている。
失敗してなくて良かった…。
安堵の溜め息を吐くと芳佳やリーネの様子がおかしい事に気付く。

「どうしたんだ二人とも？」

「いや…少し自身が無くなっただけです」

「私もです…」

「……どうゆうこと？」

落ち込む二人の言葉の意味がイマイチ理解できずに食事を続けた…。

『御馳走様！』

皆が満足した表情を浮かべながら、命に感謝を表す挨拶をする。

「はぁ～此処まで食べるとデザートまで食べたくなるよな～」

「確かにそうですわね」

「本当だな」

シャーリーさん、ペリーヌさん、エイラさんを始め皆が此方に期待の視線を向けてくる。
この視線から分かることは只一つ。俺にデザートを作れと命じている。
しかし普通の料理で数時間掛かった様に、デザートは細かい作業があるため物凄く時間が掛かる。
よって今日は作ることが出来ないと話した。
皆残念がる表情を浮かべる表情を見て、少しばかり考え明日作りましょうか？と言う提案をしてみた。
その言葉に頷くウィッチ達。明日作ることは確定だ。
明日はケーキあたりでも作ろうかと考えながら席を立ち、片付けをしようとした瞬間ハルトマンさんから衝撃的な言葉が発せられた。

「…なら明日は私も手伝おっかなー」

『！？』

人一倍驚いているバルクホルンさん。
普段の生活が非常にずぼらで、常に眠たそうな気だるい感じの振る舞いをし、自分の部屋の掃除もままならない人が自ら率先して手伝うと言ったのだ…驚くのは当たり前。

「あのハルトマンが自ら…？」

「料理を手伝う…？」

「ちょ、ちょっとトゥルーデにミーナ少し酷いんじゃない！？」

カールスラント組の二人に言われ、少し頬を膨らませ怒り気味に言うハルトマンさん。

確かハルトマンさんは料理が下手で、危険だからと言われ誓約書まで書かされたと聞いたが…。
そこまで危険な料理なのだろうか…？

「お前は料理をするな！大惨事になる！」

「ええ～。いいじゃん別に。たまには私だって料理がしたいよ」

「……良いでしょう。許可します。但し必ず黒神君の言うことを聞くこと。いいわねハルトマン中尉」

「えっ！？いいのかミーナ！？」

「有難うミーナ♪」

結果的に明日はハルトマンさんと共同作業という形になった。
その時のバルクホルンさんは表情は絶望に満ち溢れていた…。

翌日…

現在食堂のキッチンには黒神とハルトマンの二人きり。

スポンジの焼き時間等を考え、朝九時頃に作業を始めることにした。
この時間帯には寝ているハルトマンさんだが、今回はきちんと起きて何時でも作業が出来る状態。
此方としてもその方が非常に有難い。

「それじゃあまずは卵を割りましょうか」

「分かった！せーのっ！」

卵を握りしめ腕を振り上げ、思いっ切りテーブルに卵をテーブルに叩き付ける。

その瞬間、無残に辺りに飛び散る白い殻や黄卵。さようなら一つの命。君の死は無駄では無かった。

「えっと…卵はもっとこう優しく…」

「ううん？じゃあ…」

今度はスロースピードでテーブルに卵を叩き付ける。

叩き付けられた卵は軋む音を数秒奏でた後、一個目と同じように砕け散る。

これは少しばかり大変だなと心の中で思った。

その後も色々と困難が立ち塞がったが、何とかケーキを作り上げた…。

「これが…ハルトマンが作ったケーキ」

「意外とよく出来ているわね」

カールスラントの二人組が不安そうな面持ちで呟く。

皆の前には温かい紅茶の横に綺麗に作り上げられたショートケーキ。

クリームが少し崩れているが、この位の崩れ位なら別に気にするほどではない。

「今回は黒神も居るからな」

「私だって頑張ったんだから！」

エイラさんの言葉に拗ねた声色で言うハルトマンさん。
各々が意を決して恐る恐るケーキを口に運び入れる。
緊張感が張り詰めた沈黙が流れる。
そして数秒後…

「美味い…」

バルクホルンさんが驚きの表情で言う。
そして再びフォークでケーキを一口サイズに切り、今度は確りと味を確かめる様に食べ始めた。

「うん…美味い！美味いぞハルトマン！」

「本当！良かったー」

皆から美味しいと声が聞こえる度に、安堵の溜め息を吐くハルトマンさん。
そんな姿を見て自然と笑みが零れる。

「…有難うね上総。手伝ってくれて」

「当然の事をことですよ。それに途中からはハルトマンさんが一人で作り上げていたんですよ？気付きませんでしたか？」

「え…そうだった…かな？」

「それだけ真剣に作っていたんですよ。とても美味しいですよ。ハルトマンさんの手作りケーキ」

俺は正直な感想を笑顔を添えて言った。

すると、

「ッ／／／！？……有難う上総♪」

顔を赤らめ、照れた表情で素直に喜んでいた。

その後も皆で手作りケーキの味を楽しんだ。

この時食べたケーキが、今まで食べてきたケーキの中で一番美味しく感じられた…。

第三十三話：料理（後書き）

また深夜投稿…。最近深夜投稿ばかりだなと感じています。

次回は…上総と整備兵の絡む話しを書けたらいいなと思っています。尤も書けたとしても物凄い短い文章になると思います。番外編…みたいな。

第三十四話　ＥＸ：整備兵（前書き）

タイトル通りの第三十四話　ＥＸです。
今回はウィッチ達は登場せず、オリキャラが登場します。

第三十四話　ＥＸ：整備兵

人には様々な日常生活が存在する。
第５０１統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』の日常生活は一般の人々とあまり違いは無い。
大きく違うところと言えば一つ。この世界に突如姿を表した異物…ネウロイとの戦闘があることだ。
魔力を持つ少女達が、機械の翼であるストライカーユニットを駆使し、異物をこの世界から排除する。
俺が生前存在していた世界では絶対に有り得ないこと。
それと同様でこの物語の世界が本当に存在していることが驚きだ。
『ストライクウィッチーズ』は俺の世界では架空の二次元物語と扱われている。
俗に言うアニメーションだ。
その二次元の世界の中に俺…黒神　上総が存在している。
なら今の存在も只の平面或いは絵なのか？……いやそんな筈は無い。
呼吸ができる。自分を立体的に捕えることも出来る。空腹感がある。
平面や絵では得ることが出来ないことが何でも出来る。
即ち俺は今アニメーションの平面では無く、立体的に捉えられる一人の『人間』として生きている。
だけどその事が事実であるという確証はまだ得られない。
さて…そろそろ脳内が困惑して色々と故障（エラー）を起こしそうなので考えるのを止める。

話しは最初に言った日常生活に戻る。
この部隊には魔女（ウィッチ）達の日常生活と他に、もう一つの日常生活が存在している。
それはネウロイを排除する魔女（ウィッチ）達を陰から支える重要な役割を与え

られている人々。
空を飛翔するのに必要なストライカーユニットを不備の無いように、一つ一つに神経を集中させながら整備を丁寧に行う者――――整備兵と呼ぶ。
この人達が居る御陰で、魔女（ウィッチ）達が空を飛翔できると言っても過言ではない。
そして現在俺は、その整備兵達の元へ向かっている。
整備兵の皆に頼まれている物を持って…。

「皆さーん！頼まれた物を持って来ましたよ！」

昼間なのに薄暗く、油臭い空間で黙々と作業に励んでいる整備兵達に声を掛ける。
それに気付きストライカーユニットの作業を一時中断し駆け足で此方に向かってくる。
整備兵達からは待ってました！という声が上がる。
皆に頼まれた物とは、休憩時に摂取する茶菓子と紅茶の事。
男同士なので交流が結構深く、暇なときは時々作業場にお邪魔し、作業の手伝いをしている。
『魔導エンジン』の改良方法を共に考えたり、日々の鬱憤を聞いたり等もしている。
そして茶菓子の事は、整備兵の一人が『黒神は料理が上手い』というのを耳にしたらしく、その情報をこの部隊に所属している全整備兵に言いふらし、何故か茶菓子を作る羽目になってしまった。
一体誰が言いふらしたんだ…？と考えている俺に対し、美味いと連呼しながらどんどん茶菓子と紅茶を胃袋に収めていく整備兵達。
誰もが同じ反応をする中、少し違った態度を表す男が三人。

「かぁ～～～！何でこんな美味いんだよ！」

「そうだね…。まるで女子みたいだ」

「信じられねぇ…」

そう言いながら絡んでくる三人。

「涼！正和！安さん！文句言うなら食べるなよ！」

「俺は褒めてんだよ！」

俺の頭をクシャクシャに掻き撫で回す涼。

一色　涼…何時もテンションが高く元気な奴。馬鹿だが整備の腕は確かな者。年齢は２０代前半。

「楽しそうだな涼」

突如加勢に加わり脚を乱暴に踏みつける正和。

南　正和…冷静沈着で大人しい奴。優しそうだが性格はドＳ。年齢は涼と同じく２０代前半。

「やめねぇかお前等！」

涼と正和の頭から鈍い音が響く。

痛さのあまり頭を押さえ鉄の地面に蹲る二人。

その光景を見て爆笑する整備兵達。

鉄槌を下したのは、整備兵達を纏め上げるリーダーで、皆からは安さんと呼ばれる人。

髪の所々に生えている白髪と、年季を感じさせる顔立ちの、３０代後半の男…鰐島　安弘。

「ふぅ…助かりました。有難う安さん」

「気にするな。お前等黒神に謝っとけ！」

安さんは未だに頭を押さえ蹲っている二人に説教をする親みたいな声で言い放つ。

二人は顔だけを上げ、不満そうな表情で此方を睨みつけてくる。

俺が悪いのかよ…。

「少し意地悪をしただけですよ」

「そうだ！正和の言うとおりだ！俺は悪く無い！」

謝る気が微塵も感じられない二人に安さんの更なる鉄槌が下った。

再び鈍い音が薄暗い空間に響き渡る。その光景を見て苦笑を浮かべる。

「あはは…じゃあ俺はこれで…」

「おい上総。お前この後時間あるか？」

皆が茶菓子を食べ終えた事を確認した為、背を向け自室へ戻ろうとした時、不意に涼に問いかけられる。

この後は特にやることが無い。

内部の損傷は自動で直されるので、放置していても安心できる。

俺は涼の問いかけに無言で頷くことにした…。

現在整備兵達の食堂には黒神とあの三人が居る。

目の前には液体の入った瓶が三本並んでいるが、全てが同じ瓶では無い。

安さんの前には日本語のラベルが巻かれている茶色い瓶が置かれている。

もう二本は英語のラベルが巻かれているとこまでは同じだが、瓶の形が異なる。

正和の前には日本語のラベルが巻かれている瓶と殆ど同じ物。

涼には横幅が大きく太い瓶だ。

俺はこれを見て瞬時に理解する…これは酒だと。

しかし何故俺が呼ばれたんだ…？

「何で…？」

「何でって…理由が必要なのか？仲間と酒を飲むことによ」

涼の発言に頷く正和と安さん。

そう言われると結構嬉しいのだが、俺は酒なんて一度も飲んだことが無い。

況してや未成年なので飲むことも許されない。

「悪い…。俺まだ未成年――――――」

「関係無い関係無い。ほらウォッカだ…飲め！」

「涼の言うとおりだよ。さて…上総は当然リヴザルトだよね？」

「全く…強引の奴らだ。黒神は焼酎だろう？」

話しが勝手に進んでいく。

もうこれは覚悟を決めて飲むしかない様だ。

正直酒を飲んで酔わない自信は無いが、今はこの人達と楽しめれば良いと心から思った…。

――――――腕輪内――――――

「あー……マジで暇だ」

自らの脳内で創造（イメージ）し創り出したソファーに仰向けになりながら呟く。

メリクリウスの様に読書の趣味は無い。

一体読書の何処が面白いのだ？読書は只無造作に並んだ文章を読むだけだ。時間の無駄に過ぎない。

なのにあいつは読書は面白いと言い続けてくる。理解不能だ。

ウルカヌスは常に自らの能力上昇に励んでいる。

恐らく未だ制御できない『地獄の力』の精神鍛錬だろう。

ウルカヌスは怪火の他に『地獄の力』の力を有する者だが、一種類しか制御できない欠陥品だ。

以前天界でウルカヌスが調子に乗って力を使った時、案の定あいつは両腕・両足を燃え尽くされる大怪我を負った。

あの時は俺やユピテルが立ち合っていたから直ぐに治療が行えたが、もし居なかったら確実に死んで、天界から消滅していただろう。数百年前の事だからかなり懐かしく感じる。

思わず口元が緩んでしまう。

「…気持ち悪いですね」

「おわぁ！？メ、メリクリウス！？何時からそこに…！」

突如横からメリクリウスの声により、ソファーから飛び起きる。
口元を引き攣らせ、若干引いているように見受けられる。

「はぁ…最悪だ」

「まぁまぁ…落ち込まないで下さい。それよりちょっと…」

手招きをするメリクリウス。
俺は不審に思いつつもソファーから立ち上がり、乱れている服装を少しだけ整え、メリクリウスの後ろをついていく。
数秒して円状のテーブルと三つの椅子がある場所へ連れてこられる。
既にウルカヌスは椅子に腰を掛け、ジッとしている。
意味が分からずその場に立ち尽くしていると、

「席に着いたらどうだ…ネプトゥヌス」

紅い瞳を此方に向け静かな声で呟くウルカヌス。
その言葉通りに席に着く。
すると目の前に一本の酒瓶が差し出される。
二人の前にも同じ酒瓶が置いてある。

「どうゆう事だ…？」

「久しぶりに三人で共に一杯やりたいと思いまして」

「同感だ…」

酒瓶を持ち上げ、懐かしむような表情を浮かべる二人。
確かに…この三人だけで酒を楽しむのは久しぶりの事だ。
天界ではメリクリウスは頻繁に書庫に籠っており、顔を合わせることが結構少なかった。
ウルカヌスは相変わらず鍛錬一筋でまともに話す機会も無かった。
そして俺は…寝ては起きての繰り返しだ。
だからこうして三人で酒を楽しむのは本当に久しぶりの事なのだ。

「ふっ……今回は…お前の意見に賛成だな」

俺も酒瓶を持ち上げ、テーブルの中心に運ぶ。
互いの瞳で合図を送り、

「「「乾杯」」」

酒瓶同士を軽くぶつけ合う。
キィン…と静かで綺麗な音が空間に響いた…。

――――腕輪内　ｏｕｔ――――

――――おまけ――――

「ぎもぢわるい……」

「だ、大丈夫かい…涼……おげぇ」

「調子に乗り過ぎだ二人とも…うぷっ」

調子に乗って飲み過ぎ力尽きた三人組に対し、頬を少しだけ赤らめ依然元気な黒神。

「大丈夫ですか?皆さん?」

「「「無理かも…」」」

今回分かったことは只一つ…黒神　上総は酒に非常に強い。

第三十四話　ＥＸ：整備兵（後書き）

今回登場したオリキャラは後に本編に大きく関わらせたいと思います。
と言っても結構先の話しです…。

余談ですがリヴザルトはかなり特殊な甘口ワインの事です。チョコレートと合わせるようなワインです。

次回は原作を中心に書きたいと思います。
これからも応援宜しくお願いします！

第三十五話：空より高く：前編（前書き）

第三十五話　前編です。
深夜投稿なので、誤字・脱字がある場合は報告をお願いします。

第三十五話：空より高く：前編

日が西に沈みかけ海と空が茜色に染まる頃…黒神は瞼を閉じ滑走路に一人で佇んでいる。
微かに身体を撫でる様な風が潮の匂いを伴い通り抜ける。
それと何処からか聞こえてくる談笑する男達の声。

「いくか……」

大きく息を吸い身体に新鮮な酸素を送り、ゆっくりと吐き出す。
そこで小さな声で一言…天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）と呟く。
その言葉に反応した天使機関から魔力が廻るのを感じられた。
光が身体の周りに出現し、優しく包み込んでくれる暖かさ。
しかしそれを感じられるのも一瞬…光が辺りに弾け飛び、あの姿が露わになる。
純白の美しい双翼。瞳は黒色から紅色へと変化。
天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）は成功だが、やはりまだ問題が見受けられる。
ａｅｇｉｓ（絶対防御圏）やａｅｇｉｓ＝Ｌ等の防御系統の武装は正常稼働しているが、Ａｒｔｅｍｉｓ（永久追尾空対空弾）やｃｈｒｙｓａｏｒ（超振動光子剣）等の敵と渡り合える武装は未だに回復していない。
魔力機関も武装創造（ウェポンクリエイト）を除けば同様の事である。
直ぐに修復されてほしいものだが、あまり贅沢は言えない。自分の所為なのだから…。
兎も角、可変ウィングシステムが正常起動しているだけで今は有難い。
今の状況を鼻で軽く笑い、天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）を解除しようとしたとき、背後からストライカーユニット特有のプロペラ音

が耳に届いた。
今５０１統合戦闘航空団の殆どの魔女達（ウィッチ）は作戦に出撃している。
俺は未だ完治していないという事で、出撃不許可…基地にお留守番だ。
自分の無力さに苛立ちを感じる。で話しは戻るが、背後から近付いてくるプロペラ音。
空は夕暮れ時…ならば夜間哨戒だと分かる。この部隊のナイトウィッチはあの人だ…。

「あっ…黒神さん。翼が…」

「ええ。何とか修復が出来ました。サーニャさんはこれから夜間哨戒ですか？」

「はい…」

控えめに頷く銀髪黒猫少女。
サーニャ・Ｖ・リドヴャク…本名『アレクサンドラ・ウラジミーロヴナ・リドヴャク』
一見して線の細い、儚げな少女。夜間戦闘を専門とするナイトウィッチ。ナイトウィッチに必須の魔導針（哨戒レーダー）を魔力によって頭部に発現させ、地平線までの飛行物体の深査が可能の他、意識を集中させることにより遠方のラジオの電波や、果てはネウロイの『声』まで聴き取ることが出来る優秀なナイトウィッチなのだが、夜間の任務を主としているから昼間は何時も眠そうにしている。

そのため会話をする機会が全く無い。この部隊に訪れサーニャさんとまともに話したことが恐らく一度も無い。
ここは会話する良い機会だと思うが、彼女はこれから夜間哨戒がある。邪魔をするわけにはいかない。

「そうですか。お気をつけてください」

「有難う御座います…」

軽くお辞儀をして空に飛び上がる。

天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）を解除し、飛ぶ姿を手を振り只ジッと眺めた。

眺めて数秒、自然と溜め息が漏れた。

理由はある…自分の勘違いなのかもしれないが、サーニャさんは俺に対し『恐怖』の感情を若干抱いているんではないかと思っている。

元々部隊に溶け込むのが不得意な性格。いきなり現れた野郎に『恐怖』の感情を抱くのは当たり前のことかもしれない。

だがその『恐怖』の感情と共に別の『恐怖』の感情が此方に向けられている。

どんな『恐怖』なのか…一応仮定の話で考えてある。

多分だが彼女は俺に対し、『死の恐怖』の感情を抱いているのではないかと思う。

ウルカヌスの戦闘時負った左腕の傷。ネプトゥヌスの異常な殺気の重圧感。

人間が死ぬかもしれない間際の光景を見たり、只の殺気で自分の生命が刈り取られるのではないかと錯覚させてしまったり等、多くの事を体験させてしまった。

そして生まれる結果が、『黒神　上総に近付いたら生命が絶たれる』という考えだ。

その考えが刻み込まれている以上、近付くことも話すことも控えるだろう。当然の事だ。

もう一度溜め息を吐き、空を見上げると、作戦に出撃していた皆が戻ってきたのを確認した。

しかし何故か夜間哨戒に言った筈のサーニャさんまでもが此方に戻

ってきている。
何か問題でもあったのだろうか…？

「まぁ…いいか」

身体に吹く風が肌寒く感じ、滑走路を足早に去った…。

部屋の明りが消灯され、窓から入る星の光が差し込むミーティングルームに集合する５０１のメンバー。
各々が自由に席に着く。俺は出窓の石段に腰を掛けた。石特有の冷たさが、尻から全体に伝わる。
『石の上にも三年』の言葉は正にこうゆうことなのだろうか……この事は置いといて、今は目の前の事に集中すべきだ。
古びた石壁にプロジェクターで映し出される細長いタワー状のネウロイの写真。
その横にはこれから作戦の説明をするであろう坂本さんが、物差しを漫画で見られる鬼教官の姿勢で立っている。良い絵になるなぁ…。
そんな事を思いながら、次々映し出される写真に眼を通す。
空軍の偵察機が撮影したのは有難いが、ノイズしか映っていないようだ…。

「これが昼間現れたネウロイだ。全体を捉えようとしたらこうなった。全長三万メートルを超えると推測される」

三万…高さ三十キロメートルか。
成層圏は気温がほぼ一定する地上約十キロメートル以上の大気圏…
余裕で越えているな。

なら今回の作戦は時間との勝負なら重要視される人物は…。

「これが毎時およそ十キロという低速でローマ方面に移動している。厄介なのはこいつのコアの位置だ……此処だ」

手に持っている物差しでネウロイの頂点に当て、コアの位置を示す。あの位置のコアを破壊する場合は問題点が幾つか浮き彫りになる…。

「ですが、私達のストライカーユニットの限界高度は精々一万メートル…」

ペリーヌの言う通りだ。
只のストライカーユニットではコアの位置まで辿り着くことは不可能。
無理に飛んでも魔道エンジンが故障し墜落する可能性が大きい。

「確かにそうだ。だから作戦にはこいつを使う」

プロジェクターに映し出されているネウロイの写真から、ストライカーユニットの設計図らしきものに移り変わる。
設計構造を見る限りこいつは結構危険な物だ…。

「ロケットブースターだ」

「これがあればコアのあるところまで飛べるんですか？」

「いや。そんな簡単な話じゃないよ」

この場に居る全員の視線が黒神に向けられる。

「この作戦で使用するブースターは強力な分、魔法力を大量に消費するから短時間しか飛行が出来ない。そして敵（ネウロイ）は上空三万メートルと人間の限界を遥かに超えた超高々度の未知の領域に位置している…。

そこで今回の作戦を成功させるには二つ…。

一つはブースター装着者の魔法力の出来るだけ保持すること。まぁ、これは皆が途中まで装着者を運べばいい。

二つは一撃で敵（ネウロイ）のコアを撃ち抜くこと。その為には瞬間的かつ広範囲に渡る攻撃力を備える者としてコアの破壊は――――――ってどうしたんですか？」

皆の表情が驚きに変化しているのに気付き、一旦言葉を切る。

坂本さんは苦笑しながら話しの続きをと言う。

「はい…？で続きですが、コアの破壊はサーニャさんが適任だと思われます」

「うえっ！？」

エイラさんはトロピカルジュースを飲んでいるストローから口を離し、驚きの声を挙げる。

それと同時に綺麗な白髪がふわっと揺れる。

「はいはいはい！だったら私も行くぞ！」

今度は手を大きく振りながら共に作戦に参加すると意見する。

作戦を率先して参加する事は良いことなのだが…。

「別に構いませんけど…。時にエイラさん、シールドを張ったことはありますか？」

「シールド?自慢じゃないけど私は実践でシールドを張ったこと何て一度も無いんだ!」

「なら無理ですね」

「うん無理だな!……え”っ!?な、何でだよ!?」

一度は腕を組み自慢気に語ったものの無理と言葉を聞き席を立ち上がり、不満な声で問いかけてくる。
唯一俺の言葉の意味を現在理解しているのはカールスラント三人組と坂本さん。
残りの人は頭上にクエスチョンマークが浮かんでいるようだ…。

「今回の作戦はブースターを使用する上に、極限環境での生命維持。そして攻撃と…とても多くの魔法力を消耗します。となるとサーニャさんに自分の身を守る余裕は無いんです。
だからもう一人…サーニャさんの盾と為り護る者が必要なんですよ」

「わ、私は別にシールドを張れないわけじゃないぞ!!」

「でも実践で使用したこと無いのでは?」

「その通りだ!」

腰に手を当て、シールドを実践で張ったことのないのを誇らしげに威張る。
そんなに威張られても困るだけなんですけど…。
エイラさんは盾役を引き受けると意見しているけど、シールドが張れなくては全く意味がない。

ここは尤も強力な芳佳に任せるべきだが、敵（ネウロイ）は高度三万キロに滞在している存在。
どんな危険が待ち受けているか誰も分からない…仕方ない。

「……今作戦の盾役は俺がやります」

「しかしお前はまだ――――」

「大丈夫ですよ坂本さん。魔法機関は未だに故障中ですが、天使機関なら一部回復しています。飛ぶことやシールドを張ることくらいなら可能です。
速度や推進力もロケットブースターに合わせられますから…」

真っ直ぐな目線を向ける。周りのウィッチ達からは今作戦の参加に対し否定の声が挙がっている。
エイラさんだけが何やら違う理由で否定をしているが…聞かないことにしよう。
坂本さんは…少し考えている表情を浮かべているが視線は此方に向けたまま。

「……お前がその眼をする場合は幾等私達が言っても無駄だったな。分かった。お前に任せる」

「了解――――うわっ！？」

否定の声が挙がっている中、自分の右側から嫉妬と怒りが入り混じった感情が向けられているのに気付き、その方向に顔を向ける。
そこには雪国育ち特有の白い肌。綺麗な薄紫色の瞳。ふわりと揺れる髪から、微かに香る甘い匂い。
正体は白い歯を剥き出しにし、獣の宛らに唸るエイラさん。

目線を合わせる為か、態々俺が腰を降ろしている石段に座ってきた。
なんと言うか…その…。

「顔が近いです…エイラさん」

それと同じく数名のウィッチ達からの視線が物凄く怖いです…。

――――翌日。
リーネの使用武器である［ボーイズＭｋ．Ⅰ対装甲ライフル］の銃声を聞き、急いで見晴らしの良いテラスに移動する。銃声は地上からではなく、上空から響いた為だ。

「着いた…うん？何だアレは？」

空中には不思議な光景が広がっていた。
簡単に現在起きている状況を整理すると、リーネがエイラさん対装甲ライフルで狙撃し、それをエイラさんが回避行動を行い、銃弾をペリーヌが防ぐ…。
一体何なんだこれは……銃弾の無駄遣いじゃないか。

「あっ…上総」

あまりにも不思議な光景を眺めていると、横から突然名前を呼ばれる。
声のする方に顔を向けた先には、頬杖を付くハルトマンさんと身体を軽くテラスの石段に預けるバルクホルンさんが居た。
この二人ならあの謎の光景の意味を理解しているかもしれないと思

い、尋ねてみた。

「シールドを張る練習だそうだ」

「えっ…アレがシールドを張る練習？」

色々な角度から見てもアレはシールドを張る練習とは思えない。
エイラさんは本能的なものなのか、銃弾全てを華麗に避けてしまう。
シールドを張る練習には程遠い。

「はぁ…俺も一度でいいからストライカーユニットを履いてみたいなぁ…」

「上総はストライカー履けないの？」

「はい…。何の因果か分かりませんけど、幾等魔力を流し込んでも全く反応しないんですよ…。念の為魔導エンジンに不備が無いか確かめたんですけど、異常は何処にも見受けられませんでした…。俺…ストライカーユニットに嫌われているんでしょうか？」

そう…俺は何故かストライカーユニットが装着しても何も変化が起きない。
可視化する筈のプロペラや魔法陣も現れなかった。
魔導エンジンの故障と考えたりなどしたが、この基地の整備兵達がそんなヘマをするわけがない。
そう思いながら確認をしたところ案の定故障なんて一つも無かった。
じゃあ一体何が原因なんだ？

「にゃははは！そんなことは無いと思うよ。それよりも身体は本当に大丈夫なの？」

「軽く受け流された…。えっと…身体は昨日説明した通りで、飛ぶことやシールドを張ることだけは満足に出来るまで回復しました。武装の方は未だ修復中ですが…。だから安心してください。サーニャさんは例え俺が死んだとしても絶対に護り抜きますから」

「あははっ…死んだら護ることなんて出来ないよ」

「そこを突かれたら痛いですね…」

「だから……」

急にハルトマンさんは顔を俯かせたまま、言葉に間を開け始めた。数秒後、重そうな口を静かに開く。

「死ぬなんて絶対に言わないで。冗談だとしても…！」

「……」

彼女の眼が確りと俺の眼を逃がさないよう鋭く捉える。表情も俺が原因で何度か見てきたもの…怒りだ。

「うむ…ハルトマンの言う通りだ。死ぬなんて言葉を二度と口にするな。もし同じ事をまた言うのであれば、私はお前を思いっ切り殴り飛ばすぞ。

いいか黒神。私達は誰一人欠けてはいけないんだ。この部隊は十二人でやっと成り立つんだ。その十二人で成り立っている部隊でお前が欠けてしまったら、今までのことが全て崩れ去ってしまう。それはとても悔しくて、悲しいことだ。だから死ぬなんて言葉二度

と口にするなよ。
私達は大事な仲間でありそして…」

バルクホルンさんからも厳しく叱られている。
軽はずみで言った発言がここまで発展してしまうなんて…不覚。
こうして叱られたのは結構久しぶりだが、次のバルクホルンさんの発言で先程のことが頭から完全に抜けてしまう。

「……家族だ」

「ッ！？か……ぞく…」

真剣で偽りの無い真正面からの『家族』という言葉。
過去に封じ込めた筈の出来事が恐ろしいぐらい鮮明に脳内で流れ始める。
流れるのは血独特の臭いに支配された赤い空間。
唯一『家族』と呼べる存在で、初めて俺が本気で――――――

「黒神…？」

「ッ！な、何ですか…バルクホルンさん」

「顔色が悪いようだが…大丈夫か？呼吸もかなり乱れ――――――」

「だ、大丈夫です！俺はもう戻りますから…！」

居るだけで苦しさが身体を廻る為、二人から背を向け逃げるようにこの場を立ち去った…。

宿舎の廊下を只ひたすら走る。その度に舞い上がる少量の埃。
周りのことなど視界に入らない。呼吸が激しく乱れる。
そんな状態でも脳内にはあのことが…。
拳を強く握りしめ角を左側に曲がった瞬間、小さな何かと勢い良くぶつかる。
衝撃で後ろに大きく弾き飛ばされ、尻餅を着く。

「うぅ…サーニャ……さん？」

「っ……」

サーニャさんは何も言わず俺の横を通り過ぎる。
その時に右頬に当たった生温かい一粒の雫。
振り返りその姿を見ると、微かに肩が震えているのが視界に入る。
理解した。

「泣いていたのか…？」

涙の付いた右頬を擦りながら再び後ろを振り向くが、既にサーニャさんの姿は無かった。
泣いた理由は分からないけど、この場合聞くべき相手はあの人だ。
立ち上がり尻に付いた埃を払い、今度はゆっくりと歩き始めた…。

第三十五話：空より高く：前編（後書き）

久しぶりの投稿だなと感じました。

突然ですが皆さんに質問があります。

一つは数字の表し方で、見栄えとしては漢数字と普通の数字ではどちらの方が良いのでしょうか？例　漢数字：三十　数字：３０

二つは単位の表し方で、漢字で表す単位と普通の単位で表す場合はどちらが良いでしょうか？例　漢字：キロメートル　単位：ｋｍ

最後はエイラの話し方です。やはり語尾辺りを片仮名に変更した方が良いのでしょうか？

第三十六話：空より高く：後編（前書き）

第三十六話です。

第三十六話：空より高く：後編

真中に赤い猫の刺繍が施されている黒いクッションを抱きながら、ベットに身を預ける。
明日は作戦決行日。確りと睡眠をとって明日に備えるべきなのだが、眠気なんて全く無かった。
私が身体を預けているベットは二段式の物。本来なら二段目にサーニャが可愛らしい寝息を立てながら寝ている筈なのだが、そこにはその姿が見られない。
何故居ないのか？簡潔に言うと、私はサーニャと喧嘩をしてしまった。
喧嘩の原因は私の気持ちが引き起こしたもの。
黒神に貸すと言ったマフラー一本で嫉妬心を抱き、今のサーニャは私の事を見てくれない。それが堪らなく悲しくて、悔しかった。
必死に感情を抑えながら言葉を聞き続けたが、『諦めるから出来ない』と聞いた瞬間、抑えつけていた感情の歯車が回り始めた。苛立ち等の入り混じった感情をぶつけてた。
自分の言動に気付けばサーニャの目尻には涙。走り去っていくのを引き止めようとしたが、言葉が上手く発せられなかった。扉に掛けてある白いレースのカーテンが静かに揺れていた。
あの時の事を思い出しながら、身体を動かし姿勢を変える。
すると、扉が三回軽く叩かれる。静かに鳴り響く木独特の音。

「誰だよ…」

「黒神です。エイラさん」

入れ何て一言も言っていないのに扉が勝手に開かれる。

そこには紅茶の淹れたカップを二つ持った黒神が居た…。

「未だ起きていたんですね…」

「お前だって…」

近くにある円状の木造テーブルに温かい紅茶を淹れたカップを置く。
紅茶の心地良い匂いと湯気が部屋に広がる。
テーブルに付属されている小さな椅子を引き、腰を下ろす。
背を凭れると木の軋む音が静寂の空間に響き渡る。
エイラさんはベットから上半身のみを起こし此方を睨んでいる。

「温かい内に飲んだらどうですか？冷めてしまったら美味しく無くなってしまいますよ」

「いらねぇよ…。そんな気分じゃない」

顔を俯かせながら怒りを孕んだ声色で呟く。相当苛立っているようだ…。
カップを持ち紅茶を啜る。ほんのりとした甘さが口内を満たし、喉へ流れていく。
ほっと一息吐き本題に入る準備を行う。

「サーニャさんと喧嘩でもしたんですか？」

「っ……お前には関係ないだろう」

図星か…作戦決行日前夜に喧嘩とはあまり良く無いな。
況してや今作戦で重要視される人物と喧嘩か…どれ程の支障が及ぶ事やら。

「関係なく無いですよ。何時も仲の良い二人が――――」

「五月蠅い！！」

顔を俯かせたまま言葉を阻むように発せられる怒号。部屋の空気がピリピリしたものへ変化する。
腕に強く抱かれている赤い猫の刺繍が施された黒いクッションが、怒りの大きさを表す。
エイラさんは素足のまま冷え切った石の床に足を投げ出し、その場で立ち上がる。

「何だよお前！皆より少し強いシールドを張れるからって偉そうにしやがって！どうせシールドを張れない私を馬鹿にしに来たんだろ！勝手に人の部屋に入ってきて…、勝手に私が悩んでいることに漬け込みやがって…迷惑なんだよお前は！！」

「……」

「出てけよ……出てけよ！！」

黒いクッションが顔面目掛け飛んでくるが、即座に左手で受け止められる。
柔らかな風が通り抜け、髪がふわっと揺れる。先程まで抱き締めていたから、生温かい感覚が残っており、その感覚が左手に伝わる。
呼吸を乱し鋭い眼光で睨みつけるエイラ。無言で席を立ち上がる黒

神。

投げられたクッションを円状のテーブルに置き、最後に今一度紅茶を啜る。

自分のカップだけを持ち、無言で扉の近くまで歩いていく。

此処で迷惑を承知で助言の言葉を一つ掛けておく。

「…現状維持では、後退するばかりですよ」

「……っ」

白いレースのカーテンを掻き上げ、この場を立ち去る。

喧嘩の原因は聞き出せなかったが、助言はした。後はエイラさんの気持ち次第。

自分が今忘れていることに気付けば…。

明日の作戦に備える為、素早く自室へ戻った…。

「ふっふ～ん♪ルッキーニ、似合っているじゃないか」

「うう～…あづいよぉ～…」

成層圏に昇る準備として各自がコート等を用意するが、地上で着せられたルッキーニは暑さが我慢できない様子。

赤いコートを羽織り、黄色いマフラーを首に巻き付け、顔を赤らめ若干額が汗ばんでいる状況から本当に暑いという事が分かる。一方シャーリーさんは何処か楽しんでいる様子。

ちなみに俺はサーニャさんのマフラーと、バルクホルンさんのコートを貸して貰っている。

「我慢だ、ルッキーニ。成層圏は無茶苦茶寒いんだぞ」

「寒いのやだぁ～！」

「ははははっ。じゃ、これも着けてっと」

羽毛で編まれた耳あてを木箱から取り出し、ルッキーニの耳に着ける。

黒緑色の髪と小柄な身体がビクッと震え、可愛らしい悲鳴を挙げる。

思わず笑みが零れてしまう。

「うにゅ～…助けてぇ～…上総ぁ～～～」

暑苦しそうな表情を浮かべながら左腕に抱きついてくるルッキーニ。

全体重を圧し付けられている為、布越しに微かに伝わる柔らかな感触。

当たっていると指摘をするべきだが、そんな事をしたら他の魔女達から確実に鉄拳制裁が下る。

酷い場合は機能不能までに陥る可能性が大きい。一体どうすれば…？

覚悟を決め指摘し鉄拳制裁を受けるべきか。それともこの感覚を耐え抜くか…。

「うにゃ？どうかしたの？」

「えっ！？いや、何でもないよ。成層圏は本当に寒いから、ちゃんと防寒着を着用しないと凍え死ぬから。だから今は我慢しな」

頭を優しく撫で回しながら言う。
ルッキーニは猫みたいに眼を細め、気持ちよさそうな表情を浮かべながら頷いた。
やはり身体や心が子供でも、一人の女性であることは間違いない。
さらさらと触り心地の良い髪質。ほんのりと香る甘い匂い。
懐かしい…何もかもが懐かしく感じる。確かあの子もこんな髪を――――

「もう良いんじゃないか…黒神…！」

突如正面から聞こえてくる声の方向に顔を向ける。
そこには腕組みをし、口元を引くつかせているシャーリーさん。
まさか腕に当たっているのに気付いてそれで…。

「ルッキーニもいい加減黒神から離れろよ」

「ええ～何で～？」

「な、何でってそれは…その…／／／」

今度は態度が一変……頬を赤らめ口籠るシャーリーさん。その態度に疑問を抱く黒神とルッキーニ。
だが数秒後、疑問を抱き続ける黒神に対し、ルッキーニは何か思い付いたような表情を浮かべる。

「ああ～…もしかしてシャーリー……嫉妬して――――」

「わあああぁぁぁ！！？　へ、変な事言うなよ／／／！！」

ルッキーニの小さな口を慌てた様子で押さえるシャーリーさん。

何で慌てる必要があるんだ？別に変な事は言っていない筈だぞ。
只嫉妬して…――――――誰にだ？

滑走路の先端に現れる巨大な魔法陣。
魔導針と綺麗な銀髪が特徴的な少女。魔女とは異なる翼を持ち、神々をも従える青年。
その二人を足場から支える他の魔女（ウィッチ）達。

それぞれの口からカウントダウンが始まる。微かな緊張感。荒々しく鳴るストライカーユニットのプロペラ音。
不安気なサーニャさんの顔を見て優しく微笑むが、頬を赤らめ眼を逸らされてしまう。少し落ち込む。
そんな事を思いつつ溜め息を吐くと同時に、第一打ち上げ班のストライカーユニットが起動する。
排気ガスを撒き散らしながら徐々に速度が上がり、敵本体まで飛行が始まる。
作戦はこうだ。六人からなる第一打ち上げ班により通常動力によって高度一万メートルまで上昇。限界高度一万メートル到達後、第一打ち上げ班は離脱。
第二打ち上げ班は、速やかにロケットブースターに点火。俺とサーニャさん両名の突撃班を高度二万メートルまで打ち上げる。
その後、サーニャさんはブースターに点火。俺は可変ウィングシステムを起動させブースターの推力に合わせながら、ネウロイのコアがある高度３３，３３３メートルを目指し更に上昇。弾道飛行に移り、ネウロイのコアに向かう。
高度三万メートル。気温マイナス七十度。空気も無く…魔法が無ければ一瞬で死に至る。少しでも気を抜いたら、生きて帰れる保証は

無い。
そして現在は高度二万メートル付近。既に第一打ち上げ班は離脱し、残りは第二打ち上げ班の芳佳、リーネ、ペリーヌ、そして…エイラさんだ。
此処からは彼女の気持ちの問題。気付いて欲しい…自分が逃げてたこと、向き合うべき者に。

「時間ですわ！」

ツンツン眼鏡の言葉で第二打ち上げ班の私達が突撃班の二人から離れる。離れると同時にサーニャのブースターが点火。黒神の翼が大きく空に広がる。
無力な私は只二人の姿を見守ることしか出来ない。どんどんサーニャとの距離が離され、視界から姿が小さくなっていく。
本当ならあそこに私が行ってサーニャを護りたい。力になりたい。
だけど…だけど今の私には何も――――

「いい加減にしろよ…エイラ！！！」

突然私の名前が怒号に近い声で呼ばれ、顔を上げる。
私を怒鳴りつけたのは、普段温厚で優しい奴…黒神だった。

「何うじうじしてんだよぉ！！お前はたかがシールド一枚張れないだけで諦めて自分から逃げていただけだろうが！誰だって出来ないことをやろうとするのは怖いに決まっている！それで全然良いんだよ！だがな、怖いからって簡単に諦める…それは一番駄目なんだよ！神様の造った都合の良い夢見て…現実から眼を背けて…それがお

前の望んだ幸せかよ！！
一歩踏み出せよ！傷ついても、立ち止まっても、諦めなければ必ず前に歩きだせる！例え疲れて歩き出せなくなっても、お前には支えてくれる大事な子や仲間が居るだろう！俺も全力でエイラを支えてやるよ！だから…諦めるな！！一歩前に踏み出せ！！今のお前の瞳には何が映っている！！
心の底から護ると誓った筈じゃないのか！魅せてみろよ…お前が大事な子を全力で護るかっこいい姿を皆に！俺に！大事な子に！
それともその誓いは真っ赤な嘘なのか！今までの護りたいという気持ちは偽りだったのか！もしそうだとしたら俺がサーニャを護っちまうぞ！それでお前は満足なのか！！
護りたいのか護りたくないのかを今この場で『答え』を叫べよ！エイラぁぁぁぁぁ！！！」

『答え』…そんなのお前に言われる前から決まっている。

「護りたいに決まってるだろう！私が…私がサーニャを護る！」

自分の感情を爆発させ、回転を伴いながら上昇する。
魔法力が少ない筈なのに『護りたい』と思う度に、心の底から嘘みたいに魔法力が湧きあがってくる。

「何してるのエイラ！？」

「サーニャ言ったじゃないか！諦めるから出来ないんだって！私は…簡単に諦めたくないんだ！私がサーニャを護るんだ！！」

黒神の言っていた『答え』を叫びながら、必死に手を伸ばす。
届かない…けど、諦めない！絶対に諦めない！自分の『答え』を確かにする為に…！

すると私の声が聞こえたのか、手が優しく握られる。柔らかくとても暖かい感触。

「黒神…！」

「その言葉を聞きたかったんですよ。エイラさん」

先程とは打って変わり、優しい声と表情を向ける黒神。
こいつがこんなにも暖かい奴なんて知らなかった。
微かな暖かさを感じていると黒神が私の背後に回り込み、脇を強く掴み、純白で綺麗な翼を広げてサーニャの所まで導いてくれた。横目に一瞬映ったあの姿はまるで…本物の天使。

「無茶ですわ！魔法力が持ちません！帰れなくなりますわよ！」

「…私がエイラを連れて帰ります。必ず連れて帰ります」

ツンツン眼鏡の言葉に答えながら、私に頬笑みを向けるサーニャ。
言葉にか、それともこの可愛らしい表情にか、或いは両方にかは分からないが確実に私の顔は真っ赤になっているに違いない。

「後は…エイラさんに任せます」

背後から聞こえてきた優しい声。背中を押していた暖かい手が離れる。
何故か少し名残惜しい気分になったのは勘違いだと思うが…。
すかさず後ろを振り向くとそこには、親指を突き立て口元だけを釣り上げる黒神。
私もそれに答える様に頷いた…。

ロケットブースターのエネルギーが切れ、サーニャのブースターのみで高度三万メートルまで上昇。
段々周り寒くなり、呼吸がし辛くなる。見上げれば地上で見るのと比べ物にならないほどの美しい輝きを放つ星達。手を少し伸ばせば掴み取れるのではないかと思うぐらいだ。地球の丸みが肉眼で確認が出来る。
抱き合っていた身体を離し、サーニャとはぐれない様に手を強く握りしめる。サーニャも同様に握り返してくる。

彷徨うこと数秒、今作戦の目標を発見する。それはネウロイも同じようだ。コアを覆っていた装甲が糸が解れていくような形状に変化する。
その糸みたいな装甲の先端部分にある斑点から赤く細い閃光がコアに集中し充鎮される。
来る…！
コアが巨大な瞬たたきを放った瞬間、本命である赤い閃光が勢い良く放たれる。
私は護りたい…。大事な子を…絶対に護り抜きたい。自分の『答え』を確かなものにする為に…絶対に諦めない！
左手を前に翳し、『護りたい』と強く願うと同時に現れたシールド。閃光はシールドに阻まれ周りに四散される。歯を食いしばりシールドを張り続ける。張り続ける中、サーニャの手がゆっくりと離れ、フリーガーハマーの発射準備を始める。
勢いがあった閃光も徐々に止み始め、遂には先程と同じ世界に戻る。
今が絶好のチャンス。
フリーガーハマーの引き金が引かれ、多段式ロケットがコアに向かい着弾する。

着弾と同時に砕け散るネウロイの破片。激しい爆風が身体を襲い掛かり、サーニャが爆風に流されてしまいそうになる。
爆風をシールドで防ぎながら素早くサーニャの手を取り、離さない様に強く握る。
暗闇に散らばる無数の白い破片。激しかった爆風も段々と大人しくなっていく。

不意に声を掛けるが、此処は成層圏。空気が殆ど無い場所なのだから手を繋いでいても、この距離では声が届く筈がない。サーニャにも不思議そうな表情を浮かべられてしまっている。
顔を声が聞こえる距離まで近付ける。

「聞こえるか？」

「うん…」

「ごめんな」

「ううん、私も。あっ…見てエイラ。オラーシャよ」

視線の先には、雪化粧がされていない幾つもの山脈が並んでいる。
私達の大事な故郷がある所だ。

「ウラルの山に手が届きそう…。このままあの山の向こうまで飛んで行こうか？」

「っ！！…いいよ。サーニャと一緒なら私は何処にだって行ける」

涙が込み上げてきた。視界が涙で霞みサーニャの顔がハッキリと見えない。

眼を擦り涙を拭き取るが、全てを拭うことが出来ない。

「ぁ…嘘。ごめんね、今の私達には帰る場所があるもの」

「……そうだな。私達には帰る場所があるもんな。それにまだ、黒神には謝らなくちゃいけないことが沢山あるからな…」

地上に還る為にサーニャがブースターに逆噴射をかける。身体が私達の帰るべき場所へ落ち始める。

帰るべき場所…大事な人が居て、皆が居て、笑顔が日々溢れる大事な…『家族』が居る場所へ…。

「――――で、一体お話とは？」

作戦が無事終了後、エイラさんに声を掛けられた。

何でも大事な話があるようで、三人だけで話しがしたいらしい。

時間は綺麗な月が輝く夜。場所は油臭く肌寒く感じるハンガー。

何でこんな場所で話す必要があるのか分からないが、今は気にしないことにしよう。

「えっと…その…悪かった！」

突然頭を下げ謝り出すエイラさん。

何故謝るんだという疑問と驚きが表情に出る。

「私…逃げてた。出来ないことは直ぐに諦めて逃げてばっかり。その苛立ちを気付かないうちにお前に向けてぶつけていた。お前の気

持ちも知らずに傷つけ、酷いことをしてしまったと反省している。
本当に…悪かった!!」

「…大丈夫ですよ。確かに少し傷つきましたが、その代わりにエイラさんの『答え』を確りとこの眼で確認することが出来ましたから…。それで十分です」

「でも…!」

「じゃあ…一つだけ質問しても良いですか?」

少し納得できない表情を浮かべながら頷くエイラさん。
俺がどうしても本人の口から聞きたいこと…。

「サーニャさんに質問ですが…。俺の事……恐れていますよね?」

「えっ?」

そう…前から一度聞きたいと思っていたこと。俺に対する『恐怖心』を抱いているか否か…。
自分の予想では高確率で『はい』と言葉がでると予想。
しかしサーニャさんは首を横に振り、それを否定。

「恐れていませんよ…只恥ずかしかったんです。男の人と会話するのが…」

「へっ…?は、恥ずかしい?怖いじゃなくて?」

今度は首をこくりと縦に振る。
じゃあ…避けていたのは恐れていたからじゃ無くて、男の人と会話

するのが恥ずかしくて避けていたとなるのか…！？全ては俺の……
…勘違い…だと？
襲いかかる脱力感。かなり重い溜め息。

「何だよそれぇ～～～…」

第三十六話：空より高く：後編（後書き）

何とか頑張っても深夜投稿になってしまう…。
さて次回の予告だが今回はネプトゥヌスが担当だ！

ネプトゥヌスだ。ちっ…何で俺が次回の予告担当なんだよ…全く。
でなんだ、次回のテーマのキーワードは『説明』と『風呂』か…意味が分からないなこの馬鹿作者は…って未だ続きがあるのかよ。
え～とっ…『さ～て次回もサービス♪サービス♪』……おい！これは違うだろう！

第三十七話：戦いの予感（前書き）

第三十七話です。今回はかなり短い作品です。短編みたいな…。

第三十七話：戦いの予感

空高く昇った真昼の太陽が浜辺の砂一粒一粒に照りつけ、灼熱の場と化す。
足場から伝わる熱が身体全体に廻り、背中に滲み出た汗がシャツにへばりつく不快感。額から滝の様に流れる汗は、鼻をゆっくりと伝い雫となり浜辺へと落ちる。
静かに波打つ海が清涼感を引き立てるが、炎髪灼眼の男の所為で意味を全く果たさなくなる。

右手を包み込む鬼火が音を鳴らしながら燃え盛る。指の関節を動かす度に鬼火の形状がそれに応える様に変化を遂げる。
これ程まで簡単に操作が簡単だとは理解していなかった。試しに五本の指を真っ直ぐ伸ばしレイピアの形状を創造する。すると、先程までの鬼火が一変。炎が細長く伸び、全長八十センチ位の両刃の剣。その姿正しくレイピアと同類の物。しかも鬼火で造り出した物なので、付属（エフェクト）として凝縮された強力な炎が追加される。
試運転として軽く右腕を横に薙ぎ払う。鬼火のレイピアは薙ぎ払う度に空気を吸収・斬り裂きその威力を徐々に上昇させていく。空気中には残り火が漂う。
試運転を重ねていくうちに大体は鬼火のレイピアの性質が理解できた。
先ず利点から…周りの空気を吸収し常に威力を上昇させることが出来る。鬼火を剣先から普通に噴き放つことも可能。汎用性が高い。
そして欠点…周りの空気を吸収する為、あまり長時間の使用が出来ない。指の関節の少しの動きでも反応してしまい、形状持続が非常に困難。
一長一短が確りと表れているので、戦況に応じて使い分けることが可能だ。

ならば他の形状も――――――いや、今日はここまでにしておこう。
無駄に魔力を消費して負担を掛けても、何も得は無い。寧ろ疲れが増加するだけだ。

神話融合を解除し、炎髪灼眼から黒色の髪と瞳に戻る。同時に襲い掛かる肉体及び精神負荷。未だに魔力機関等は不完全な状態なので結構苦しく感じる。
だが今はそれ以上に辛いことがもう一つ。

「あっちぃ～…」

解除した途端に、決壊したダムの様に溢れ出す汗。何度も腕で拭っても腕自体が汗で濡れている為、全然意味が無い。このような事は地味に苛立ちを憶えてしまう。
着装している衣服で拭おうとしたが、衣服までもが汗でびしょびしょに濡れている。脱いで絞ったら簡単に脱水出来るのではないかと思うぐらいだ。
恐らくウルカヌスとの神話融合が原因だと思う…。
ウルカヌスは神話の中では火の神と称される。当然火を操作したり内部に貯蓄する”神術”を有している。なら神話融合した場合はその能力全てが俺にも共有されるのは当然。
今までは神話融合しても、心地良い”風”や涼しい”水”を身体で感じていたが、今回はこれの真逆。
気分を物凄く不快にさせる”火”なのだ。
別にウルカヌスの事を差別し見下しているわけじゃない。只もう少し此方に配慮を施して欲しいのだ。

言葉には出せないことを心中で呟く。滲み出た汗が眼や口内に流れ込む。眼に走る軽い痛み。口内に広がる塩辛い味。
直ぐにこの不快感を洗い流したい気分だ。

現在時刻は午後の二時頃。皆は訓練や書類整理、自由時間を過ごしているだろう。あの場をこの時間帯に使用する人物は特に居ない筈。

「行くか……風呂」

汗を再び拭い、風呂場へと歩みを進めた…。

風呂場…。

辺りに立ち籠める湯気が視界を奪う。近くに設置されている鉄製の手摺りに掴まりながら、石段を注意しながら降りて行く。

石段を全て無事に降り終え、早速汗を流す為に身体を洗浄する場へ向かう。

カスタード色に着色された木材が、一人の人間が十分に満喫できる個室を造り出している。

持ち出してきた石鹸を一度湯に浸けた後、手早く石鹸を擦る。

白い泡が表れたのを確認し、身体全体に泡を行き渡せ、湯で一気に洗い流す。

先程まで不快感を感じさせていた汗が流れ落ち、気分爽快になる。

次は日本(ふそう)の人間なら絶対は誰もが好む…風呂だ。

エイラはサウナの方が良いと言い張っていたが、やはり俺は風呂の方が好きだ。

尤も熱風で身体を暖める習慣は日常では無かったので、サウナはあまり好きにはなれない。

只無駄に汗を――――止めよう…これ以上言ったらエイラやサーニャに文句を言っていると同じ事。

さっさと湯船に浸かってしまおう。

足を湯船に入れ背凭れがある所まで移動し、静かに腰を降ろす。

「あ～…気持ちいい～」

体温より少し高めな湯船に浸かりながら正直な感想を述べる。
この気持ちをあいつ等にも分けてやりたいぐらいだ。

「ふぅ…私には丁度良い温度ですね」

「馬鹿かてめぇは…十分熱いぞ」

「むぅ……足りぬ」

突如聞き覚えがある声に顔を左側に向ける。手前から、満足そうな表情を浮かべるメリクリウス。熱さに項垂れるネプトゥヌス。何が足りないか理解できないが、不機嫌そうなウルカヌス。
何故か神達が湯船に浸かっている。物凄く不気味な光景だ…。
てか、何時の間に此方の世界に訪れたんだ?

「貴方が先程馬鹿みたい声を発した時にですよ。全く…私達の姿を確認しただけで不気味とは…。本当に最低屑野郎ですね。あっ…因みにこれは読心術ですから。超能力なんて一切使用してませんよ」

こいつ…心中を的確に読み上げやがった。しかも勝ち誇った顔をして…相変わらずむかつく奴だ。
上等だ。本当に読心術が使えるのか試してやる。
微かな対抗意識を燃やしながら、メリクリウスの薄緑色の瞳をジッと見つめる。

「何ですか気色悪い…。はぁ…貴方は表情に表れやすいタイプです

から…分かり易いんですよ。それと何故私達がこの場に居るかですか？まぁ…簡単な質問を対面する形でしたいのです。腕輪からだと読心術が失敗する恐れがありますからね」

「何か気に障る言い方だなお前は…。質問は構わないが、俺からも気になる事を質問をさせてもらうぞ」

メリクリウスは無言で頷き、俺の質問権を承諾する。

「先ずこの腕輪に関して何だが、何故穴が七つ何だ？」

ローマ神話の神達を倒した際に得られる宝石。その宝石を収める為の台座となる金色の腕輪。
腕輪には宝石を収める穴が七つ空いている。それが先程言った事に繋がる。

「……人間は地を這う為に大地を欲する。人間は呼吸をする為に風を欲する。人間は生命を繋ぎとめる為に水を欲する。人間は暗闇を照らす為に火を欲する。人間は指導者と化す為に戦争を欲する。人間は空を得る為に天候を欲する。人間は死ぬ為に冥界を欲する…理解できましたか？」

消滅を許されない、人間の欲望が尤も滲み出たもの…それが神様という形で具現化した。
つまり…神達と戦闘すると同時に人間の欲望とも戦闘している。勝利をした場合は、世界の理を変化させる事が可能になり、全ての欲望を独り占めすることが出来る。
敗北した場合は、世界からの追放。今までの欲望を素の居場所へ還す。
成程…だから神達は俺を消滅させようとするのか。世界の理を只の

人間に変えられる事が恐ろしくて、俺の消滅に懸命になるのか。

「さて次は私達の質問ですが、貴方の師匠に名前はもしかして……光牙なのでは？」

「えっ…？……えっ！？」

脳内は消滅のことで頭が一杯になり、正直メリクリウスの言葉が聞こえなかったが、最後の”光牙”の言葉だけは鮮明に耳の鼓膜に響いた。驚きを隠せない表情のまま頷く。

「やはり…光牙が貴方の師匠でしたか。どうりで剣術や天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）が似ているわけだ…」

「ちょっと待てよ！何で…何でお前が師匠の事を知っているんだよ！！」

「天界で対面したことが何度かありましてね……彼は元気ですか？」

「ッ……分からない」

メリクリウスの問いに答えることが出来ない。思い出されるあの出来事。

髪と瞳は同色の紫色。身長は俺と同じ位。顔の右頬には龍の烙印らしきものが彫られている。

服装は紺色の長ズボンに白いシャツの上から薄茶色のジャケットを羽織っていたあの男。

身体が押し潰される程の殺気。圧倒的な武術と魔力を備えている。

負の感情以外何も無い心。

「分からないとは一体…？」

「言葉の通りの意味だ。訓練中突然現れた男に襲われてな…確か名前は……魔牙」

『ッ！？ま、魔牙だと！！！』

魔牙の名前を述べた瞬間、今までに見たことの無い神達の尋常じゃない驚き。

メリクリウスは眼を見開き有り得ない現実を言われた表情を浮かべる。ウルカヌスは呼吸を忘れメリクリウスと同様の表情を浮かべる。そしてネプトゥヌスは歯を思いっ切り食い縛り、怒りの態度を露わにしている。

何だお前等…魔牙の存在を知っているのか？と問いかけたが、歯切れの悪い声色で”知らない”の一言のみ。怪しい…何か重大な事実を隠して居る様な素振りを見せつけているのだが、何故か今のこいつ等に話しかけることが出来ない。自分の本能がそう語っている。

鼻下まで湯船に浸かり、口から空気を吐き出す。ぶくぶくと水泡が割れ弾け飛ぶ音だけが酷く悲しく風呂場に響いた…。

――――神ｓｉｄｅ　ネプトゥヌス――――

非常に不味い事態が発生した。あいつが…魔牙が…深い眠りから目覚めやがった。

最強の神と呼ばれるユピテルの封印をぶち壊して、天界にその姿を現した。

もう既に死亡しているもの思っていたが、まさか生きていたとは…

しぶとい野郎だ。
現在あいつは野放しにされた狂犬。再びあの惨劇を繰り返すつもりなのか？それとも光牙や俺達に対する復讐？或いは黒神に――――
―絶対に有り得ない。魔牙は弱者には興味の欠片も感じない。
あの時に俺に向けた眼と同じように。くそっ…！消した筈の傷が疼きやがる…！！

「厄介な事態だ…どう対処するつもりだ。ユピテル…！」

――――神ｓｉｄｅ　ネプトゥヌスｏｕｔ――――

第三十七話：戦いの予感（後書き）

短くて本当に申し訳御座いません。
では次回の予告に移ります。

次回は再び新キャラ…正確に述べると新ペットの予感がします。以上！！！
本文も予告も短い作者がお送りしました！

第三十八話：銀狼（前書き）

第三十八話です。

第三十八話：銀狼

壁両側に備え付けられている本棚に難しい書物が並ぶ執務室。
部屋に入室した際に必ず眼に入る、職務用の大きな木造の机。腰を下ろす椅子もそれに合わせての物が配備されている。床は赤い絨毯が敷き詰められており、清潔感も鮮明に保たれている。

そんな執務室にカリカリと静かに響く、書類に筆を書き入れる音。
何故か物凄く懐かしく感じる。
生前、学問に励んでいた頃に特に何も感じなかった感覚。只機械の様に板書された文字を思わず落書きしてしまいたくなる白いノートに書き写す。重要な個所があれば、蛍光ペンを取り出し線を引いたり、赤文字で文字を記載したり等、誰もが当たり前に行う事を普通にやっていた。
間違えた個所は消しゴムで何度も擦り、集まった消しカスを指先で器用に練って、馬鹿な友人に暇潰し程度に当てまくっていた。だからだろうか…あいつの頭は気付くと消しカスだらけだったな。
授業が終わればその馬鹿な友人が、今の自分の状態に気付き俺に問い詰める。その光景を見て楽しむ大事な幼馴染。
あの日の日常が物凄く懐かしい。再びあの世界に戻りたいと思ってしまう。あの日常を取り戻したい。あの子が生きていた時間を取り戻したい。だけど、その願いが叶わないのが現実であり真実である。
俺はあの日に大型トラックに無残に撥ねられて事故死したんだ。撥ねられた瞬間は、痛みも何も感じなかった。その時に理解したのだ…『死んだ』と。
人間、自分が死ぬと理解すると極度の恐怖心を抱く。必死に抵抗しようとする。命を刈り取る死神の存在から逃げようとする。普通の人間なら当然の事だ。
しかし、俺は普通の人間とは全く違う思考をその時働かせていた。

恐怖心も抱かない。抵抗もしない。命を刈り取る死神の存在からも逃げようともしない。
別に良かったのだ…死んでも。死ねばカビの様にへばり付いた過去の記憶が洗い流されるかもしれない。ずっと背負ってきた責任から解放出来るかもしれない。あの子に再度会える事が出来るかもしれない。そんな想いが俺の動く足に釘を打ちつけた。
だが結果的に今生きているのが紛れもない事実。結局へばり付いた記憶や背負っている責任からは解放されない。
君は…何を俺に求めるんだ?何故生かし続けるのだ――――――

「……君……黒神君…黒神君!!」

「ッ!?」

突然横から名前を呼ばれ驚き、身体を震わせる。先程駆け廻っていた過去の記憶がふっと消える。
名前を呼んだのは、第５０１統合戦闘航空団の隊長である尤も重要な人物…ミーナ中佐だ。
ミーナ中佐は赤髪を揺らしながら、心配した表情で此方の顔を覗き込んでいる。

「一体どうしたの?体調でも優れないのなら、休んでも構わないわよ」

その言葉に首を振り、大丈夫ですと言った後木造の机に落ちている羽ペンを再び手に持ち直し、書類に文字を書き入れていく。
中佐は未だ同じ表情を浮かべたまま自らの職務に戻る。
そもそも何故俺が執務室でミーナ中佐の手伝いをしているのかは、今から丁度五日程前に遡る…。

湯気が立ち込める風呂場に身体を浸かる四体の陰。各々からの額からは汗が滲み出る。
しかし…様子が可笑しい。炎髪灼眼の男を除き、残りの者達の様子がだ。
黒髪と緑髪は尋常じゃない汗を拭いながら、風呂に起きている異常を考えている模様。
蒼髪の者に至っては、完全に逆上せており身体が真っ赤に火照っている。

「おい…黒神……何か……変じゃないか？」

「ネプトゥヌス…の……言う通り…ですね」

確かに…普通風呂の温度は、体温より少し高めの四十度位が基準だ。
なのにこの風呂の推定温度は…一体何度だろう？感覚が熱さで麻痺してしまい判断が出来ない。
メリクリウスは思考を働かせ考えを懸命に纏めている。ネプトゥヌスは…駄目だ。使い物にならない。
考えるんだ……熱湯…熱…火…ウルカヌス――――――ッ！？
すぐさまウルカヌスが浸かっている方を見据える。次の瞬間、確信犯を頷ける発言。

「ふむ……良い」

『お前の所為か！！！』

今まで抑え付けていた苛立ちの感情を爆発させ、神達と同時に怒鳴

りつける。
一方ウルカヌスは怒鳴りつけられた理由が分かっておらず、平然としている。

「てめぇ…俺を殺す気か…屑が」

「そんなつもりは毛頭無い…只少しばかり温度を上昇させただけだ。丁度良いだろう？」

「いい加減にしてください。それは貴方の基準…私達には私達の基準があります…！」

激しく？み合う神達。その光景を見て、物凄く嫌な予感を覚える。
変な方向に進まないことを願うだけだ…。

「頭にきた…ぶち殺す！！」

「今回は…ネプトゥヌスに賛同します」

眼の前で早速願いが崩壊。
メリクリウスは風を凝縮させ半円状の風の牙を、ネプトゥヌスは過冷却水を龍の形状に仕立て上げ、強力な振動を加え氷龍を、ウルカヌスは両手に燃え盛る鬼火を展開させる。
――――ちょっと待て。こいつ等人間の姿をしているが、正真正銘の神様だ。個人が持つ『力』はどれも強力で危険なもの。恐らく神一体で、ロマーニャ全土を喰い尽くせる程の力を持ち合わせている。
その力の持ち主達が今正に衝突しようとしている。だとしたら…非常に不味いことに…。
今すぐ止めなくては――――って、もう攻撃準備してるし！！

「ちょっ…お前等」

「死にさらせぇ…氷龍絶破衝！！」

「反省しなさい…Ｌｉｖａｔｈａｎ！！」

「愚か者が…鬼火！！」

俺の制止の声は届かず、三つの力が勢いよくぶつかり合う。

数秒後…巨大な光が風呂場を包み込んだ。

俺は馬鹿共が暴れ無残に瓦礫の山となった風呂場から脱出し、一瞬で着替え、反省を表す正座をしながら魔女達の到着を待っていた。

その間にも馬鹿共は暴れ続けた。

止めようと考えたが、高確率で怒りの矛先が此方に向き、三対一に持ち込まれる可能性が大きい。余計な手出しは死を招くことになる。

その後爆発音を聞いた魔女達が風呂場に駆けつけて来た。瓦礫の惨状を見た瞬間、皆その場に立ち尽くし暴れる神達を呆然と眺めていた。エイラとサーニャはお気に入りであるサウナが崩壊したことに酷く悔しがっていた。

ミーナ中佐は顔を引き攣らせ、現状の理由を詳しく話せと命令してきた。何故だ…俺は決して悪くないのに、皆に睨まれるんだ？女性って恐ろしいな…と思いながら中佐に詳しく全てを話した。

話し終えると中佐は無言で鋭い視線で神達を睨みつけた。その恐ろしさに全員が身体を震わす。あの神達までもがだ。流石、隊長の肩

書きは伊達では無いな。
睨まれた神達は”場所を変更する”と言い訳し、逃げる様に腕輪の中に戻った。
簡単に結論を導くと…あの馬鹿共は責任放棄し、俺に押し付けたのだ。

それが現在の状況に繋がる。
俺に課せられた責任は、五日間ミーナ中佐の書類整理。
軽い罰で済んだことを本当に感謝している。

「ふぅ…これで最後」

最後の空白の個所に筆を書き入れ全作業を終える。
指を絡ませ身体を大きく伸ばし、固まった筋肉を解す。絡ませていた指を離すと同時に、腕に襲い掛かる脱力感。椅子に凭れながら一息着く。
中佐は笑顔でご苦労様と言い、職務用の机の引き出し引き、中身を漁り始める。

「えっと…あったわ！黒神君、これを」

机に置かれたのは、何処にでもある紙袋。
中身は一体何が…？

「中身はお金よ。今までの報酬として受け取って頂戴」

「そんな…！別に要らないですよ。俺はこの部隊に居候の身なんですから。お金を貰うなんて…」

俺は偶然出会った第５０１戦闘航空団に力を貸す、只の居候の身に

過ぎない。
無料で食事や寝床を提供してくれたし、皆優しく接してくれる。それだけで充分すぎる。
なのにお金を貰うなんて…絶対にできない。
けど、ミーナ中佐は紙袋を更に前へ突き出す。

「…私は貴方を居候だなんて思っていないわ。大事な仲間の一人よ。坂本少佐やバルクホルン大尉達皆も貴方の事をそう思っている。私は大事な仲間を差別なんて絶対にしない。皆が平等に過ごせるようにする。だから受け取りなさい。これは命令よ」

「……了解」

中佐の真剣な瞳に負け、俺は小声で承諾した…。

「到着、か…」

純白の双翼を羽ばたかせながら人目の無い地上へ降り立つ。地面に微かに散らばっている砂が、双翼を羽ばたかせる度に中空に舞い散る。
天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）を解除し、大通りに歩みを進める。
徐々に聞こえ始める人々の活気賑わう声。薄暗い場所から明るい場所へと視界が移り変わる。

「二度目のロマーニャだな…」

辺りを見回しながら呟く。
ミーナ中佐が与えたもう一つの命令はロマーニャに観光してくるこ

と。業務終わりで疲れきっているのでは無いかとの中佐の優しい気遣いだ。断っても多分中佐はそれを否定するだろう。それに優しき気遣いを無駄にするわけにはいかない。

「先ずは…そうだな」

何をしようかの考えを打ち消す様に腹が急に鳴り始める。そう言えば書類整理を早く終了させる為、今朝の朝食は軽めに済ませた記憶がある。なら先ず最初にやることは只一つ。食事だ。

近くにあった少しお洒落な喫茶店により早めに食事を済ませた…。

「はふぅ…うめぇ」

大通りに配備されている頑丈そうなベンチに腰掛け、先程の喫茶店で購入したパンに齧りつく。パン表面の程良い固さと内部の柔らかい感触が、歯を撫でながら喉の奥へ流れ込んでいく。

ロマーニャは遺跡などの建造物も有名だが、食べ物もそれに劣らない品格を醸し出している。街の賑わいも個人的に結構好きなもの。

俺の居た世界とは全く違う賑わいがとても心地よい。

ああ…何て過ごし易い街なんだ、此処は。瞼を閉じ街の賑わいの音を聞こうとした時、妙な音をこの耳に聞き入れた。

何の音だ…？微かに聞こえる苦しそうな呼吸音。人間ではなく動物特有の物だ。血液の臭いが風に流され鼻孔を突く。

呼吸音は俺の背後の右斜めにある、人が殆ど踏み入れない細長い路地からする。

ベンチから腰を上げ路地に向けてゆっくり歩いていく。太陽光が遮断され暗闇になった空間。壁には緑色の藻が張り詰めており、怪しい雰囲気を表現している。肌寒く感じる。

迷うことなく路地を進んでいく。辺りに眼を晦ましながら呼吸音を奏でる者の正体を探し回る。
探すこと数分…遂に呼吸音を奏でる者を発見した。

「こいつは…」

眼にしたのは銀色に靡く綺麗な毛並み。警戒を示す身体を射抜く様な紅い眼光。剥き出しにされた鋭く光る真っ白な犬歯。これは間違えなく…狼だ。
しかもこいつ片足を怪我しているな…。仕方ない、動物は専門外だが直してやるか。

「大人しくしてろよ…銀狼」

「……」

「そんな睨みつけるなよ…ファーストエイド」

傷口に手を翳し治癒魔法を唱える。唱えると同時に光が発生し、負傷している傷口を包み込む。
何秒かして傷口から手を退ける。先程あった傷は綺麗に消え去り、素の状態へ戻る。
銀狼は驚きを隠せない表情を浮かべながら、負傷した足を何度も動かす。
その姿に自然と口元が緩んでしまい、何時の間にか銀狼の頭に手を置き優しく触れていた。

「次は…こんな怪我するなよ。じゃあな銀狼よ、達者でな～」

「……」

お座りをしている銀狼から背を向け、手を軽く振りながら出口に向かう。
だが数歩進んでクゥ～と変な音を聞いた。言っとくが俺はこんな可愛らしい音は出さないぞ。この場に居るのは俺と腕輪内の神達と…それと……。

「まさか…あの可愛らしい音はお前か？銀狼」

「……ッ」

人間の言葉が理解出来るのだろうか？顔を俯かせながら頷く銀狼。
警戒心は自然と消えており、普通に接することが可能だ。思いっ切り抱き締めてもふもふしてみたいが今は無理だろうな。
自分の願いを密かに胸に抱きながら、食べかけのパンを銀狼に差し出した瞬間、犬歯でパンを貫きガツガツと喰らい付く。そんな腹が減っていたとは…。

「あははっ…お前は本当に可愛い奴だな」

再び銀狼の頭を撫で回す。撫でられるのが気持ち良いのか、眼を細めながらパンを食べ続ける。
さて…今度こそ戻りますか。頭から手を離す。その時、銀狼が寂しそうな表情を浮かべていたのは勘違いだろうか？まぁ…別に構わない。仲良くなれたのだから…。
少し嬉しい気持ちになりながら大通りに向けて歩んだ…。

「結構購入したな…」

手荷物を抱えながら最初に降り立った場所に向かう。購入した物は皆へのお土産。
色々と悩んだ結果、相手が気に入ってくれるものと同時に、自分が気に入った物を選択した。
女性思考で欲しい物は結構厳しかった。喜んでくれるかは、帰らないと分からないな。

「人影無し…天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）解放」

基地に帰還する為、天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）を解放させる。
自画自賛するのは可笑しいが、何時見ても綺麗で純白の双翼だ。胸を張って自慢できる個所の一つだ。

「帰還――――…この視線は？」

突如視線を感じ取り飛行するのを中断し、視線のする方向に顔を向ける。
その場には俺の瞳をジッと捉える紅い瞳。銀色の毛並みが風に揺られ光を反射する。

「お前は…銀狼。何故此処に？」

この問いに答える様に銀狼は俺の足に縋りつく様にじゃれ始める。
離れる気配は全く見受けられない。つまりこいつは…あれか。

「一緒に行きたいのか？」

本当にこいつは人間の言葉が理解できるようだ。
外見から分かる…こいつは強いかもしれない。初めて出会った時の

威圧感が現在の考えに至る。
連れて行っても、皆には迷惑はかけないだろう。安心出来る。

「来いよ…。連れてってやるぜ銀――――――いや、名前は…そうだな」

「……？」

「むむぅ～……フェンリルなんてどうだ？」

咄嗟に思い付いた名前を上げた瞬間、フェンリルは勢い良く頷き自分の名前を簡単に承諾する。
やっぱり凄いな…結構優秀な狼だよ。

「さっ！帰るか…フェンリル！」

俺はフェンリルを抱きかかえ双翼を羽ばたかせ、基地へと帰還した…。

窓から見える星々が美しい夜空。
ベットの横に寝ているもふもふとした柔らかい毛並みが眠気を誘い出す。
帰還後、フェンリルの事を皆に言った。責任を持って世話をすると強くせがんだら、何とか承諾を得ることが出来た。喜びの声を上げる俺を見て、魔女達も微笑んでいた。
その後、購入したお土産を皆に渡した。芳佳には犬型に彫られた髪飾り。リーネには紅茶葉セット。ペリーヌには様々な花の種子と液体肥料。坂本さんには風呂好きなので入浴剤。ハルトマンさんとル

ッキーニにはお菓子の詰め合わせ。エイラとサーニャにはお揃いのマグカップ。シャーリーさんには桃色のラメが施された桜のペンダント。バルクホルンさんには可愛い服を。ミーナ中佐には装飾が細かいネックレスをお土産として渡した。

シャーリーさんとバルクホルンさんは顔を赤らめ何故これを?と問い詰めてきた。

一度バルクホルンさんと喧嘩しているときに可愛い下着を身に着けていたシャーリーさんを見て、可愛い物が好きなのかと思いペンダントを購入。バルクホルンさんは想像したら何故かこの服が思い浮かんだし、スタイルが良いから似合うかなと思い服を購入した理由を話した途端、顔全体を紅潮させ恥じらいながら”有難う…”と一言。一応…喜んでくれたみたいだ。

安心して一息着くと扉が三回叩かれ、扉が開かれる。入室してきたのは、包装紙に包まれた箱を手に持っているミーナ中佐。

入室してすぐさま中佐からの質問。

「ねぇ、黒神君…これ一体いくらしたの?」

「えっ…?」

「この包装紙を見る限り、ロマーニャの高級宝飾店の物よ…こんなに高価な物…受け取ることは出来ないわ」

「正直こっちの金銭感覚はイマイチ理解できませんけど…それなりに高価な物だったと思います」

未だにこの世界の金銭感覚は理解できていない。元々買い物に出る機会が殆ど無いので学ぶ機会も全く存在しない。なので今回の買い物は値段も見ないで購入していた。

「だったら…」

「でも、俺はそれを値段で選んだわけじゃありません。ミーナ中佐に似合うかと思って、値段は関係無しに選んだんです。それ自体が気に入らないなら、投げ返してくれても構いません。けど、値段を理由に返されるのは嫌です…！」

「……っ…御免なさい。貴方がそんな気持ちで買ってくれたなんて知らなかった。…有難う、黒神君。大事にさせてもらうわ」

ミーナ中佐は小さく頭を下げ俺に謝り、購入したお土産を確りとした気持ちで受け取ってくれた。
気に入って貰えると良いな…アレ……。

そんな事を思いながら、フェンリルを撫でながら深い睡眠に落ちた…。

第三十八話：銀狼（後書き）

更新遅れて誠に申し訳ありません！！
実は最近発売したテイルズオブエクシリアに熱中してしまい小説が全く進みませんでした。
本当に個人的な理由で更新を遅らせてしまい申し訳ありませんでした！！

第三十九話：甦る記憶：前編（前書き）

第三十九話：前編です。

第三十九話：甦る記憶：前編

先程まで薄暗かった空が、今はすっかり青空に埋め尽くされている。雲も周りに散らばっており、外の空気が少し肌寒く感じる。

そんな空の下で対峙する者が居る。一人は特徴的な黒髪を揺らしながら、真剣な表情で鉄製の模造刀を力強く握りしめている。もう一方は、同じく鉄製の小型模造刀をフルートを吹く様な形で咥えている。

思わず見とれてしまう銀色の毛並みが海風により微かに揺れる。黒髪の少年が僅かに爪先に力を込め、身体を前傾姿勢を取りながら、眼の前の紅い瞳を逃がさない様に鋭い視線を向ける。

本来これ程までの鋭い視線を向けられたら、戦闘経験者でも一時的に怯むであろう。この部隊の魔女達でも耐えることが可能なのは恐らく四人程。

力持ちでスタミナにも優れており、威力の高い武装を多く使いこなしている。また、ストライカーユニットの助けを借りなくてもその固有魔法による『怪力』は凄まじく、大の男をたやすくのしてしまったり、地面に埋められた鉄骨を引き抜いてしまう程…ゲルトルート・バルクホルン大尉。

３００機を超える撃墜数を誇り、幼い外見にそぐわず、その能力に関しては非の打ち所が無い。エースにありがちな自身の力に頼り過ぎるところが無く、これまでの戦闘で編隊を組む僚機を敵に撃墜されたことが無い。危険を冒さず、仲間を失わずに戦うかを常に考えて実行できる超人的な戦闘のセンスの持ち主である反面、性格や生活が全く軍人とは思えない程の自由人…エーリカ・ハルトマン中尉。

『ＳＴＲＩＫＥ　ＷＩＴＣＨＥＳ』の隊長。物腰は柔和で、その思

考も型にはまらず部下に自発的に自由行動させる主義であり、常に笑顔を絶やさないが本気で怒ると容赦がなく、ペリーヌやルッキーニもそんな時の彼女の前には恐れをなす程である。ウィッチとしても戦闘力は高く、１５０機を超える撃墜スコアを挙げている。固有魔法による『超感覚』で遠くの声や気配を知ることができ、しかもそれを立体的に空間として把握することも可能である。完璧人に近い存在だが唯一常人とは違うところは、『味覚が一般人な人のそれとは違う』こと…ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐。

日々の訓練で異常なまでの成長を遂げ、今となっては魔力を吸い取る諸刃の刀を自由自在に扱える程になり、その力の証明を模擬戦と実践で発揮している。訓練の際は厳しく指導するが、それは仲間を未熟なまま戦わせて失いたくない一心ゆえである…坂本美緒少佐。

流石実力者…と言っても過言ではない。さて…場面は再び素に戻る。

視線を向けられたフェンリルも俺の視線を全く逸らさない。寧ろ負けじと紅い瞳の色彩を強めてくる。

横移動を数歩行い互いに模造刀を力強く握る。刹那…滑走路に響き渡る金属が交わる音。鍔迫り合いながら飛び散る朱色の火花。刀を交えて理解した…強い。

加速及び跳躍に必須な個所…強靭に鍛え抜かれた脚力。武器の特性を十分に理解しての攻撃。全ての観点において結構な上級者。此方も手を抜いたら勝負が決まってしまう。ここは一旦距離を取るべき…。

そう思い左足を地面に着け後ろに飛び退く。がフェンリルはその隙を逃さない。

後ろ足で素早く跳躍を行い、激しい追撃。突然の出来事に驚き防御が遅れる。全くの反撃が不可能。只一心に後ろに飛び退きながらの追撃の防御。

不味いな…滑走路の端が見えてきた。これでは海中に一直線か斬られるかの二つ…仕方ない。
右手に持つ模造刀で縦横無尽に襲いかかる攻撃を防ぎながら、腰に掛けてある鞘を左手で抜刀し、フェンリルの模造刀を鞘で防ぎ、右手の模造刀を首元に添える。勝負…アリだ。
数秒の沈黙で確実な勝者を確認した後、首元に添えている模造刀を除け鞘に静かに戻す。フェンリルも咥えていた小型の模造刀を離し、疲れたのかその場に身体を伏せる。
その姿があまりにも愛らしく頭をくしゃくしゃと撫で回す。ふわふわと柔らかい感触が伝わる。相変わらずこいつは気持ちいい毛並みだな…。

「さて…そろそろ戻るか」

基地に戻る為フェンリルの頭から手を離す。
その時何故か名残惜しい表情をされたのは見間違いだろうな…。
そんな事を考えながらフェンリルと共に基地に戻る。
風に流されて面白い虫を見つけた！…と言う少女の声が聞こえた様な聞こえない様な…。

「皆さん、お早うございます」

優しく頬笑みながら挨拶をするミーナ中佐。
今はミーティングルームで朝の集会を行っているが、全員揃ってはない。
この場に居るのは、芳佳、リーネ、ペリーヌ、ルッキーニ、エイラ、坂本さん、ミーナ中佐と俺を含めての計八人。残りの皆は大体予測が出来る。

シャーリさんは自室で趣味の機械弄り。サーニャは夜間哨戒明けの疲労で爆睡中。バルクホルンさんは未だに眠っているハルトマンさんを起こす為に奮闘中だろう。
因みにフェンリルは自室で待機させといた。この場に居ると芳佳達が怯えて集会の時に通達された事に集中出来なくなってしまうからだ。

「今日の通達です。先日来の施設班の頑張りにより、全壊したお風呂の修復が終わりました。本日正午より利用可能となります」

皆から喜びの声が挙がる。
漸く風呂の修復が終わったのか。施設班の人達もあの惨状を目撃した時は、口を呆然と佇んでいた記憶が残っている。壊したのは俺では無いのに物凄い形相で睨まれたのも憶えている。施設班の中には何故か『羨ましい奴め…』とトーンの下がった声で連呼していた奴も居た。
言っとくが風呂場を全壊させたのは俺では無い。腕輪の穴に収まっている魂宿る宝石…馬鹿三人組だ。
あいつ等が腕輪内でどのように日常を過ごしているかは知る由も無いが、一つだけ解る事がある。
率直にあいつ等馬鹿共は、非常に仲が悪い。下手すれば殺し合いに発展するまでだ。
大抵の原因を造り出すのはメリクリウス。挑発に軽々しく乗るのがネプトゥヌス。その二人を止める為か或いは己の能力を向上させる為に二人を実験台に力を行使して事態を悪化させるウルカヌス。
どう考えても仲が悪いのは明確だ。しかも一番面倒なのがネプトゥヌス。
何時間も日々の愚痴を聞かされるし、いきなり怒鳴るし色々と散々な被害に遭った。
本当に仲良く過ごしてほしいよ…あいつ等には。

気付けばミーナ中佐の通達は聞かずに、考え事ばかりしていた。その為か後半は何を話していたのか分からなかった。
只分かるのは皆お風呂の修復が済んで喜んでいる事だけだ。

「おっ風呂！おっ風呂！私が一番～…うじゅじゅ」

ルッキーニは腰掛けていた窓側の石段から降り、軽い足取りで風呂に直行しようとしたが、坂本さんに服の襟を背後から掴まれ止められる。本人は止められた理由が分からない模様。
全く…ルッキーニは話を聞いていなかったのか？風呂が使えるのは正午からだぞ。現時刻は十時頃…使用できるのは二時間後だ。坂本さんに止められるのも、注意されるのも当然だ。と言っても後半中佐の話しを聞いていなかった俺が言うセリフでは無いけど…。

「風呂に入れるまで、未だ時間がある。というわけで風呂に楽しく入る方法があるんだが…」

坂本さんの提案に皆期待の声を発する。
楽しい入浴方法…もう大体予想が付いている。

「訓練で汗をかけ！全員、基地の周りをランニングだ！」

見事に予想的中。湧きあがる不満の声。
訓練好きの坂本さんなら絶対言うと考えていた。もしも俺が坂本さんと同類の立場でも、多分同じことを皆に言っているだろう。自らの力を向上させる為の訓練は嫌いではない。寧ろ訓練は好きな方に属する。坂本さんと少し性格が似ているな…。

「つべこべ言わずに…走れー！！」

『あっ、は、はい！！』

不満を蹴散らす様な怒号により、他の魔女達は逃げる様にしてミーティングルームを後にする。結果的にこの場に居るのは、坂本さんとミーナ中佐と俺だけだ。

「……ッ」

急に襲い掛かる眠気。先程まで正常だった視界も今となっては歪んでしまっている。立ち上がろうと全身に力を込めるが、腰を下ろしていた高級感漂う緑色のソファーに縄で強く縛り付けられている感覚が伝わる。徐々に全身の力が緩んでくる。

駄目だ…と思った瞬間、全意識を眠気に刈り取られた…。

「わぁー！！凄ーい！！」

思わず眼の前に広がる光景に驚きの声を挙げてしまう。

訓練終了後に訪れたお風呂場。ミーナ中佐はアドリア海が一望できる野外に作って貰ったと言っていたので私の期待も結構膨らんでいる。ペリーヌさんは何故か残念そうな表情をしていたけど…。

石の階段を登って眼にしたのは、六本の石の支柱に頑丈そうな石造の屋根。左側の石壁には、小さな滝が二つあり、そこからお湯が流れ込んでいる。アドリア海も綺麗に広がっている。

「いーっちばん！」

ルッキーニちゃんは駆け出し勢い良く湯船に飛び込む。私も久々のお風呂が嬉しくて湯船に飛び込んだ。体温より少し高めのお湯が全

身を優しく暖める。ルッキーニちゃんも気持ち良くて湯船ではしゃいでいる。

「気持ちいい…リーネちゃんも早く早く！」

「う、うん…」

「何恥ずかしがってんだ？」

タオルで胸を隠すリーネちゃんとは裏腹に、大胆に全てを包み隠さず露わにしているエイラさん。流石雪国育ち。肌色も普通の人よりも白色でとても綺麗。胸も…結構ある方だと思う。
視線を下に送り自分の胸と二人の胸の大きさを見比べる。

「むぅ…私だって――――――うわぁ！？」

突き付けられた現実に苦し紛れに抵抗していると、背後から突然胸を揉まれる。感触や大きさを確かめる様な馴れた手付き。この褐色色の腕に小さな手はこの場に一人しか居ない。

「う～ん…やっぱり残念…」

「残念…？残念って何！！ルッキーニちゃん！！」

「残念～残念～残念♪」

挑発する様な口調で”残念”と連呼され、一番悔しかったのが事実なのを否定出来ない自分。私だって何時かはシャーリーさんみたいなナイスバディに成長するんだから！！
密かな決意を胸に込めながら久々のお風呂を楽しんだ…。

お風呂に満足した私達は着替える為に現在脱衣所に居る。
濡れた身体をバスタオルで拭きながら、自分のズボンを掴む。
確か…以前上総さんが私の履いているズボンは決してズボンでは無く、スクール水着だ！と言い張っていた気がする。皆が疑問の表情を浮かべる中、上総さん一人が難しそうに唸っていた。
あの時の唸る表情……い、今思い出すと可愛かったな／／／
上総さんの表情を脳内で浮かべ自らの顔を赤面させていると、突如リーネちゃんの悲鳴を挙げる。
何事かと思いリーネちゃんに問いかける。

「ズ、ズボンの中に何か居るの…！」

小刻みに震えながら答えるリーネちゃん。私は確認するために、ズボンの前に移動しその場に屈む。そこには一センチ位の微かな膨らみで、もぞもぞと素早く動き回る小さな物体。

「何これ？虫？」

「虫！？い…いやぁー！！」

再び悲鳴を挙げながら履いていたズボンを下ろした途端、黒色の甲殻に赤い斑点のある虫が飛び出し、そのまま何処かへ飛び去ってしまう。
あの虫…何度か見てきた様な気がする。野放しにしてはならない様な感覚――――あれ？何かペリーヌさんの様子が可笑しい…。

「ペリーヌさん？」

「ち、違います！ズボンに入って――――――のわあっ！そこは…だめぇーーー！？」

「ペリーヌさん、早く脱いで！！」

「宮藤さん私は――――――ああっーーー！？」

その後色々と大変だった。

脱ぐのを断固否定するペリーヌさん捕まえ私とルッキーニちゃんの二人で無理やり脱がした挙句、その姿を坂本さんに目撃されたペリーヌさんは、ショックにより基地全体に響き渡るんじゃないかと思うぐらい悲鳴を挙げ、その場で膝を抱えながら蹲り泣き始めてしまった。そこからペリーヌさんの虫に対する復讐心が芽生え、あの虫を捕獲するという事になった。

探している最中分かったことが三つ。あの虫はルッキーニちゃんの所有物であること。訓練時に綺麗な虫を捕まえたから見せてあげると嬉しそうに言っていたから事実であるのは確か。

もう一つは虫の習性。あの虫は何故かお尻に入り込む習性がある。現にリーネちゃんやペリーヌさん、虫を探す際に騒いでいた私達を注意する為に訪れたバルクホルンさん等が被害に遭っている。

最後はどうも虫が通過した場所は停電しているらしい。基地の大部分が停電で電気が消えており、整備兵の人達も困っているようだった。

私達はその厄介な虫を見つける為にミーティングルームに集合し策を練っているが、全長一センチ程の小さな虫を確実に見つけ出すなんて至難の技だ。一体どうすれば良いのだろう…？

「私に任せろ！」

悩んでいると扉の方から自信あり気な声色が聞こえてきた。声の方向に視線を送ると、何やら怪しげな機械を持ち、壁に凭れ掛るシャーリーさん。

「話しは聞いた。基地内の電気の流れを調べたら、どうもその虫は停電させる前に、特殊な電磁波を放って電線からエネルギーを吸い取っている可能性がある。そこで！こんな事もあろうかと電波探知機を造っておいたのさ。しかも、そいつの電波を探知するように周波数を合わせてある。
名付けて虫探知機！」

自慢気に分かり易く説明した後、虫探知機のスイッチを力強く押す。妙な音を出しながら起動する。
シャーリーさんは石段をゆっくり降りながら、探知機を頼りに虫を探し始める。一人ずつ探知機を翳し虫が付着しているか確かめる。この部屋に居るのはミーナ中佐とサーニャちゃんを除いて全員居る。上総さんはソファーに身を預け気持ち良さそうな寝息を立てながらぐっすり眠っている。
一度身体を軽く揺すったが、全く起きる気配が無かった。多分日々の訓練の疲れが一気に出てきたのだと思う。

「そこだ！」

『……えっ？』

遂に探知機が虫の居場所を特定した。探知機の示した方向は私の右斜め後ろの場所。すかさず振り返り虫が居るかどうか確認するが、

そこに居たのは虫では無く一人の男性…黒神上総さん。

「えっと…その…つまり今虫は…／／／」

「黒神のズボンの中…／／／」

ハルトマンさんとエイラさんの言葉で皆が一斉に赤面する。顔に血液が廻り、熱くなっているのがハッキリと解る。バルクホルンさんは探知機の故障では無いのかと言うが、シャーリーさんはそんな事は決して有り得ないと主張する。
自動車の運転は酷いけど、機械に関しては詳しいシャーリーさんなので機械の誤作動や故障等の失敗を起こさないと思う。つまり…探知機は正しい方向を示しているんだ。

「ど、どうする…トゥルーデ／／／」

「わた、私に聞くのか…／／／少佐はどう考えているんだ？／／／」

「むぅ……これ以上基地を危険に晒すわけには…やはり黒神のズボンを脱がすしか…／／／」

意見が真っ二つに分かれる。男性のズボンを許可無しに脱がすのは駄目。現状維持で見守ると意見する慎重派。基地にこれ以上被害を出さない為に仕方なく脱がすと意見する強行派の二つだ。
慎重派は私、リーネちゃん、エイラさん、シャーリーさんの四人。
強行派は坂本さん、ペリーヌさん、バルクホルンさん、ハルトマンさん、ルッキーニちゃんの五人。
互いの意見をそれぞれ交わし合い如何するか討論する。
討論して数分後…

「うっ…やめ……くっ…」

突然上総さんから苦しそうな呻き声が挙がる。
一旦討論を止め呻き声を挙げる上総さんの素に駆け寄る。

「止め…ろ……その子に…手を……出すな…！」

「か、上総さん…？」

「止めろ…止めろ…止めろ…！茜……茜……茜ぇぇぇぇぇ！！！」

叫び声を挙げながら飛び起きる。その出来事に誰もが驚愕し、虫の存在など完全に頭から外れる。上総さんは呼吸を異常なまでに乱し両眼を左手で覆い隠しているが、頬を伝っている大量の涙の所為で隠す意味を無くしてしまっている。

「上総さん…涙が…」

「……ッ」

ソファーから腰を上げ、逃げる様にミーティングルームから退室する。
初めて見た…あの人の無く姿を。私達の知らない女性の名を叫ぶ姿を。
何故だろう…途轍もなく胸の奥が痛い。鋭利な針で刺された様な感覚。

誰一人言葉を発声しない静寂な室内に響いたのは、探知機の作動している音だけ…。

また…あの悪夢を夢で見てしまった。
血液で染められた部屋。血液特有の臭いが鼻孔を突き刺す。初見となった瞳孔が開かれ冷え切っている人間の死体。踏み潰され粉砕骨折に陥り動かなくなった右手。出刃包丁で斬り付けられた背中。薄汚れた床板に広がる自らの血液。
そして…俺を兄と慕ってくれる少女。

「何で…何でだよ……茜…！！」

茜は唯一本物の『家族』として認めた大切な人物――――――

茜は心の支えとなってくれた掛け替えのない存在――――――

茜は今まで生きてきた人生の中で初めて俺が――――――

本気で恋をした女性…。

第三十九話：甦る記憶：前編（後書き）

今回も書き終わったと思えば真夜中の二時半近く…。
感想はとても疲れたとしか言えない…（一―一）ｚｚｚ

次回はいよいよ四体目の神襲来の予感！尤も黒神に絶大な影響を与える神様です！
どの神が舞い降りるかは、当然秘密です！

今後も”異世界を渡る人”応援宜しくお願いします！
沢山の感想も心からお待ちしております！

第四十話：甦る記憶：後編（前書き）

第四十話：後編です。同じ表現を何度も使用してある場面が恐らくあります…。
本当に申し訳ありません。

第四十話：甦る記憶：後編

数時間の睡眠で出た汗を流す為に、新たに設置された露天風呂に向かっている。先程まで殆どの隊員がミーティングルームで何やら相談事を肌で感じ取っていた。詳しい内容は夢の事で頭に入らなかった。

収まりつつある少量の涙を拭う。頬を伝った跡は渇いており、薄い白色の線が浮かび上がっている。

人間は眠っているとき、色々な物事を現実の様に見開きしたり、感じたりする現象を常識的に夢と言われる。夢には様々な種類が存在している。

食欲などの欲求を一時的に満たしてくれる良い夢。これが一般的な夢であり、誰しもに平等に与えられている。しかし俺が最近見る夢はこれとは結構離れている。

不吉で非常に恐ろしい出来事であり、記憶に深々と刻み込まれた凶夢。毎回繰り返される大事な子…茜が殺害される場面を鮮明に夢で目撃する。

血液の生臭い空間に亡骸として存在している高校生男女及び中年女性の死体。背中を鋭く斬りつけられ無残に床に倒れ込む自分。茜の助けを求める悲鳴を聞きながら、馬乗りになり頬を軽く撫でる男。

二度と茜の事は思い出さない為に記憶から消去した筈なのに…今は全ての事が確りと思い出されてしまっている。茜共に笑い合い過ごした日々も鮮明な映像として思い出されている。

あの時間は――――――…これ以上は止めておこう。只自分が苦しめられるだけなのだから。それに風呂場に辿り着いた。今は衣服に纏わりつく汗を洗い流す事を考えよう…。

軽く空気を吸い夢で速くなった心臓の鼓動を落ち着かせ、『ゆ』と書かれている赤い暖簾を掻き上げ脱衣所へ入る。入って直ぐに妙な現状に気付く。

「……暗いな」

天井から吊るされている豆電球からは明りが灯っておらず、視界の悪い空間を造り出している。何とか脱衣籠を発見し、安堵の息を吐きながら着衣している服を順々に脱ぎ丁寧に畳み脱衣籠に置く。ズボンを脱ぎ畳み終わった時、何かが付着しているのに気付き顔を近付け確認する。

付着していたのは黒い甲殻に赤い斑点の模様がある全長一センチ位の綺麗な昆虫。この昆虫…何処かで見てきた感覚だが、いまいち分からない。

頭を悩ませ考えていると黒い甲殻を纏った昆虫は、珍しい斑点と同じ色彩の羽を広げて飛び去る。捕獲しようとしたが、明りの灯っていない薄暗い空間で全長一センチの昆虫を捕獲するのは不可能に等しい。態々魔力を行使するわけにもいかない。まぁ…放っとけばそのうち逃げるだろう。

露天風呂へと繋がる木造の戸を横に引く。戸を開いた途端一瞬肌寒い風が身体を通り抜け、思わず身体を震わす。風邪を引いたら困るので、足早に石の階段を上る。

少しして視界が晴れる。眼にしたのは、屋根やそれを支える支柱等の殆どが石造りの露天風呂。小さな滝から流れ落ちる湯の音が、和風感を引き立たせる。

「うわぁ～…すげぇ～」

「ッ！？く…黒神君！？」

「えっ…？」

施設班の技術力に関心の声を挙げると、風呂場内から酷く驚いた様

子で俺の名前を言う女性の声。嫌な予感を感じながら、声のする方向に眼を凝らす。湯煙が邪魔で上手いこと姿を確認出来無い。集中して更に眼を細めると、そこに居る人物がはっきりと分かった。長髪赤髪を器用に上に纏め、頬を紅潮させている。

「み…み…ミーナ……中佐？如何して此処に…」

「それはこっちの台詞です／／／／！！何で…脱衣籠に私の軍服があったでしょう／／／／！！確かに電球が切れて暗がりの中では分かりにくい状況だったけど…不審に思って周りを確認出来たでしょう／／／／！！」

タオルで身体を隠しながら怒鳴りつけるミーナ中佐。それに対して俺は、素早く中佐から背を向け瞼を強く閉じている。普段の怒りとは別物で、これはこれで少し怖い。

怒鳴り声も徐々に止み始め、今度は張り詰めた沈黙が流れる。

「……そこに居たら寒いでしょう。早くお風呂に入って身体を暖めなさい」

「えっ…でも、それは…」

「大丈夫よ…。背中……向けているから」

振り向きそっと閉じていた瞼を開く。確かにミーナ中佐は背中を向け、無言で風呂に浸かっている。表情は此方の位置からは見えないけど、先程と同様で紅潮させてるに違いない。

俺は中佐の指示を風呂に浸かる形で示した。丁度良い温度が身体を暖める。

忘れていたけど……腕輪内で行われている神達同士の戦闘は終わっ

たのか…？

それから数分後…

未だ辺りの空気が張り詰めている風呂場では、中佐も俺も微動だにしない。素よりどちらか一方が動いたら気まずい雰囲気になるからだ。

そう言えば…以前坂本さんがミーナ中佐に対しては、時々で良いから芳佳達に対して見せる砕けた態度で接して欲しいと言っていた。

中佐は立場的にも性格的にも責任感や義務感が強い。その為結果的に俺を自分達の戦いに巻き込んでしまっていると、一人で居る時どこか浮かない表情をしているらしい。

普段の日常では明るく笑顔を絶やさず振舞っているが、陰で密かに苦しんでいるミーナ中佐を坂本さんは救ってくれと…。

すっかり忘れていた…最近過去の事ばかり考えており、頭から抜け落ちていた。

最低な自分に悩みながら、坂本さんの頼みをどう切り出そうか考えていると、中佐が静かに立ち上がるのを感じ取り再び瞼を閉じる。

「私はそろそろ上がるわ…」

「あっ…はい」

風呂場内の湯を掻き分けながら歩き、風呂場から立ち去って行く。

人の気配が無くなり瞼を開き、色々な感情が入り混じった溜め息を吐く。

結局…切り出せなかったな。また今度話せばいいか…ミーナ中佐はそんな貧弱な人間じゃない筈だ。それに今は個人的の問題を優先的に解決したい。かなりの歳月を必要とするけど…。

「あっ…そうだ」

不意に神達同士で行われている戦闘の現状が気になり、金色の腕輪を自分の視線位置まで持ち上げて、空いている左手で軽く三回程腕輪を叩く。

暫くして緑色の宝石から応答が見受けられた。緑色は風神・メリクリウスだ。現在腕輪内に居る神達の中で一番長い期間共にした奴だ。何時も自らの興味をそそるものを探し求めている。その興味の主な被害者はネプトゥヌスだ。メリクリウス曰く、気強いネプトゥヌスを弄り回すのが最高に面白いらしい。

（はぁ…はぁ…何ですか……黒神　上総）

「少し状況確認をしようと……聞くまでも無いな」

（当たり前です…！私はこれで失礼しますから…！）

神達同士の戦闘は終戦していない様だ。メリクリウスと対話した際に激しく息切れをしていたし、残りの二人が大暴走する大声が対話と交じりながら耳に入ってきた事から、終戦していないことは明確だ。一体何日間続けるつもりだよ…。幾等魔力や体力が保持可能でも流石にやり過ぎだと思う。

腕輪内の恩恵なのかは知る由も無いが、止めないで放置していたら軽く一ヶ月戦闘を行いそうだ…。

あいつ等には当分…相談事は無理だな…。

腕を横に大きく広げ天井を眺めながら呟く。

「茜……」

濡れた身体を軽く拭いながら黒神君の事を考える。
彼はこの数ヶ月間で隊の皆と完全に打ち解けている。本来なら隊の結束面から喜ぶべき事なのに…私は彼の打ち解けている姿を見ても、そんな気持ちに中々なれない。
私は…この世界にたった一人で迷い込んで寄る宛も無い、この世界の理も殆ど知らない彼の弱みに付け込んで無理矢理私達の戦いに巻き込んだだけではないかしら…。
――――いいえ、実際その通りだわ…私達にはそれぞれこの世界に生存する者として戦う責任がある。でも私は彼の意思をまともに聞かずに、全く違う世界の戦いに命を懸けさせている。
本当に彼は心から私達と戦うことを承認しているのかしら…？
他に行く所が無いと優しい彼を上手い事誘導した為に、甘んじて私達と戦っているだけじゃないのかしら…？
黒神君の事は大事な家族だと思っているけど今の私は…。

（最低ね…。御伽話で人間を騙す悪い魔女みたい…）

軍服の下に着衣する白い刺繍の施しの無いシャツを羽織り、濃い赤紫色のローレグのズボンを穿く。穿いたと同時に感じる違和感。ズボンの中に塵が入っているのかしら…。

「居ましたわ！！」

「えっ？」

聞き覚えのある声に思わず振り向く。申し訳なさそうな表情を浮かべている宮藤さんとリーネさん。牙を剥き出しで激怒しているペリーヌさん。探し物が遂に見つかった表情を浮かべるルッキーニさんと面倒臭そうに頭部を掻いているシャーリーさん。ダウジングを両

手に持つエイラさんと何故か固有魔法を使用している美緒とサーニャさん。な…何で皆が脱衣所に来ているの!?

「ちょっ…ちょっと!?一体――――――」

「逃がしませんわよっ!!ふんっ!!」

「…見えた!!」

問い質そうとした時、ペリーヌさんが私の下半身目掛けて飛びかかって来る。突然の出来事で回避不可能…と思った瞬間穿いていたズボンが勢い良く脱がされ、美緒が妙な事を言い出す。
見えた…何が?ズボンを脱がされた私の状況は…

「……ッ～～～～／／／!!?いやぁぁーーーーー!!?」

一時的に停止していた思考が瞬時に回復して、自分の今の状態を理解した。叫び声を挙げながら脱がされたズボンを一気に引き上げ、皆の眼の前で露わになっているものを隠す。
何かが私のお尻で砕けるのが微かに伝わる。

「あっ…ネウロイの反応消失」

「良くやった、ミーナ」

「流石ですわ!!」

「な…何なのよ一体／／／!?」

私は今までの人生で一番の大恥を皆の前で晒してしまった…。

神々しく光輝く夜空の月を、灰色の薄汚れた雲が覆い尽くしている。
アドリア海から波打つ音が物凄く心地良い。腰を下ろしている浜辺の砂は昼間に訪れるより、かなりの温度差がある。
今日は夕食を摂取する気が起きず、数時間この浜辺に座り込んでいた。時々過去の良い思い出だけを何度も何度も脳内で映像として流し貴重な時間を潰し続けてきた。
さて…今度はどんな過去の映像を楽しもうか……。

――――過去ｓｉｄｅ――――

季節は並木道に植え付けられた美しい桜木が、風が吹く度に綺麗に舞い躍る春。ほんのりと暖かい陽射しが身体を包み込む。ふと、空を見上げれば恐ろしい位雲が無い晴天。
今日は中学校の始業式。クラス替えや新たな授業の始まりで皆が心高鳴る。それは俺も同様だが、もう一つ心高鳴る要素が存在している。

「お兄ちゃ～ん！」

此方に駆け足で向かってくる一人の少女。手に持っている学校指定鞄は何時もより軽いようだ。始業式に備えてクリーニングした学生服の少し短めなスカートが揺れる。洗剤と少女の長髪からする匂いが、鼻孔を的確に擽る。石鹸とラベンダーの安心させる香りを感じていると、少女が全身を使い腕に絡み付いてくる。

「いきなりこんな場所で抱き付くなよ…。通行人が見ているだろう？」

「そんなの気にしないの！だって…私達は――――――」

――――過去ｓｉｄｅ　ｏｕｔ――――

映像がテレビの砂嵐の様に途切れた。正しく述べれば途切った近い。本当はこのまま映像を楽しみたい所なのだが、そうはさせてくれない『お客様』が襲来してきたようだ。

全神経を集中させ、相手の正確な位置を探知する。存在する気配は魔女でも整備兵でもない別物。なら経験上から解る事は一つ…四体目の襲来だ。

（何処から攻撃を仕掛けて――――――ッ！？）

浜辺から感じ取った魔力。素早く跳躍し上空に回避行動を行った突如、地面から鋭く突き出してきた土壌の刃。もしあの場に留まっていたら、今頃大きな風穴が空いてたに違い無い…。

常時警戒態勢で危険な大地に降り立ち、攻撃を放った者が身を隠している岩陰に、プレッシャーを込めて見据える。その所為かゆっくりと岩陰から姿を現してくる。

その姿を目撃した瞬間…異常なまでに心臓が体内で鳴り響く。

身長は１６５センチ前後。

栗色の長髪と瞳が特徴的な女性。

透き通るような美しい白い肌。

間違えない……何故あの子が生きている…眼の前で死んだ筈だ…。

「何で…何でお前が……茜…！！」

第四十話：甦る記憶：後編（後書き）

次回は初の女性神との戦闘です。皆さんを楽しませるよう精一杯書きたいと思いますので、応援宜しくお願いします！

あまり必要の無い雑談ですが…この『ストライクウィッチーズ』のキャラクター設定には実在した人物をイメージモデルとしているようですね。

主人公である宮藤芳佳はのイメージモデルは、大日本帝国海軍航空隊の通称『空の宮本武蔵』呼ばれた、武藤金義（撃墜数３５）らしいです。
これからも他の隊員のイメージモデルを紹介出来たらしたいと思います。

第四十一話：重なる姿（前書き）

第四十一話です。後半は結構雑に仕上げてありますのでご注意を…。
誤字・脱字がある場合は報告を宜しくお願いします。

第四十一話：重なる姿

人間の死に無関心な僧侶が、非常に嫌そうな表情で木魚を何度も叩く。耳障りに聞こえる汚いお経。息詰まるようなお焼香の匂い。”可哀想に”と同情する近所の馬鹿な連中の声。

行事等で頻繁に使用されるパイプ椅子に腰を下ろし、静かに顔を俯かせている自分。指を器用に絡ませては離すを繰り返す。脚を動かすと、薄緑色の畳と靴下が擦れて僅かな熱を感じ取る。

不意に、着衣している喪服のポケットに手を突っ込みある物を探す。指先に触れる冷たく硬い物体が当たり、それをポケットから取り出す。

白銀の鎖が通されている傷一つ無い綺麗な指輪。他人からは誰の所有物なのか判断できないが、俺には誰の指輪なのか判断できる。尤もこれは最近、自分の小遣いを使用し贈り物として購入した物。

一体誰の為に指輪を購入した？簡単だ……――――――

俯かせていた顔を上げる。色鮮やかに飾られた花々に囲まれる様にして横一列に並ぶ、亡骸が存在している五個の棺桶。その内、一番右側の棺桶に視線を送る。残りは……どうでも良い。右側の棺桶には大事な存在が冷たく傷だらけで眠っている。その存在に購入したのがこの指輪だ。

だが、この指輪を再度渡すこと等不可能…。　大事な存在…茜は死亡した。眼の前で無残に刺し殺され死亡した。あいつの所為で……あいつの所為で茜は殺された――――――筈だった…。

眼の前で起きている有り得ない現実に、心臓が異常なまでに体内で響き渡る。小刻みに震える身体を両手で力強く抑えるが止める事ができない。呼吸も乱れ、視界も揺らめく。

映り込む栗色の長髪及び瞳の同年代の一人の少女。白く透き通るような美しい肌。顔立ちまでも類似している――――死亡した筈の茜に…。

「何で…何でお前が……茜…！」

無意識に震える声色で、茜に類似しすぎている同年代の少女に尋ねていた。只純粋に少女の声が聞きたい。立ち塞がる存在が茜なのか確かめたい。そんな気持ちが、心を突き動かす引き金となったのだ。一方尋ねられた少女は、何を言っているんだ?と言わんばかりの可愛らしい疑問の表情で、唸り続けている。

数秒後…遂に少女が小さな口を開いた。

「え～～～とっね…私は大地母神で有名な神様で…ケレスって正式名称があって、茜という名称じゃないの。人違いだと思うから……御免ね。

次は私から質問何だけど…君は黒神　上総君で間違い無いかな?無関係な人間達は極力巻き込みたくないから、確かめておきたいの」

同じだけど違う…顔立ちや口調も茜に類似している点が多いが、声質が以前より少し高くなっている。それに大地母神・ケレスは自ら茜では無いと否定した…。嘘を吐いていない。ケレスの眼を見れば、誰にでも分かる事だ。

当然か…この眼で目撃したもんな……茜が刺し殺される姿を。馬鹿だな…何で分かり切っている事なんて聞いたんだろう…。苦しい気持ちを抱きながら、ケレスの問いに静かに頷く。

「そっか♪良かった～……私の姿を見て驚いているんだもん、間違えて無関係な一般人を攻撃しちゃったと思ったよ～。安心♪安心♪――――でね、私が此処に訪れた理由は、言わなくても分かるよ

ね？」

「……ああ」

「うん…。なら早速始めようね……いくよ！！」

過去の人物に似すぎている大地母神・ケレスと迷いある気持ちを抱く黒神　上総との戦闘が、薄汚い雲に隠された月下で開始された…。

戦闘はあまりにも一方的な状況である。

地面から襲いかかる土壌の刃が出現する瞬間を的確に見極め、様々な回避行動を行う。挟み込む様な左右からの攻撃は、身体の重心を引き飛び退く。中空に形成された飛来型の土壌の刃は、直撃位置の少し手前に回避を行い、自ら鍛え抜いた腕力と脚力を交互に使用し打ち砕く。

攻撃速度は今までの神達の中で尤も遅い。神術の応用も今のところ殆ど見受けられ無い。土壌の硬度も何とか打ち砕く事が可能――――だが、何故だが接敵することが出来ない。

近付こうと走り込めば、地面からの土壌の刃が襲い掛かり振り出しに戻される。判断が困難である回避行動を取ろうと一歩踏み出せば、遮る様に邪魔をしてくる。

まるで未来位置を把握しているかのように…。『地殻レーダー』でも使用しているのか？

『地殻レーダー』とは第二次世界大戦でドイツがソ連の戦車群の位置を知る為に研究していた技術。無数の振動探知機と音波レーダーで通常のレーダーでは不可能な地上を行動する物体の把握が可能だ。

しかし、ケレスの身体を見る限りそんな物体は何処にも…。

疑問の視線を放っているのに気付いたケレスは、意味も無く優しく

微笑んできた。

「うふふ♪そろそろ不思議に思っている頃だね？何で私に近付く事が出来ないのか、でしょ？特別に教えてあげるよ♪私は今回二つの能力を使用したの…『走紋』と『眼十輝（トウインクル・アイ）』を…まぁ初耳だと思うから、私が丁寧に分かり易く説明してあげる♪

『走紋』は体重・威力（パワー）・迅さ（スピード）…指紋の様に一人一人違った”走り”を私の石に刻み込む。この程度の場所（ピーチ）ならば一度覚えた走紋の位置は全て把握できるの。

『眼十輝（トウインクル・アイ）』は空間にある全ての物体を三次元に捉えて、完璧に近い精度で相手の次の”動き”を予測する…大地母神の私だけが持つ特殊能力……『立体把握幹（ソリッド・センシティブ）』。

私は『走紋』で的確な位置を把握し、『眼十輝（トウインクル・アイ）』で次起こる”動き”の位置を予測したの。だから君は私に近付けなかった…機転を利かした回避行動が出来なかった…納得してくれたかな？」

世界に邪魔な異物的存在である自分に、ケレスは先程使用した能力を分かり易く説明してきた。理解出来ない…敵である異物に能力の種明かしをするなんて…普通の戦場では先ず有り得ない事だ。

しかし良い情報を入手出来た…好都合だ。

『走紋』は地を走らなければ探知されはしない。『眼十輝（トウインクル・アイ）』の能力は説明からすると、未来を”予知”するのではなく”予測”するだけの能力。

なら簡単だ…予測不能の素早さで動き回れば接敵可能になり、倒す事が――――――できる！！その為には、道を開かなくてはならない…。

「発――――――ッ！？」

武装創造（ウェポンクリエイト）を使役し、刀剣を造り出そうと”発現”と呟いたが途中で

言葉紡ぐのを止めてしまう。無意識では無く意識的に止めたのだ。
視線を落とせば、震えている右手。左手で金色の腕輪が嵌めてある右手首部分を強く握りしめ、震えを無理矢理抑え込む。
震える理由が解らない……確かにケレスは死亡した茜に類似しすぎている。だから何だ？類似しているから震えるのか？茜とは全然違う存在なのに…何故だ？

「…君は知っている？弱者の天敵は強者……けどね、強者の天敵も弱者なんだよ？そして強者ほど…”牙”の長い持ち主ほど見えていない……己が既に”檻”捕えられていることにね。
そして、刻み込まれた石の記憶は欺けない」

「いきなり何を言って――――――なっ…身体が……動かない…！！」

突然全身が石造の様に硬直してしまう。身体も微弱に動かすことしか…！
落ち着け…落ち着いて考えるんだ…！地面から伝わるこの感覚は…『振動波』だろう。それではこの振動を引き起こす為に発振しているのは……まさか…！？

「水晶振動子の…原理を応用した……『振動波』か…！」

「大正解♪」

水晶振動子…水晶（石英）の圧電効果を利用して高い周波数精度の発振を起こす際に用いられる受動粒子の一つ。
原理は、圧電体である水晶の結晶に電圧を加える（電界を印加する）と、圧電体に変形が生じる。電気的特性としては、通常はコンデンサとして作用するが、その固有振動数に近いある特定の周波数帯でのみコイルの様に誘導性リアクタンスを持つものとして動作する。

この原理を応用した電子部品が水晶振動子である。
発振回路において、トランジスタとコイル・コンデンサの接続の組み合わせにより発振の条件が決まる回路がある（ハートレー発振回路、コルピッツ発振回路）。これ等の回路のうち、コイルが発振の条件として必要な部分に水晶振動子を接続すると、その固有振動数出力が得られる。

振動波…振動波とは、平たく言えば重力波である。
原子核の陽子と中性子が空間に作用する事で、空間自体がほんの微弱に波打つ現象、それが振動波であり重力波である。
当然のことながら一つ一つの原子が作り出す振動波は余りにも微弱なため、感知できない。だがある程度以上の量が集まると、発生する振動波もほんのわずかに大きなものになるため、感知する事が出来る様になる。
振動波の振動数は原子によって違う。
同じ原子が大量に集まっていればより感知しやすいし、雑多に原子が存在していたりすると感知しづらくなる。

つまり、非科学的に発生させた水晶振動子の原理の発振を応用して、振動波を起こし此方側の動きを封じ込めたわけか…。

「くっ…そ……駄目だ…上手く……動かねぇ…」

「余計な動きはしないでね…上手く直撃させられないから」

そう言うとケレスは、飛来型の土壌の刃を三本程自信の周りに展開させ、硬直状態の敵である人物に目掛けて放つ。俺は歯を力強く食い縛り、硬直状態を解除しようと試みる。
この『振動波』は強力だが、身体全機能までもが石みたいに硬直状態には至らない。何処かしら可動部位が存在している。現在の可動

部位は両足の爪先に両手の指先、顔全体が硬直せずに済んでいる。
たった三箇所の可動部位さえあれば十分だ。
指先に力を注ぎ込み拳を成す様に…！爪先で一気に跳躍する様な感覚で…！全身で振動波に塗り固められた身体を突き破る…！
最初は古びた木造設計の住宅から聞こえてきそうな軋む音が鳴るだったが、突き破ると心中で呟いた瞬間、辺りに硝子が割れる様な音が響き渡り、硬直していた身体が解放される。
解放されるや否や襲い掛かってくる刃を両腕で振り払う。先程とは違う重量感溢れたのに驚愕し、動きを一時的に停止させてしまう。
その隙を貫くかのように、右脇腹を土壌の刃が掠れる。
掠れた反動で身体は後ろに弾き飛ばされ、危険な地面に叩き付けられる。右脇腹には刃物で斬り裂いた後みたいな傷から血液がゆったりと滲み出ている。
不味いな…再びあの振動波を直撃されたら今度は少し危険だ。技の種は理解した…問題はどう打開するかだが……――――――あれなら…ケレスの『振動波』を逆に跳ね返せるかもしれない。
メリクリウスとの特訓で得た技…成功するかは自分自身の問題。

「やってみるか…」

脇腹の傷を押えながら起き上り、何度か呼吸を整える。
整えて数秒後は、ゆったりと深く空気を吸い続ける。
身体の隅々まで、奥の奥まで空気を導き入れていく。自分自身が空気になる感覚。空気は自分。空気の柔らかさは自分の柔らかさ。空気の流れは自分の流れ。
例えて言えばそれは――――――水深二十メートルの世界。肺に掛かる巨大な圧力はいわば高水圧下での空気ボンベ。気圧が高まると、空気は急速に体内に溶けていく……それは実に地上の三倍以上。
大量の酸素は脳や筋肉を活性化し、関節を柔らかくする。しかし…ここで最も重要なのは…普段人体に全くの無害…かつ大気の七十パ

ーセントを占める――――――

”窒素”！！

限界まで体内に吸収された窒素は、ほんの少しの減圧で一気に結合。体中に……――――――特にできやすい身体の隙間に――――――窒素の泡が発生する。

それは想像を絶する激痛。だがその天然のエア・クッションを挟んだ関節群は、その限界可動域をやすやすと越え――――――”人”の動きすら超えるっ……！！

「メリクリウス直伝……荊棘（ソニア）」

「荊棘（ソニア）…？何なのそれ…聞いたこと無いよ」

僅かな警戒体勢と真剣な眼差しで問い掛けてくる少女に対し、額の汗を拭った後は固く口元を閉ざす黒髪の少年。

「質問に答えてくれないのは…当然だよね？なら直接身体に聞く事にするよ！！」

再度『振動波』が放たれるが、こんなネタバレバレの”手品”など荊棘（ソニア）には通用しない。

「えっ…ど、どうして……！何で動か…ないの……私…！？」

ケレスが驚愕の表情を浮かべる。

本来なら無残に『振動波』の餌食になっている筈だが、現在の状況は真逆。『振動波』を使用した本人がその餌食になっている。一体何故こんな状況にケレスは陥ったのか？トリックは至って簡単であ

る。
物質は全て固有の振動を持っているが、特定の『石』の振動周波は特に正確で時計などにも応用されている。経験は無いだろうか？例えばマッサージ機のような振動を続ける物体に触れると、手が離れなくなるという現象――――…これは手と振動体が共振し一体化する為に起こる現象で、その周波が正確であればある程強力になる。要は超々高速で地面を蹴り続ける事によって”大地母神”と同じ振動波を生み、力を相手側に撃ち返した…これがトリックの正体である。
しかし地面を蹴り続けている間は、互いに行動することは不可能。勝負の決め手は只一つ。蹴りを止めた瞬間、ケレスにどれ程まで接敵できるかで勝敗が大きく分けられる。
大きく空気を吸いながら、徐々に地面の蹴りを弱める。
弱め…弱め……今だ！！
「ふぅっ！！」
一瞬の隙を突き、荊棘（ソニア）で強化された膝関節を曲げ、跳躍の要領で一気に接敵。突然の事態に驚きを隠しきれないケレスは、防御の為に創り上げた石壁を展開する。
荒野に咲く荊はどんな硬い岩にも根を張る。岩のほんの僅かな『スキマ』。密度の弱い”石の眼”を探し当て掘り割る。
石壁の極めて小さな隙間に衝撃を加えると同時に、辺りに砕け散る石壁の欠片。その背後には微かに怯えている少女。俺は今からこの子を――――
「…ッ……ぁぁぁあああ！！！」
右手拳を強く握りしめ、顔面目掛けて勢い良く振り下ろす。拳は少女の左頬に見事に直撃し、二メートル程吹き飛ばされる。確かに殴

り飛ばした…この震えている右手拳で…。
シャツを握りしめ苦しい気持ちを抑えていると、断続的に聞こえる啜り泣く声が聞こえた。何事だと思い、啜り泣く声が聞こえる方向を見るとそこには、殴られ赤く染まった頬を左手で押さえ、目尻に大量の涙を浮かべている大地母神であるケレス。
何か…嫌な予感が……。

「ううっ…ひっぐ……うわああん……えぐっ…」

「あっ…ご、ごめんな…。えっと…その……あれだ…涙拭いたあげるから、ちょっと手を退かして？」

「う、うん。有難う……」

純白のハンカチを取り出し、流れ出るケレスの涙を傷を痛めない様に優しく拭う。拭かれる事が、くすぐったいのか子猫みたいに眼を細めたり、殴られていない筈の右頬を赤く染めたり等、何処か落ち着かない態度を取っていた。

「あ、あのさ……どうして私に優しく接してくるの？数分前は、お互いに傷つけ合う敵同士だったのに…。何で…こんな事を？」

「何でだろうな？自分でも理由が分からない……けど一つ言える事がある」

「言える…こと？」

「ああ。率直に言うと……俺はケレスをこれ以上傷つけたくない」

「ッ／／／！！？……／／／」

ケレスは顔を紅潮させ俯き、黙り込む。
雲で隠されていた月も今は確りと顔を出している。アドリア海の波音は変わらず心地良い音を綺麗に奏でる光景を数分間眺めていると、沈黙を破るようにケレスが話しかけてきた。

「私も…これ以上闘って誰かを傷つけるのは嫌。痛みを感じるのも嫌。……だから降伏するよ。敗北したと認める。そうすればこれ以上私達が闘う理由が無くなるでしょう?」

「確かにそうだけど…ケレスは――――――」

「良いの!私が自分で決めた事なんだから!それを貫き通すのが道理でしょ?」

「……そうだな。今日から宜しく頼むよ…大地母神・ケレス」

「此方こそ宜しくね!私のご主人様♪」

その時のケレスの笑顔は、最高に可愛らしくて美しかった…。

第四十一話：重なる姿（後書き）

次回は投稿が恐らく出来ないと思います…。
理由は大事なテストが迫っているからです！以上！！

第四十二話：悲しみの記憶（前書き）

投稿遅れて申し訳御座いません！テストや小説の内容を考えるのに時間が掛かってしまい、二週間も更新できませんでした！自分勝手な理由で投稿できず誠に申し訳御座いません！

それでは、第四十二話をどうぞ！

誤字・脱字がある場合は御報告を…。

第四十二話：悲しみの記憶

ふと、窓辺から外の景色を眺めれば、何時もと同じく綺麗な青空。
しかし、私の心は陽射しが全く差し込まない、冷たい灰色雲に覆い尽くされている。
こんな気持ちになった原因は、昨日の上総さんにある。
初めて見た上総さんの悲しみの涙。泣きながら叫んでいた『茜』という女性らしき人物の名前。誰もがその姿に驚きを隠せなかった…。

「……ッ」

考える度に胸中の奥が酷く痛む。先端が細長く鋭利な針に、何度も刺されている様な感覚。心の冷たい灰色雲から発生した、もやもやとした気持ち。
私は…真実を上総さん自身の言葉から知りたい。何故涙を流していたのか…。『茜』という人物は一体誰なのかを…。
そんな気持ちを抱きながら、私は未だに睡眠中であろう上総さんに、朝食の準備が出来た事を伝える為、部屋に向かっている。
ミーナ中佐とサーニャちゃんを除いて他の皆も、今朝から少し浮かない表情をしていた。やっぱり皆昨日の事が気になっている様子だった。
机上に頬を付けて大人しくしているハルトマンさん、シャーリーさん、ルッキーニちゃん。無言で少し怖い表情で考え事をしているバルクホルンさん、坂本さん、ペリーヌさん。趣味のタロットカードを取り出し、占うか占わないか小さく唸り声を挙げ、悩むエイラさん。不安で落ち着かないリーネちゃん。皆一人一人が、上総さんの事で悩んでいる様子だった。
――――…何時の間にか部屋の前に到着していた。
大きく息を吸い、ゆっくりと吐き出す。

「起きてくださ～い！もう朝食の準備ができまし…た……よ…？」

扉を開け挨拶をする……が目撃したのは衝撃的な光景だった。
下着姿で気持ち良さそうに、睡眠中の二人の女性。一人は部隊の大事な仲間であり、エイラさんに懐いている女の子…サーニャちゃん。
もう一人は長髪茶髪が特徴的な、見知らぬ女性。
そして…私の訪問に驚愕している上総さんが居た…。

何とも摩訶不思議な夢……。
昔歴史の教科書で勉強した…中央の寝殿を囲みコの字型に対屋、釣殿等を廊下で繋いだ建築様式。平安貴族の住宅に用いられた事で有名である『寝殿造り』
その寝殿造りで、天皇が日常起き伏しした御殿と思われる部屋に、自分と中国衣装を纏っている男女。
平安時代文化と中国文化が混ざり合った、何とも不可思議なコラボレーション。
意味不明な光景に呆然としていると、中国衣装を纏っている男女が誰に向けてか、突然話し始めた。

「ええ…その通りだ。かつて私達はその言葉の意味すら知らない言葉群の響きに、心ときめかせ、街中で連呼しまくったものだ。
例えば…そう、フェラーリやπ…ちんすうこう……そして肉まん…」

「ならば時代は、やはり肉まんはイムラヤ…。イムラヤの下に世界の平和は、訪れると私は…私は確信するでしょう…」

「おお……ハラショー…イムラヤ」

何を言っているんだ、こいつ等は……？何故街中で最高級自動車や、数学の円周率を連呼する必要がある。肉まんはイムラヤ…？イムラヤの下に、世界の平和は訪れるって…一体何の事だか全く理解不能。早く帰りたい…そう願うと男女が、中国衣装の懐から何かを取り出す。白い生地に先端が、器用に練られている…肉まん。

『うむ…モチモチ…モチモチ……。ああ…素晴らしきかな、私は知っている。このモチモチスライム肉まんを私は知っている…』

俺には正しい意味は分からないが、どうやら摩訶不思議な夢から目覚める様だ…。

両腕から伝わる真綿にくるまれた様な重みで、ふと夢から目覚めた。眼に最初に飛び込んできたのは、見慣れた石造りの天井。この５０１統合戦闘航空団の仮隊員となり、数ヶ月の月日が経っている。見慣れるのは……当然か。医務室の天井も、何度か眺めてきているよな…ローマ神話の神々達との戦闘で負傷して、”神話融合”という新たなる力を手に入れ、忘れた筈の『茜』との様々な思い出が蘇って……死亡した筈の茜に、類似しすぎている少女…大地母神で称されている、ケレスと出会った。

声質は違うが、容姿や性格は殆ど茜と同類。思わず自分でも、見間違えてしまう程に類似している。

しかし、大きく違う個所が一つ……魔法が使用出来る事だ。

茜は何処にでもいる只の一般人。即ち…普通の人間。大地を自由自在には操れないし、情報分析能力もあれ程備わっている筈は無い。

だから……ケレスは茜とは全くの無縁の存在。只類似しているだけの存在に過ぎない。

そう…思っているのに、何故か意識してしまう。

（ケレスは茜とは別人…なのに……無駄に意識してしまう…）

否定の意を表す様に頭部を横に数回振り、起き上ろうと腕部に軽く力を加える。

瞬間――――――

「「……やぁっ……」」

両腕から艶めかしく聞こえた女性の声。嫌な予感を感知しながら、確認行動を行う。

先ず右腕から……下着姿で、控えめに腕を掴み、時々使い魔の黒猫と固有魔法の魔導針を発動させている銀髪の少女――――――サーニャ。

次に左側……同じく下着姿で、サーニャとは違い大胆に腕に絡み付き、程良い大きさの胸を意識的にかは定かではないが、異常に押し付けてくる長髪茶髪の少女――――――ケレス。

二人共…下着姿だから眼の遣り場に少々困る。特にケレスは胸を強く押し付けている為、ぐにゅぐにゅと多様な形状に変化するのが結構辛い…。

「と、兎に角…この二人を退かさないと――――――」

「起きてくださ～い！もう朝食の準備ができまし…た……よ…？」

突然扉が開かれ、芳佳が部屋に入室してくる。直後芳佳の笑顔が驚愕の表情に急変し、その場所で硬直してしまう。因みに俺は、睡眠中の二人を退かそうとしている状態。傍から見れば、襲っている様に捉えられてしまう。

これは…急いで芳佳に弁解しないと不味い気が……。

「……」

案の定、無言状態に陥ったと思えば、部屋から退室し扉を静かに閉められてしまう。これは精神的に、一番傷付く行動だ……。

「弁解する余地が――――…あれ？待てよ……あっ！！！」

突然だが脳内整理を行おう。

芳佳がこの部屋に訪れたのには、理由がある。確か朝食の準備が整ったと、入室の際言っていた記憶が残っている。つまり、俺とサーニャを除いて残り十人が、既に食堂の席に着いている事が、結果的に分かる。此処までは大丈夫。

問題は芳佳が目撃した光景。自分は、両腕を掴んでいる二人の少女を退かそうとしていたが、他者から見れば襲っている様に捉えられる……芳佳は勘違いをし、部屋を退室。

その後は事態を知らせる為に、食堂へ直行…――――――ッ！？

「た…大変だ……！！」

両腕に絡み付く二人の少女を少し乱暴に振り払い、ベットから身体を起こし普段着に着替える。着替える際は、睡眠中の二人を起こさない様慎重に素早く行う。

サーニャとケレスが何故俺の部屋に居るのかは、理解出来ないが…それよりも今は自身の被害拡大を抑える為、芳佳に弁解しなくては……！

扉を開き、食堂目指して宿舎の廊下を走り抜ける。自室から食堂までの距離は少しあり、普通に歩いて数分間位掛かる。

――――…軍規違反だが、走ったから二分程で何とか到着。

食堂の扉を勢い良く開き、食堂へ入室するが――――時既に遅しの状況。九人の魔女（ウィッチ）達の突き刺すような鋭い視線…。特にエイラ…恐らく親愛なるサーニャを取られたと勘違いをしているのだろう…今にも殴り掛かって来そうだ。最年少のルッキーニだけは、状況を把握していない様子。

それよりも今は――――

「……み、身の危険を察知した為、撤退行動を――――」

『させるとでも…？』

「ですよねー……ははははっ…」

何でこんな事態になったんだろうか…？

「つまり話しを整理すると……お前は、サーニャと見知らぬ一般人を自分の部屋に連れ込み、着衣している服を脱がして、下着姿で一緒に寝た……そういう事だな」

「何でそんな結果に至るんですか！？何度も違うと否定しているじゃないですか！？」

腕を組み仁王立ちで問題の整理を行う坂本と、その眼の前で正座をしている黒神。

撤退行動も虚しく終わり、あっさりと魔女達に捕まってしまい、現在事情聴取を行われている。だが、この事情聴取は一方的なもので、幾ら否定しても聞いてもらえず、話が悪い方向に勝手な方向に進行

されてしまい、事態が悪化するの繰り返しだ。
思わず疲労の溜め息を深々と吐くと、それに気が付いたエイラが、正座をしている俺の眼の前まで駆け寄り、坂本さんと同じく腕を組み仁王立ちをする。

「何溜め息なんて吐いているんだよ！！大体何が違うって言うんだよ！！お前がサーニャを無理矢理部屋に連れ込んで、服を脱がせて襲っただろう！！この……最低変態野郎！！！」

「最低変態野郎って……俺はサーニャ襲ってもいないし、部屋にも連れ込んで無い！！何でエイラは話しを悪化させるんだよ……馬鹿エイラ！！」

「なっ…！！じゃあ何でサーニャがお前の部屋で、寝ているんだよ！！」

「そんな事俺が知るわけ――――――」

突然食堂に接近してくる魔女達とは、異なる魔力を感知し言葉を止める。この魔力の感覚は、この世界に訪れてから新たに感じた、ローマ神話の神々達だけが所有している特殊な魔力。メリクリウス達はこの魔力を使役し、各々が持ち合わせている”神術”を攻撃用法や防御用法に転用している。その神術を転用する際に重要な役割を果たしているのが、以前ウルカヌスが言っていた”神術回路”だ。
神術回路の原理は、一般の魔女達が所有している魔法機関と同じであるが、それぞれの神達から感じ取れる感覚は結構違う。その事は神話融合のとき、神術回路から流れる魔力から学んだ。
メリクリウスなら身体を通り抜ける心地良い風。ネプトゥヌスなら清涼感漂う水。ウルカヌスは消滅すること無い灼熱の火等だ。
さて…話を先程の件に戻すが、この接近してくる魔力の感覚はロー

マ神話者に間違えない。腕輪には緑・青・赤の三色の宝石が収められている。
よってこの魔力の感覚は…――――
恐る恐る正座のまま食堂の扉に視線を送る。徐々に聞こえてくる、宿舎の廊下を駆ける足音。非常に嫌な予感がする…。
数秒後――――木造の扉が壊れてしまうのではないか、と思うぐらの音量で扉が開き、魔女達の視線が一斉に音のした方へ向けられる。
その場に居たのは、長髪茶髪を美しく靡かせ、刺繍の無い無地の白いシャツと、太股が見える短めの紺色スカートを着ている同年代の少女。
少女は俺を発見した途端笑顔になり――――

「主～～～♪おっはよ～～～♪」

「ケ、ケレス――――むぐっ！！」

腕を大きく広げ、抱きついてくるケレス。突然の事で対応できず、そのまま押し倒されてしまう。弾力のある柔らかい感触が、身体全体に伝わる。
皆も見知らぬ女性の訪問に、驚きの表情を浮かべている。また、数人の魔女達からは何故か、嫉妬の様な黒いオーラを感じ取ったのは、気のせいだろうか？

「うにゅ～…主の身体暖か～い♪」

「ちょっ…ケレス！は、離れろ！！」

「ふぁ～～～…おはよう……御座います」

小猫のみたいに可愛らしく、頬づりしてくるケレスを離す為奮闘していると、サーニャが眠そうな表情と欠伸を兼ねて食堂に入室してきた。
それに素早く反応したのは、散々最低や変態などの悪口を言い散らしてエイラ。流石…親愛なる大事なサーニャの事になると、行動が何時も以上に速い…。

「サーニャ！大丈夫か！？部屋に連れ込まれて、変な事されていないよな？」

「……？何を言っているの、エイラ？私は夜間哨戒終えた後、ちゃんと自分の部屋に戻ったわよ？」

『えっ……あっ…』

サーニャの回答に、魔女や少年は一時的な沈黙の後、気付いた様に同時に声を発した。

成程……簡単に纏めると、夜間哨戒を終え眠気満タンのサーニャは、無意識で自分の部屋と俺の部屋を間違えてしまい、あの状況に至った。着衣していた服を脱いでいたのは、恐らくサーニャが寝るときに服を脱ぎ、下着姿で寝るのが当たり前になっていたから、身体が自然に動いてしまったんだろう。
溜め息を吐き、この事をサーニャに伝えると、眠そうな表情が一変…眼を見開き顔を真っ赤にしながら焦った口調で、”すみませんでした…！”と謝ってきた。こんなに顔を赤らめたサーニャを見たのは、初めてだ…。
まぁ、誰にでも間違いはあるという事で、この件は水に流すことにした。精神的負傷は未だ癒されていないけど…一件落着だ。
一応事態が収まった事に安心していると、

「それじゃあ、その女の子は一体誰なんですか！」

芳佳が真剣な視線で、ケレスを指差す。

「あっ…えっと……こいつは…その…」

「私？私はローマ神話の神々達の一人で、大地母神で称されているケレスって言うの！関わることは無いと思うけど一応……宜しくね♪」

「ローマ神話……ッ！？黒神…お前また一人で戦ったのか！！」

ケレスが勝手に自己紹介をし、自分がローマ神話の神々達の一人である事を暴露した途端、魔女達の表情は驚愕及び怒りのものに変化していた。特に坂本さんの怒りは凄まじく、今にも首元を掴んで殴りそうな勢いだ。強く握りしめている拳から見受けられる。

何時も気儘で自由人のハルトマンさんや、無邪気で明るいルッキーニも、これには酷く怒っている。これは確りと説明しなくては…。

「安心してください、坂本さん。最初はケレスと刀を交えたけど、その後はちゃんと言葉同士で和解しましたから……負傷なんて一切していません。立派な健康体ですよ」

「嘘を吐くな！！あれ程言った筈――――」

「止めてよ…」

突如ケレスは抱きついていた身体から離れ、坂本さんの言葉を阻むようにして、眼の前に立ち上がり冷たい声色で静かに言い放つ。昨

晩のと先程ケレスには全く該当しない、別人に捉えられた。

「な、何のつもりだ貴様…」

「それは私の台詞……主は間違った事なんて一つも言っていないよ。最初は互いの力をぶつけ合った…けど、その後は戦いではなくて言葉で和解したの。私は戦闘に不向きで、痛みや誰かを傷付けることは大嫌いだから……主の言葉での和解に大賛成だった。これは紛れもない事実。

これでも貴女達ウィッチは信用してくれないの…？私の言葉を信用しないという事は、主の言葉も信用していないにも繋がる。大事な仲間の言葉すら信じられないなんて、本当の仲間とは決して言わない。貴女達は主の優しい心を利用して、惑わせて騙している只の……最低な人間だよ」

重い沈黙が空間を支配する。ケレスの言葉の所為か、誰一人動こうとしない。ケレスも冷たい眼線で、魔女達一人一人を睨み付ける。

それから数分後…大地母神は腕輪内に一時的に戻り、魔女達や少年は遅い朝食を摂った。

朝からギスギスとした空気での食事は、あまり美味とは言えない物だった…。

「この紅茶…香りも味も最高～♪」

「好きなのか、紅茶？」

「うん！時々メリクリウスに紅茶の知識を色々と教えて貰って、自

分で淹れてみたりするんだけど、中々上手に出来ないんだよ～。まっ、今度からは主に紅茶を淹れて貰うよ。主が淹れてくれる紅茶…もの凄く美味しいからさ！」

「そ、そうか…」

大地母神の褒め言葉に、照れているのか頬を少し紅潮させている黒神。

ケレスが現れて約一週間程経った。一週間＝１６８時間もあるのに時計の針が、普段より速く進んでいる様に感じた。最近は入浴や就寝、御手洗い以外殆どケレスと行動を共にしている。訓練は大地母神が”神術”を使用し繰り出す技を回避したり、破壊したり等の訓練。食事はケレスが隣に居る場合は、仲の悪い魔女達と共にするのは出来るだけ避け、気配の無い時に摂取する。休憩時間は、現在の通り紅茶を飲んだりして、会話を楽しんでいる。

駄目だ…振り払っても『茜』の姿を重ねてしまう…。

ティーカップの撮み部分を、離しては撮みを何度も繰り返す。すると、ケレスの顔が何故か俯いているのに気が付いた。不思議に思っていると、彼女はゆっくりと意を決したかのように、小さな口を開く。

「あのさ…主……。私…知りたい事があるの……聞いても良い？」

「別に構わないけど……何が知りたい？」

「以前私と出会った時……姿を見て『茜』って呟いたよね？一体誰の事を指しているの？」

掴んでいるティーカップの紅茶が一瞬震えた。二度と思い出したく

ない過去の悪夢。初体験の光景が辺りに充満している、血臭い空間。
紅茶に映り込む、微かに怯えている自分。今まで他人には打ち明けなかった過去の出来事を彼女に教えれば、多少は過去の苦痛から解放されるのだろうか？
残りの生温かい紅茶を一気に飲み干し、ケレスの問いに答える為、深呼吸を数回行う。

「ふぅ～～～……家族は六人家族だった。両親、兄貴と姉貴、俺、そして同年代の義妹である茜。家族構成だけを述べれば、ごく平凡で何処にでも存在している家庭。
だけど、家庭内は酷く荒んだものだった。親父は酒やギャンブルに溺れ、兄貴と姉貴は、社会に適応できない不良の連中と絡み、朝から晩まで馬鹿みたいに遊んで、手持ちの金銭が尽きれば古典的な手口で金を奪い、また遊ぶを繰り返していた。
唯一正常だったのは、母親と俺、義妹の茜だけだ。母親は必死に働いて俺達二人の事を支えてくれた。食事は仕事が忙しくて作れなかったけど、ご飯は忘れず炊いといてくれたんだ。他の食材は与えられた金で買った物を調理して食べていた。人間…水と食料があれば生きていける生物だからな。
そしてケレスの知りたがっている茜は、辛い時に傍に居てくれて、笑顔がとても可愛い…俺が一番大事に思って…いや、初めて恋をした女の子だった。何時かは、本気で告白しようと心に秘めていたよ。けどな……」

「けど……？」

「俺以外の全員が死んだ…。正確に述べると殺された…が正しい回答だな」

「そ、そんな事が何で…？」

「殺された理由か……それは――――――あれ？何だ……これ？」

手の甲に落ちた雨粒の様な感覚を不思議に感じながら、眼元に手を持っていくと、無意識のうちに泣いていたのか大量の涙が、頬を伝い流れている。眼を力強く擦って涙を拭いても、追い打ちを掛けるように溢れ、流れ出る。

止まらない涙に悔しがっていると、ケレスが無言で横から包み込むように抱き付く。

「な、何をしているんだよ……別に…こんなの……」

「主……辛いなら泣いても良いんだよ？そんなに一人で全部背負わないで…。まだまだ未熟者の私だけど、主を支える様に頑張るから…」

「ケレス……うっ…くっ……！」

心に傷を負っている少年は、優しき少女の胸の中で静かに泣いた。

扉の向こうにいる者達の存在に気付かずに…。

第四十二話：悲しみの記憶（後書き）

久々の執筆…物凄く疲れました～。
時間があれば、神々達の詳しい詳細を執筆したいと思うので、応援宜しくお願いします！

第四十三話：新たなる刺客（前書き）

第四十三話です。今回は結構短めな作品だと思うので、ご了承ください。

第四十三話：新たなる刺客

――――腕輪内　ネプトゥヌスｓｉｄｅ――――

微かに柔らかい弾力のある蒼色のソファーに、後頭部で手を交互に組み、大人しく身体を預ける。眺めている天井は、相変わらず無色で面白さの欠片も無い。それが腕輪の特徴なら、仕方ない事だ。

粗悪品の腕輪に溜め息を吐きながら、他の神達の様子を窺う。

メリクリウスは難しい表情をしながら、長椅子の背凭れが後ろに倒れ、調節できる座席に座りながら、左側の小さな木造の円状テーブルに置かれている、暖かそうな紅茶を手に取り、静かに啜っている。

ウルカヌスは何時も以上に訓練に集中しており、何人たりとも近付けさせない、濃い殺気に満ち溢れた雰囲気を醸し出している。

こんな状態を産み出した原因は、考えられるだけで只一つ……

「魔牙……」

消え入るような声で、憎たらしい者の名前を呟く。

魔牙…数百年前勃発した、ある出来事の首謀者である人物。髪色及び瞳は同類の紫色。顔の右頬には、奴だけが所有している特殊で希少価値のある神術…龍の烙印が彫られている。あの神術は、あまりにも危険すぎる。天界で完全無欠・最強無敵で恐れられている雷神…ユピテルさえ魔牙の神術を酷く恐れ、その異常な力を二度と表沙汰にしない為、魔牙本体諸共深い闇に封じ込めた……筈だった。

以前風呂場で黒神と会話した際、衝撃的な言葉を聞いた。

魔牙に出会ったという有り得ない言葉を……。

有り得ない現実に驚きを隠せなかった。あの時薄れゆく意識の中で、確かにユピテルが魔牙を閉じ込めた状況をこの眼で確認した。幾つもの黒色の頑丈そうな鎖で束縛され、叫び声を挙げながら抵抗する大罪人。戦闘で使い物にならない程破れている衣服に、頭部から溢れ出ている血液を手の甲で、少し乱暴に拭う光牙とユピテル。傷付いた身体から伝わる激痛に耐えきれず、無残に地面でもがき苦しんでいる俺達ローマ神話の神々達。

「……ッ」

過去に魔牙の神術の直撃を受けた、胸部分を優しく触れる。メリクリウスやウルカヌスも同様の神術を受けて傷付いた。最も酷い損傷だったのは、戦争の女神・ミネルヴァだ。ミネルヴァは身体の臓器の殆どを魔牙に持って逝かれしまい、治療する事が不可能な状態だった。

その時、自分の全臓器をミネルヴァの為に役立ててくれと名乗りを挙げたのが、戦争の神・マルスだ。マルスはミネルヴァとは仲良く、頻繁に天界を出歩いていたのを目撃していた。いや…正確にはサドであるミネルヴァが、マゾのマルスを奴隷みたいに調教している様に見受けられたが……マルス自身鞭で叩かれて喜んでいたから、別に構わないのだろう。

だが他者からの視線で捉えれば、その姿はかなり――――――

「気持ち悪ぅ……」

「何が気持ち悪いの？」

「どわっ！！？」

突然声を掛けられ驚きの声を挙げると共に、ソファーから飛び跳ね

る。声の正体は、常に黒神と日常を一緒に過ごしており、自らの立場関係無く黒神に好意を寄せている大地母神・ケレス。
ケレスの性格は地を這う人間に似ており、少し苦手な相手だ。今回馬鹿なウルカヌスが引き起こした行動に裁きを下す為、メリクリウスと共闘していた所をケレスの神術『振動波』で中断され、何故か数時間正座で頭に響く声色で説教された……意味不明だ。

「はぁ……別に何でも無い。少し、数百年前の出来事を思い出していただけだ。
――――で、何でお前が此処に居るんだよ。黒神と一緒居るんじゃないのか？」

「本当はこれから主と一緒に、遊ぼうと思っていたんだよ！なのに……扶桑の眼帯黒髪ポニーテールが邪魔して…！むぅ～～～……あの泥棒猫がぁーーー！！」

扶桑人の眼帯黒髪ポニーテール……この第５０１統合戦闘航空団の隊員で該当する人物は、うろ覚えの記憶を探る中で只一人。確か名前は……坂本　美緒だったか？
所詮は機械の翼が無ければ飛べない人間の一部……興味も湧かないな…。

――――腕輪内　ネプトゥヌスｓｉｄｅ　ｏｕｔ――――

仕事場に戻る途中、辛そうな表情を浮かべる美緒と、少し不満気に美緒の後を続く黒神君を見かけた。時間帯や美緒が持っていた模造刀から、恐らく二人で模擬戦をするのだろう。数ヶ月前までは、粗毎日行っていたけれども、最近は全然模擬戦を行う姿が見られない。

美緒の辛そうな表情の原因は、多分数日前に遡る……。

――――――数日前…

「ふぅ……」

書類を纏める時に使う羽根ペンをインクが入っている黒色の小さな瓶に移し、長時間のデスクワークで固まった筋肉を解す様に、肩を何度か力強く叩く。それに伴い執務室の扉が三回ノックされ、微かに軋む音を奏でながら開かれる。入室してきたのは、悲しそうな顔色をしている美緒。彼女のこんな状態、今まで一度も見た経験が無い。

「一体どうしたの…？」

「その…ミーナに相談があって……だな」

心配になった私は相談を受ける事にした…。

「成程ね……」

大体予想していたが悩みの原因は、部隊の大事な仲間（かぞく）である異世界人…黒神　上総君に強く関係する事だ。内容を分かり易く整理すると、この頃黒神君が私達に対する態度が、ローマ神話の神々達の一人で、通称大地母神・ケレスという女性に向ける態度とあまりにも違いが激しいという内容だ。

確かに…私も思い当たる節がある。今朝彼に挨拶をしたところ、何時もと変わらない優しい笑顔を向け挨拶してきたが、その笑顔は何度か練習を重ね創り上げた、偽物のような感覚。最初は何かの間違いだと思っていたが、ケレスさんに向けた笑顔を目撃し、それは確かな確信へとなった。

態度や表情……何もかもが特別。偽物を遥かに超える、彼女だけに魅せた本物の笑顔。仲間(かぞく)より、敵同士であった彼女に優しく接する黒神君の姿に、悲しみの気持ちを抱いた。

美緒の言っている事は紛れもない事実。彼の態度に対して、きちんと話しをする必要がある。

「だったら黒神君に直接話しに行きましょう。私からも一言二人に、言いたい事があるから…」

「うむ……そうだな」

椅子から腰を上げ執務室から退室し、二人の居場所を固有魔法『超感覚』を使役し捜し当てる。固有魔法の御陰で、直ぐに発見する事が出来た。現在位置は宿舎の食堂である事を美緒に伝え、足早に食堂へ向かう。その最中他の隊員達と出会ったが、やはり皆同類の事で悩んでおり、これから直接話しに行く様子。ルッキーニさんに至っては眼尻に少量の涙を溜め、シャーリーさんの衣服の裾を掴んでいた。

シャーリーさんによると、黒神君に遊んでくれと頼んだ筈なのに、全然相手にしてもらえない状況が、ここ数日間続いているらしい。部隊が乱れている事を肌身で感じていると、既に食堂の前に辿り着いていた。意を決して扉を開こうとした途端、彼の声が聞こえた。思わずドアノブに伸ばしている腕を一時停止させてしまう。何事かと思い意識を集中させ聞いた内容は、あまりにも衝撃的な事実だった…。

”彼の家族は全員――――――何者かに殺害されたと……”。

とある昼下がり……。突然坂本さんからの模擬戦の誘いを受けた為、何時もの模擬戦場である砂浜に脚を運ぶ。此処では自主訓練をする場所でもあるから、彼方此方損傷個所が見受けられる。刀剣が掠った跡の幾つもの浅い一筋に、跳躍に利用され一部が押し潰されている岩石。多種多様な攻撃魔法の使用で、黒色に染まり上がった砂等の以前は無かった光景が広がっている。空を見上げれば、太陽光が眩しい綺麗な青空。アドリア海は静かに波打ち、丁度良い清涼感を産み出している。

そんな感覚を吟味しながら、手に持っている模造刀に視線を送る。最近坂本さんと模擬戦をしていない所為か、少しこの模造刀が懐かしく感じる。

ゆっくりと模造刀を鞘から引き抜き、軽く横に振り払う。それを合図としたのか、坂本さんも手際良く鞘から引き抜きて、無言で此方に刀を向ける。

「互いに準備完了ですね…。それでは――――――ッ!!?」

早速…戦闘開始しようと模造刀を握り締めた瞬間、上空から何やら不吉な物体が、急接近してくるのに勘付き、青空を再度見上げる。この魔力の感覚は魔女でも無く、ローマ神話の神々達でも無い。この二次元世界『ストライクウィッチーズ』での三度目の新たな魔力の感覚。しかも、かなり危険な使命感に満ち溢れた……一体何者が…。

考えを纏めていると、視界に黒い球体が出現し急速落下してくる。坂本さんもその黒い物体に気付き、模造刀を投げ捨て、バックステ

ップで直撃しない距離を取る。此方も同じように模造刀を砂浜に突き刺して、斬れ味のある鋭い刀剣を発現させる。
黒い球体はそのまま地面に勢い良く落下し、激しい轟音共に細かな砂を周辺に舞い散らせる。視界が良好では無くても、常時警戒は怠らない。一般常識だ。
――――数秒後…球体が卵の殻みたいに割れ始めた。
合成樹脂（プラスチック）を粉々に砕き割る不快音に、手に汗握ると球体の内部から不吉で、危険な使命感に満ち溢れた者が、姿を露わにした――――
――驚愕。
人間宛らの容姿をしているが、この見覚えのある漆黒の装甲。両肩と両太股には、六角形の光輝く紅い斑点模様。間違い無い……こいつ等は…！

『人型ネウロイ…！！』

眼の前に立ち塞がる一体の人型ネウロイを見据える。全長二メートル程の高身長に、特殊な魔力を持ち合わせている人型ネウロイ。これまで殲滅してきたネウロイとは、全くの別者。危険すぎる……即急に坂本さんを退避させ、殲滅させる必要がある。
行動に移ろうとした瞬間――――人型ネウロイは右腕を天に掲げたと同時に、ｇｕａｒｄｆｉｅｌｄに類似している黒色のドームが発生し、俺達を閉じ込めた。

【目標ノ再確認ヲ開始。黒髪及ビ過去ノ記憶ニ囚ワレテイル瞳。右手首…金色ノ腕輪ニ四色ノ宝石。多数ノ一致条件ニヨリ、照合。７２……８４…９８……１００。照合結果カラ異世界人…黒神　上総ト情報ヲ確定。任サレタ任務……黒神　上総ノ排除ヲ――――開始スル】

刹那…襲い掛かってくる人型ネウロイの腕部から形成された長刀を

間一髪防御する。刀同士が鍔ぜり合う度に火花が辺りに飛び散り、自分の皮膚が若干焼かれる。

長刀の重圧も凄まじく、少しでも気を抜けば押し潰されてしまう感覚。全身に重荷の様に掛かる負担は大きく、身体全体が悲鳴を上げている。もし人型ネウロイの攻撃をモロに喰らったら、生命(いのち)は無いと考えた方が妥当だ。

全ステータスを含めこいつは、今まで以上に強力な異物。場合によっては、容赦無しに神話融合を使用して、一気に片付ける。

恐らく人型ネウロイの目的は、黒神　上総という異世界人の排除のみ。この場に居る、坂本さんは眼中に無い存在……それに『過去の記憶に囚われている』と言う言葉が引っ掛かる。俺の過去を知っているのは師匠とケレスだけの筈なのに、何で知っているんだ…何で……！

新たなる刺客に疑心を抱く少年は、真実を求める為戦う…。

第四十三話：新たなる刺客（後書き）

何時も短い作品で申し訳ありません。
次回は戦闘を主軸とした話しにするので、応援宜しくお願いします！

第四十四話：静かな怒り（前書き）

第四十四話です。
深夜投稿なので誤字・脱字があるかもしれません…。
恐らく今回も短い作品だと思います。

第四十四話：静かな怒り

漆黒の球体が不気味に覆い尽くす空間で、金属同士が激しく交わる轟音が鳴り響く。暗闇を明るく鮮明に照らす火花が、砂浜や黒髪の少年の腕部を付着し、獲物を追い詰める肉食動物のように、じりじりと皮膚などが焼かれる。

正面を向いている身体全体を右回転させ、敵対勢力に背後を見せつける――――正面から丁度１８０。の位置で、刀剣を力強く水平に薙ぎ払う。実践経験の浅い他者達なら反応が追いつかず、胴体が上半身と下半身に綺麗に両断され、血飛沫が中空に舞い散るだろう。しかし、この異物『人型ネウロイ』は経験不足の他者達とは違う。薙ぎ払われた一撃を素早く反応し、特徴的な両肩の紅い斑点を輝かせ、黒色の右腕部で形成された長刀で容易く防いだ。形成された長刀の全長は、眼分量で『人型ネウロイ』の半分程……約一メートル前後。硬度は日常的に襲撃してくる汎用型ネウロイとは比較にならない……刀剣を握りしめている右手が痺れている事から理解出来る。黒髪眼帯の女性…坂本　美緒は眼の前で繰り広げられている光景に恐怖してか、愛刀『烈風丸』を握り締めたまま立ち尽くしている。恐らく彼女も直感的に理解したのだろう……自分があの場所に参戦した場合の状況――――黒神　上総の足手纏いになると同時に、自らに襲い掛かる明確な『死』に……。

賢明な判断だ。今まで魔女達が殲滅してきたのは、汎用型のネウロイ。魔法力を所有せず、武器を形成する等器用な技術を持たない。唯一の攻撃手段が圧縮粒子砲（ビーム）だけ。生命部分に該当する核（コア）を覆い尽くしている装甲も、鉛玉で簡単に破壊できる程の硬度しかない。だが黒神　上総が戦い、坂本　美緒が目撃している敵対勢力『人型ネウロイ』は、上記で述べた汎用型とはあまりにも異なる。独自の魔力を所有し、黒色の装甲から武器形成する上級技術を持ち合わせる。誰も知り得ない新たなる異物――――『魔法力所持、人間の

形為す強化型ネウロイ』
鍔迫り合い状態で少年は、鋭い眼光で『人型ネウロイ』を見据える
――――――強い。

「……ッ…うわっ！？」

”黒神　上総の排除”と何者にか与えられた使命を果たす為、突如上空から舞い降りた人型ネウロイ。
こいつが降り立った場所は、自主特訓や模擬戦で頻繁に訪れる砂浜（ビーチ）。
足場は神話融合の訓練等で以前より悪化しており、訪れる度に嫌々としていた。その事が今回仇となってしまった…。
盛り上がった小さな砂山に脚を置いた瞬間、体勢をがくんっと崩す。
警戒していない個所で発生した、突然の出来事（ハプニング）に驚愕し、意識が脚元の方向へ瞬間的に向いた。人型ネウロイはその事を見逃さず、失態を嘲笑うかのように長刀を振り上げる。
奇怪に黒光りする長刀を眼の前にし、爪がめり込む位強く握りしめ、身体を駆け抜けるだろう激痛に耐え抜く準備を行う。これが合図となったのか、黒光りする長刀が勢い良く振り下げられる。
殺られる――――と思ったが、予想外の音が鳴り響いた。
がきんっと硬質な何かがぶつかり合う。透かさず視線を鳴り響いた音の方に移す。そこには、愛刀の『烈風丸』に魔力を纏わせ、人型ネウロイの長刀を防いでいる坂本少佐。

「な、何してるんですか！？今すぐ逃げて下さい！！」

「……ッ」

歯を食い縛り無言状態で、押し潰される程の威力を持つ長刀を防ぐ。
烈風丸は刀身に術式が施してある為、特殊な術技の使役や刀身が受ける衝撃を軽減可能だが、それは無限に持続するわけではない。現

在坂本さんは、長刀の衝撃を軽減する為に膨大な魔法力を烈風丸に流し込んでいる。徒でさえ膨大な魔力を吸い取る諸刃の刃では、消費される魔法力も凄まじい。
徐々に消費されていく魔法力は、烈風丸の軽減する力を弱めていく。
坂本さんの魔力が何時空になってしまうかは時間の問題。

【……魔女風情ガ調子ニ乗ルナ。所詮『烈風丸』ガ無ケレバ、戦ウコトガ不可能ナ魔女。蟲ノヨウニ大地ヲ這ウ、汚ラシイ人間ト同類ノ存在。
コノ戦イニ無力ナ貴様ハ不必要。直チニ此処カラ……失セロ】

「――――――ッ…があッ！？」

「坂本さん……！！くそっ…」

人型ネウロイは肩に付着した埃を払い除ける様に、簡単に坂本さんを長刀で弾き飛ばす。数メートル後方に弾き飛ばされた本人は、背中から乱暴に着地し苦しそうに咳き込んでいる。また魔力の極度な使い過ぎにより、かなりの疲労が圧し掛かっている。表情から読み取れる。生命（いのち）に危機を晒す傷が無いなら大丈夫。意識を敵に集中させ――――――反撃開始。
刀剣を相手に突き刺す状態に持ち替え、三連撃の神速突きを放つ。
動作が素早く、その後も敵との位置関係が殆ど変化しないので連携が途切れにくい――――――刹牙。
今度は逆手に移行させ一歩踏み出し、打撃と衝撃を打ち込む技。相手に向かって飛び込む為、リーチが長いのが利点。技の後に少し間合いが開くが、届かない攻撃は殆ど無い距離なので連携に支障はない、刹牙と同類の連携技――――――双衝。
相手の気が緩んでいたのか、此処までの攻撃は全て直撃。装甲の破壊までは至らないが、結構な損傷は与えた。なら次の一撃で捻り潰

す。
中級レベルの雷属性魔力を呼び起こし、黄緑色の雷を刀剣全体に纏わせ、人型ネウロイの中心部に叩き込む渾身の一撃――――――雷斬衝。

「終わりだ……豪快に砕け散れ――――――ッ！？」

戦闘終了――――――では無かった…。攻撃は確実に届いた筈なのに、人型ネウロイは悠然と立ち塞がる。今まで直撃させた攻撃が嘘みたいに、黒色の装甲には一切損傷部分が無い。有り得ない光景に眼を驚愕していると、人型ネウロイの紅い斑点が光輝き、左腕部が右腕部と同じ長刀へと形成される。
ぎらりと鋭い両腕の長刀が振り上げられる。
不味いッ……幾等なんでも二本同時を防ぐことは不可能。

【貴様ガ終ワリダ……黒神　上総】

「くっ…間に合わない――――――」

右手首の金色の腕輪に収まっている、一色の宝石が激しく光輝く。
直ぐに腕輪に視線を落とすと、反応を示しているのは薄茶色の宝石。
何故ケレスが…そう思った時には、既に両腕を大きく広げて俺を護ろうとしている。

「止めてよ！！主をこれ以上……傷付けないで！！！」

「馬鹿…！！ケレス……やめろぉぉぉぉぉ！！！」

制止の言葉は届かず、二本の長刀が勢い良く振り下ろされる。ケレスの身体が無残にも斬り付けられ、大量の血液が吹き出す。斬り付

けられた反動で、後ろに身体が倒れる。透かさずケレスを強く抱き抱えながら、人型ネウロイとの十分な距離を取る。手に生温かい感触が伝わる。

「大丈夫か!?確りしろ…ケレス!!」

「げほっ……大丈夫…だよ…。傷口は…自分で……塞いだから。そんな心配そうな……んっ…顔しないでよ。私は…笑顔の主が……大好きだから…ね……」

静かに気絶したケレスを眼にした瞬間――――――頭の中で何かが切れた…。

「黒神……!そいつの怪我は――――――うっ…!?何を……!!」

少年は顔を俯かせたまま、事態を目撃し駆け寄ってきた坂本　美緒の首元に手を添える。添えた直後、彼女は膝から崩れ落ち、砂浜に優しく倒れる。それを横目に、傷付いたケレスを倒れ込む坂本　美緒の隣に降ろし、人型ネウロイと対峙する。
そして少年は怒りを孕んだ声色で小さく呟く…。

「神話融合……」

腕輪の紅い宝石から放出される光は、少年の身体を覆い尽くす。
数秒後――――――光が周辺に弾け飛ぶ。姿を現したのは煮えたぎるマグマの塊の様な……敵対勢力に向けられた明確な闘志。全てを無慈悲に溶かし尽くし…尚も燃え盛る灼熱の眼光。それらを象徴させる役割を果たす、綺麗なのに途轍もない威圧感を引き立たせる――
――――炎髪。

――――A burnt child dreads the fire――――

意味は…火傷をした子供は火を怖がる。

「ケシズミになってから後悔しても、もう遅いぜ…お前」

「燃えろ……」

両手に纏わせた青色の炎『鬼火』で、人型ネウロイに殴り掛かる。しかし硬度が高い特殊的な長刀で、簡単に防がれてしまう――――計算通り。防がれる事なんて、最初から十分理解している。下級から中級までの術技を幾等使役しても、長刀や核（コア）を隠し覆い尽くす装甲は、簡単には破壊できない。

メリクリウスは機動性に優れているが、攻撃面対しては若干不安が残る。直撃すれば絶大な破壊力を秘めているＬｅｖｉａｔｈａｎは、空気を圧縮して創り上げた一撃必殺技で無限とは欲張らないが、数十発は使用する事が可能な神術。だがＬｅｖｉａｔｈａｎには弱点があり、放たれた疾風の牙に強い刺激を加えると、簡単に神術としての威力を無くす。

ネプトゥヌスはどの術技にも応用が利き扱いやすいが、致命的な攻撃の種類が少ない。過冷却水を龍の形状にさせ、振動で凍らせた巨大な氷龍を相手にぶつけるだけの神術――――氷龍絶破衝だけが、現時点唯一の致命的な攻撃を与える手段。

残るはウルカヌス徒一人。攻撃面に特化しており、全てを燃やし尽くす威力を秘める。人型ネウロイの破壊は難しそうだが、高熱量の鬼火で『溶かす』事は恐らく可能だ。火力を上昇させる。

それを直感で理解したのか、右脚部を脇腹部分に捕捉させ蹴りを放

ち、此方の動きを停止させるという考えなのだろう。ならば――――！！

両脚部に大量の炎を充填させ、一気に爆発的噴射をさせる。

刹那――――――黒髪の少年の姿が、人型ネウロイの前から消え去っている。残ったのは軽い衝撃波と鬼火の青色の炎。これと類似する現象が一つ存在する…。

それは超音速の戦闘機が、燃料を直接タービンに噴射・燃焼させる事で行う超加速法。音速の壁を超えた衝撃波と、ジェット燃料の炎だけを後に残し……その後は見る者の視界から消える。

『ＡＦＴＥＲ　ＢＵＲＮＥＲ』

原理：ガスタービンエンジンの理論空燃比は、空気：燃料が大凡１５：１であり、熱効率やエンジンの小型化の面ではこの混合比で燃焼させるのが最も望ましいが、実際は６０：１程度の薄い混合比で燃焼させている（リーンバーン）。その為、燃焼室とタービンを通過してきた排気には、吸気時の約７５％の酸素が残っている事となる。この十分に酸素を残した高温の排気中に燃料を改めて噴射し、点火することにより、燃焼させる事で推力増加を狙ったのがＡＦＴＥＲ　ＢＵＲＮＥＲである。

【……”ステルス”……】

「何言ってんだよ……鈍間（のろま）」

人型ネウロイの背後に出現した炎髪灼眼の少年は、右腕全体に青色の炎を纏わせ、反応が遅れた異物の黒色の身体を焼き貫いた…。

第四十四話：静かな怒り（後書き）

今回出来なかった『ｕｎｋｎｏｗｎ　ｓｉｄｅ』を次回執筆したいと思いますので、応援宜しくお願いします！

第四十五話：主人公設定２＆ａｍｐ；神々紹介＆ａｍｐ；お詫び（前書き）

タイトル通りです。

第四十五話：主人公設定2&神々紹介&お詫び

名前：黒神　上総

性別：男

年齢：17才（『ストライクウィッチーズ』の世界に訪れ、年齢を更新）

身長：178cm

体重：60kg

趣味：訓練　料理

［詳細］

突然の不慮の交通事故に不運にも巻き込まれ、生命を授かった現代世界から、自然や動物、人間の存在しない『天界』に降り立った少年。

過去に本気で恋した義妹：茜を眼の前で無残に殺害され、心に大きな傷を負っているが、決して表情に出さないと誓っている。しかし、甦る記憶やケレスの襲来で、その気持ちは大きく揺らぐ。

戦闘方法や知識は、黒神の師匠である光牙の受け入り。

『ローマ神話　人物紹介』

名前：メリクリウス

所属：商業の神　風神

神術：武器生成　風操作

性別：男

年齢：３０代位（実際年齢は不明）

趣味：読書　紅茶時間（ティータイム）　神達或いは黒神を弄くる事

［詳細］

常に冷静沈着で、自分の興味を掻き立てる出来事を探している、髪色及び瞳の色は緑色の風神。
暇さえあれば、長椅子に腰掛けながら読書と紅茶を行う。また、唐突にネプトゥヌスや黒神を弄くり、どのような反応を示すかを楽しむ。
機動性に特化してる反面、攻撃力に若干の不安が残る。

名前：ネプトゥヌス

所属：海神

神術：水操作

性別：男

年齢：２０代位（実際年齢は不明）

趣味：睡眠

［詳細］

眼つきは最悪で、昭和時代に生息していた不良の連中に良く似ている、髪色及び瞳の色は蒼色の海神。

人間や魔女を酷く嫌っており、身近に存在する５０１統合戦闘航空団の魔女達に、冷たく殺意を充分に込めた、意見や視線を向けている。但し、黒神だけは特別である。

攻撃力や防御力は良くも悪くもないが、技の応用が効きやすい。

名前：ウルカヌス

所属：火神

神術：怪火　地獄の力

性別：男

年齢：４０代位（実際年齢は不明）

趣味：鍛錬

［詳細］

殆ど言葉を発声しない無口で会話が全く弾まない、服装が武士と特徴のある炎髪灼眼の火神。

自らが操作できない『地獄の力』の鍛錬に日々励み、神術回路や精神を鍛え上げている。

機動性は劣るが、攻撃力は現在の四神で一番である。

名前：ケレス

所属：大地母神

神術：大地操作

性別：女

年齢：１０代位（実際年齢は不明）

趣味：製薬

［詳細］

人間に性格が似ており、明るく元気で無邪気な、心優しい髪色及び瞳の色は栗色の大地母神。

優しく接してくれる黒神に好意を抱き、突然ベットに侵入したり、力強く抱き付く等の行動を、魔女達の眼の前で示す事が多い。また、黒神の辛い過去の記憶を知っている為、全力で支えると根強く、誰にも負けないという『意思』がある。

攻撃力は低いが、防御力と知力に優れている。

名前：ミネルヴァ

所属：戦争の女神

神術：不明

性別：女

［詳細］…不明

名前：マルス

所属：戦争の神

神術：不明

性別：男

［詳細］…不明

名前：ｕｎｋｎｏｗｎ

所属：不明

神術：不明

性別：不明

［詳細］…不明

名前：ユピテル

所属：雷神

神術：不明

性別：男

［詳細］…不明

『その他』

名前：魔牙

所属：不明

神術：龍の烙印（正式には未だ不明）

性別：男

［詳細］

数百年前勃発した、ある出来事の首謀者である人物。
髪色及び瞳の色は紫色。身長は黒神と同じ位。顔の右頬には、特殊で希少価値のある龍の烙印が彫られている。

［神話融合］

自分の従えたローマ神話の神々達と、一時的に融合すること。融合した際は様々な変化が、身体で起こる。髪、瞳の色がその神に応じて変化したり、融合した神の所有している『神術』を使えたりなど、戦闘を有利にする力を一時的に持つ事が可能になる。

しかし『神話融合』には大きな欠点がある。
融合者に、過度な身体的及び精神的な疲労を招く。
一般人が神話融合を行うと、一瞬でその身体と精神は殺れてしまう。
神話融合を行うと、身体的及び精神的疲労が身体に一気に負荷として掛かる。負荷を直すには、治療術を行うのではなく、普通に睡眠で直すことしかできない。
神話融合を行う際、身体全身にその融合する神の魔力を一時的に流す為、その身体に残留している魔力がプロテクトとなり、治療術がごく少量しか通用しない。
時間が経つと、神の魔力は身体から自然と抜けていき、素の身体に戻る。その時に睡眠を行うと、神の魔力が身体から抜けるのを促進させる。

［神話融合　弐式］
名の通り、ローマ神話の神二体同時に融合する事。
融合した際は、強力な神術が手に入る。単体での神話融合を凌ぐ程の…。
力を得ると同時に、それなりの代償を支払う。支払う代償は、単体での神話融合と殆ど同じだが、身体に掛かる負荷が尋常じゃない。
一度の使用で、生命の消失率が単体での神話融合の倍。

『お詫び』

この度は次話を更新できず、誠に申し訳ありません。
理由は三つ程あり、全て個人的問題です。
1…小説のアイディアが思い浮かばない。

2…マウスの調子が若干悪い。

3…新しいゲームを購入し、それに熱中している。

本当に個人的問題で、この小説を読んで下さる皆様に迷惑をかけてしまい、申し訳御座いません。

次回はテストが迫っている為、執筆出来るか分かりません…。

［訂正］

天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）から、ｐａｒａｄｉｓｅ＝ｓｏｎｇ　Ｐ＝ｓｔｅａｌｔｈ　Ａｐｈｏｄｉｔｅを除去します。

理由は…この小説が結構進んだら、明らかになります。

第四十五話：主人公設定２＆ａｍｐ；神々紹介＆ａｍｐ；お詫び（後書き）

次回は…執筆できるか物凄く不安です……。

第四十六話：『坂本　美緒の思い』『逃亡』（前書き）

更新遅れて申し訳御座いません！
やっとテストが終了した為、投稿可能となりました！
それでは、第四十六話をどうぞ！！
誤字・脱字がある場合は、ご報告をお願いします…。

第四十六話：『坂本　美緒の思い』『逃亡』

――――坂本　美緒ｓｉｄｅ――――

薄れゆく意識の中、黒神の事を思い浮かべる……。
数日前、私達に向ける態度とローマ神話の神々の一人で、大地母神と称される……黒神を殺害するため送り込まれ、腰部分まである綺麗な栗色の長髪を靡かせ、敵だったとは思えない素振りで、接している女性――――ケレスとの態度が、あまりにも違い過ぎる事に驚き心痛めた私は、５０１統合戦闘航空団［ストライクウィッチーズ］の隊長であるミーナに、この事を相談した。
話した際、ミーナも何処か思い当たる節があるのか、口元に手を添えて考えていた。表情も、何時も以上に真剣であると同時に、何処か悲しみに縛られていた。
ミーナが出した結論は、『黒神とケレスに、直接話し合いを行う』という事だ。ミーナの結論には、私も大賛成だった。
あの女は、自分の所属はローマ神話の神々の一人であり、大地母神・ケレスだと言っていたが、それが本当に事実なのかは、知る由も無い。単純に黒神の噂を聞き付け、あいつの精神に揺さぶりを掛けた、非軍関係者等の可能性も無きにしも非ず。これが事実であれば、直ぐに基地から放逐する事が可能。
逆に本物のローマ神話の神々であっても、聞き質す事柄は山ほどある。
何故、ローマ神話の神々は黒神の生命を執着して狙うのか…。
何故、仲間である私達を頼らず、孤独に一人で戦い続けるのか…。
そして――――…
何故、『茜』という人物の名前を叫びながら、泣いていたのか…。

それらの思いを抱きながら、ミーナの固有魔法『超感覚』で割り出した黒神の現在位置…食堂へと少しばかり、足早に向かった。途中、他の隊員達と出会ったが、皆浮かない表情を浮かべていた。理由を聞いてみると、会話の機会の減少や食事を一緒に摂ってくれない等と、殆ど私が悩んでいる事に、近い意見であり、類似しているもの。私やミーナも、隊員全員が最近の黒神で悩みを抱えていた事実には、酷く驚き、結果的に全員で黒神が居るであろう、食堂へと向かう事になった。

元々歩いていた所為か、数分程度で食堂に辿り着いた。
この扉を開けば、本当の真実が確かめられる…。誰もがそう思いながら、ミーナが扉を開こうとし、手を掛けた直後――――――黒神の声が聞こえた。
それに気付いたミーナは、手を一旦引っ込めて、黒神の声を聞き取る態勢を取る。皆も一歩前に出て、その声に耳を傾けた…。
黒神の衝撃的な過去話を盗み聞きした私達は、少しの時間、呼吸することを忘れた…。

黒神の家族や大切な存在は眼の前で――――――殺された…。

青空が美しい晴天の今日、大地母神と雑談をしている黒神を模擬戦に誘った。
誘った際、ケレスは会話中に邪魔された事に腹を立てたのか、不満や不機嫌等が大量に入り混じった、鋭く濃い視線を突き刺し、人間或いは魔女である私が、黒神の傍に居る事に納得出来ない様子で、金色の腕輪に、茶色の宝石として収まった。
黒神は笑顔で誘いを承諾したが、その笑顔は何度も練習を積み重ね、創り上げられた偽物の笑顔。その笑顔に、若干の恐怖心と悲しみを

憶えた。

場所は以前頻繁に模擬戦を行っていた、砂浜（ビーチ）。

正直…模擬戦に誘ったのは、徒の口実に過ぎない。

黒神の衝撃的な過去…家族や大切な存在を無くした事実を知った。

私なりに、如何すればいいか必死に考え続けた結果、過去を盗み聞きした事を黒神に言うことにした。

だが、実際本人を眼の前にした状況では、上手く話しを切り出せなかった。一言声に出せば良いのに、何かが喉元に引っ掛かっている様な感覚――――――不安。

もし、盗み聞きした過去を告げたら黒神はどうなるのか…？当然、心の傷口を抉り取る行動に激怒し、今までの仲間としての関係が、一瞬で砕け散るだろう。それだけは……絶対に嫌だ。仲間としての大事な関係を崩したくない…。だけど、黒神の事を放っとけない。助けてやりたい…。支えてやりたい…。

渦巻く気持ちのまま、無意識に模造刀を抜刀し、黒神に向けていた。模造刀を向けられた本人も、同じように鞘から模造刀を抜刀し、此方に向けてくる。当たり前だ…黒神は模擬戦を行う為に、この場に出向いたのだ。模擬戦に誘った私が、それを拒むのは可笑しい。

……――――――覚悟は決めた。これが終わったら…全てを話そう。

その時――――――突然の襲撃。

天空から突如舞い降りてきた、人類の敵対勢力であるネウロイ襲撃。

日常的に襲撃してくる、徒のネウロイなら一切問題は無い。この頃、じゃじゃ馬で魔法力を吸い取る烈風丸が、自由自在に扱う事が可能になっている。奥義である『烈風斬』も、時間を重ねる毎に強くなり、今では粗一撃で葬り去る事が可能だ。そう……徒のネウロイなら。

私が目撃しているのは、片腕が鋭利な黒色の長刀に変化し、接敵し

た瞬間が分からない速さで、人間と同じ言葉を発声させながら、黒神に襲い掛かっている『人型ネウロイ』

過去に一度、人型ネウロイなら見た事がある。身長は宮藤位で、全身が黒一色に染め上げられている。知能は持ち合わせているが、武器を生成する魔法力等一切無い……私が知っている人型ネウロイの特徴である。しかし、この人型ネウロイは違う。知能を持ち合わせると同時に、言語能力が備わっている。逃亡不可能な空間や、自らの腕部を変形させ長刀を創り出す魔法力がある。

こんなネウロイは有り得ない…。恐怖で烈風丸を握る手が小刻みに震える。が、このまま黒神だけに戦わせて良いのか？また、痛み傷付く姿を見てしまうのか――――否、私にも戦う力量がある。邪魔で、足手纏いかもしれないが、私は――――――戦う…。意を決して、魔法力を持つ人型ネウロイに接敵。

案の定、私は人型ネウロイの攻撃を魔法力を纏わせた、烈風丸で防ぐだけ。長刀の圧力は凄まじく、一瞬でも気を抜いたら即座に長刀で斬られ、噴水の様な鮮血が飛び散るであろう。

脳内に鮮明に映し出される、自らの『死』の映像。振り払っても、映像が止まる事は決して無い。相手はそれを感じ取ったのか、何かを呟いた後、先程の長刀が振り下ろす状態から、振り払うに変化。埃を払うかのように、身体は横に弾かれ、砂浜に背中から落下する。肺の空気が強制的に吐き出され、苦しさで何度か咳き込む。咳き込みながら人型ネウロイに視線を送ると、奴の左腕部が右腕部と同類の長刀に生成されている。幾等あいつでも二本同時で防ぐのは――――不可能。身体を起こして、向かおうとするが、此処からの距離からは、間に合う筈が…！

最悪な状況でもう一方の長刀が振り下ろされた瞬間――――――黒神の眼の前で両手を大きく広げ、必死に護ろうとしている女…大地母神・ケレスが出現する。

直撃…――――――黒神は負傷したケレスを抱き抱え、人型ネウロイ

から十分な距離を取る。私も透かさず、駆け寄り安否を確認しようとした直後――――意識が薄れてゆく…。
痛みが全く無い手刀……誰のかは言わなくても分かる。

”黒神……また…お前は――――”

――――坂本　美緒ｓｉｄｅ　ｏｕｔ――――

焼き貫いた黒色の装甲から、鬼火を纏わせた手を勢い良く引き抜く。中心部を貫いた穴の周囲は、軽く液状化しており、ポタポタと砂浜に流れ落ちて、特徴的な砂の黄土色を汚染された水の紺色に、確実に染め上げる。
自動再生は未だ開始されていない。尤も通常の汎用型ネウロイよりも、数倍遅い気がする。考えられる要因は幾つかある。この人型ネウロイは攻撃及び防御力に、異常なまで特化されたイレギュラー。強力な魔法力を所有し、自らの装甲の一部分を武器と為す高等技術力…武装創造（ウェポンクリエイト）と類似している魔法や、相手の逃亡を許さないと同時に、外部からの攻撃の干渉を受け付けない…戦略的空間を創り上げる空間魔法…ｇｕａｒｄｆｉｅｌｄと類似している魔法を所有している。
装甲の防御力は、リーネの『視力強化』やバルクホルンさんの『怪力』と同類の強化系統の魔法だと、可能性として考えている。渾身の一撃――――雷斬衝を人型ネウロイの胴体に叩き込み、全く効果が見受けられないときは、『不破の鎧』でも装着しているのかと思ってしまうが、それは如何やら的外れの考察だったらしい…。

不破の鎧とは、どんな剛腱も刃が立たず、どんな鋭利な槍でも矢でも貫く事が出来ない。
トロイ軍の武将アエネアスの物である。トロイ戦争の際、この鎧を身に付けたアエネアスは十年に渡り勇敢に戦い、トロイ陥落の際も無事に延びる事を得た。
その後、信託によってラティヌウムに辿り着いたアエネアスは、恋愛沙汰から再び戦争に巻き込まれてしまう。しかし、不破の鎧はこの時も彼を救った。
戦いに勝利し、新しい国を建国したアエネアスは、ローマ民族国家の創始者として崇められた。

伝説上有名であるが、現実的に存在しているとは信じ難い。この世界に訪れるまでは…。
この二次元世界『ストライクウィッチーズ』で敵対勢力として出会った、ローマ神話の神々達。現実的には絶対に有り得ない邂逅だ。
ローマ神話は自分の感覚で、架空の物語だと捉えていた。しかし、金色の腕輪に収まっている、美しい四色の宝石達は、自身等の所属をローマ神話の神々の一人だと言っていた。最初は信じ難い発言ばかりだったが、各々の瞳や言動を見聞きする度に真実だと思ってしまい、現在はローマ神話の神様が存在していても、可笑しくないと思っている。
最も、何処にでもいる徒の一般人の人間が、魔法力を入手し天使の双翼を纏わせ、二次元作品の世界『ストライクウィッチーズ』に飛ばされたしまった、異世界人の俺が言うのは、滑稽かな…。
さて、話しは不破の鎧に戻すが、この世界では有り得ない事が、現実的に起きている事実から、これ等の魔道具が存在していても、何も変哲も無いのだ。
人型ネウロイが、もしも不破の鎧を装備していたのなら、鬼火を纏わせた拳如きでは、あの黒色の装甲を焼き貫くこと等不可能な筈だ。けど、実際は人型ネウロイの中心部に、綺麗な穴を拳で作り出した。

という事柄から、人型ネウロイは『不破の鎧』を装備しているのではなく、独自が所持している、強化系統の魔法を使役していた事になる。

「……お前には聞きたい事がある。焼き殺すのは、その後だ…。何故ネウロイであるお前が、魔法力を所持しているだ…？一体誰の差し金で、黒神　上総を殺害しろと命じられた？何で…何でお前は……！俺の過去を知っているだぁッ！！」

【損傷経路ノ確認ヲ開始……。異世界人ノ黒神　上総ガ従エテイル、ローマ神話神々ノ一人――――ウルカヌストノ神話融合二ヨル神術『鬼火』二ヨリ、核（コア）ヘノ衝撃。シグナル反応……レッド――――自動再生不可能ト断定。貯蓄魔法力ノ残量ヲ測定開始……――――残量二十四パーセント…。これ以上ノ、作戦続行ハ不可能ト情報ヲ断定。
今作戦ノ目的ヲ再度確認スル…。今作戦目的ハ二ツノミ……。第二目的ハ、異世界人デアル黒神　上総ノ消去ヲ可能デアレバ、行ウコト。コレハ、第二目的デアリ、実行不可ノ場合ハコレヲ放棄スル。第一重要目的…黒神　上総ノ戦闘力情報ノ分析及ビ、魔法力ノ採取。第一重要目的ノ任務ハ成功…アノ方ニ情報ヲ伝エル為――――帰還スル】

「――――ッ！？突然に襲い掛かってきて、無関係なケレスを傷付けて……！！勝手に帰還するつもりなのか…！！そんな馬鹿げたこと……許されると思うなぁぁぁぁぁッ！！！」

両脚部に鬼火を充填させ、炎の噴射力で逃亡を企てている人型ネウロイに接敵。『ＡＦＴＥＲ　ＢＵＲＮＥＲ』と言える程の速さは無いが、この程度の距離なら取り逃がすことは絶対に無い。両手に鬼火を纏わせ、防御を完全に棄てた捨て身技に移行する。

敵対勢力の人型ネウロイとの距離は、互いに二メートル前後。鬼火を最大出力で――――擦れ違う…！
数秒間の沈黙の後――――

「がふぅ……ッ！？」

黒神は大量の血液を吐血しながら、砂浜に片足を力無く附ける。

鋭い激痛が、身体全体を駆け巡る。激痛のする左腹部に視線を送れば、着衣している衣服が赤黒く滲み染め上げられている。何故だ…人型ネウロイには確実に直撃させた筈だ。俺では無くて、奴が無残に全身から鬼火を噴出する予定なのに…――――何故だ！？
透かさず弾かれた様に人型ネウロイへ顔を向けると、黒色の装甲に似合わない白銀に光輝く、先端部分が三つに分かれている武器を握り締めている。
その光景を不思議に感じていると、腕輪に収まっている青色の宝石が、荒々しく反応する。

（あの武器は……俺の『トリアイナ』か！？）

「トリアイナ……――――ッ！？まさか……魔道具ッ！！」

トリアイナ（三叉槍）は、先端が三つに分かれた武器の一種。
トリアイナとは、『三つの歯』を意味する。ローマ神話の海神ネプトゥヌスが使用する三叉銛として、知られている。元々は漁師が魚類を獲る為に使っていたこともあり、ローマ時代の剣闘士の一種であるレティアリィはこの武器と網を使用し、主として魚の兜を着けたムルミッロと試合を行った。
漢字表記では三叉槍（さんさそう）、また先端が戟の場合は三叉戟（さんさげき）となる。

【Ｐｒｏｌｏｇｕｅ『Ｔｈｅ ｈｅｒｏ ｉｓ ｓｔｏｐｐｅｄ ｂｙ ｒａｉｎ』（序章『勇者 雨に征く手を阻まれる』）
Ｃｈａｐｔｅｒ １．『Ｏｒｃａ、ｓ ｆａｎｇｓ ｐｉｅｒｃｅｓ ｔｈｅ ｈｅｒｏ、ｓ ｃｈｅｓｔ』（第一章『魔龍の牙 勇者の胸に突き刺さる』）】

（あの野郎…術式を詠唱しやがった……！？危険だ…直ぐに避けろ！！）

「ちょっ……何処に回避すれば――――――ッ！？……んぐぶぅ！？」

突如周辺に出現した水球体は、勢い良く身体を包み込む。眼に滲みる感覚や口内に広がる塩味等から、この水分は海水だと分かる。海水に含まれる塩分の内訳は、塩化ナトリウム７７．９％と塩化マグネシウム９．６％、硫酸マグネシウム６．１％と硫酸カルシウム４．０％、塩化カリウム２．１％とその他の物質で構成されている。これは徒の豆知識であって、問題点は別の個所。出血している左腹部の怪我。

海中では、血液は止まらない。血液は海水と殆ど同じ成分から構成されているからだ。その特徴の所為で左腹部からは鮮血が溢れ出し、止まるという反応を身体は示さない。

苦しむ黒神に対し、水球体は更なる追い打ちを掛ける。

「――――――ぐっ……！？ごぼっ…がぼっ……！？ごぽッ…！！」

絞殺される感覚――――――水圧の急激的な上昇。

『水』はその存在そのものが、奇跡と言える魔法の物質だ。

僅か１００℃という温度差で、固体⇒液体⇒気体へと自由自在に姿を変化させ、中性のまま粗あらゆる物質の溶解が可能。しかも、電

気分解によって水素と酸素に分離し燃焼する。この言葉だけ聞けば、万能な物質だが実際は、簡単に人間の意識を刈り取る危険な道具でもある。
肺は中に空気が無くなると必ず、脳とは関係の無い自律行動で息を吸う。これは例え水中であっても、自分の意志では止められない。
そして肺に水が浸入すると一瞬でブラックアウト――――意識を失う！！

「……がほっ……ごれ以上…！がふっ…でぎるどぉ……思うなぁ…！！」

神術『鬼火』で包み込む水球体を一気に蒸発させると同時に、視界が水蒸気によって奪われる。鉄製の刀剣も容易く熔解する、高熱量の『鬼火』なら水分を蒸発させること位、大して苦ではない。
体内に入り込んだ余計な水分を吐き出す為、何度も咳き込む。左腹部の怪我や咳き込み過ぎで、鉛が縛り付けられたような重い身体で、現状況を把握する為、空を見上げる。
先程まで存在していた漆黒のドームは消滅しており、辺りは眩しい程の色鮮やかな世界が、酷く眼に滲みる。人型ネウロイの姿は何時の間に消え、肉眼で確認できたのは、ストライカーを装着した魔女達の六つの軌道が、此方に急いだ様子で向かってくる光景だけ…。

第四十六話：『坂本　美緒の思い』『逃亡』（後書き）

今回も『ｕｎｋｎｏｗｎ　ｓｉｄｅ』を執筆不可能だったため、次回執筆したいと考えているので応援宜しくお願いします！

もしかしたら次話には、遂に――――――！！

第四十七話：悩み（前書き）

第四十七話です。
結構短い作品となっておりますので、ご了承ください…。

第四十七話：悩み

「はあ……」

一体何度目の溜め息だろう……と洗濯物を干しながら思う。隣で同じ作業をしているリーネちゃんも、悲しそうな表情を浮かべ、何度も溜め息を吐いている。

今日も何時もの様に、身体を通り抜ける風が心地良い晴天。こんな天気時に洗濯物を干すのが、直ぐに乾いて一番効率が良いし、太陽光を沢山浴びた軍服や布団は、暖かく柔らかくて、使用した時に気持ち良く感じる。

『一石二鳥』と言う言葉を思い浮かべながら、籠の中から洗濯物を取り出す。以前は洗濯物の殆どは、軍服やズボン、掛け布団やシーツ等の、日常的な物品や女性物の洋服しか無かった。

だけど……今は違う。籠から取り出したのは、一際大きめなTシャツ。所々が、傷んで糸が解れてたり、何度擦ったけど綺麗には洗い流せなかった、血液の滲んだ痕跡が、薄く付着している。

……このTシャツは、第５０１統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』の大事な仲間（かぞく）で、私が好意を抱いている男性――――黒神　上総さんの物。Tシャツの端を持ち、大きく拡げ、徒ジッとそれを見つめる。

数日前…皆で盗み聞きしてしまった、上総さんの過去と『茜』という女性の正体…。

あの時は、最近一緒に食事をあまりしてくれない事や、『茜』とは誰なのかを知りたい気持ちで、胸が苦しくなり我慢できず、気付けば宿舎の廊下を歩いていた。

途中シャーリーさん達やミーナ中佐達に出会った。何事かと思い話

しを聞くと、皆同類の問題で悩んでいるようだった。ルッキーニちゃんに至っては、眼尻に涙を浮かべ、シャーリーさんの軍服の裾を掴んでいた。

シャーリーさんは、そんなルッキーニちゃんを宥める様に優しく撫で続けていた。が、表情までは優しさではなく、曇模様で埋め尽くされている。確か……ロマーニャに補給員として行き、突然行方不明になったルッキーニちゃんと上総さんを探したが見つからず、近くの喫茶店に立ち寄った覚えがある。

その時、私は初めて上総さんに対するシャーリーさんの気持ちを知った。

――――――”そっか…お前もか……”

その言葉だけでも、私は直ぐに気付く事が出来た。

シャーリーさんは上総さんの事が好きだと…。

話しを戻すが、ミーナ中佐達も上総さんに用事があるという事で、皆で一緒に食堂に向かう事にした。中佐の固有魔法『超感覚』で感知した反応は二つ……一つは言わなくても分かるが、黒神　上総さんの反応。

もう一つは、長髪茶髪が見惚れてしまう程綺麗で、B・W（バスト　ウエストヒップ）・H等の、全ての体型バランスが羨ましい位整っていて、何時も上総さんの隣に並んでいる女性。ローマ神話の神様の一人で、通称・大地母神で知られている――――――ケレスさんの反応。

”また…ケレスさんと一緒に……”そう思った途端、モヤモヤとした気持ちが、煙みたいに湧き上がってくる。食堂へ向かうのが、足早になってしまう。

数分で食堂前の扉に辿り着く。此処を開けば真実が…。

中佐が意を決して、扉に手を掛け、誰しもがその光景に息を飲む。

瞬間――――声が聞こえた…。
ミーナ中佐はそっと手を引き、声が聞こえるよう扉に耳を傾ける。
私達も釣られて、同じ行動を行う。
上総さんがケレスさんに打ち明けた過去や、『茜』という人物の正体を知った私達は、その場所で扉を開ける事すら出来無いまま、無言で立ち尽くしていた…。
あの時……私は一体如何すれば良かったのだろう――――

「……芳佳ちゃん？」

「ふぇ!?な、何かな……リーネちゃん」

「えっとね…洗濯物の途中で考え事をしているのが……分かったから。その…やっぱり……芳佳ちゃんも私と同じ事で悩んでいるんじゃないかな、と思って……」

「じゃあ……リーネちゃんも…？」

悲しそうな表情で頷くリーネ。

手に持っている大きめなTシャツを一旦籠に仕舞い、手を重ねながら顔を俯かせる。隣に居るリーネちゃんも、洗濯物を左腕に掛けたまま顔を俯かせている。静かで長い沈黙が、数秒間流れる。
風が吹き抜ける度に、髪が揺れて頬を優しく擽る感覚を感じながら、沈黙を破る。

「私、さ……如何すれば良かったのかな……？」

「……」

「上総さんの過去が、あんなに辛いなんて知らなかった……。初恋の人で、大事な義妹の茜さんを殺されたなんて信じられなかった……。悲しい事実を抱えているのに、あんなに優しい笑顔を浮かべられるなんて分からなかった……」

「うん……」

「私なりに考えたんだ……如何すれば良いのか…。でね、考えた結果が『上総さんを支えたい、助けになりたい』って答えが、頭の中で思い浮かんだの…。

――――だけど……それは上総さん自身が望んでいる事なのかなと、同時に思ったの。

もし、盗み聞きした事を話して怒られたらどうしようとか、仲間（かぞく）の関係が崩れて壊れてしまったらどうしようとか……不安で……怖くて…！

リーネちゃん……一体如何したら――――」

突如、基地全体に荒々しい警報が鳴り響く――――ネウロイの襲撃。

先程の緊張感が、別の緊張感に一瞬で変化する。

二人で俯かせてた顔を反射的に上げ、互いに眼を合わせて、深く頷いたのを合図にし、急いでハンガーに向かう為、一歩踏み出した瞬間――――警報と共に、新たな通信が入る。

《き、緊急事態発生！！緊急事態発生！！敵ネウロイ、突如基地周辺上空に一体出現！！観測結果データから……これはッ…！？ひ、人型ネウロイ！！》

観測塔からの緊急事態を知らせる通信を聞き、衝撃が身体全身を駆ける。

人型ネウロイは、この眼で目撃したことがある。極秘で製造されていたウォーロックの正体を見せてくれたが、破壊されてこの世界には存在していない。

「急ごう、芳佳ちゃん！！」

「……うんッ…！！」

上総さんの事も重要だが、人類を脅かすネウロイを倒す事も重要。私は第５０１統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』の魔女（ウィッチ）だから…。

呼吸を少し乱しながら、ハンガーに駆け込む。

ハンガーには既に私とリーネちゃんを除き、他の隊員が集まっている。だが、皆の様子が可笑しい…。人型ネウロイの事で揉めている他に、別の事態に対して非常に焦っている様に見受けられた。

一体何が起こったのだろうか…？眼の前で発生している出来事に不思議に思っていると、エイラさんが此方の存在に気付き、駆け足で向かってくる。

「宮藤！！リーネッ！！やっと来たか…たくっ……一体何処行ってたんだよ！？」

「せ、洗濯物をリーネちゃんと一緒に干しに……それよりも一体何が起きたんですか…？」

「それが……少佐と黒神が…！！」

エイラさんが早口で、人型ネウロイと関係する別の緊急事態を述べる。聞かされた緊急事態に、私達は他の隊員同様に驚きを隠せず、焦り始めている。

心臓が激しく鼓動し、此処まで走ってきた時よりも、呼吸が乱れて苦しくなる。唇が乾燥して、上手く言葉を発声する事が出来無い私に対して、リーネちゃんはエイラさんに少し強引に詰め寄る。

「上総さんと坂本少佐が、たった二人だけで人型ネウロイと戦っているって……本当なんですか!?エイラさん!!」

「ほ、本当だ!ミーナ中佐やサーニャがそう言っているんだから、本当に決まっているだろう!?てかリーネ顔が近い!!少し離れろってば!!」

「――――ッ!?顔が近いとか、離れろとかは今は関係ありません!!エイラさんは、二人の事心配じゃ無いんですか!?坂本少佐はストライカーも装着していないんですよ!?それに…今の上総さんは――――」

「……ッ…大事な仲間(かぞく)の心配をしない馬鹿が、この部隊に居るかよぉ!!私だって……私だって二人の事が心配に決まっているだろ!!!

理不尽に突然一人で怒って……まるで私が、仲間(かぞく)を大事に思っていないとか勝手に勘違いしやがって……!リーネ…お前、意味分かんねぇよ!!」

「二人共止めなさい!!今は喧嘩をしている場合じゃありません!!」

二人の口論にミーナが、透かさず仲裁に加わる。

その光景に誰もが驚いていた。
何時も優しく穏やかで、争いを好まない性格のリーネちゃんが、声を大きく張り上げて、エイラさんに詰め寄りながら口論をしたのだ。
初めて見たかもしれない……これ程まで怒りを露わにしているリーネちゃん姿を…。
乾燥したままの唇に少し自身の唾液を塗り、ミーナ中佐に問い掛ける。

「ミーナ中佐…！速く出撃して、二人を助けに……！」

「宮藤さんの言うとおりだわ。今は二人を救出及び援護する事を最優先とします。
だから、リーネさんとエイラさん…喧嘩は止めて作戦に集中しなさい。これは命令よ」

『……了解』

人型ネウロイと二人の反応がある目的地（ビーチ）に向かう為、天空を翔ける機械（つばさ）『ストライカーユニット』を装着すると、自然と使い魔である豆柴の『九字兼定』の犬耳と尻尾が出現する。
それを合図とし、少しの間合いの後、ストライカーユニットを固定しているストッパーが外れる。自由自在に天空を翔け抜けられる機（つ）械（ばさ）に、自分の魔力を注ぎ込んで、敵ネウロイと大事な仲間（かぞく）が居る砂浜へ…。
今作戦の編成は、バルクホルンさん、ハルトマンさん、ミーナ中佐、ペリーヌさん、リーネちゃん、私の六人編成で行う。残りの四人は、別の個所でネウロイが出現する可能性が有る、という理由で基地の

ハンガーで、何時でも迎撃可能な出撃準備をしながら待機している。向かう最中、多くの不安が脳内を過ってくる。怪我を負っていたら…二人共人型ネウロイに殺害されてしまったら……！使用武器である［九九式二号二型改１３ｍｍ機関銃］を力強く握る手に、手汗がジットリと付着しており、自ら不安の度合いを確かにする。

「もう少し…って……何だよアレ！？」

ハルトマンさんが驚きの声を挙げながら、眼下に広がる光景に指を差す。

そこには砂浜全体を覆う程の黒色ドームが形成されており、不気味な雰囲気を醸し出している。瘴気等では無くて、別の何かが私達を縛り付けている感覚も感じる。

明確な濃い殺意を込めた…一度体験済みの感覚。ローマ神話の神様の一人で、通称・海神の名前で知られている――――ネプトゥヌスさんが、一度私達に魔女（ウィッチ）に放った殺意と同じ感覚…。

まさか……人型ネウロイとは別で、サーニャちゃんの固有魔法『魔導針』やミーナ中佐の固有魔法『超感覚』に反応しない能力を所有し、人数で言うと五人目の神様が襲来してきたんじゃ……！！

最悪の予想映像を脳内で流していると、突如黒色ドームが卵の殻みたいに、ボロボロ崩れ去っていくと同時に、内部から何かが勢い良く飛び出してきた。

人間の形状をしていて、両肩と両太腿部分に紅い六角形の斑点模様がある。

あれは…間違えないッ……人型ネウロイだ。

「人型ネウロイめ…！！よくも、黒神と少佐に――――」

「ちょっ、ちょっと待ってよ、トゥルーデ！！今から追撃したって間に合いっこないよ。それに、今回の作戦は人型ネウロイの破壊じ

ゃなくて、上総と少佐の救出が最優先目標だろ？」

物凄い速度で上空に飛び去った人型ネウロイを追撃する為、武器を構えたバルクホルンさんだったが、ハルトマンさんがそれを慌てて制止させる。

今作戦の最優先目標は、ハルトマンさんが先程言っていた”上総さんと坂本さんの救出”であり、人型ネウロイの破壊は、第二優先目標であるとミーナ中佐が指示を出していた。

それに、もう姿の欠片も無い敵ネウロイを追撃するなんて、先ず不可能…。

「だからさ……武器を下ろして二人の、安否確認をしに行こうよ。ねっ、トゥルーデ」

「……そうだな。悪かった…少しだけ、頭に血が昇っていたようだ」

「気にしないで。さっ、速く行くよ！！」

ハルトマンさんが先陣を切って、砂浜に降下し始める。その後を追い掛けながら、私達は同じように、荒れている砂浜に降下し始める。

視界には徐々にと大事な仲間の存在が、大きく鮮明に映り始める。

その時…一瞬だが、上総さんの髪色が紅色に見えたのは、気のせいだったのだろうか…？

第四十七話：悩み（後書き）

皆さんもそろそろ思う頃でしょう……『何時になったらｕｎｋｎｏｗｎ　ｓｉｄｅを執筆するんだよッ！？』と…。
本当に申し訳御座いません。今回も、時間的問題や眠気にあっさり敗北してしまい短い作品とｕｎｋｎｏｗｎ　ｓｉｄｅが執筆不可能でした。
何時になったら執筆できるのかな～…と思っております。

これからも応援宜しくお願いします！
感想も待っています！！貰えると元気が出ます！！

第四十八話：復讐への決意（前書き）

第四十八話です。
後半に進行するにつれ、何を書いているのか分からなくなります…。

第四十八話：復讐への決意

魔道具であるトリアイナで負傷した左腹部の怪我や、体内に入り込んだ海水を吐き出す為、何度も勢い良く咳き込んで、鉛のように重くなった身体を起こしながら、周囲の現状確認を行う。

先程まで此処一帯を包囲していた黒色のドームは消滅し、アドリア海の青々とした色や、木々の心落ち着かせる深緑等の明るい色彩が、酷く眼に滲みる。

襲来してきた人型ネウロイは、既に『逃亡』と言う名の『帰還』を実行し、”黒神　上総の情報収集及び魔法力の採取”という命令を下した人物の元へ、飛び去ってしまった。

追撃を試みようと思ったが、鉛の身体では幾等天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）を行使しても、あの人型ネウロイの速度には追い付けない。Ｕｒａｎｕｓ・Ｑｕｅｅｎ・ｓｙｓｔｅｍ（空の女王）を機能させれば、全スペックを急上昇させ、強制的に現時点でも飛行する事が可能で、追撃することだって簡単だ。

しかし、Ｕｒａｎｕｓ・Ｑｕｅｅｎ・ｓｙｓｔｅｍ（空の女王）を使用すると、後に副作用が弱体化している身体を、全スペック急上昇に比例するかの様に蝕んでくる。下手すれば生命が、消失する可能性もある。此方も今は成すべき事柄がある為、簡単には死ぬつもりは無い。

残り三名で在るだろう……ローマ神話の神々達との戦闘。突如、甦ってきた過去の記憶。負傷しているケレスの医療等、成すべき事が沢山有る。

特徴的なプロペラ音が聞こえた為、今一度だけ人型ネウロイが帰還した青空を見上げる。

視界に捉えたのは、ストライカーユニットを装着した魔女達と、六つの滑らかな軌道。地上と空中での距離はそこそこあるが、個人の

髪色や装着しているストライカーユニットの種類から、今回編成された人物が明確になる。
階級順に並べると、ミーナ中佐、バルクホルン大尉、ハルトマン中尉とペリーヌ、曹長のリーネと軍曹である芳佳、という階級順になる。一応、『黒神　上総』もミーナ中佐が上層部に新人隊員として、申請した為、一人の軍人としてみなされていて階級も有るらしいが、詳しくは把握していない。尤も、現状況では全く関係の無い話なのだが……。
神話融合を解除して、元通りの髪色と瞳に戻る。同時に襲い掛かる肉体疲労と精神疲労に、若干の苦しみを感じながら、負傷し気絶しているケレスの傍に駆け寄る。上空からは、少女達の声が聞こえるが、耳を傾けるつもりは無い。
砂浜に片膝を着き、負傷して気絶しているケレスを抱き抱える。ひょい、と簡単に持ち上がる軽さに、驚きと悔しさで一時的に身体が硬直した。ローマ神話の神様と言えども、身体は人間の女の子と変わりは無い。こんなに軽い身体で、必死に護ろうとしてくれたなんて……。
ギリッ…口内で響かせると、砂浜に何かが突き刺さる音が背後から聞こえ、身体をその方向に向ける。当然だがそこに居るのは、足早に駆け寄って来る六人の魔女達。

「上総さん!!大丈夫ですか!?」

「黒神さん、坂本少佐は――――――ッ!?しょ、少佐!!」

芳佳とリーネ、バルクホルンさんとハルトマンさんが慌てた様子で駆け寄り、ミーナ中佐とペリーヌの二人は血相を変えながら、気絶している坂本さんを揺すりながら呼び掛けを行う。
そんな光景を尻目に置きながら、足早に基地へと歩みを進めると、左腕を掴み引っ張る小さな衝撃を感じ取り、首元だけを動かして掴

んだ者の正体を確かめる。
三百機越えのネウロイ撃墜数を誇り、幼い外見にそぐわず、その能力に関しては非の打ち所が無い。今までも鋭い洞察力で、腕輪の事や何者かと戦っている事実を指摘した人物。通称『黒い悪魔』で有名である――――――エーリカ・ハルトマン中尉。

「待ってよ、上総！！何処に行くつもりだよ……」

「何処にって……基地に戻るんですよ。それと、坂本少佐は気絶しているだけです。身体には目立った外傷は一切ありません。ミーナ中佐……ペリーヌ……そんな過剰に心配しなくても平気ですよ。今日はもう疲れましたから……もう、放っといてください」

「な、何言っているんだよ！？放っとけるわけ無いだろう！？だって上総、横腹怪我してるし……血も全然止まっていないのに……！！」

ハルトマンさんが左腹部を指差すのに釣られ、視線を小さく落とす。左腹部からは血液がじわりっと溢れ出し、着衣している洋服の下半分が赤黒く染まる。足元には、垂れ流れた血液が小さな水溜りを作り、生暖かい感触が地肌に伝わる。
実際は直ぐに治療するべきだが、それ以上にケレスの怪我を治療する事が先決である。出血は止まっているが、長刀で斬り裂かれた傷口は深く危険な状態である。

「先程も言いましたが、俺のことは放っといてください…。自分の失態で負傷した怪我位で、皆さんの手を煩わすつもりは有りません。それに今は、ケレスを治療することの方が重要ですから……」

「でも……確かにさ、ケレスを治療する事も重要だよ。だけど、そ

れと同等に上総の怪我を治療する事だって、私には重要だよ……！！
それに……私達は仲間だろ？十二人が一人一人を支え合って、初めて「ストライクウィッチーズ」だろ？私達の手を煩わすとか、そんな悲しい事言わないでよ……」

左腕を掴み引っ張る力が、徐々にと弱まってくる。
一度ハルトマンさんの言葉に耳を傾ける為、基地へと向かう脚を止めたが……如何やら会話は、これで終了したみたいだ。だったら、何時までも此処に滞在する意味は無くなった。
弱々しく掴んでいるハルトマンさんを乱暴に振り払い、左腹部から駆け廻る激痛に耐えながら、歩み進めると、又しても彼女が声を張り上げて、此方の動きを停止させようとする。
流石に此処までしつこいと、苛立ちを憶えてくる。

「上総ッ！！」

「……ハルトマンさん。一体何回言えば解るんですか？”俺のことは放っといてくれ”と、この分を合わせて彼此三回は言っている筈です。これ以上……同じ言葉を何回も言わせないでください。今回ばかりは、本気で怒りますよ……？」

「で…でも――――」

「だからッ……放っとけって何度も言っているだろうがぁッ！！！」

『ッ！！？』

少年の鋭く荒々しい怒号に、魔女達は身体を大きく震わせる。
背中を向けたまま黒神　上総が放った怒号に、六人の魔女達は驚き

を隠せなかった。普段の少年からは想像の出来無い……純粋に怒りのみを明確に露わにした声色。
彼女達は一度だけ少年の怒号を聞いたことがあるが、アレは怒りではなく一歩踏み出せない彼女に対しての、『答え』を導く道標になったまで。
だから、魔女達は初めてだったのだ……少年の此処まで純粋な怒りを目撃したのは…。

誰一人言葉を発声しない沈黙の状態が数秒間続く。
その重苦しい沈黙を破ったのは、少年が脚で器用に蹴り上げて手にし、砂浜へ無造作に突き刺した、刀が収まっていない模造刀の鞘。
突然の行動にさえ敏感に反応する魔女に対し、少年はケレスを力強く抱き寄せて、無言のまま生暖かい脚を基地へと向けた。

「どうしてだよ……私達は仲間だろう……？」

エーリカ・ハルトマンは悲しい声色で呟くが、黒髪の少年には届くわけが無い…。
何故なら彼の意識は、腕に抱えている大地母神・ケレスにしか向いていないのだから…。

「――――――ったく、リーネの野郎……ふざけたこと言いやがってぇ……」

「エイラ……もう落ち着いて。リーネちゃんだって、悪気が有って言ったわけじゃないのよ。上総さんの事が心配だったから……」

「分かってる…分かってるけど……」

ぶつぶつと愚痴を零すエイラを、サーニャが必死に宥める。
シャーリーとルッキーニは周囲をウロウロしながら、何処か落ち着かない様子。

私は苛立ちながら、右手で髪を乱暴に掻き回す。こんなにも苛立っている原因を作ったのは、基本的に大人しくて穏やかな性格が黒神に似ており、実に触り心地が良い……シャーリーに次ぐ巨乳だが、本人はあまりその点に言及されたく無いようであり、サイズを実測値より明らかに小さく自己申告をしてる人物――――――リーネだ。
今回リーネの言った言葉には、流石に我慢が出来なかった。理不尽に怒り始めて、仲間を心配していないとか勝手に勘違いをして……
――――――考えるだけでイライラしてきた。
大事な仲間の心配をしない馬鹿な人間なんて、この部隊には存在しない。実際に黒神や少佐のことが、心配で耐えきれず、今直ぐにでも出撃したい。が、私達にはミーナ中佐から待機命令が下されている。他の場所からネウロイが出現する可能性や、戦えない整備兵達を護る等の重要な役目が、この待機命令に込められていることは、言わずとも分かる。
話を少し逸らすけど、以前から妙に黒神の存在が私の中で大きくなり始めている。サーニャと同等に、黒神の存在が大事になり始めたのは、私がうじうじして一歩踏み出せなくて困惑していた時だ。
あいつは『答え』を出せず困惑している私に対して、穏やかな性格からは想像できない程の声を張り上げて、〝怖がるな、支えてやる、一歩踏み出せ〟と強い意志で勇気をくれた。あの時の強い意志が込められた言葉は、一語一句胸に刻み込まれている。思い返すと、結構恥ずかしいけど……。
もし、サーニャと黒神への気持ちは一緒なのか？と、質問されたら即答で『ＮＯ！！』と答える。サーニャに抱く気持ちは、絶大な信頼をしている親友への親愛。一方黒神に抱く気持ちは、はっきりと

は自分でも理解していないのだが、確実にサーニャとは違う気持ちを抱いている事実だけは分かる。
又しても私は『答え』が見つからずに、困惑しているのだ。それに、黒神の過去を盗み聞きした事にも悩んでいる。明るい笑顔の裏には、あんな暗い過去が有るなんて……――――――
思わず溜め息を零すと、それに気付いたシャーリーが何やら怪しい表情を浮かべながら、此方に向かって来る。ああ……もう、悪い予感だけ感じねぇー……。

「恋に焦がれる少女が溜め息ってか、エイラ？」

「ぶっ！！？な、何言っているんだよ……お前それ、意味分かって使ってんのか／／／／！？てか、大体誰が誰に恋焦がれるだよ／／／／！！」

「そりゃあ……あれだよ。エイラが黒神にだよ」

「は、はいっ／／／／！！？」

突然意味の分からないシャーリーの発言に、顔を紅潮させる。何故顔を紅潮させたのかは分からなかったが、無性に恥ずかしい事だけは嫌でもこの身体で体感した。少し前までの私なら、別に恥ずかしがらずに軽く受け流した筈だけど……。

（はぁ……黒神の奴、速く帰って来いよ……って、あれ？）

シャーリーにあんなことを言われたのに、結局は黒神のことを思い浮かべてしまう事に不思議に思いながら、薄暗いハンガーで黒神が帰還してくるのを待ち続けた。
数分後に、ストライカーユニットのプロペラ音が聞こえ、皆が帰還

してくる姿が見えた。無事だった事に安堵の息を吐くが、肝心のアイツの姿が無いのに気付き、透かさず中佐に問い掛けた。
中佐は悲しそうな表情を浮かべたまま、分かり易く全てを伝えてくれた……。

窓辺から入り込む僅かな月夜の明りが、部屋を優しく薄明るく照らす。
その光景を一瞬眺めて、直ぐにベットに視線を落とす。純白のベットには、ケレスが小さな寝息を鳴らしながら、気持ち良さそうに眠っている。
人型ネウロイに斬り裂かれ負傷した傷口は、ネプトゥヌスの治療の御陰で綺麗に完治している。一度、ケレスの怪我を自分の治癒魔法で癒そうとしたが、その行動はメリクリウスに止められてしまった。如何やら、人間の魔法力が神々の体内に存在する『神術回路』へ侵入すると、神話融合と同類の副作用がローマ神話の神々達に発生する恐れがあり、酷い場合には『神様』の座席から降ろされてしまう。『神様』の座席を降ろされた者は、人間の記憶から消え去り、孤独に『死』を迎える。
外部や『神術回路』以外に魔法力が浸入するのは平気なのだが、ケレスの斬り裂かれた傷口は深くて、人間の位に所属する俺が治療するのは、『神術回路』に害を加える可能性がある為、禁止らしい。

静かに眠っているケレスの頬を、優しく撫でる。
柔らかくて癖になりそうな感触と、キメ細かく滑らかな肌触りが、指全体へ確実に伝わる。過去にも、似た感覚に何度も触れて、可愛らしく怒る『茜』の容姿が脳内で、古びた映画フィルムの様に流れ始める。
流れ始めたと同時に、ケレスを傷付けたネウロイへの殺意が段々と

芽生え始めてくる。
そして小さく呟く――――――

「……徹底的に潰す」

復讐への決意。
大地母神・ケレスを負傷させたネウロイを、徹底的に武力排除すると誓った復讐へのどす黒い決意。
その復讐心に狩られた少年は、更なる復讐が膨張化を遂げ、首輪が引き千切られた一匹の狂犬が青空で誕生する出来事が起こるなど、黒神　上総も、魔女達も、神々達も予期していない……。

その純白の天使の双翼は、復讐色へと染まり上がる……。

第四十八話：復讐への決意（後書き）

次回は、少し速めに投稿しようと考えています。
感想待っています（＾Ｏ＾）／

第四十九話：晩餐会（前書き）

第四十九話です。
又もや後半……何を執筆しているのかワカンネ（ー。ー）ｙー。。。。
てか、顔文字を状況に合わせた使い方すらも分かんない……。

第四十九話：晩餐会

――――――Ｕｎｋｎｏｗｎ　ｓｉｄｅ――――――

正確に建てられた石柱に備え付けられている、蛍火の様な穏やかな明りを放つ蝋燭が、大部屋を薄暗く不気味に照らす。大部屋の中央には、如何にも高級感が漂う木造の机と椅子が置かれている。その大部屋に存在する膨大な圧迫感と、それを放つ怪しき五体の影。その内、四体の影は先程の高級感が漂う木造の椅子に腰を降ろし、机に並べられている暖かな食事を静かに進める。

今回の晩餐会メニューは、非常に硬そうなパン、こんがりと焼き上がった上質なステーキ、血液よりも若干濃いめな赤ワインである。金髪金眼の羽衣を纏う男性は、ステーキを丁寧に切り分け、ゆっくりと味わうように咀嚼する。一方、白色の髪色と黒色の瞳を持つ大男は、筋肉質で痛々しい斬傷が目立つ腕を確りと組み、食事に興味を示さない態度を表すかのように、瞼を深々と閉じている。残りの二人はパンに齧り付いているが、その噛み切れない硬さに負けてしまい、ぶつぶつと文句を呟いている。

そんな四人に敬意を示すかのように、もう一体の影は跪き何かを報告している。

【――――――以上ガ、黒神　上総ト戦闘シテ得タ情報デス……】

「……そうか」

跪く者”人型ネウロイ”は、黒神　上総の戦闘力情報を的確に分かり易く伝えた後、摂取した魔法力と一時的に授かった武器『トリアイナ』を木造の机へ丁寧に置く。

金髪金眼の男性は食事を進める手を一旦止め、人型ネウロイの報告

に静かに呟く。そして横眼で、人型ネウロイが摂取した黒神　上総の魔法力を確認する。
黒色の瓶に充満して蒼色に光輝く煙を、金髪金眼の男性が横眼に眺めていると、黒緑色の長髪が繊細で美しく、ドレスが良く似合う身体をしている女性が興味を表すかのように、小さな唇が揺れる。

「あら……？随分綺麗な魔法力ね。純粋で優しくて、暖かくて……光牙にそっくりだわ。これが、魔法力を持たない徒の人間の分際から、異世界人として成り上がった者の力量、ね……。
ふふっ……以外に面白いじゃない。中々の逸材よ、この異世界人」

「結構な高評価だね……ミネルヴァ」

「はぁ……何勘違いしているのよ、マルス。確かに私は、純粋で優しくて、暖かい魔法力と言ったわ。けど、それは表向きの話としているだけで、決して評価はしていないわよ。褒めるなんて言語道断。私が高評価を与えて、逸材と認めている部分は――――――黒神　上総の裏よ」

「う、裏……？裏って一体何の……」

「馬鹿な貴方には後々教えるわよ。にしても――――――」

ミネルヴァと呼ばれた女性は、黒色の瓶に充満している蒼色に光輝く魔法力から視線を離し、小皿の上に置かれているパンを右手で掴み取り、大胆に齧り付く。
しかし、ミネルヴァの口元の大きさでは全てを咥え込めず、況してや噛み千切る事も難しい。なので、隣に座っているマルスからは、かなり艶めかしく見受けられてしまう。

「ほぉのパン……ほぉんほうに、たべにきゅいわね。味ふぁ良ひのに……ふぉんなに硬ふぁとねぇ…。ぷあっ……困ったものね」

「え～と、”このパン……本当に、食べにくいわね。味は良いのに……こんなに硬いとね”で言った事は合っているよね？てか、そんな艶めかしい食べ方しないでよ……聞いているこっちが恥ずかしいから…／／／」

「恥ずかしい？貴方にはどう聞こえて恥ずかしいのかしら～？具体的で丁寧に、そして分かり易く説明してみなさいよ。この、変態奴隷さん♪」

ミネルヴァは口元を釣り上げながら、マルスの頬に人差し指を優しく這わせる。

戦争の女神・ミネルヴァは智恵・戦術・技芸の神であり、このように悪知恵が直ぐに働く。彼女はその悪知恵を利用して、自らの奴隷であるマルスを弄り回すのが趣味である。

それに対してマルスは、顔を紅潮させながら擽ったそうにしている。だが、表情は嬉しさが隠し切れていない様子。

戦争の神・マルスは闘争心や流血を好む神である。防御等の回り諄い行動は嫌いであり、如何なる戦闘においても、自身の身体が傷付くことも気にせずに突っ走る。荒過ぎる戦い方だが、マルス本人は流血する瞬間を快感としている。

ミネルヴァとは恋仲であり、サドの彼女に鞭で叩かれる行為を祝福と感じているの他、簡単に悪知恵の餌食になり騙されると、マゾで単純馬鹿である。

「くすっ……相変わらず可愛い反応ね。これだから貴方を弄ぶのは楽しいのよ。

それと、さっきから黙って食事をしているけど……好い加減、其処

に突っ立っている人型ネウロイを片付けてくれないかしら？一々視界に入り込んできて……鬱陶しいのよ」

淡々と食事を進める金髪金眼の男性に、心底嫌そうな声色でミネルヴァは問い掛ける。すると、男性の手が再度止まり食器であるフォークとナイフを置く音が大部屋に響く。

問い掛けた彼女は、声色と同じの嫌そうな表情を一切変化させず、前髪で見え隠れしている瞳を正確に見据える。マルスはその行動に若干の恐怖心を抱きながらも、金眼を捉える。が、石柱に備え付けられている蝋燭の蛍火よりも、ギラギラと燃え盛るそれに意識を刈り取られる気分に圧迫され、直ぐに視線を逸らす。

「鬱陶しいのなら、自分で片付ければ良いだろう……」

「アレに魔法力を与えたのは、他ならない貴方でしょ？世話をするのも、命令を下すのも、利用価値を判断するのも……全部貴方の仕事の筈よ。それを私に押し付けるなんて、責任感が無いのかしら？ああ……それと個人的な意見だけど、もう利用価値無いと思うわよ……アレ」

「……」

そう言い親指を突き立てて、人型ネウロイを見ずに指差す。

ミネルヴァの指摘を無言及び無表情で聞いていた男性は、彼女が指差した方向をゆっくりと見据える。跪いて大人しくしていた人型ネウロイは、圧倒的な存在に身体を大きく震わせる。

その哀れな姿勢が見受けられた光景に戦争の女神は、くすりっと小さく笑いながら残されている食事を美味しそうに食べ進める。

「……利用価値なら未だあるさ、ミネルヴァ」

「何処にかしら？こんな塵屑同然の死に損ないに……」

「ふっ、この部屋を盛り上げる小道具としては、十分な利用価値が有る」

「じゃあ早速見せて貰うわよ。貴方が考える塵屑の使い方をね……」

金髪金眼の男性は徐に椅子から立ち上がり、左手を自分の肩部分まで持ち上げる。

突然の行動に理解不能な人型ネウロイに対し、ミネルヴァは一瞬で何をするかを気付いた様子。口内に含んでいるステーキをじっくりと咀嚼しながら、金髪男性なりの『利用価値』を興味を示している。

白色の髪色と黒色の瞳の大男は、相変わらず腕組みをしたままだが、左瞼だけ開いている。如何やら、彼もミネルヴァと同様で、これから起こる事を確りと把握しているらしい。

男性は指の第一関節を軽く曲げた後、邪魔な埃を振り払う要領で人型ネウロイに左手を向ける。

瞬間――――

【――――ッ！？――――――！！――――――……】

蒼白い雷撃が跪く人型ネウロイを包み込む。

突如の薄暗い大部屋を盛大に照らした雷撃は、各々の顔立ちから表情まで鮮明にする。

戦争の女神・ミネルヴァは予想道理の美貌の持ち主であり、ドレスが似合うのも確実だ。どんなに丁寧に持ち上げても逃げられてしまう様な、淑やかで繊細な黒緑色の長髪が靡く度に綺麗だと感じる。

尤も性格は、綺麗の反対だが……。

そして同類の位置に所属している戦争の神・マルスは、闘争心や流

血を好む顔立ちはしておらず、反対に争い沙汰が嫌いでひ弱な弱小動物のようである。
残りの二人は一言で表すと、『恐怖』という文字しか思い浮かばない。怪しく光輝き燃え盛る瞳を捉えるだけで、心臓が破裂しそうな勢いで鼓動し呼吸が苦しくなる。
以上がこの者達の第一印象である。さて、会話が少し逸れたので訂正したいと思う。
激しい雷撃が直撃した人型ネウロイは、叫び声を挙げる暇無く焼き焦がされ、最終的に残ったのは雷撃を放った個所にできた、無残な焼け跡。灰の一つも残らない残酷な光景。

「成程……これが塵屑の『利用価値』って訳ね。まぁ、個人的には断末魔の方を聞きたかったけど……これはこれで、色々と楽しませて貰ったわ。視界に入り込む邪魔者を退かすと同時に、死の宣告も無しに焼き殺してくれた冷酷な姿勢に、一応感謝しとくわ。
あと、忘れ掛けていたけど……■■■■族所属■■■の一件はどうなったの？貴方が犯した失態で、あの子は此処から逃げ出した上に、魔道具『レージング』と『ドローミ』を破壊して人間界に降りたのよ？
そろそろ居場所位は、十分に把握している頃でしょ？」

ミネルヴァは彼なりの『利用価値』を関心した後、ある人物の事を会話に加えた。
羽衣を纏う男性は椅子に腰を降ろし、懐から壊れている鎖を取り出す。魔道具である。
魔道具『レージング』と『ドローミ』を自分の眼の前に置き、数秒間沈黙する。

レージングは、■■■■■■を捕縛する為の鎖。

日増しに巨大になるそれに恐れを抱いて、神々は一本の太い鎖を鍛えた。
それが『レージング』である。
■■■■■の名声欲に付け込んだ神々は、この鎖を断ち切れば名声が高まると■■■■■を騙して付けさせたが■■■■■が、身体を揺すっただけで粉々になってしまった。

ドローミは、■■■■■捕縛の為に作られた第二の鎖。
レージングが易々と粉砕されてしまったので、是は更に二倍の強度に鍛えてある。
神々は再び■■■■■の自信と名声欲に付け込んで、『そんなに力が強いのなら、この鎖も切れる筈だ』と言って鎖を付けた。
レージングよりは持ったが、■■■■■が本気で暴れまわると、呆気なく鎖は断ち切れてしまった。

「あの小娘の居場所は既に把握している。血相を変えて捜す必要は無い。それに、脱走したのは戦力外である小娘だ。黒神　上総抹消計画には、全くの無傷だ。
安心しろ……直にお前達二人も出会う事になるさ」

「出会う……――――――ッ！？まさか■■■の奴……！！」

「嗚呼、その考え通りだ」

「はぁ～～～、呆れた……食欲が一気に失せたわ」

彼女は体内にある酸素を全部吐き出す溜め息して、乱暴に椅子から立ち上がり扉へ足早に歩き始める。マルスも半分以上残っている食事を中断し、ミネルヴァの後ろ姿を追い掛ける。

少しして扉が開かれる音が大部屋に響き渡り、二人のローマ神話の神様が退室する。退室したと同時に大男も椅子から腰を上げて、扉の方向へ軽快に歩いて行く。そんな大男を金髪金眼の男性は不意に呼び止めた。

「お前には期待しているぞ……■■の支配者、■■の神・■■■」

「期待される筋合いは無い。雷神・ユピテル」

■■■は渋い声色でユピテルに言い終えると、透かさず大部屋から退室する。

一人薄暗い大部屋に残っている雷神は、他の神達が食べ残しにした料理に軽く視線を一時的に落とし、血液よりも若干濃いめの赤ワインの注ぎ込まれたグラスを持ち――――

「好い加減、茶番は終わりにしようか……異世界人」

不気味に微笑んだユピテルは、赤ワインを少量流し込んだ。

ごくりっ……と喉を寂しく鳴らし響かせた……。

戦争の女神・ミネルヴァは思い出していた。

過去に存在した、あの緊張した出来事を。

一語一句を大切に噛み締めるかのように……。

――――”生まれて初めて、僕は自分の存在意義を感じてるよ。

君の部品になら、僕は喜んでなれる”

身体中に激痛が駆け廻りベットから降りられない状況で、そいつは

優しく言った。
普段強気な態度だけど、内心突然の告白に戸惑いを隠しきれない。
平常心を保ちなさい……と何度も呟きながら、告白した奴を見つめる。
ひ弱そうで争い沙汰を嫌うような弱小動物みたいな顔立ち。
こいつは昔から興味を持っていた奴だ。暇なときは何時も一緒に会話をして、有意義に時間を潰した。あっという間に時間は過ぎ去り、何十時間会話したのかと感覚が可笑しくなる。あいつが他の女神と、楽しそうにしていると胸の辺りに不快感が充満し始めたのも憶えている。
だから私は、気持ちを揺り動かしてくるコイツに興味を持ち始めた。
そんな奴から突然の告白。純粋に徒嬉しかったから、私はこう言った。

――――”貴方の部品が私の体内に在るの？……――――ふん…ま……我慢しましょ。貴方が分け与えてくれた部品から流れる血液……暖かくて、気持ち良いから♪”

これを境眼に私達は――――恋仲になった。

「マルス」

「うん？何かあったの、ミネルヴァ」

「……ふふっ、何でもない。徒呼んだだけよ♪」

だから私達は絶対に敗北しない。
貴重な時間を摘み取る、成り上がりの異世界人には絶対に……！！

Unknown side out

第四十九話：晩餐会（後書き）

今回はローマ神話が中心的でした。
次回の投稿は全然分かりません！！が、速めに投稿したいと考えております。

第五十話：舞い降りた狂人者（前書き）

第五十話です。
作業が終わったのは、朝方５：５０分……。
今から睡眠って……はぁ…。

第五十話：舞い降りた狂人者

――――腕輪内　ネプトゥヌスｓｉｄｅ――――

何時もと変わらない姿勢で深々と瞼を閉じ、これまで事態を鮮明に思い返す。

この世界に訪れた異世界人であり、風神や火神から確実な勝利を得ると同時に、人間如きの分際では、不可能と言われ続けたきた『神話融合』を成し遂げた人物――――黒神　上総。

俺が初めて黒神と出会ったのは、風神・メリクリウスが敗北した事実が分かって数日後だった。最初は風神が敗北したと聞いて心底驚いたが、アイツは前々から陰で黒神　上総という異世界人に興味を示していた事は知っていた。

メリクリウスは『風』を操作し、攻撃や防御に転用するローマ神話の神。威力や耐久力は低いが、風を手足のように自由自在に扱える為、俊敏性は上位ランクに匹敵する力量だ。その持ち前の俊敏性を利用して、黒神を嬲り殺すことだって可能な筈なのに、メリクリウスはそれをしなかった。

そう…――――故意に手を抜いて、敗北したのだ。自分が興味を示している相手に近付く為に…。風神・メリクリウスは、そういう奴だ。興味の真相を知る為なら、自らの身を投じる無謀家であり策士家。

そんな無謀家の尻拭いという面倒な役目を任せられたのが、海神である俺だった。正直…敗北者の尻拭いなど嫌だったが、メリクリウスが故意に敗北してまで興味をそそる異世界人に、此方も若干の期待と興味心を抱いていた。

そして遂に出会えた異世界人。主に扶桑人の身体的特徴である黒髪

と黒眼。年齢は十代半ばであり、健康的で整った顔立ちや身体から醸し出される、敵意や殺気の籠った瞳。そんな生意気な黒神に当時の俺は、非常に強い苛立ちを憶えていた。

それらを一つの原動力とし戦闘をしたが、隙の大きい動きや危機的状況に追い込まれての対応の遅さ。どれを取っても半人前と言える実力者で、簡単に殺す直前まで追いやった。

メリクリウスが興味を示した異世界人も所詮見当違いだったか……思いながら神術『氷龍絶破衝』で、無駄な戦闘を終わらせた――――筈だった。

氷龍が喰らい氷塊と化した場所が粉砕され、辺りに氷の欠片が飛び散る。透かさず振り向き、目撃した有り得ない姿に驚愕――――――髪色及び瞳が、翠色へと変化した黒神。

その後の出来事は詳しく憶えていないが、無様に敗北した記憶だけなら有る。

……何やら余計な事を思い出していたようだが、そろそろ本題へと移るか。

先ずは、魔力を持ち合わせた人型ネウロイについて。

本来ネウロイは魔法力を所有しない、未知なる生物。攻撃がビーム（圧縮粒子砲）だけと単調で、生命部分であるコア（核）を覆う黒色装甲も、鉛玉で簡単に崩れ壊れてしまう程度。人間共の私的事情に、首を突っ込むつもりはさらさら無いので、何故ネウロイが突如出現したかは詮索するつもりは無い。

だが、今回のネウロイだけは別の話。あの人型は異常な使命感に満ち溢れており、独自の魔法力を持ち合わせていた。身体の一部を武器に為す上級技術や、耐久力や俊敏性を上昇させる強化魔法まで……。

こんな馬鹿げた芸当を考え可能にする人物は、天界で徒一人。

（雷神・ユピテルが動き出したか……）

天界では、完全無欠・最強無敵で恐れられている絶対強者。
雷神・ユピテルならネウロイに対して、新たな『力』を吹き込める。

（それに……魔道具まで使うとは……）

ネプトゥヌスは人型が使用した魔道具『トリアイナ』を思い浮かべる。

魔道具とは、その名前の通り『魔力の宿った道具或いは武器』である。
魔道具にも種類豊富な道具や武器があり、三叉槍やズフタフの槍、炎剣レーヴァテイン等の伝説上の武器が、気持ち悪いほど沢山揃っている。尚三叉槍の後に述べた二種類の武器は、主に火神・ウルカヌスが優先的に使用する魔道具だ。

ズフタフの槍……戦いの兆しを感じ取ると、柄から炎を噴出し、唸りながら戦場へ勝手に向かっていく魔槍である。
戦時には頼りになるが、平時に野放しにしておくと、否応無しに戦争を引き起こしてしまう。この為、いざ使う時までは厳重に保管しておく必要がある。

炎剣レーヴァテイン……軍隊壊滅どころでは無い。世界を焼き尽くすという究極の武器である。
北欧神話に登場する巨人の武器、レーヴァテインがそれだ。レーヴァテインとは『害をなす魔法の杖』と言う意味。ルーンの呪力で強化され非常に危険な為、九つの錠が掛かった箱で、この炎剣を厳重に保管されている。

（今まで重要に保管していた魔道具を表沙汰にするとは……ユピテルの糞野郎、ローマ神話の神々達に使用させないで、人型ネウロイを実験材料に一時的に試運転させたか……相変わらず、えげつない奴。
魔道具は危険が伴う場合が多々有るから、慎重に手扱う必要がある……。しかも、久々に保管庫から取り出したから、魔道具達もストレスが溜まり更に危険な状態……。
其処で考え付いたのが、身代わりを実験題材にすることか。自分は遥か上空で高処の見物をして、身の安全を確保する……ちっ……胸糞悪い話だぜ）

「よっ……と！！ただいま～」

雷神・ユピテルの露骨でいやらしい遣り口に、不快感を憶えて溜め息が漏れる。睡眠……何とも素晴らしい響きの言葉通りに行動を進めようとした直後、聞き慣れた女性の声が鼓膜を叩く。
首元に手を添えながら、女性の声がした方向に顔を向ける。

「一々”ただいま”とか言う必要が有るのかよ、ケレス」

「うわぁ、ガラ悪っ！！別に良いじゃん……家は此処なんだから」

「はぁ……面倒臭い奴。てか、ガラ悪いとか関係無いだろうが……」

ケレスは唇を蛸みたいに尖らせて、ぶつぶつと文句を呟き始める。
数日前までは大怪我を負い瀕死だったが、今では五月蠅い位元気を取り戻しており、四六時中黒神の傍から離れることは無い。恐らく…以前黒神自身が打ち明けた過去話を聞いての、ケレスなりに一生懸命な『支え方』なのだろう。
あの時、偶然聞いてしまった黒神の過去。家族が殺され、大事な義

妹であり初恋の相手を殺され、自分以外に血筋の通った者達が居なくなり、天涯孤独の存在になった。
明るく振舞う態度からは、想像を絶する荒んだ過去。

「正直……未だ十七歳の人間には辛すぎる話だよな……」

「何か言った？眼つき最悪男」

「うるせぇ、ただの独り言だ。それよりも珍しいな……お前が此処に戻るなんて」

「珍しいかな？まぁ……耳を澄ませば、戻って来た理由が分かるよ」

「はっ？意味不明すぎる解答だろ……それ……」

「文句言う暇があるなら、実際に試してみなよ」

そう言って急かすケレスを尻眼に、意識を聴覚に集中させる。
聞こえてきたのは、緊急事態を知らせるかのような耳障りな警報音。
睡眠を行おうと思ったが、一気に頭が冴えてしまう。蒼色のソファーから身体を起こし、髪を少し乱暴に掻き毟る。
この警報音が鳴り響くと、決まって睡眠が阻害されてしまう。

「けっ……ネウロイかよ。毎度毎度……蠅みたいに増殖しやがって。ネウロイ共も熱心だな……今日も張り切って世界征服ってか？ふざけやがって……――――で、今回襲撃してきたのは雑魚の方か？それとも再び雷神・ユピテルからの、丁寧に包装されているプレゼントか？」

「凄い喧嘩腰だね、ネプトゥヌスは。だけど残念……今回は普通な

ネウロイだってさ。敵数を詳しくは把握していないけど、大型ネウロイが二機らしいよ。
だから、主を含めて全員総出撃だって赤髪の女が言ってた」

「そうか。なら安心だな」

「うん。けど――――」

突然ケレスの表情が険しくなる。
先程までの活発な雰囲気が、嘘みたいに消えて不思議に感じた。

「今日の空は、不気味で気持ち悪いの……。晴天なのに、物凄く……」

「貴女も感じていたとは、感覚の才能は劣っていませんね」

「メリクリウス……」

会話に無理矢理割り込んできたメリクリウス。
今まで何処で何をしていたかは全く知らないが、どうせ優雅に趣味である紅茶を啜りながら、世間的に『読書』と言われる意味無い文章を黙々と読み進める、精神向上行動を行っていたのだろう。
尤もメリクリウスの動作を、大体予想できてしまう自分が可笑しい話だが……。
腕輪内での連中達の趣味や動向を理解してしまっている事に対し、微かに苦笑を浮かべていると、メリクリウスが意味深長な発言をする。

「風が強い……こんな時は、風が予期しない来訪者を連れてくるものですよ……」

『来訪者……』

この時点では未だ、言葉の真意を理解していなかった……。

――――――腕輪内　ネプトゥヌスｓｉｄｅ　ｏｕｔ――――――

天使化（Ａｎｇｅｌｍｏｄｅ）で発動させた純白の双翼を羽撃かせ、敵対勢力が存在している空域に向かう。

今回の破壊目標の敵数は大型ネウロイが二機であり、全員総出撃との指示がミーナ中佐から下された。人型では無いが、ネウロイだという明確な真実には何の変哲も無い。

無関係なケレスを傷付けたネウロイ共を、無暗に生かしておくわけにはいかない。傷付く事を承知で、身代わりになった大地母神の少女。それを護れなかった哀れさを実感した夜に誓ったんだ…降り掛かる火の粉達を完膚なきまで、徹底的に捻り潰すと……。

拳を力強く握りしめ、近付く度に芽生え始める殺意を抑え込む。魔女達が此方をチラチラと何度も見てきたが、気にも止めないで飛行を続けた。

一～二分間程の重苦しい沈黙が流れるが、銀色短髪の少女――――サーニャ・Ｖ・リトヴャクの慌ただしい声色が、それを大きく突き破る。

「……――――――――！？ネウロイの反応が一つ……消失しました」

「消失だと……？一体どういう事だ……」

「それは現場に行って、この眼で確かめるしかないね」

バルクホルンさんの疑問にハルトマンさんが答える。
空域から離脱するなら分かるが、唐突にネウロイが消滅するのは妙な現象。種類によって自爆を主武器とするネウロイが、存在していても可笑しくは無い。だが、相手が訪問していない状況で、突然の自爆行動を選択するのは、あまりにも気色悪過ぎる。
此処はハルトマンさんの言う通りに、この瞳で確認するしか方法が無い。

更に数十キロメートルを飛行し続けると、遂に敵勢力が視界に移り込む。
巨大な黒色の塊と六角形の紅い斑点……間違えない、ネウロイだ。
サーニャの情報通りで、残り一匹の姿が何処にも見当たらないが、眼の前にいる相手を徹底的に潰せれば問題無い。
双翼からはＡｒｔｅｍｉｓ（永久追尾空対空弾）を、近接戦闘を想定してｃｈｒｙｓａｏｒ（超振動光子剣）を、それぞれ攻撃準備を万全に整え、魔法力を込めた瞬間――――

《ごがあああああぁぁぁぁぁ！！！》

『ッ！！？』

猛獣宛らの咆哮が響き渡り、大型ネウロイが紫色の瘴気に包み込まれる。
瘴気には勢いが伴っている為、激しい突風が身体を吹き飛ばそうとする。それに対応するように、歯を必死に食い縛り激しい突風を耐え抜く。
少し経って風が穏やかになり始め、紫色の瘴気も徐々に晴れていく。
透かさず大型ネウロイが存在している場所を見据える――――どくんっと心臓が体内で響き渡る……。

其処には既にネウロイは存在していない。在るのは人間の不気味な影。
紫色の髪と瞳が特徴的であり、身長は黒神と同じ位。顔の右頬には龍の烙印が彫られている。服装は、紺色の長ズボンに刺繍が施されていない黒いTシャツに、上から薄茶色のジャケットを羽織っている。
少年は有り得ない光景を目撃しながら、小さく喉元から発声する。
「な、何故お前が…魔牙……！！」
「えっ……黒神の知り合い……なのか？」
シャーリーは恐る恐る尋ねるが、少年はそれに一切耳を傾けない。
「答えろ、魔牙……！！何でッ……！！」
「んあっ？お前誰……――――――ああ、思い出した。確かお前は光牙の弟子だった……人間の小僧か。
ふん……丁度良かったぜ、お前に会えて。好い加減、邪魔なコレを返したかったんだよ」
無表情で魔牙は答えながら、何処からか取り出した日本刀を乱暴に投げてくる。硬直気味の身体を強制的に動かして、何とか日本刀を受け取る。その見覚えのある日本刀には、ベッタリと渇いた血液が付着している。
（この日本刀は……――――――ッ！！？）
直後、身体が小刻みに震え始め日本刀に異常なまでに重量感が加わ

る。
そして得た情報源から、既に理解しきっている結果を聞きだす。
「おまッ……この日本刀……！？」
「はあッ？未だ分かんないのか……一々面倒な小僧だ。いいか、耳穴かっぽじって確り聞けよ。
お前の師匠である光牙は――――――」
――――〝止めろ、それ以上言うな〟
「俺が――――――」
――――〝ヤメロ、頭が狂ってしまう〟
「殺した♪」
「止め…ああっ……うあ………ああああっ……うわああぁぁぁぁぁ！！

！」

少年は頭を両手で抱え込み、大事な師匠が殺された事実に悲痛の叫び声を挙げる。
魔女達は初めて黒神の叫び声を聞いた為、身体が石造みたいに硬直する。対して魔牙は、黒神の絶叫を眼にし喜びの表情を浮かべる。

「あはぁ♪顔色が変わったなぁ！！いいねぇ、その表情！！光牙を殺した時も最高だった！！あいつ！！あの顔！！
自分が手を下して殺した相手に、今度は自らが無残にぶち殺されると解った瞬間の、絶望！！反吐が出ちまいそうな身体が、肉片一つも残らず消滅した時の、快感！！興奮して脳内が狂っちまいそうな程、鼻孔を突き刺す甘美な血液の匂い！！あ”あ”…もう……最高だった！！！」

言葉は非常に喜んでいるのに、その”眼”は全くの真逆だった。
道端に落ちている、一円玉を見るような……新しく買ってもらう為、態と置き忘れた玩具を立ち去り際に一瞥する子供のような……剃刀のような細く鋭利な”眼”。
それと光牙が殺された事実の全てが、それまで黒神　上総を陰で支えていた、水よりも柔らかく繊細な最後の”糸”を――――――切った。

「決まりだ……貴様が師匠を殺した…！！その事実さえ分かれば良い……！！
もう喋らなくても良いぞ、魔牙。先ずは、そのべらべらと回転の良い舌の根元から――――――引き千切ってやろう…！！」

純白の双翼は、鮮血に染まり上がる……。

第五十話：舞い降りた狂人者（後書き）

遂に魔牙登場！！

次回は黒神ＶＳ魔牙の狂人者同士の、荒々しい戦闘描写を執筆できるように頑張りますので、応援宜しくお願いします！！

第五十一話：鮮血の双翼（前書き）

更新遅れてすいませんでした。
簡単に理由を述べれば……見事なスランプ状態に陥っていた！

それでは、第五十一話をどうぞ！！

第五十一話：鮮血の双翼

――――――シャーロット・E・イェーガーｓｉｄｅ――――――

ストライカーユニットの速度を一定に保ちながら、敵対勢力の反応が有る空域に向かう。
その間、少し遠くで飛行している黒神の顔色を何度も窺う。瞳が全くぶれずに、ネウロイの反応が有る方向を真っ直ぐ見据えている。表情の変化も無いが、何処か私達に恐怖心を与えるような雰囲気を醸し出している。この事態に関しては、恐らく全員が把握しているだろう。
皆も黒神の顔色をしつこく何度も窺っている。特に宮藤とリーネ、ハルトマンとバルクホルン、少佐とエイラ達の顔色を窺う行動が、他の隊員と比較して著しく多い。
私の考えが正しければ、この六人は黒神　上総に明確な好意を抱いている連中だ。好意と言っても、助け合い協力する仲間としての好意も勿論あるが、異性としての好意も根強く存在している。
訓練一筋の坂本少佐やサーニャ大好きエイラまでもが、黒神に好意を抱いているとは驚きの事実だ。尤も二人は少し天然であるから、自分の気持ちには未だ気付いていない。
私がエイラの気持ちに気付いたのは、人型が襲撃してハンガー待機を中佐から命令された時だ。黒神と少佐が二人だけで、人型ネウロイを対応している事態に不安を隠しきれなかった私は、それを紛らわすようにエイラを冗談半分にからかった。
相変わらず予想しやすい結果だったのだが、表情は予想とかなり食い違うものだった。顔全体を熟れた林檎みたいに紅潮させ、冗談半分に言ったことに酷くあたふた焦っていた。
その姿まるで、恋する乙女かのように……。

「……――――――ッ！？ネウロイの反応が一つ……消失しました」

「消失だと……？一体どういう事だ……」

「それは現場に行って、この眼で確かめるしかないね」

サーニャの慌ただしい声色で、はっと意識が作戦に戻る。

ネウロイの反応が消滅したことに、バルクホルンが疑問の声を挙げてハルトマンがそれに答える。疑問に思うのは確かだ。今までネウロイが”逃亡”という事はあったが、何もないのに”消失”などとは、一度も聞いた試しが無い。ハルトマンの意見通りに、この眼で確認するしか方法は無い。

更に数十キロメートル飛行し続けると、視界に敵対勢力が移り込む。巨大な黒色の塊と六角形の紅い斑点……作戦内容と同じ、大型ネウロイ（３００m級）だ。サーニャの固有魔法である『魔導針』から得た情報通り、残りの一匹が何処にも見当たらない……。

横眼で黒神を見ると、既に戦闘準備をしており純白の双翼が、飛行中よりも大きく拡がり、握り締めていた拳も開かれている。何時も以上に準備が速く感じるが……大丈夫だろう。

不安感を抱きながらネウロイに意識を向けた瞬間――――――

《ごがあああああぁぁぁぁぁ！！！》

『ッ！！？』

突如鼓膜を突き破るような咆哮が空域に響き渡り、大型ネウロイが紫色の瘴気に包まれる。紫色の瘴気は激しい突風を伴っている為、身体が吹き飛ばされてしまいそうになる。ストライカーと魔法力を駆使して、突風を何とか耐え抜く。

少し経って風が穏やかになり始め、咆哮を響かせた紫色の瘴気も晴れていく。私達は透かさず警戒を怠らない状態で、大型ネウロイが存在している場所に視線を移す――――が其処にはネウロイの存在した痕跡が一切残っておらず、唯一在るのは人間の不気味な影。

紫色の髪と瞳が特徴的で、身長は黒神と同じ位。顔の右頬には龍みたいな烙印が深々と彫られており、途轍もない威圧感を放っている。服装は、紺色の長ズボンに刺繍が施されていない黒いTシャツに、薄茶色のジャケットを羽織っている。

だが重要なのは身体的な特徴では無く、男がどんな状態で私達の眼の前にいるかだ。男は黒神と違い、天使の双翼を生やしておらず、その場所に地面が在るかのように『脚を着けている』

その光景に困惑していると、黒神していると、黒神が震えた声色で男に話し掛けた。

「な、何故お前が…魔牙……！！」

「えっ……黒神の知り合い……なのか？」

恐る恐る尋ねたが、黒神は此方に一切耳を傾けない。

ただ真正面に佇んでいる『魔牙』と呼ばれた男を、眼を見開いて驚いた表情で見据えている。呼吸音も酷く荒れており、息を吸い込むのも苦しそうだった。

「答えろ、魔牙……！！何でッ……！！」

「んあっ？お前誰……――――――ああ、思い出した。お前は光牙の弟子だった……人間の小僧か。

ふん、丁度良かったぜ、お前に会えて。好い加減、邪魔なコレを返したかったんだよ」

無表情で魔牙と呼ばれた男は、何処からか取り出した扶桑刀を乱暴に黒神へ投げつけた。黒神は動き辛そうな身体を強制的に動かし、何とか投げつけられた扶桑刀を受け取る。この距離からは確認できないけど、赤黒い何かが付着しているだけは解った。
一体何が付着しているんだ……疑問に感じていると直後、黒神の身体が小刻みに震え始め、扶桑刀にも振動が伝わる。
そして先程よりも動揺を隠しきれない、酷く震えた声色で魔牙に問い掛けた。

「おまッ……この日本刀……！？」

「はあッ？未だ分かんないのか……一々面倒な小僧だ。いいか、耳穴かっぽじって確り聞けよ。
お前の師匠である光牙は俺が――――殺した♪」

「止め…ああっ……うあ……ああっ……うわああぁぁぁぁぁ！！！」

黒神は頭を両手で抱え込み、悲痛の叫び声を挙げる。
私達は初めて黒神の叫び声を聞いた為、身体が石像みたいに硬直してしまう。ストライカーを装着しているのに、故障しているかのように微動だにせず、その場所に強く固定される。対し魔牙という男は、黒神の叫び声を眼にし喜びの表情を浮かべた。

「あはぁ♪顔色が変わったなぁ！！いいねぇ、その表情！！光牙を殺した時も最高だった！！あいつ！！あの顔！！
自分が手を下して殺した相手に、今度は自らが無残にぶち殺される

と解った瞬間の、絶望！！反吐が出ちまいそうな身体が、肉片一つも残らず消滅した時の、快感！！興奮して脳内が狂っちまいそうな程、鼻孔を突き刺す甘美な血液の匂い！！あ”あ”…もう……最高だった！！！」

私は意味が分からなかった。

――――魔牙という男は、一体何を殺したんだ？

――――何故あいつは、黒神のことを知っているんだ？

――――何であんなにも、恐ろしい笑顔を浮かべているんだ？

恐怖心で使用武器である［Ｍ１９１９Ａ６］を握り締める手が更に強くなり、冷や汗が鉛のようにゆっくりと頬を伝い流れる。

視線を逸らせない相手を眼の前にして硬直していると、黒神から低音の声色がした。

透かさず黒神の方に顔を向けると、そこには――――

「決まりだ……貴様が師匠をころした…！！その事実さえ分かれば良い……！！

もう喋らなくてもいいぞ、魔牙。先ずは、そのべらべらと回転の良い舌の根元から――――引き千切ってやろう…！！」

静かに明確な復讐を宣言し、どす黒い表情浮かべる異世界からの訪問者。

私は自分の眼を疑った。

黒神……この瞳に映るお前は、本当にあの黒神　上総なのか……？

――――シャーロット・Ｅ・イェーガーｓｉｄｅ　ｏｕｔ――――

――

道端に落ちている、一円玉を見るような……新しく買ってもらう為、態と置き忘れた玩具を立ち去り際に一瞥する子供のような……剃刀のような細く鋭利な”眼”を浮かべながら、復讐を宣言した異世界人を哀れみ見下す狂人者――――――魔牙。

その狂人者である魔牙に対して黒神は、周りで硬直している魔女達のこと等配慮せずに、濃密で圧迫感のある殺気を無言状態で放ち続ける。瞳からも殺気が溢れ出しており、ただ眼線を合わせるだけで背筋が恐ろしい程寒くなる。

黒神は魔牙を視界に捉えたまま、右腕部をそっと前方に突き出す。

「天使武装（Ａｎｇｅｌｗｅａｐｏｎ）ｍｏｄｅｃｈａｎｇｅ……『ａｅｇｉｓ（絶対防御圏）』の設定を大幅変更。防御機能から攻撃機能へと、情報を訂正。

座標設定開始……全時間方向にａｅｇｉｓ（絶対防御圏）を一斉展開。角度設定開始……六つの相対角度を形成。射出速度は自動機能と設定。対象物設定……魔牙。

ａｅｇｉｓ（絶対防御圏）全設定の変更を完了――――――射出開始……！！」

ぶつぶつと静かに呪文を解読するかのように呟く少年。

魔牙を取り囲むかのように、細長い六角形の薄緑色をしたａｅｇｉｓ（絶対防御圏）が、十二個に斬り分けられた個別機体として出現する。今まで防御機能のみ正常可動させていたａｅｇｉｓ（絶対防御圏）の変化を遂げた形状。

ａｅｇｉｓ（絶対防御圏）攻撃型……この世界に存在する実弾兵器

や圧縮粒子兵器、刃物等あらゆる攻撃を簡単に防いでしまう、天使武装（Ａｎｇｅｌｗｅａｐｏｎ）で二番目に圧倒的な防御力を誇る最強のシールド。
その本来は防御機能のみ発動させていたａｅｇｉｓ（絶対防御圏）の、情報を書き換えて強制的に攻撃目的として運用するのが、この『ａｅｇｉｓ（絶対防御圏）攻撃型』だ。

魔牙は紺色ズボンのポケットに両手を突っ込みながら、左右を両眼で二回だけ確認する。回避困難だと思われる攻撃でも、僅か”二回”だけの確認のみ。身構えたりなど無駄な動きは一切見受けられない。
この行動から理解できることは一つ――――――強者の余裕。

黒神の”射出開始”という掛け声でａｅｇｉｓ（絶対防御圏）が、ひゅんと風を斬りながら魔牙に向けて、順々に射出されていく。
全方位からの攻撃を回避するなど、ストライカーを履いている魔女達さえでも不可能。しかし、強者の余裕を振りまいている魔牙にとって、この程度の攻撃などは歩行するよりも簡単な作業。
襲い掛かる六角形のａｅｇｉｓ（絶対防御圏）を紙一重な位置で、軽く華麗なステップで避けていく。その度にａｅｇｉｓ（絶対防御圏）が激しくぶつかり合い、硝子が砕け割れる轟音が空域に響き渡る。
壊れた六角形の破片を尻眼に置きながら、最後のａｅｇｉｓ（絶対防御圏）を軽々と避けていく魔牙。だが直後、彼の背中に壁みたいな物体がぶつかる小さな衝撃が伝わる。
魔牙は無表情のまま、未だ背中に存在している物体に視線を向ける。
其処には砕け散った筈のａｅｇｉｓ（絶対防御圏）が、再構築されて長方形の壁として在った。長方形の壁は更に再構築され、魔牙を閉じ込める青緑色の牢獄が完成する。

「圧殺……」

少年の言葉に反応したのか、魔牙を閉じ込めている青緑色の牢獄がゆっくりと収縮していく。その事態に対して魔牙は、右ポケットから手を出して面倒臭そうに溜め息を吐きながら、髪を乱暴に掻き毟る。

そして右足の爪先部分で軽く牢獄を蹴り込む。その瞬間、最強の防御力を誇るａｅｇｉｓ（絶対防御圏）がいとも簡単に崩壊する。

黒神は手馴れた様子で前方に右腕を突き出し、光分子を手中に集結させる。一秒も満たさずに、光分子は弾け飛んで、一本の光子剣が握り締められる。

刀身は光分子で創られており、かなりの速度で振動を伴っている。

空中の近接戦闘において最高の威力を持ち合わせている光子剣――――ｃｈｒｙｓａｏｒ（超振動光子剣）。

ｃｈｒｙｓａｏｒ（超振動光子剣）を両手に持ち直し、純白の双翼を拡げる。同時に純白の双翼から、赤紫色で霧状の魔法力が一気に噴出し始める。

「その赤紫色の魔法力……憤怒か」

魔牙は少し関心した様子で、一言呟いた。

憤怒の魔法力……激しい感情の起伏により発動し、幾ら才能や武力を持ってたとしても決して得ることができない。選ばれた者達がだけが、無意識に身体の内部に備えられている特別な『力』

その選ばれた『力』を持つ黒神　上総の現在の感情値は、ただ復讐だけに縛られ尤も危険極まりない『憤怒の力』である。憤怒は名前の通り、『怒り』『怨念』『殺意』など負極の感情だ。

「くくっ……面白いじゃねぇかよぉ」

無表情だった口元が、不気味に釣り上がる。
その言葉を合図として黒神は紅紫色で霧状の魔法力を噴出させ、魔牙へと急速接近する。その際、霧状の魔法力は黒神　上総が飛行した位置を残像として残されていく。
少年は速度を上昇させながらｃｈｒｙｓａｏｒ（超振動光子剣）を、剣道で言われる『突き』の状態にして突撃する。防御を棄てて突っ込むだけの大雑把な戦法に魔牙は、期待外れだったか、と溜め息を吐きだす。
ひらりっ、蝶が自由奔放に舞い飛ぶかのように回避し、黒神と一瞬だけ擦れ違う。それだけで、黒神の肩部分からは血液が溢れ出した。何が起こったのか理解できない魔女達や、無残に落下していく光牙の弟子を哀れみながら一瞥し、小声でつまんねぇなぁ、と呟く。

「……――――――あ？」

突如魔牙の左腕に、力強く握り締められる感覚が伝わる。
不快感を感じながら感覚が伝わる個所に視線を移す――――――誰かの手が、二の腕部分を掴んでいる。魔牙はゆったりと瞳を動かして、手を辿っていく。
左腕を握り締めている人物は、先程無残に落下した筈の黒神　上総。

（何だ……雰囲気が急変しやがった……）

疑問の感情を抱いていると、次の瞬間――――――

「……ぁぁぁあああああ”あ”あ”あ”あ”！！！」

少年が異常なまでに咆哮を挙げて魔牙の左腕を――――――無理矢理引き千切った。

ぶちんっ、と鈍い低音が空域に響き渡り、遅れて鮮血が勢い良く噴水みたいに噴出する。
綺麗な青空やアドリア海が、汚い赤色に染まった瞬間だった。

「見ちゃ駄目だ！！！ルッキーニ！！！」

「ひっ……腕が……血が沢山……」

シャーリーは隣で立ち尽くしていた、部隊で最年少隊員のルッキーニを隠すように、自分の豊満な胸に顔を埋めさせる。しかし『反応』よりも『光景』の描写が圧倒的に速かった為、ルッキーニはネウロイと戦うよりも数百倍の恐怖心を抱き、身体と声色が小刻みに震えている。
他の隊員達も多種多様な行動を取っている。吐き気がするのか、口元に手を添える者。各隊員に与えられたいる銃器を、力無く垂れ下げている者。激しく何度も荒々しい呼吸を繰り返す者。
皆違う動作だが、思っていることは全員一緒――――――恐怖。

黒神　上総は、自分の右頬に暖かいものが付着しているのに気付いた。舌を動かして口に含み、唾液と共に咀嚼する。
非常に不味い、肉の味がした。

「あは」

思わず笑みが零れてしまう。
何だか無性に”タノシク”なってきた。駄目だと思っているのに、風船が弾け飛ぶような”カイホウカン”を抑えきれない。
少年はくちゃくちゃ、ぺちゃぺちゃと口内を動かし、ごくん、と気色悪く喉を鳴らす。引き千切った左腕は不必要と判断し、蒼いアドリア海へと投げ捨てる。

そんな黒神を眼にした魔牙は、今までの時間で最高最悪な笑みを浮かべた。

「はは、ぎゃはははははははははッ！！望外だぁッ！！！悪く無いぜ小僧ぉ！！何だよ、正義感振り撒いている寝小便くせぇ人間だと思っていたが、見事に化けれんじゃねぇかよ――――――ッ！？」

憤怒の魔法力を行使している少年は、赤紫色で霧状の能力『残像』を使用した痕跡を残さず、無理矢理引き千切られた左腕の赤黒い円状の傷口を、的確に蹴り込む。それと同作業に魔牙の狂喜の顔面に、拳をめり込ませる。

魔牙は一瞬、自らの身体に鈍い衝撃と共に吹き飛ばされた感触に驚いたが、逆にそれらが彼を狂喜の渦へと誘う麻薬となっていた。久々に感じる興奮に、感情がかなり昂る。

「腹ァいっぱい喰わせてもらおうか、丸々太った猛獣を…。遠慮無く、じっくりと、骨の髄までなあああああああああああああああああああああああああああああああああああああッ！！！」

狂人者同士の”喰い合い”が開始されようとした。

その時――――――

第五十一話：鮮血の双翼（後書き）

次回はスランプにならないように、努力します！！
感想も待っています（＃＾．＾＃）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8662s/

異世界を渡る人

2012年1月15日02時45分発行